

二次元 2D DREAM MA 100

2018 **06** Volume.100
DIGITAL EDITION

18
未 満

カラー
ピンナップ
COVER EDITION

表紙&ピンナップ
テレホンカード
**応募者全員
サービス**

ヤスダスズヒト
トモセシュンサク
うるし原智志
ぼっしゅい竜胆
こっばむ

【えっちマンガ】

楠木りん
或十せねか
Rusty Soul
ばふえ
FCT
ひぐちいさみ
嘉納あいら

【連載&読み切り小説】

峰崎龍之介×孫陽州
冬野ひつじ×神崎詩音
酒井仁×桐島サドン
あらおし悠×みかん
空蟬×つづきますみ
栗栖ティナ×かん奈
新居佑×恋河ミノル
千夜詠×秋月からす
高岡智空×草上明
火村龍×阿呆宮
有機企画×緑木邑
屋形宗慶×秋月からす
天戸祐輝×ササマシ
黒名ユウ×黒澤ユリ
狩野景×はれんちとめこ
089タロー×しゅんぞう
上田ながの×青年ホルモン
木森山水道×トモセシュンサク

豪華
プレゼント
祭り!

祝

100号!!!

★ニジマガを彩ったヒロインたちが集結!
特別別冊付録

試し読み版

エロんなことがあってもラストはヒロイン勝利!!!

今号の
Special Edition Series
特集

二次元



元氣爆発絶対無敵の凛々しき女騎士は
熱血最強の山賊団に捕らわれてしまい

絶対無敗騎士

キリンタイム

小説 / きもりやますいどう
木森山水道

挿絵 / トモセシュンサク

K王国の東の外れ。昼も薄暗い大森林の奥深くに、朽ちた昔の城があった。

「がははは。略奪で溜め込んだ財宝を着に宴会するのは、堪らねえな！」

入り口の開けた場所で騒ぐのは、古城を根城にする無法者だった。人間と魔物——人間とは容姿も生態も異なる異種族——からなる、二十人強の山賊団だ。

薄汚れた裸同然の格好で、ケダモノみたいに筋骨隆々の肉体を剥き出しにして、あるいは古く汚いシヤツ姿で、汗臭さと加齢臭と男臭さを強く放つ男たちは、まるで蛮族である。

「とはいえ、お宝に美酒に美食とくれば、あとは美女。けど、肉便女にしたのも出荷用に調教したのも、うっかり全部、奴隷商にうつばらつちまったからなあ」

筋肉質で大柄な子分たちよりも一段と逞しい身体つきで、顔の上半分を覆う煤(すす)けた兜を被る山賊のボスが、ひとりごちる。そのときだった。

「悪行三昧はそこまでです、山賊『ダーティマスターズ』、略してDM団の皆さん！」

数人の男騎士を引き連れて、森から颯爽と躍り出たのは、若い女騎士だった。

少し離れた山賊どもに抜いた剣を突きつける。育ちのよさが滲み出る美貌をキリリと引き締める彼女の後ろで、男騎士たちが叫ぶ。

「神妙に縛に就け！ キリイ・タイム隊長が率いる我らタイム騎士団からは逃れられん！」

「こちらにおわす女神……もとい、おわす方は、今のときこそ、貴様らを討伐する隊のリーダーだ……」

「本来は、我がK王国が誇る『絶対無敗騎士団』の若きホープ！」

「『絶対無敗騎士団』は、選抜されたエリート騎

士集団であり、特別な洗礼を受けた強者たち。どんな絶望に襲われようと、必ず逆転勝利を掴む不敗伝説の体現者なのだ！」

話題の女騎士は真つ赤な顔で眉根を寄せた。「そんなに褒めないでくださいよ……」

良家の令嬢めいた美声で呟く。

「はん！ たった数人ばかりの騎士が、二十人を超えるオレらを捕まえられると思うな！」

三人の山賊が、得物を掴んで立ち上がる。彼らは武器を振り回して突進した。

それぞれが間合いに入り、凶器を振り上げた刹那、女騎士の目つきが変わる。

「ドリム・エンドグ！」

ボワアッ！

全身から金色のオーラが立ち上った。

「ハアッ！」

たゆまぬ鍛錬と才能が滲む鋭い身のこなしで、横薙ぎに剣を振るう。

シュバンツ！ ……ドガアンツ！

「ぐええええ！」

山賊どもは纏めて吹き飛び、古城に激突。

「峰打ちです。命に別状はありません。ですが、手向かいなさるなら……！」

健在の山賊たちに女騎士が警告する。

「馬鹿な！ キンピカ眩しい姿になって、たった一振りでも三人も吹き飛ばすなんてッ」

山賊が青さめる。ボスが声を張り上げた。

「城に入れお前ら！ 地の利を生かして時間を稼げ。オレがなんとかしてやる！」

彼は脇目も振らずに城に駆け込む。

「お頭！ 本当にどうにかできるんですかい！」

子分も城になだれ込む。男騎士たちが騒ぐ。

「上手いことを言って、ボスひとりで逃げる気には違

いない！」

「闇ルートのパイプが多いというあいづには、尋問することが山ほどあるんだぞ！」

誰よりも早く女騎士が走り出した。不思議な金色のオーラを纏う彼女は、ポニーテールの髪全体と、前が大胆に開いて裾が踝まで届く腰布をなびかせる。白く薄い生地を纏う豊かな胸を弾ませ、翻るスカートから白い下着をチラチラ露出させながら、指示を出す。

「わたしはボスさんを追います！ 皆さんは子分さんをつ」

暗く埃っぽく、廃滅の空気に満ちた城に踏み込むと、通路の向こうにボスの背中が見えた。彼は一番奥の扉をくぐる。片側がなく、残っている方も斜めに傾くその大きな鉄扉へ女騎士は駆け、勢いよく飛び込んだ。

「よききたな、『絶対無敗騎士』さんよオ

朽ちた玉座に腰掛けていたボスが立つ。

どうやら謁見の間らしい。落ちた外壁の隙間から仄かな陽光が差している。

「山賊のボスさん、犯罪者とはいえ、傷つけたくありません。投降してください！」

キリイは剣を抜かずに呼びかける。ボスが口にしたのは別の話だった。

「知ってるぞ。『絶対無敗騎士』の……お前の強さの秘密を」

彼は得意げに続ける。

「特別な洗礼とは、生身の肉体を、正義の心を力に変える体質に変えるという改造手術。つまり、お前の人間離れた力の源は、お前の正義の心というわけだ」

「なぜそれを……国家機密なんですよ……！」

「オレもその改造手術を受けているのさ！」

ボスは低く響く声で叫ぶ。

「ピカレスク・エンドグ！」

ぼわわわ!

ボスの全身からドス黒いオーラが迸る。

「まさか!」

瞠目する女騎士。そのとき、扉から無数の光が飛び込んできた。黒く吐き気を催すそれらは、全部ボスに吸い込まれた。彼の禍々しいオーラは膨れ、なんと高い天井に達する。今や彼のオーラは、彼女の数倍も大きかった。

「どうよ! 稼いだカネをつぎ込んで、この力を手に入れた。闇市場に流出した『絶対無敗騎士』の改造手術を、自衛のために受けたのさ!」

ボスは床に置いていた戦斧を片手に取り、一歩、また一歩と、無造作に女騎士に近づくと、

「もつとも、オレの力の源は、王侯貴族や、お前らみたいなその狗への恨み辛みだがな」

「どういうことですか」

「オレや子分は皆、元は善良な市民だった。しかし、弱者イジメの政策や、下劣な金持ち、権力者の食い物にされ、なにもかも奪われた! その怨念を糧に山賊をやり、自衛のために溜め込んでたわけだ」

怨念の権化は彼女の前に立ち止まった。

「くっ!」

気圧される女騎士が剣を繰り出す。

「通じるかよ!」

剣が届くより先に、ボスは斧を振った。

ブンッ!

「さやあああああああ!」

生じた衝撃波を浴びて女騎士が倒れ伏す。

ボスは無慈悲に斧の柄を振り下ろした。

ドスッ! ドスッ! ガシヤッ! ザンッ!

「あぐらうらう!」

肢体に突きを何度も受け、彼女の身体がくの字に曲がる。騎士の象徴の鎧が砕けて破片が散り、腰布とスカートが引き裂かれた。ニーハイソックスが円

く破れた奥から太腿の柔肌が露出し、胸元の布のウエアは弾け、白く瑞々しい豊胸がブルンッと飛び出た。

「うう、まだです……わたしは負けませんっ!」

攻撃が止むと、彼女はよろよろと立ち上がった。痛めつけられる間も離さなかった剣を杖にし、腰布やスカートの破れ目からTバックのお尻を突き出しつつ、強い目つきで怨念の権化を見る。正義の心の印である金色のオーラは、まだ健在だった。

「こりゃ驚いた。オレの力は、オレや子分の怨念の集合体。手加減したとはいえ、常人なら死んでお

かしくないのに、まだやる気とは」

「絶対無敗騎士」の名にかけて……正義の心で……

必ず逆転してみせますっ!」

「なら、その正義の心を封じてやろう」

ボスは斧にはめ込まれているオーブを外す。

ピトッ……ズブウウウウウ!

露出する乳房に、冷たく光る握り拳大のオーブを押しつけた。

「ああああアアアア……」

女騎士の悲鳴が木霊する中、オーブは彼女の身体

の中に入り込み、見えなくなる。

不意によろけた彼女は、埃っぽくてカビ臭い床に倒れ込んだ。

「今のオーブには、お前の力を封じる効果があるの

さ。これも闇市場で買った。お前は今や、騎士姿の

ただの小娘。つまり、逆転の可能性はゼロになった

というわけだ」

ボスは怨念のオーラを消した。転がる女騎士を荷物のように担ぎ上げる。

「オレたち虐げられた者の怒りのはげ口になっても

らうぞ」

黒く筋肉質な肩の前で、彼女の白い乳房をブラブラ揺らしつつ、広間を後にした。

*

「がはは。逆転したのはオレら山賊だったな」

山賊のボスが汚く哄笑する。場所は古城の入り口

で、彼らが宴会していたところだ。

男騎士は全員纏めてロープで簀巻きにされて、宝

の山の側に転がされている。隊長のキリィを人質に

されて、やむなく投降したのだった。

「さあ、弱っちい『絶対無敗騎士』(笑) が主役の

生き恥かきまSHOWの開幕だ!」

ボスの言葉に、周囲の子分たちが沸き返る。

「ヒューヒュー! やつちまえボス! 宴会の肴に

はもつてこいのイベントですぜ!」

騎士たちに倒された者はいたが全員、回復アイテム

のポーションで復活し、元氣深刺だった。

同じものを飲まされて回復しているものの、力を

封じられているので手も足も出ない女騎士キリィこ

と、恨み権力者の手先を玩具にするという意味でも、

鼻息を荒らげている。

「あなた方は辛い目に遭ったのかもしれませんが、

だからといって、罪のない人々に悪事を働いていい

ことにはなりませんよっ!」

ボスの胡座に足を広げて——いわゆるM字開脚。

両足の爪先を部下が押さえているので、振りほどく

ことはできなかった——座らされている女騎士キリィ

イ・タイムが訴える。

「ふざけるな山賊ども!」

男騎士たちも声を張り上げた。投降するまではほと

んど無傷だったが、縛り上げられてから、山賊たち

ちに痛めつけられ、顔が真っ赤に腫れている。しか

し、口調は激しい。

「キリィ様におかしな真似をしてみろ。ただでは済

まさんぞ!」

敬愛する上司を守る気持ちというよりも、恋人の

ピンチに激高するひとりの男みたいにがなる彼らの

祝
100

これまでのニジマガを
支えていただいた先生方が総出演SP!
怒涛の二次元エンドラッシュスタート!

ハートフルウォーミング Heartfulwarming ARISA アリス



たかおかちから
小説 **高岡智空**
NOVEL
くさかみあきら
挿絵 **草上明**
ILLUSTRATION

まずは「次元屈指の
名コンビ」が登場!
可憐ふにぶにな
魔法少女に迫るHな危機!!

ある春の日、うららかな昼下がり。

「そっち行つたよー」

上空を舞うように、ゆつくりと飛んでくるボール。体育館でのパレーは初めてではないが、制服を着たままというのは勝手が違うものだ。

「オーライ、オーライ……わぶっつ！」

ヨタヨタと危なっかしい足取りで、長いスカートと揺らしながら少女がそれを追うも、トスすることは叶わず、掲げた手の平をすり抜けたボールは、ものの見事に頭を直撃する。

「ちよっ……亜里沙、大丈夫!？」

慌てて駆け寄る幼なじみに、少女——朝戸亜里沙は、まん丸の瞳に涙を浮かべつつも、なんとか答えた。

「へ、へーきだよ、恵美ちゃん……」

「本当に大丈夫? こことか、すっごい腫れちゃってるけど……」

心配そうにする幼なじみ少女の手は、亜里沙の制服越しの大きな膨らみを、容赦なくムニユリと揉みしだく。修道服を意識させる、黒を基調としたスカート一体型の制服。その胸を白昼堂々弄られるなど、学園ではおそらく、亜里沙以外に経験はないだろう。

「ひやうっ?! ちよっ、恵美ちゃん、そこ、違っ……んあうっ……」

学年平均などより何回りも大きく熟れ育った亜里沙の乳房は、恵美のみならず、クラスメートの視線を普段から釘づけにしていた。こうして幼なじみ

人も、同じように手を伸ばしてくる。

「うん、今日もいい柔らかさだ」

「もつと大きく育ててあげるからね、元気に育つんだよ?」

「亜里沙は嬉しい、私たちも嬉しい、実に Win Win だね」

「嬉しくないよおっ——つて、なんか増えてるし!」

いつの間にやら幼なじみだけでなく、他の女子たちにまで胸を揉まれ始め、まったく関係ない太もやお尻までがセクハラの餌食になっていた。

だが——そんな友人女子らにも言い分はあるという。背は低いのに胸は大きく、愛らしい容貌でありながら媚びもない。そんな無邪気で明るい亜里沙の姿は、自分たちの理想の妹、理想の娘と言っても過言ではない——と。

「可愛い妹や娘の成長、確認しないわけにはいかないでしょ?」

「いかなくないよ! そもそも私、妹でも娘でもないし……んあっ……」

困ったように眉根をひそめると、亜里沙の大粒の瞳はますます垂れ下がり、泣きそうな表情を見せる。拒絶、もしくは反論しなげればと思うのだが、大事な友人たちが相手だと思つて強く出ることができない。

それが亜里沙の優しさであり美点、それでいて弱いところでもあるのだが、そんな美少女の反応に、幼なじみたちはさらに劣情を煽られてゆく。

「あつ、やつ……めぐう……んっつ! ちよっ、強っ……くうんっつ!」

最近キツくなつていた下着の端から僅かに溢れる乳房、それを揺らすように指で叩かれ、思わず亜里沙は声を潤ませた。そんな美少女の媚態に、体育館の隅のほうから歓声が響く。

「おほおっ、やつてるやつてるよ」

「タブタブだぜ、朝戸のやつ……」

「俺らも触りてえ」

壁の低い位置にある小窓からパレー

ボールを鑑賞していたクラスの男子たちが、美少女たちの戯れに思わず声を上げてしまったらしい。

「ふえっ……や、やだっつ!」

それに気づいた亜里沙が思わず悲鳴を上げるが、幼なじみたちの反応はそれよりも早かった。

「こらあつ! このエロ助ども!」

「私らの天使を汚い目で見るな!」

窓を蹴り破らんばかりの勢いで男子たちを追い散らし、カーテンを引いて視線を遮る。日頃の戯れでもそうだが、女子がなんの遠慮もなく亜里沙の身体を弄ぶ姿を、男子はいつも血涙流して見つめていた。だが、彼らが近寄ろうものなら、友人たちは完璧なチームワークでそれを阻む。

曰く「純粹無垢で穢れない亜里沙のおっぱいは私たちの宝」だとか。

「ふう……もう大丈夫よ、亜里沙」

「あ、ありがと、みんな……」

そこで話が終われば美しい友情になるのだが、一旦火の点いた彼女らの欲望は、そう簡単に収まらない。

「さ、これで落ち着いて揉めるね」

「それじゃ、失礼しま〜すよ」

「えっ、ちよ、ちよつと……あうっ、あんっ……ウソツ、待つてえ……」

昼休みのレクリエーションはいつの間にか、彼女たちによる亜里沙へのセクハラ——もとい、成長確認タイムへと変わってしまったようだ。

「あ、またちよつと大きくなつた?」

「えっつ……いや、その……いい、一センチ、だけ……」

「やつぱり! じゃあこつちも!」

「んあうっ! お、お尻は、そんなことないもんっ……だ、めええ……」

等々——密着する友人たちの体温や匂い、その状態で練りだされる手技の数々に、亜里沙の胸も次第に激しく高鳴りだす。身体は熱く、呼吸は荒くなり、ジンワリと広がる甘い感触に四肢も弛緩し始めていた。

(きよ、今日の恵美ちゃん……特に激しいよおっ……んうっ……)

「はああ……ホントに可愛いなあ、亜里沙は……大好き♥ ながあつても、私が守つてあげるからね……」

その感覚に身を任せては危ない、そう思うのに、恵美が耳元へ甘く囁きかけるのを聞くだけで、胸の奥がキュウッとき、身体に力が入らない。

(だ、めえ……恵美ちゃんの声と、手の感触……気持ちよくなって、私……)

「おかしくなつちやうよお……」

思わず目がトロンと湧け、恵美に身を委ねてしまいたいそうになる——が。

そんな級友たちとの心温まる交流は、

突如として現れた脅威によって崩されることになった。

「きゃあああ——っつ！」「みんな急いでっ、早く！」「助けてえっ！」

「え——な、なにっ、どしたのっ!?!」

バアンッと勢いよく開かれた体育館の扉から、大勢の女子が泣き叫びながら飛び込んでくる。それを見た友人たちは驚いた様子だが、亜里沙だけはハッとした様子で、彼女らがやってくる扉の向こう側を見つめていた。

（これって、まさか——）

恵美たちが周囲で嘩然としている間にも、逃亡者はさらに増えてゆく。そして——その背後からは、野太く低い唸り声を響かせ、大勢の男たちが押し寄せてきていた。

「いたぞおっ、女だあっ！」

「はあっ、あああっ、犯せええっ！」

目を血走らせ、開きっぱなしの口から涎を垂らす集団、そのほとんどが男子生徒である。それを見た亜里沙は、予想を確信へと変えていた。

「な、なによあれっ！」

「いけないいっ……みんな、とにかくドア閉めなきゃ！ 急ごう！」

異常事態と察した亜里沙たちは、慌てて扉を押さえ、追ってきた集団をすんでのところまで閉めだす。

「な、ながあつたんですか……」

「それが……突然、男子たちが暴れだして、手がつけられなくなっ……」

数名の女教師が、半ばパニックに陥りながらも情報交換をする。その間に

亜里沙たちは、逃げてきた女子を介抱し、落ち着かせていた。

「うっ、うっ、怖かったあ……」

「よしよし、もう大丈夫だから」

「でも、ずっとここに居るわけにもいかないよね……」

そんな中、亜里沙は男子たちの姿を思いだし、キュッと唇を引き結ぶ。

（さっきの男の子たちの状態、あれっで……だとしたら、またすぐ——）

知らず亜里沙は、スマホのストラップを強く握り締めていた。いつの間にか、スマホも圏外になってしまっている。それを不安がっているように思われたのか、恵美は小さく震える亜里沙の手を取り、優しく包み込んだ。

「大丈夫、亜里沙？ 心配しなくても、私が守ってあげるから」

「恵美ちゃん……うん、ありがとう」

彼女の力強い言葉に心が温まる。

思えば恵美は、日頃のセクハラは激しいものの、昔から亜里沙のことを色んな危険から守ってくれ、意地悪な男子を遠ざけてくれていた。

それはおそろく、このよくわからぬ事態に対しても同じこと。恵美は全力で亜里沙を庇い、いざとなれば我が身を盾にしても、まだ見ぬ危機から守ってくれようとするはず。いままでも通りの亜里沙でいるなら、そうした彼女の脚を引っ張らないよう、おとなしく縮こまっているべきなのだろう。

だが——。

（ありがとう……でも、ごめんね）

この事態を解決できるのは、おそらくこの学校で——否、この世界で自分だけなのだ。

（私のハートフルパワーで助けないと、みんなが悪魔にされちゃう！ 悪魔王……ポッコの力で！）

亜里沙のそんな考えに反応したように、手の中でストラップが震える。

「亜里沙、学校内にポッコエネルギーが充満しているわ！ 悪魔王が来る前に、早くアリスに変身しないと！」

そう心の中に話しかけてくるストラップの正体は、自意識を持つ魔法の杖であり——亜里沙の中のハートフルパワーを増幅させ、ウオーミングアリスへと変身させるキーアイテムだ。

彼女の言うポッコエネルギーとは、人々の悪い心や淫らな感情を増幅させ、やがては姿形までを変化させてしまう魔の力である。そして、その力を操る諸悪の根源こそ、亜里沙や杖が口にする、悪魔王ポッコだった。

魔界を支配する悪魔王は、人の悪しき心を増幅させ、使い魔にし、人間界の支配を進めようとしているらしい。その企みを阻止するため、天界はこの魔法の杖を使い、悪魔に対抗できる力を持つ人間を探していた。それが亜里沙であり、亜里沙の持つハートフルパワーなのだという。

（……すぐウソっぽいけど、本当に変身できちゃったんだよね……）

変身した亜里沙は、悪しき心によって魔物に変化した人間を浄化し、見事に救ってみせた。自身の力と為すべきことを教えられた亜里沙は、それ以来悪魔王との戦いを続けている。

（今回の男の子や先生たちも、きつと使い魔になりかけてるんだ……その前になんとかして、ポッコエネルギーを浄化しちゃうわね……）

それにしても、これほど大規模なエネルギーを感じるのは初めてだ。いつもなら一体の悪魔と戦い、相手を浄化することで決着がつくのだが——。

（このエネルギー量じゃ、学校のみんが使い魔にされそうで……なんだか、すごく嫌な予感がするよ……）

体育館の扉は、いまにも破られそうなほどの強さでガンガンと叩かれている。それを見つめながら亜里沙が考えていると、胸元のストラップ——ロッドが焦った声で訴えてくる。

「亜里沙、早くしないと！」

「——っ！ う、うんっ、そうだよなっ……あ、でも……」

体育館には大勢の人が集まり、しかも自分は恵美に抱き締められているため、密かに変身するのは難しそうだ。自分の正体を知られば、彼女らを必要以上の危険に巻き込みかねない。それだけは避けなければ——。

（なんとか見つかからないよう——奥の倉庫とかに行ければ、変身できそうなんだけど……あっ!?!）

そう思い、亜里沙が体育館奥の用具倉庫に目を向けた瞬間だった。

「ドオンッ！ ドゴオオッ！」

「そんな、扉がっ……」

頑丈な金属の扉が粉碎されるように開け放たれ、女性陣が悲鳴を上げる。そしてその向こうから現れた異形を目にしたことで、その悲鳴はさらに大きく膨らんだ。

「なにあれ!?」か、怪物っ……」

侵入してきた男たちの一部は、角や翼の生えた、悪魔のような姿に変化していた。人外と化した彼らが、増幅された腕力で扉を破壊したのだから。

「あれって、倉本くんっ……!?」

「あつちは石川……嘘でしょ……」

クラスメートたちが声を震わせるのは、先ほど覗き行為を働いていたクラスの男子たちが、異貌に変じているせいだ。大勢の女子が青ざめ、腰が抜けたようにその場へへたり込む。

「梶谷くん……それに、桑原くんまでっ……ほかに、あんなにっ……」

経験のない悪魔の大攻勢、しかも顔見知りの変貌は、亜里沙にも少なからず動揺を与えていた。他の女子たち同様、顔を青くして凍んでいると、こじ開けられた扉から、さらに多くの男たちが強引に身体を捻じ込んでくる。

「いやっ、来ないでええっつ!」

「やめなさいっ、やめっ……きやあああっ! 離せえっ、いやああっ!」

逃げ場のない女子たちが捕まり、制服を引き裂かれ、無遠慮な男の手に蹂躪されていく。それは亜里沙のクラスメートたちとて、例外ではない。

「やめてよ、倉本くんっ……どうしち

やつたの、ねええっつ!」

「梶谷っ、冗談でしょっ……いつ、やっ……やだっ、いやああっつ!」
 目の血走った悪魔たちはクラスメートの訴えを無視し、獣欲に支配された顔つきで、衣服を引き裂いてゆく。

「みんなっ……助けなさいっ……」

思わず駆け寄ろうとする亜里沙だが、それを制するように叫んだのは、他でもないクラスメートたちだ。

「恵美っ、亜里沙をっ……」

「もちろんっ、わかっている!」

戸惑う亜里沙をよそに、恵美は亜里沙の身体を引き寄せると、そのまま体育館の裏手へ向かわせるように、ドンと勢よく突き飛ばした。

「恵美ちゃんっ?! なにをっ……」

「亜里沙、逃げて! 私たちなら大丈夫だから、裏口から逃げて!」

そう叫んだ恵美は、自らを阻にすべく、男子の群れへ飛び込んでゆく。男たちの往く手を阻み、亜里沙を追わせまいとする、必死の抵抗だ。

「恵美、ちゃんっ……っつ……」

羽交い絞めにされた恵美が、僅かな怯えを覗かせる。その瞬間、亜里沙は弾かれたように駆けだしていた。

「っ……待ってて、すぐに!」

もはや一刻の猶予もなかった。亜里沙は彼女らの想いに応えるように背を向け、脇目も降らず体育館の奥へ駆け出る。だがもちろん、それは裏手の非常口から逃げるためではない。

彼女らを手助けするために——だ。

「くっつ……しつかりなさいよ、石川っ……あんたドスケベだけど、こんなゲスじゃないでしよっ……」

恵美は目の前の男子——変わり果てたクラスメートの石川にそう訴えるが、彼の動きは止まらなかった。複数の男子に拘束された恵美の脚をベタベタと撫で回し、ピチャピチャと音を立て、耳朶を舐めしやぶってくる。

「いやっ、いやああっ……桑原くん、正気に戻ってえ……ううっ……」

隣では別の友人が、剥きだしの牡肉に顔を擦られ、涙目になって懸命に顔を背けていた。それを助けたいのは山々だが、恵美もすでに、動ける状態ではない。それどころか、いつ同じ目に遭わされるかもしれない状態だ。

「こいつら、どう見ても正気じゃないっ……いっつたい、なにが……」

妙なウイルスか病気に冒されているかのような異常事態——はつきりとしていることは、彼らが異性に対して異常なまでの劣情を抱いているということ。そして、それが暴力的な行為となつて溢れているということ。

「やるなら、やればいいっ……」

このあと自分がどんな目に遭うか、その想像もつかないほど恵美は純粋ではない。だがそれでも、幼なじみの彼女がそんな目に遭うよりは、何万倍もマシだと思っていた。彼女が無事に逃げられるまでは、どんなことがあっても我慢する——そう覚悟を決める。

「っつ……女の身体は、もつと優しく扱いなさいよねっ……」

男の手が下着の中に滑り、柔らかな肉房を揉み擦った。怯えたようにビクツと身が跳ねるも、恵美は歯を食い縛り、弱気な反応を誤魔化す。万が一にも亜里沙が戻ってきたとき、そんな自分の姿を見せるわけにはいかない。

鋭く睨みつける目の前では、異形の男子が着衣をはだけていた。股間にはグロテスクな赤黒い肉塊が屹立し、臭気と汚れを撒き散らして、スカート越しの下腹部に擦りつけられている。

「こんな形でなんて……最低っ……」

覚悟をしていますが、それが辱めであることには変わりない。例えようのない喪失感に苛まれ、恵美は悔しさに拳を握る——けれど。

「……あ、れ?」

恥辱の瞬間は訪れることなく、不意に恵美を拘束する男たちの力が抜け、支えを失った身体が床に崩れた。

「——危ない、間一髪っ……」

小さく囁いた少女の手には、先端部にハート形の宝石が煌く、短いロッドが握られていた。先ほどまでストラップだったそれを彼女が振ると、溢れだした温かな光が周囲を照らし、男たちがガクリと崩れ落ちる。

「みんな、正気に戻って!」

呼びかけながら、さらに続けて杖を振る少女は、この学校の生徒でも、警察でもないように見えた。それもそ

のはず、彼女の服装はあまりに奇抜
それでいてセクシャルな、見る者の目
を惹きつけるデザインである。

基礎となつているのはバレリーナや
フィギュア選手の着るレオタード衣装、
あるいは下着のビスチェか。眩い太も
もを脚の付け根から大胆に覗かせ、長
いニーソックスで脚を覆い、愛らしい
ブーツで足を飾っていた。

上半身も肩や胸元を開き、眩いほど
の白肌や悩まし気な上乳、乳房の谷間
を惜しげもなく晒している。

（うう、やっぱり慣れないなあ……）
けれど、恥ずかしがついている場合で
はない。目の前では級友たちが、いま
にも男たちの毒牙にかけられようとし
ている。そんな彼らに向けて杖を振る
うと、先ほどと同じく温かな光が波状
に広がり、狂気と本能に捕らわれてい
た男子や教師を照らした。

「邪悪なる意思よ、みんなの優しい気
持ちを返しなさいっ——ハートフルッ、
ウォーミンググッツ！」

杖から放たれたハートフルパワーは、
彼らを捕らえるポッコエネルギーを打
ち払い、解放された男たちは一時的な
がら意識を失う。魔の手から逃れた級
友たちは、驚いた顔で少女を見つめ、
まだ震えている声で問いかけた。

「た、助けてくれて、ありがとう……
でも、あなたはいったい……？」

「私は——みんなの心を温める天界の
使者、ウォーミングアリス！」
その名を聞いた瞬間、友人たち——

特に恵美が、大きく反応を示す。

「アリス……垂里沙と同じ名前……」
「うえっ……そ、そう！ 垂里沙ちゃ
んに頼まれたの、友達を助けてつて
ね！ だからもう大丈夫、みんなは安
全な所に下がってて！」

誤魔化したかはわからないが、考え
るのは後回しだ。友人たちを背後に下
がらせ、男たちの群れに飛び込んだア
リスは、次々とハートフルパワーを浴
びせてゆく。

「お願い、元に戻って……えいっ！」
扇情的な姿のアリスを見て、男たち
は節操なくこちらを標的に定めてくる
が、軽やかなステップでその手を強い
潜り、すれ違いざまに、あるいは対峙
する前にと、相手の悪魔エネルギーを
浄化していくアリス。まだ身体にまで
浸食を受けていなかった彼らは、流し
込まれるハートフルパワーで気を失い
こするものの、すぐ目を覚ますだろ
うし、身体に影響はないはずだ。

ただ——エネルギーの影響を強く受
けすぎ、肉体まで変貌してしまつた者
は、そう簡単には行かない。

「ギャギャギャ……女だぜえ……」
「アア……ウマそんな牝だあ！」
理性を失い、肉体を悪魔に奪われて
しまつた彼らは、弱いハートフルパワ
ーなど弾き飛ばしてしまふ。見知つた
相手にそうすることは躊躇われるが、
助けるにはより攻撃的なパワーで、そ
の身を貫かなくてはならない。

「……絶対、助けてみせるから！」

これまでも街中で、普通の主婦や
サラリーマン、学生などが使い魔と化
してきたのを退け、浄化してきたアリ
サである。そのときより相手の数は多
いが、それに臆するなど鼓舞するよう
に、握つたロッドが輝く。

「大丈夫、フルパワーなら勝てるわ……
心の温かさ、解き放つて！」
「了解！ フルパワー……ハートフル、
ウォーミンググッツ！」

剣士のような構えで杖を握り、意識
を集中すると、先端の宝石が先ほどま
で以上に燦然と輝き始めた。その眩さ
に使い魔たちは後ずさり、動揺した声
や呻き声を上げる。

「な、なんだ、この光いっ……」
「ギエエエツ、目があつ！」

悪魔たちは次々に女性を手放し、そ
の場に膝をつき、あるいは尻もちをつ
いて顔を覆っていた。一部の者に至つ
ては、心臓の病のように胸を押さえ、
低く呻いて身を震わせる。

（効いてるっ……あと、一息っ……）
それは、使い魔に影響をもたらした
ポッコエネルギーが、身体から乖離し
ようとしている予兆だつた。この状態
になつた使い魔に、ハートフルパワ
ーの矢を撃ち放てば、それに射貫かれた
者たちは元に戻つてくれる。

それを確信したアリスは、安堵に唇
を緩めつつも油断はせず、心に溢れる
温かなパワーを全力で杖に注ぎ込んで
ゆく。さながら、杖は弓であり、巨大
なバリスタであつた。

そうして、撃ち放たれるべき力が、
いよいよ矢と化そうとした——その瞬
間、周囲に冷気が満ちる。

「ククク……よいのかな、天界の使者
よ……そのままで、君のお友達が無
事では済まないと思うのだがね」

「なに、いまの声……誰なのっ?!!」
頭に響く声に反応し、アリスが顔を
上げると、崩れ落ちた一部の使い魔た
ちに、異変が起きていた。

「どういうこと、これっ……」
悪魔と人間の身体が混ざり合つたよ
うに、彼らの肉体の一部が人間のそれ
へと変化している。だが、完全に戻り
きつてはいないためか、その男たちは
人間の身体に戻つた部分をより強く握
り締め、苦悶に抗うように悲鳴を響か
せ、床にのたうち回っていた。

「強い個体に合わせ、ハートフルパワ
ーを放ち続けた結果だ……まだ使い魔
として馴染んでいなかった彼らは、強
すぎる光に我がエネルギーを徐々に削
り取られ、乖離しきつておらぬ人間の
精神をも奪われているのだよ」

「そ、そんなっ……ウソツ……」
震える声で否定しようとするアリス
だつたが、目の前で苦しむ男子を見
ると、そう断じることができない。

「お、あ……お、俺、なにを……」
「ぐっ、がああつ！ 頭があつ！」
（あれは——倉本くん、石川くん……
……ダメツ、このままじゃ!）

クラスメートの苦しげな反応に気づ
いた瞬間、杖に満ちていたハートフル

淫欲に塗れた肉蕾は
人目にさらされ花開く！

姫騎士 エーシュ

マゾ豚公開艶技

せんやよみ
小説 NOVEL 千夜詠

あきつき
挿絵 ILLUSTRATION 秋月からす

薄暗い森も一人きりで彷徨えば、漆黒の闇の中を歩いている気分になる。腰にかかる長い金髪のおどけない顔立ち。仕立ての良い上質なドレスを身に着けた、まだ大人の半分もないような身長少女なら、尚更恐怖心は募った。ただ泣きじやくりながら動かしていた足も止まり、木の根っこに膝を抱えて座り込む。幼い思考で、きつとこのまま誰にも見付けてもらえずに、死んでしまうのだと考えた。

泣き、諦め、怖くなり、また泣き――繰り返すだけ。

初めての乗馬での不運。暴走した馬は、牧場の垣根を飛び越え、慌てて追った連れの馬をどんと引き離していった。

辿り着いたのがこの森で、彼女はそこで馬から落ちたのである。幸い、大した怪我はなかった。

風が冷たくて、腕を擦りながら、俯いている。

「何をしているんだい？」

不意に聞こえてきた声は、森の妖精が語りかけてきたのだと思った。

何も……、迷子なだけ。

俯いたまま答えた。

「どうして、そんな所に座っているんだ？」

「だって、何処に行っても帰れないもの。」

「でも、動かなくては、解決しないよ」

「どう、動けばいいの？」

「じゃあ、手を貸してあげる」

見上げたそこに彼がいて、伸ばされた手を握った。

途端に、体は温かく、世界に光が戻ったのだ。

乱れた呼吸音を奏でながらネージュは森の中を駆けていた。頭部の左右に結わえた金髪の巻き毛のテールを揺らし、白銀の鎧が重く感じる。

青い瞳には、困惑と焦りが滲んでいて、泣きはしめない。ここで倒れるわけにはいかないと、強い意志が滲んでいた。

「姫、お覚悟を――」

脇の茂みから不意に現れた灰色の鎧を纏った兵士の剣をかわす、刹那、戸惑った。

相手はつい先程まで味方だったのである。

「く……」

体は染み付いた剣士の動きで、居合の一閃を見せていた。

弾き飛ばしたのは兵士の剣。ネージュの切先は次の瞬間には、相手の喉元へと突き立てられている。

「いけ……」

冷や汗を掻いていた男は、慈悲に応じて逃げていった。

――私も、まだ甘い……。

王国の第一王女にして、將軍と並ぶ軍の指揮を任された騎士の頂点に立つのが、彼女だ。

普段は厳しく部下を鍛えてきたネージュであったが、肝心の所で冷徹にな

りきれないでいた。もつとも、そういった敵しさと優しさを併せ持った彼女であるから、その美しさ以上に、騎士にも国民にも慕われているのである。

「いたぞ！」

重々しい重装兵の足音まで聞こえてくる。追ってきているのは、王国兵が七割、公国兵が三割。味方であった者の方が多。

――どうして、こんな事に……。

何の前触れもなく、突如侵攻を開始した隣国に対して、ネージュは七千の兵を率いて防衛線を張った。共に戦場に立つた將軍ロムの裏切りがあったのは、その時である。

五十代に入ったばかりのロムは、恰幅が良く、ネージュが覚えている範囲では既に腹は出ていたが、若い頃は獅子と謳われた猛将だった。

反面、若い頃からよく仕えてくれて、最初に剣を教えてくれたのも彼だ。

信頼していた。彼と自分なら、八千の公国兵も軽く押し返せると考えていたのに、戦争が始まってみれば、味方のうち、半数が敵に寝返ったのだ。

周囲にいた自分の親衛隊が逃がしてくれなければ、今頃、屍になっただかもしれない。

「皆、無事でいてくれ」

最後まで戦って死ぬという選択もあった。しかし、決死の覚悟で倍以上の敵に対峙した彼らの気持ちが無碍にはできない。ネージュは、希望なのだ。

足の速度を落とさぬまま、考える。最初から公国の大公と將軍が通じていたなら、目的は王位の簞奪か。どちらが持ちかけた話なのか、今はどうでもいい。問題は、城にいる王と王妃がどうなっているか、だ。

「お父様、お母様……」

早く王都に戻り、確かめたかったが、どうにかして逃げ延びなくては、何もできなくなる。

前を見据える。この先には、一つの館がひっそりと建っているのだ。

「できれば、あそこには行きたくないのだけ……」

迷っている時間はなかった。

ロム將軍の下に知らせが届き、彼はその館の前までやってきた頃には、日は西へと傾き、空に赤みが差し込んでいた。

「ここが、かの魔法使いの館か……」

人食い森に住まうという魔法使いは、王国の領地内にながら、独立を宣言し、その勝手を振る舞いが許されてきたのも、最凶とも呼ばれる力がゆえ。厄介な所に逃げ込まれたとロムは考えた。

あくまでも噂であり、彼自身は見ただ事はないが、杖の一振り、騎士が十人ばかりで倒せなかった魔物を滅したのだとか、干ばつに苦しむ村に、豪雨を降らせて洪水を齎したなど、逸話は多かった。

敵に回せば、これ程厄介な相手はい

ない。

漆黒の館を、百を超える兵士で取り囲んで睨み合っている状態が続いている。魔法使いの噂は、周辺国にまで響いていて、森に入るのさえ拒む者も大勢いるのだ。不用意に突撃できる兵は誰もいない。

魔法使いへの交渉を、將軍自らが行おうと前に出たその時、館の扉が開いた。

おお——と、どよめきが兵から発せられる。

後ろ手に縛られたネージュ姫を先頭に、後ろから黒いローブの男が現れた。

漆黒の長い髪、漆黒の瞳をした青年一見する若さと滲み出る老獪さが同居して、涼し気に、不敵に笑むのである。

「いやあ、諸君、これ程の大勢で訪問客がやってきたのは、初めてだよ」

取り囲んでいく多くの兵を前にしても、虚勢ではない落ち着き払った様子に強者を感じた。

ロムは兵士らを割って、自分が代表者と分かるように一歩前に出た。

「貴君が、かの高名なる魔法使い殿か」

慎重に言葉を選び訊ねる。

「如何にも。我が名はタンペット。暴風の魔法使いと呼ぶ者もいる」

警戒しながらも、状況は決して悪くはない。苦々しい姫君の表情が物語っていた。

「タンペット殿、歓迎してくださるなら、我が友として、望みを聞こうではないか」

魔法使いの満足そうな顔に、ロムは自分と同じ俗物の気配を感じるのだった。

王国は七百年の歴史を持つ。決して強大な国家ではないが、王家の統治の下、大きな争いもなく、周辺国と比べて安定していた。

城の玉座に初めて、始祖王の一族以外がついている。

ロムは、自ら、將軍から新王を名乗り、国全土にそれを知らしめた。その玉座の間に、今、ネージュは連れてこられている。

彼女を銀雪の戦姫と言わしめた由来となった鎧もなく、立場を理解させる為に、囚人用のローブが着せられていた。薄い薄茶色の一枚布を被せたような代物で、脇から艶やかに白い肌が覗けて見える。下着すらなかった。

手枷をされたネージュは、乱暴に押され、ロムの前へと進まされた。

「三日ぶりですか、ネージュ……元王女」

奥歯を噛み締めながら彼女はロムを憎悪の滾った瞳で睨む。

「お父様とお母様は何処？」

「場所は言えません。ただ、まだ生きておいでだ。まだ……ね」

いつでも処刑できる。城の牢獄に捕らえられている間に、食事を運んでくれた侍女がこっそりと教えてくれた情報では、ネージュの両親、それと彼女を戦場から逃がした騎士らが、何

処かに捕らえられているという事だけ

「随分とのんびりしているのね」

「正直に言いましょ。まだ、前王派、特に貴女を支持する兵や国民が大勢いる中、処刑してしまつては、暴動が起きるかもしれない。頭を悩ませていると、彼が面白い提案をしてくれましてね」

「彼？」

ロムの向けられた視線の先へと顔を向けると、そこには魔法使いタンペットの姿があつた。

クールな中にも、その奥に劣情を感じさせる瞳に、ネージュは反射的に体を隠す仕草をとつた。

薄いローブのみの姿で、質量を十二分に感じさせる釣鐘状の乳房の形状に、鍛えて引き締めながら、肉感的な柔らかさを残す体のラインが露わになっているのだ。

王女の頬は赤く染まり、普段はあまり見せない乙女が滲み出ている。

そんな様子に、ロムも興奮を覚えた。最初は真つ先に処刑を考えたのだが、魔法使いの提案に乗って良かったと感じている。クーデターを成功させる事ばかりを考えて、忘れていた欲求が一気に膨らんでいくのが分かった。

「ネージュ姫、貴女には王家の信用を貶める役割を果たしてもらいましょ。聡明な貴女ならお分かりのはずだ。拒否権などない、と」

ネージュに近い者をまだ誰も殺していないのは、人質とする為だ。

恨みがましい視線を魔法使いに送りながら、今すぐに彼を蹴飛ばしてやりたいとネージュは思うのだった。

彼女を象徴する鎧が身に着けられたのは、遠くから見ても王女ネージュであると分からせる目的の為だ。

ただし、それ以外はない。素肌に直接鎧を身に着けた状態で、四肢の防具の他に、シールド、ブレストプレート、腰当、とそれだけである。

従つて、腹部から股間が剥き出しにされ、肉付き良く、男好きするそその形状のお尻に、薄く恥毛が生えた鼠蹊部も露わになっている。ある意味、全裸よりも変態的で、真つ赤になり、気の強そうな瞳を涙目にして、ネージュは両手で股間を隠した。

「さあ、この馬に乗ってください、姫。今から民の前で凱旋するのだから、遠くからでもお姿が見えた方がいいでしょう」

下卑た薄ら笑いを浮かべている兵らに囲まれながら、自分が彼らの歪んだ性欲の対象にされているのを感じた。

「お、お前ら……」

城の衛兵らは一新されていて、ここにいるのは、完全にロムに従う者で構成されている。

「ほら、隠さないで、大きく股を開いて乗るんですよ。何なら、お手伝いしましょうか？」

あからさまに股間を膨らませている彼らから、騎士の誇りは感じられない。

「断る。く……、自分で、乗れる」

精神的な強さを見せるも、用意された馬の鞍を見ると、そこに一本の棒状のものが取り付けられているのが分かった。途端に、ビクッと身が震えてしまう。

——な……、こ、これって……。

男性器を模した形状である。本物をその目で見た事などなかったが、そのくらい知識はあった。

取り付けられた位置、その形の意味を理解してしまい、反射的に太股をきつく閉じる。

「どうしました？ やっぱり、お手伝いしましょうか」

「いらん！ 下衆共め……」

奴らは嫌がる自分の反応も楽しんでるのだ。

負けるものか——今も牢獄に捕らえられている父、母、忠誠を誓ってくれた部下らの為に、ネージュは辱めに耐え抜く事を決意する。

鎧に足をかけた瞬間から、男達の視線は、下半身に集中してきて、もう一方の脚を高く上げた瞬間、いやらしい歓喜が聞こえてきた。

——今、見られた？！

一瞬、広げられた股間から、卑猥な牝の本体が覗けたはずだ。羞恥が強く煽られて、体が震えそうになったが、弱い部分を見せたくない。

しかし、馬上から真下を見ると、鞍から突き伸びている張形に怖気を覚えてしまう。それは黒々とした木製の

大ききも彼女にとっては凶器だ。

彼女は処女なのである。

「ほら、しっかりと座りませんと」

「わ、分かっている！」

気の強さがかえって自分を追いつめている。楚々とした姫であつたら、泣いて許しを請うていたのだろうか。

——こんな、大きい、入るわけ……

……でも、このままじゃ……

いつか愛する人と結ばれる日を妄想した時には、平気で受け入れていたのに、現実には酷すぎる。

僅かに腰を下げると、直ぐにデリケートな粘膜に硬い感触が当たってきた。

「う……」

肉裂が開かれる感触、そこに棒状が触れている姿を大勢に見詰められている羞恥にも、直ぐにこの場から逃げ出したくなる。

「へへ、やっぱり、お手伝いしますよ」

左右から寄ってきた兵士らの手が太股を掴んできて、グイッと下へと押しつけてくるのだ。

「や、やめろ……。ああ……」

他の男達も近くから覗き込んできて、挟まれていく様子を觀賞されてしまう。興奮した彼らの息遣いが、嗜虐的な性欲の対象とされてる事を意識させ、姫騎士は歯を食い縛った。

「く……、うう……、い、痛……」

押し広げられていく肉壺が軋み、処女膜が遅々と破られてしまう。まるで濡れていないそこは、強引に振込まれる激痛で引き裂かれそうに感じた。

「うひよ、あのネージュ姫様のオマンコ……、きつい性格と違って、ここは大人しそう」

「それが、こんなに広がって、ハア、ハア、やべえ、俺、もう扱きたくなっちゃう」

「我慢しとけ。後で、たっぶり……」

欲望剥き出しの男達の声に耳を傾けている余裕はない。破瓜の鮮血の滲んだ処女孔が、内側からの圧迫に泣き必死に押し返そうとしているのに、ゆつくりと腰は沈んで、ゴリゴリした苛烈な刺激が女の芯を苛んできた。

「すげえ、入ってくぞ。ほら、姫様もう少し、頑張れ」

椰揄うような応援が飛び、屈辱のまま木製の張形の先端が、子宮口を小突く位置まで到達してしまう。

——う、うう……、私の初めてが、こんな……。

無機物を相手に、大勢の男達の視線に晒され、性的な笑いにされる初めて。非情な扱いに涙するが、唇を強く結び、気丈にまた男達を睨んだ。

「さ、さあ、乗ったわよ。次は何をすればいいの？」

まだ消せぬ誇りの高さに、刹那、兵士らはたじろぐのだった。

街の人々の反応は、ほぼ同一であった。最初は、捕らえられていると噂されていた姫君の姿に安堵し、だが、次の瞬間にはぎよつと目を見開くのだ。

ざわつく声が耳に届き、羞恥に歪んだ顔をネージュは真つ赤にさせている。衣服を身に着けずに、鎧だけの格好で、下半身の一番恥ずかしい部分が白昼に晒されていた。

馬上の彼女の前に二人、後ろにも二人の兵が監視と誘導の役割で付いている。黙ってはいるが、ニヤニヤとした顔付きに悔しさが湧き起こった。

——ああ、街の皆が、私に気付いて、見てる。こんな、恥ずかしい姿を……。でも……私がここで耐えなくては……。

父、母、忠誠を誓ってくれた騎士、そして民の為に、気丈に前を向く。

遠巻きに足を止めて、見詰めてくる視線がどんどん増えてきた。下半身が剥き出しにされているのを確認すると、多くは見えないように顔を背けるのだが、中には後ろからついてきて、劣情の籠もった視線をお尻に注いでくる者もいた。

「ん……、響く……」

馬の歩みに合わせて腰が跳ねてしまひ、張形のカリ状に腔粘膜が擦られ、先端が子宮口を小突いてきた。

初めは痛みだけだったのが、女性自身を守る肉体の反射で淫蜜が滲み出してくると、むず痒さへと変化してきてしまう。

刺激を強く感じて、引き抜いてしまいたいのだが、腰を上げてしまうとそこに疑似男根を挿入していた事がバレてしまう。だから、太股に力を込めて、お尻が浮いてしまうのを何とか防

いでいた。

「ん……、ハア……、く……」

全身から汗が滲み出てくる。柔らかく豊かな胸元やむっちりとした太股が珠状になったそれで濡れてきて、全身が蒸れたようになった。脇の下から滲んだ汗が垂れていき、姫騎士の全身から濃い牝の匂いが放たれてくる。

そんな状態で街中を一周されて、辿り着いたのは、四つの街道が交わる王都の広場であった。最も大勢の人々が集まる場所でもある。

「さあ、着きましたよ、姫」

「ここで、何をさせようというのだ」

「いいから、馬から降りてください」

行方知れずであった姫が突如現れ、これからいったい何を行うのか、興味を持った人々がもう集まってきていた。

「く……、降りるわ」

腰を上げて、張形が抜けていくと、肉壺の中で移動する感覚に、唇が震えながら開いてしまう。

「あ、ああ……、お……、く……」

眉根を寄せる表情で喘ぎを発する王女の姿から感じ取れる異常な色香に、集まった街の男達の股間は直ぐに膨らんでしまうのだ。

「お、おい、あれ……」

誰かが指差したのは、ネージュの乗っていた鞍。そこに、男根を模した棒状のものが伸びていた事で、多くの者がどんな状態であったかを察した。

「いやあ……、気付かれて、しまった。」

しかも彼女の股座と張形の間に淫蜜の糸が引かれ、鞍も濡れていた。

「おやおや、姫様、随分と感じていらつしやつた様子で……」

「ち、違う。そんなはず……」

好奇の視線が突き刺さってくる。反論して大声を上げれば、もつと大勢の人に知られてしまうだろう。

広場の中心に立たされたネージュ。露出した鼠蹊部を隠す事は許されない。

「皆の者、よく聞け。これより、王女ネージュ様が、ご自身の破廉恥な本性を露わにされる。その瞳で、よく見ていくがいい」

一歩前に立った兵士がそう言い放つた。

「な、何を……」

「姫、ここでオナニーをなさってください。もう、疼いて我慢できなくなつておいででしょうか？」

「オ、オナ……、そのような、猥褻な行為……」

「貴女が命令を一つ無視するたびに、騎士の首を一つずつ刎ねる事になっていきますが」

「お、おのれ、下衆が……」

兵士が離れ、一人きりにされると、ネージュは俯いていたが、覚悟を決めて顔を上げた。

「皆、これから、私がどんな醜態を晒そうと、最後まで信じて欲しい。それが、そなたらの為でもあるのだ。お願いだ、皆……」

「往生際が悪いですよ、姫。とつとつと」

始めてください」

もう一度、兵士を睨み付けるが、それはかえって嫌がっている自分の様子で興奮させるだけだった。

立つたまま、震える指先を股間に添えていく。

「や、やるのよネージュ。そうしなければ……、ああ……」

蒸れた湿気も濃くなっている肉裂の合間に、指を添えて肉芽に触れた瞬間、ビリッと全身に電流が走ったように感じた。

「ンあつ……、んん……、つ、いや……」

聞いた事のないような凛々しい姫騎士の可愛らしく漏らされる声に、集まっていた男らの生唾を呑み込む音が聞こえる。

クリトリスは普段、体を洗う時などに何気なく触れていた時と比べて、ずつと膨れていた。しかも、やけに鋭敏に刺激を感じてしまう。

「み、見られている。あそこ、触っているところ、恥ずかしい行為が、こんなに大勢の人々に……」

民の目は皆一様に股間に注がれており、男は舐めるような視線を、女は口元を押さえながら、驚きと軽蔑の眼差しを向けてきた。

泣きそうになりながら、食い縛り指を蠢かせていく。

「姫様、そんなんじや、よく分かりませんぜ。もつと股を開いて、もつと大きく指を動かして。クリトリスも、皮を剥いちやってください」

強要される恥ずかしい行為の一つ一つに拒否権はない。命じられるままに高貴な顔を羞恥に歪めるネージュ。

「く……、こんな娼婦のような恥ずかしい行為……、こんな大勢の前でやらされて……」

蟹股になり、腰を突き出すようにしながら、クリトリスの包皮を指先で剥いていく。

「し、信じられねえ。あのネージュ様、そんな……」

「嘘だ。これは、絶対に、やらされているんだ」

素朴そうな青年が一人、前に出て、兵士に突つかかってくる。

「お前らだろ、姫様に、こんな事、やらせやがって！」

兵士らの手が剣の柄にかかる。いけない——青年が殺されると感じ、ネージュは叫んだ。

「違うの！ お、お願い……、怒っては駄目。わ、私が……、私から、望んで、しているの」

呆然とする青年。兵士は剣から手を離した。

「そんな、嘘でしょ、ネージュ様」

「ほ、本当よ。私から、こ、こう……、したいって……」

ざわつく広場に集まった人々に向け、兵士は大声で言った。

「そうだ皆の者、ネージュ姫様は、露出姿のマゾであらせられる。いやらしい姿を見られるのが大好きな痴女なのだ。さあ、お前ら、もつと近づいて、

闇のトラップに堕ちた女王
響きわたる恥辱の叫び！



女司令官のプライド崩壊洗脳凌辱

セイント ゲート

SAINTGATE

あら い ゆう
小説 NOVEL 新居 佑

こいかわ
挿絵 ILLUSTRATION 恋河 ミノル

観測史上最大規模の太陽フレアの影響により、日本各地に「異界」との門が開いてから十数年。

地球と異界とを行き来できるほどの巨大なゲートは、観測されてから、わずか数日で消失してしまっただが、その影響は人々の生活に、大きな変化をもたらした。

異界の力を、個人レベルの特殊スキルとして取り出すことのできる人々「異能力者」が、日本全土で次々と現れ始めたのだ。

その中でも、その力を己の欲望のために使おうとする連中は、凶悪犯罪組織「ダークネス」を結成。

現代科学を上回る、異能の力を使い、人々の平和を蝕んでいた。

しかし、その異能力を、正義のために行使する人々もまた存在する。

公安庁、その中に新設されたゲート犯罪対策組織、通称「セイントゲート」。

己の異能力を、正義のために振るうと決めた、セイントゲート……そこに所属する志高い隊員たちの活躍により、ダークネスの勢力は減衰し、日本の治安は守られている。

ここは、都心部に建てられたセイントゲートの本部ビル。その地下十数メートル直下に設けられた階層。

それは、地面から上のオフィスビルとは完全に隔離された、凶悪ゲート犯罪者専用の取調室だ。

「……で、その少年が、特A級ゲート

犯罪者。ダークネスの幹部であるリベル・マギウスか？」

厚さ十数センチを誇り、ロケット弾の直撃にすら耐える特殊素材の壁で囲まれた取調室。

そこに入ってきた、スーツ姿で、背の高い美女が、静かに尋ねる。

「はい、藤堂司令官っ！ 昨日未明、

東京湾岸の貸倉庫にて、指定暴力団・刃部組と、「アムリタ」の取引を行っていたのを、現行犯で制圧、確保いたしました」

答えたのは、先に室内に入り、犯人を尋問していたセイントゲートのうら若い女性隊員だ。

彼女が着ているのは、ボディラインにピッタリと張り付いたバトルスーツだ。際どいハイレグ水着のような見た目からは、想像もつかないほどの防御力を備えている。

「アムリタ……闇ルートで出回っている強力な催淫薬か。即効で依存性が高い……その胸元はやはりダークネスだな？」

司令官……。そう呼ばれた妙齢な女性の名は、藤堂ユリア。

かつてセイントゲートの現場隊員時代、その圧倒的な戦闘力と、決して折れない正義感によって、犯罪者たちから「絶対女王」の異名で呼ばれる凄腕の異能力使いである。

異能力テロリスト・ダークネスによる数々の凶悪犯罪……大臣クラスの暗殺や、数十万を超える被害者が想像さ

れた大規模テロを、過去にいくつも未然に防いだ経歴と実績をもつセイントゲートのスーパーエースだ。

入隊してから十年余り。今は上からの要請で、本部付きの司令官として、現場の指揮統制および、隊員の育成に当たっている。

身長170cmの長身に、ロケットのよう突き出たポリウムたつぷりの爆乳をもつ、魅惑的でグラマラスな女性を包む衣装は、戦闘スーツからビジネス用のスーツへと変わっている。

数々の修羅場の経験とともに年齢も重ね、心だけでなく、身体も成熟しつつあり、ウェーブのかかったロングヘアや、セクシーに開いた胸元から匂い立つ色香は、男性職員の垂涎の的だ。しかしユリアが内に秘める強い正義感、能力を振るう場所が現場であっても、作戦室であっても変わることはない。

むしろ司令官という責任ある立場になったことで、その使命感はより確固たるものへと昇華されている。

「ご苦労だったな。身なりは少年だが、相手はダークネスの幹部だ。あとどの尋問は、私が引き継ぐ。下がっていいぞ。危険な現場で疲れただろう。今日は早く上がって、ゆっくり休むといい」

「は、はいっつ！ ありがとうございます、失礼します！」

元気な声でそう言った女性隊員は、その美貌をわずかに赤く染めながら、

名残惜しそうに部屋から出ていく。ユリアのこれまでの圧倒的な実績そして神々しいまでの凛々しさとカリスマ性から、女性隊員たち全員が、彼女に強い憧れを抱いている。

「やれやれ……。さて……っ！」

ユリアは、ゲートスキル封じの特殊な手錠を施され、椅子に座る少年……犯罪組織ダークネス幹部のリベル・マギウスを、その冷たくも凛とした切れ長の瞳で、きつく見下ろした。

「お前があの悪名高いリベル・マギウス。闇娼館を数十も運営し、娯楽ドラッグ・アムリタの販路を急激に拡大させた特A級犯罪者。まさかこんな少年だったとはな」

女性隊員に向けていた優しい瞳から一変。ユリアは目の前で椅子に座る少年を見下ろすように、腕を組み、その切れ長の瞳を鋭く光らせた。

「僕もだよ。「アブソリュート・クイーン」。犯罪者の間じゃ死刑執行人にも等しい名前だからね。どんな女かと思っただけ……ふふ、いいねえ、そのエロい身体。顔も最高級の美人じゃないか。さっきのガキっぽい連中より、年を重ねたその熟れた感じがたまらないな。僕の娼館で働けば、指名一位は間違いないね」

リベル・マギウス。見た目は十代半ばの少年だが、その瞳の奥に抱える闇の濃さは、常人のものではない。

（こんな大物を捕えられるとは。まさに僥倖だな。こいつから得た情報を、

75

ダークネス壊滅の一手にさせてもらうぞ。

ユリアはその冷徹さを示すような高いヒールをひとつ、カッソンと静かに響かせる。

「ふっ、そのふてぶてしさ。子供だからといって手加減する必要はないようだな。私の取り調べを舐めないことだ。必ず組織のすべてを暴き、ダークネスをこの世から抹消してみせるっ！」

言ったユリアが、いまだ不敵に笑う少年に、取り調べの始まりを告げようとした時のこと。

「そう熱くなるもんじゃないぞ、藤堂くん。犯罪者とはいっても、人権はあるし、まだ子供じゃないか？」

「……田所本部長」

ユリアの許可なく取調室に入ってきたのは、セイントゲートの本部長を務める田所だ。

セイントゲートは、特殊機関とはいえ、治安組織の一部であることに変わりはない。キャリア組である田所は、異能力と実際の権限こそ持たないものの、役職上はユリアと同格の扱いだ。

田所は、おおよそ捜査官とは思えない不摂生なメタボ腹を、ワイシャツのボタンがはちきれんばかりに、ゆさゆさと揺らしている。

中年特有の粘っこい汗をにじませながら、まるで執念深いヒキガエルのような瞳で、ユリアの豊満な身体を嘗め回してくる。

「さあ、まずはコレでも飲んで落ち着

いたらどうだ？ 司令官は激務だ。キミも疲れているんだらう？ なんならわしが取り調べを代わるうか？」

田所の脂ぎった手から渡されたのは、一杯のコーヒード。

どこか不思議な香りがするそれを、ユリアは不愛想に受け取ると、形ばかりに一口だけ口を付ける。

（……いつもは取り調べなどに、まるで興味を示さない給料泥棒のくせに、相手が幹部とわかって近づいてきたか。まったく……どこまでも利己的な男だ）

田所は、己の出世のことしか頭にない典型的なダメキャリアだ。

行動原理が常に自分の利益を中心に回っており、市民の安全や正義などといったものとは無縁な男である。

しかもセイントゲートに転属前は、その権力を盾に、自身の様々な悪事を巧妙にもみ消してきたというのが、もっぱらの噂で、ユリアですら、田所の闇の経歴を調べあげることではできなかった。

金にうるさく、女にも手が早い。

実際、魅力的すぎる女性をもつユリアへの直接的なセクハラこそないものの、今でもスーツの胸元からのぞくユリアの爆乳をチラチラと盗み見ており、その淀んだ瞳の奥に、あからさまに下卑た劣情を孕んでいるのは明白だった。「コーヒードありがとうございます、田所本部長。ですが、目の前の少年は、れつきとしたゲートスキルの持ち主です。拘束具で能力を制御されていると

はいえ、普通の人間である本部長には危険ですので、ここは私に任せてもらいます」

キャリアである強いプライドをもっている田所だが、自身が異能力の才を持つていないことに強いコンプレックスを抱いている。

そのことが、セイントゲート最強の能力者といわれる、ユリアに固執するもうひとつの要因だが、田所の取り調べや現場への介入を防げるという意味で、ユリアにとつて都合がよかった。

「ふ、ふん……っ。そうか。わかったよ藤堂くん。……ふふ、まあ好きにするといい。しかし、仕事で欲求不満だからといって、年下に変な気を起こすんじゃないぞ？」

いつもなら手柄を求め、なんだかんだと屁理屈をこねて、もう少し粘るところだが、今日に限って、素直に部屋から出ていく田所。

その様子を横目で見ながら、ユリアは田所への軽いいら立ちを、一息ついて発散させる。

「……ふう。面倒な男だ。さて、リベル・マギウス。早速、アムリタの売買ルートについて吐いてもらおう……なにっつっつ!!」

ビ——ッツツ！

田所が部屋から出ていった直後、耳障りな電子音が響く。それは取調室と外とをつなぐ扉が、なんらかの要因でロックされてしまったことをユリアに伝える。

周りを見れば、扉のロックだけでなく、監視モニターなどもすべて使用不能状態になっている。これでは周囲から取調室の様子はわからない。完全に孤立無援状態だ。

「くっ、貴様の仕業かっつ！」

「さあてね。けどこれでお姉さんと、思い切り遊べるねっつっ！」

マジシャンのように、いつの間にか拘束具を外したりリベルは、——巧妙に隠し持っていたのだらう。手に持った銃、その引き金を指をかけた。

ダンダンッツツ！ なんの躊躇もなく放たれる、二発の凶弾。

隊員が装着しているセイントゲートの戦闘スーツなら耐えられるが、司令官であるユリアのスーツにそんな機能はない。

完全な不意打ち。いくら訓練されているとはいえ、普通の隊員ならよけることは不可能な攻撃である。だが……っ。

「私を誰だと思っている……っ!! 舐めるなよ、子供が……っつ!!」

ヒールを履いた足を華麗にステップさせ、身体を瞬時に左へターンして二発の銃弾をかむすユリア。長い黒髪が美しい弧を描く。

「へえ、いい反応だねえ。さすがは女王さま。ならこいつはどうだっつっ!!」拳銃を投げ捨てたりリベルが、次から取り出したのは、小型軽量のサブマシンガンだ。この狭い部屋で、一度に大量の弾丸をばら撒かれれば、今度

こそ回避するのは難しい。

リベルの幼さの残る顔に、犯罪者らしい凶気の実味が浮かび、トリガーが引き絞られる。

しかしリリアに動じる素振りはない。冷静に銃口を見つめ、そして精神の集中を極限まで高める。

「……………開け、門よっつ！ ゲートスキル『ディストーション』！」

リリアの身体から凄絶な気迫が、瞬間、リリアの正面の空間が、迫りくる無数の銃弾ごとブウウンツツツ！ という低い音とともにグニヤリと歪み、ガムのように引き伸ばされる。

そして刹那の後、空間が引き戻され、元に戻ったその時には、発射された銃弾は、区間ごと掻き消えてしまっていた。

その脅威の能力に、リベルに純粹な驚きと恐怖の色がにじみ出る。

「こつ、これが噂の藤堂ユリアのゲートスキル。空間ごと対象を消去する異能力か。ははっ、おもしろいね。そうだよ、そうでなくちゃ僕が呼ばれた意味……………ぐあああああつっ！」

リベルの興奮じみた言葉の最後が、無残な悲鳴に変わる。

ダアアンツツツ！

『ディストーション』によって、空間ごと距離を詰めたユリアの手には、ユリア自身の拳銃が握られていた。そしてその銃口から放たれた弾丸が、少年の右肩を容赦なく打ち抜いたのだ。激しい激痛に、リベルが右肩を押さ

え、惨めな悲鳴を上げる。

「ふつ……………なにを企んでいたのか知らないが、相手が悪かったな。遊びたいというのなら、相手をしつやろう。泣いてすむと思うなよ、リベル・マギウスつっ！」

カツツとヒールを鳴らし、ユリアは地面に倒れ込んだリベルの左膝に銃口を向けた。その瞳に浮かぶのは、情けではなく、強い正義感だ。

市民の安全と平和を守るセイントゲートの司令官として、凶悪犯罪者への慈悲はない。

そんなユリアの強い眼差しを受け、リベルは隠していた凶暴性を露わにする。

「く、そおおつ。よくも僕に傷をおつっ！ 僕の遊びは、いつも僕が一方的に相手を弄ぶゲームなんだつ。それを……………くそつっ！ このB・B・Aがあつっ！」

「ふつ、やはり犯罪者は所詮犯罪者だな。まずは一度その口を閉じてもらおうか。尋問はそれからだ。はああつっ！」

ユリアは、下賤な挑発に揺らぎもせず、タイトスカートから伸びるムッチリとした両脚にグッと力を込め、リベルのボディにきついキックを食らわせてやろうとした。

だが……………

「なつ、足に力が……………つ!! 馬鹿な……………貴様、は……………謀ったな……………つ!!」

力を入れようとしたユリアの両足が、まるで後から膝を小突かれたように、ガクリツツ！ と力なく崩れ落ちる。

足だけではない。麻酔薬でも打たれたかのように、全身が痺れ、銃を持つことはおろか、意識を保つことさえ難しくなっていく。

ユリアの戦士としての直感が、これは少年の能力などではなく、すでに仕組まれていたものであると告げる。

「……………くくくつ、はははつ。いいタイミングで効くもんだねえ！ そのままたちよつとだけ眠ってもらおうか。女王様」

「うう、くうつ……………お、おのれ……………卑怯……………つ……………」

指一本動かさなくなっていくユリアは、冷たい床に這いつくばった格好で、その意識を途切れさせた。

「う……………ん……………ああ……………つ」

途切れた意識が回復し、ユリアの切れ長の瞳がゆつくりと開かれる。

あれから一体どれほどの時間が経ったのだろう。

気が付いた場所は、セイントゲートの取調室ではなく、十畳ほどの広さに、四方を鈍い金属製の壁で囲まれた、どこか冷たい感じのする部屋だった。

(……………ダークネスのアジトのひとつか。どうやらリベルに拉致されたようだな。くつ、しかもこの格好は……………つ)

百戦錬磨の戦士の経験が、冷静に状況を分析するが、同時に強い屈辱に美

貌が歪む。

ユリアが着ているのは、先ほどと同じビッチリとしたグレーのスーツだ。しかし強いいられている姿は、理知的なユリアをひどく辱めるものだった。

彼女はまるでロデオ器具のような椅子にお尻を固定されており、両手、そして両脚は天井から伸びるワイヤーによって、高々と掲げられ拘束されている。

そのワイヤーも、リベルに使った拘束具と同じように、対象者のゲートスキルを抑え込むタイプのものだ。

スーツの胸元は広げられ、妖艶な黒いレースのブラをまとった爆乳は、見事なまでの量感を、これみよがしに露わにしている。

足首にまかれたワイヤーで、天上に引き上げられながらV字に大きく開かれた両脚のせいで、タイトなスカートはたくし上げられた格好になり、ブラと同じ、黒いショーツが丸見えの状態だ。

そのくせ悪に怖れられる女王然とした高いハイヒールとエロティックなストッキングはそのままで。

かつて最強と謳われたセイントゲートの女司令官は、被虐的な色香を漂わせる、淫猥なスタイルで、一人、敵のアジトに捕まっている。

しかもユリアの正面に置かれたモニターには、この拉致が周到に仕組まれた罠であった証拠映像が、これみよがしに流されている。

教調楽快奪略姫護守

小説 / あらおし悠^{ゆう}
NOVEL

挿絵 / みかん。
ILLUSTRATION

仲睦ましい姫と女騎士を襲う
ふたなり調教&快樂地獄!



百年の和平を破り、シヤガ国が諸国連合への同時侵攻を開始した。先王の急逝を受け、王位を継承した第一王子が、喪が明けるのを待たずに宣戦布告をしたのだ。

連合の盟主国による突然の侵略行為に、各国とも迎撃が間に合わない。緒戦はシヤガの連戦連勝。だが、広く薄く伸びきった戦線の維持は簡単ではない。いずれの国に対しても決定打を欠き、戦況は膠着状態に陥った。

しかし、シヤガの侵攻を阻んでいた最大の理由は、軍事の要となる魔術師の、数と質の差にあった。

連合諸国の建国の祖は、そのほとんどが古の魔術師。王家の者はその身に大きな霊力を宿し、優秀な術者を数多く擁している。彼らが祈祷で結界防壁を張り、侵略者を食い止めていた。そして皮肉な事に、追い詰められて守護する地域が狭まった分、結果は厚く強固になっていた。

対してシヤガは、急速に勢力を伸ばしたとはいえ、歴史の浅い新興国。槍や弓は揃えられても、魔術師の血脈は多くない。

中でも、最も攻めあぐねていた相手が、エリシマム王国だった。一帯で最も古い魔術国家。王族が連綿と受け継いだ霊力は、純粋にして強力。他国の追隨を許さない。その障壁を破るに足るだけの術者を持たないシヤガ国は、エリシマムに戦力を集中させたが、逆に他国から背後を突かれる事になり、

一時的な撤退を余儀なくされた。

「姫様、湯加減はいかがですか？」

「ありがとうフレア。とてもいいわ」

王城より戦場に近い離宮。その総大理石造りの浴室で、エリシマム王国の第一王女、リナリアは、数日ぶりの入浴を楽しんでいた。床を円形にくり抜いた浴槽は、思いきり脚を伸ばしてもまだ余る。広い浴槽に身を沈め、彼女は心地よさそうな吐息を漏らした。

「やっぱりお風呂が一番安らぐ。フレアもそう思わない？」

「う、うわっ！」

いきなり振り向いたリナリアが、身を乗り出して浴槽の縁に肘を置く。護衛として傍らで控えていたフレアは、慌てて視線を逸らした。

（姫様っ、胸、見えてますっ！）

それでも、目蓋にしつかりと焼きついてしまった。重そうに揺れる豊かな乳房と、白い肌との境界が曖昧な、淡い色の乳輪が。

「フレアったら、何を恥ずかしがっているの？ 女の子同士なのに」

リナリアがクスクス笑う。しかし同じ女性とはいえ、姫の胸をまじまじ見るなど不敬の極み。なのに、胸の奥で鼓動が高鳴るのを止められない。

「変なフレア。お互いの裸なんて、子供の頃から何度も見ているじゃない」

赤くなつて俯くと、彼女は不思議そうに首を傾げた。

この無邪気な姿を見て、誰が信じる

だろうか。彼女こそが、十日もの長きにわたり王城の「祈りの間」に籠もつて結界を張り続け、ついにはシヤガの大軍勢を退けた救世主などという事。その霊力は当代随一との呼び声も高い。しかし、当の本人はおっとりして、幼馴染みのフレアでさえ、強大な力の持ち主には見えなかった。

湯面に広がる、柔らかな長い金髪。幼さを残す丸い頬に、頼りなげに垂れた目。小柄なのに乳房だけは人並み以上の成長を見せ、いつドレスの胸元が弾け飛ぶか心配になるほど。

子供のようにあどけなく、天使のようには神々しい。そんな不思議な魅力を持つ幼馴染みの姫に、フレアは、同性でありながら強く心を惹かれていた。

もちろん、これは身分違いの恋。建国以来、男子は代々近衛隊長を務め、女性は王女の乳母を担う。母親もリナリアの乳母を務めた。そんな王家に近い家柄とはいえ、家臣は家臣。まして女性同士で結ばれないなどと、夢見る事すら許されない。ならば、せめて隣にいられるようにと、周囲の反対を押しきって近衛騎士に志願した。

剣の腕が認められ、見習い入隊が許されたが、やはり所詮は女と見下されていたのだろう。実際に与えられた仕事は、姫の側仕え。メイド扱いだ。

（お側にいられるし、これはこれで面白い通りと言えなくもないけれど……）

剣で姫をお守りしようと思んだ気持ち

は、行き場を失ってしまった。

先日の戦いでも、彼女は結果で国を守るという大役を果たした。魔法陣の描かれただけの四角い部屋に、ひとり何日も籠もり続けて。

その間、自分は扉の前に護衛として控えていただけ。無論、それが重要なお役目なのは心得ているけれど、役に立った実感がない。腰から提げた大剣も錆びついてしまっそうだ。

「ねえフレア。何をそんなに難しい顔をしているの？」

ふさぎ込んでいたら、リナリアが心配そうな顔をしていた。

「せっかくだし一緒に入りましょう」

「……は？ い、えっ。そんなわけにはいきません！ 姫と入浴なんて、家臣にあるまじき不敬……」

突然の申し出に、動揺を隠せない。当然辞退するけれど、この姫様は、おつとりに見えて意外に強引。

「いいから、入つて。……あなたに、そばにいて欲しいの」

切なげな声でお願いされたら、断りきれぬはずもない。フレアは、躊躇しながらも革の鎧を脱ぎ去った。

「し、失礼します……」

身体を流し、リナリアと距離を取って湯に浸かる。しかし彼女は、すぐに隣へと移動してきた。肩が触れ合い、緊張で身体が強張る。と同時に、彼女の柔らかさと、自分がすっかり筋肉質になつてしまった事を実感する。

「はあ……」

姫の小さな頭が肩に乗せられた。裸

99

で触れ合うのが畏れ多く、再び距離を取る。不満げに再接近を図る彼女に、フレアはあえて固い話を持ち出した。「ひ……姫様っ！今更ですが、お役目、お疲れ様でした！」

現状、結界は解かれ、見張りが敵を発見し次第、魔術師部隊が任務を引き継ぐ事になっている。つまり、彼女ひとりで数人の部隊以上の霊力を有しているという事。それだけの力を持つ者の重責は、騎士見習いごときに想像できるものではない。

「それにしても、なぜシヤガは突然の侵略なんて暴挙に出たのでしょうか。周りを全部敵にしたら、苦戦するのは明らかでしょうに」

その疑問を、騎士の自覚からくるものと思ってくれたのだろう。リナリアは、面白くなさそうにしながらも、真面目に答えてくれた。

「あの王子には以前お会いした事があるけれど、あまり政治に明るい方ではないよね。きっと彼には、シヤガが無敵の軍事大国と思えたのでしょう」

なぜ連合が均衡を保っていたのか、少し考える頭があれば、無謀な戦いを始める事もなかっただろう。

「そうそう、魔術師なんてカピの生えた力に頼るなんて馬鹿馬鹿しいとも言っていたわ」

「そんな、姫様を侮辱するなんて！」
憤りに駆られて立ち上がる。リナリアは一瞬だけ呆気に取られ、そして小さく微笑んだ。

「私ではなくて、魔術師全般の話よ」
そんな事は分かっている。その中にリナリアが含まれるのが許せない。

「前国王のお父上は魔術研究に注力していたのに、それを縮小してしまつたらしいわ。もつたいないこと」

生まれつきの霊力を持つ魔術師が少ないシヤガは、薬や道具で疑似的に使用できる魔術を開発していた。それらは「霊力」と区別して「魔力」と呼ばれている。ただ、結果のような大掛かりな力は発現できず、素質ある者が個人的に行使するのが限界らしい。

「わたしにも霊力や魔道具があれば、もつと姫様のお役に立てるのに……」

ぼつりと、羨望が口から漏れる。たとえ未発達な技術でも、今の未熟な自分よりは数倍ましだろう。

「何を言うの。あなたは十分に私を守ってくれたわ」

「いいえ。わたしは祈りの間の扉の前で、無為に立っていただけです」

死力を尽くす彼女に、何も力添えずに己の不甲斐なさに歯噛みするフレアの腕を、リナリアは女神のように穏やかな笑みで抱き寄せた。

「それが、どれだけ心強かつた事か。あなたが側にいてくれたからこそ、私は祈りに専念できたのです」

「姫様……」
彼女は励ましてくれていただけ。そう思っても、胸が感激で満たされる。

「だって、私とあなたは、同じお乳を飲んで育つた仲だもの」

「ひ、姫様っ!?!」
いきなり乳の話なんて始められて、つい声が裏返った。

確かに二人は、共にフレアの母親の母乳を飲んだ乳兄弟ならぬ乳姉妹。そんな親密さを再確認しようとしただけなのだろうけど、慎ましかたな彼女の口から「お乳」なんて言葉を聞くと、背徳的な気分になってくる。

「姫様……」

リナリアの大きな瞳が、フレアを見上げる。ふと、彼女の半開きになった唇に乳首を咥えられる妄想が頭に浮かんだ。出るはずのない母乳を飲まれる錯覚で、胸の先端がピリピリ痺れる。

（な、何を考えて……！ 姫様でそんな事を想像するだけでも罪なのに！）
冷静になろうとするほど、熱めの湯加減と相まって、頭が逆上せてくる。

しかし、そんな浮ついた気分は、やはり彼女の無邪気な言葉によって叩き落とされた。

「将来は、私の子があなたの乳を飲むのかしらね」

離宮に隣接している、騎士の宿舎。その灯りの消えた部屋の中で、フレアは眠れず悶々としていた。幼い面影を残しながらも、すっかり大人に成長したリナリアの裸身が目蓋に甦る。

「姫様……姫様あ……」
白い肌、柔らかい身体。姉妹同然に育つたのに、身分と性別を超えた恋に心身が焦がれる。

いずれ、彼女はどこかの王子にでも嫁ぎ、子を成す。それは、姫に生まれた者の至極当然な幸せ。なのに、彼女が誰とも知れぬ男に抱かれるのだと思うだけで、胸の奥が掻き搔かれる。

「ああ……ああ姫様……」

息が苦しい。仕える主への思慕と、まだ見ぬ彼女の夫への嫉妬。それが邪な劣情となってフレアを苛んだ。小振りな乳房や股間が疼く。そして、それを鎮める術は、ひとつしか知らなかった。身体に要求に逆らえず、指を疼きの発生源へと這わせていく。

「姫様、申し訳ありません……ふあん！」
姫で欲情した事への謝罪も間に合わない。指が勝手に動き出し、右手で股間を、左手で乳房をまさぐり始める。

「あ、あ……ああうっ」
いつもそうだ。一度こうなると簡単には止められなかった。貫頭衣の簡素な寝間着の裾を捲り上げ、下着をつけていない脚を大きく開く。背筋を走る小さな疼きに身悶えしながら、乳首と秘裂を撫で回す。それが、愛しい姫の指であると妄想しながら。

「姫様でこんな事……でも、あつ」
いけないと思うほど、悦びが深くなる。淫肉の割れ目を指先で擦ると、微小な痺れに身体が覆われる。硬くなった乳首を強く捻ると、小刻みに震えた背中がベッドから浮き上がる。

「ひっ、あつ。姫様、そこい……」
目を閉じ、本当にリナリアに愛撫されていると思ひ込みながら、妄想の彼

女に語りかけてみる。

「ひ、姫様知ってますか？ 女の子は……ここが気持ちいいんです……」

フレアは、一番感じる部分に手を伸ばした。胸を高鳴らせ、性器の上端にある硬い肉芽を摘み上げる。

「ひいひいッ！」

衝撃で全身が硬直した。内腿から手足の指先までビリビリ痺れる。そこは敏感すぎて怖いほどの場所。なのに、その痺れが癖になって、自慰のたび触らずにいられない。

「は、は……はあうっ」

乱れた呼吸を整え、もう一度、今度は陰核と同時に乳首も捻る。上半身と下半身から生まれた痺れが、頭の中を快感色に染め上げる。

「んあっ。姫様あ、気持ちいいよ」

自慰を覚えたのはいつ頃だろう。日に日に美しくなる幼馴染みの姫に欲情を覚え、気づけば、自分を慰めるのが日課になっていた。近衛隊で唯一の見習いのため、宿舎は粗末な隔離部屋。一人寝なのをいい事に、淫らな遊びを存分に堪能してしまう。

「ン、あ、あ……」

しかし、同じ建物には男性隊員も寝泊まりしている。寝着着の裾を唾えて声を抑える事に気を取られると、なかなか絶頂には辿り着けない。

「ん……ンッ。………ん？」

ふと、静寂の中に異様な音が聞こえてきた。胸と股間に手を当てたまま、暗闇の中で聞き耳を立てる。

「お屋敷の方だ！」

何者かが争う声、窓の破れる音。リナリアの離宮に異常があったに違いない。跳ね起きたフレアは、剣を片手に窓から飛び出した。裸足のまま芝生の上を走り抜けると、二階の一室から怒号や悲鳴が。

——誰か、誰か……！

その中にリナリアが助けを求める悲痛な声を聞き、全身が総毛立った。考えるより先に身体が動く。剣の鞘を咥えると、壁を蹴ってバルコニーに飛びついた。直前まで自慰で悶えていたのに、自分でも驚くほどの身軽さで騒ぎの現場に転がり込む。

「——!？」

愕然となった。護衛に当たっていた近衛騎士が残らず床に倒れている。そして、低い呻きが響き渡る現場の中心に悠然と立つ、軍服姿の怪しい人物。

右手に握ったサーベル。ふくらはぎまである深紅の外套や、光沢のある長靴から判断すると、将校か。ただし、エリシマムのものではない。

「シヤガ国!!」

「……おや？ まだ雑魚がいたのか」

フレアの声で、侵入者がゆっくりと振り返った。それが女性である事でさらに驚く。肩で切り揃えた黒髪と切れ長の細い目は、いかにも冷徹な軍人。太腿も露わなミニスカートの軍服は、大人の色気を漂わせながら、彼女の大胆さや自信を窺わせる。撤退したはずの敵国の、それも将校

が、どうしてこんな場所に。女性が単

身で潜入任務を行い、近衛兵を打ち倒したというのだろうか。驚くべき点多すぎるのと信じられないのとで、フレアの頭では処理しきれない。

だが、彼女の小脇に抱えられたリナリアの姿が、フレアを激昂させた。意識がないのか、ぐったりとしている。

「姫っ、リナリア姫様！」

必死の呼びかけに、リナリアがうすらと目を開けた。

「駄目……フレア、逃げて……」

しかし、それだけ言うと再び気を失ってしまった。敵の手に落ちた彼女の姿に、フレアの髪が怒りで逆立つ。

「姫様を離せっ！」

床を蹴って敵将校に斬りかかる。彼女はサーベルで受けようとする。そんな細身の剣で近衛の大剣を止められるはずがない。叩き折ってしまおうと、渾身の力で振り下ろす。しかし剣が交錯した瞬間、激しい衝撃が襲った。

「きやああっ!!」

フレアの身体は弾き飛ばされ、バルコニーの手すりに叩きつけられた。

「い、今のは一体……?」

まるで雷に打たれたようだ。全身が

激痛と痺れで動けない。剣を交えただけなのに、なぜ自分は床に転がっているんだらう。全身がバラバラになりそう

な痛みで考える事さえままならず、

這いつくばって身悶える。

「これで最後かしら？ それでは、お

姫様をいだけて行くわね」

女が、リナリアを肩に担ぎ直す。フ

レアの霞んだ視界の中で、姫の端正な顔が苦痛に歪む。このままでは彼女が連れ去られてしまう。その危機感が、痺れる身体を無理矢理動かした。

「ま……待てっ！」

「……うお!!」

女将校が息を飲む。立ち上がったフレアの大剣が、唸りを上げて彼女の髪を掠めたからだ。冷淡な吊り目が少なからず見開かれる。

「驚いた。まだ動けるなんて」

女が大きく目を見開く。とはいえ、

余裕の態度は崩していない。騎士道にもとる不意打ちを食らわせたのに仕留められず、フレアは唇を噛んだ。

「姫を……離せ……っ」

もはや、立っているのさえやつとの

状態。それでも、騎士としての使命感

がフレアを突き動かした。

「だあああああっ!!」

「……むっ!!」

まだフレアに攻撃する力が残っているとは思わなかったのか、油断していた敵の反応が遅れた。咄嗟に振り上げたサーベルが真っ二つに折れる。

「なんだと……!!」

女将校が、今度こそ驚愕で顔を引き

擡らせた。しかしフレアの反撃もそこまで。二度目の雷撃を受け、もう指先

ひとつ動かせない。

「ひ、姫を……返せ……」

「なんて娘なの。この雷撃剣に耐えた

ばかりか、折るなんて」

魔法少女 ロイヤル ニート

*Magical girl
Royal Neet*

見た目はクールビューティー、中身はニート！
ダメダメ系魔法少女に
待ち受ける数々の受難！

うえだ
小説 **上田ながの**
NOVEL
せいねん
挿絵 **青年ホルモン**
ILLUSTRATION

さい。あと、家の掃除と、朝、昼、晩のご飯の支度も頼むわ」

「——へ？」

ロイは不思議そうに目を見開いた。「仕送りとかあるって言ってましたよね？ それに炊事や掃除はお手伝いさんが来てるって……。あ、そういえば、なんか部屋が汚くなってる。って、まさか……」

豚は結構察しがいいらしい。

「そうよ。仕送りを切られたのよ。お前の生活は人として間違ってる。少しは普通の人間の苦勞も知れ——とかわけの分からないことを……」

家外敷島家の両親はまともなものかも知れない。まあ、だったら二九歳まで放っておくという話だが……。

「そういうわけだから私のために働きなさい。そうすれば魔法少女くらいやってやるわよ」

こうして敷島茜は魔法少女としての第一歩を踏み出したのだ。

因みにロイは魔法で人間形態に変身することが可能だ。見た目は少女にも見えるレベルの可愛らしいシヨタである。その姿でロイはバイトやら家事やら、色々扱き使われることとなった。

*

「で、魔法少女の仕事ってなによ？ 病みがどうか言ってたけど」

「人の心に潜む病みです。それを魔法で浄化するんです。病みのせいで家から出られなくなっている人や、罪を犯している人を救ってあげるんです」

「つまり、引きこもりやニートみたいなクズの更正ってことね」

「……あ、貴女がそれを言いますか」

「なんか言った？」

「い、いえ、なんでもありません」

「まあいいわ。で、魔法少女ってどうやって変身するのよ？」

「変身ですか？ 簡単です。心の中に呪文を思い浮かべて下さい。それがキーとなって変身することができます」

「なるほど……呪文ね」

ふむつと茜は考える。そしてすぐにキーワードを導き出した。

「アパレルアパレルラリルレロ・キラランキラランカキクケコ——マジカルタッチで魔法少女になくあれっ」

カアアアアッ！

瞬間、茜の身体が光り輝いた。

輝きの中で身に着けていたジャージが光の粒子に変換される。代わりに茜の全身をピンク色にしたヒラヒラのドレスが覆い尽くした。フリル塗れのスカートに、胸元には大きなリボン。髪の色も黒からピンクに変わっている。まさにザ・魔法少女といった趣だ。ただ、茜はかわいい系ではなく美人系である——ニートのくせに生意気な——。

しかも、顔立ちは年相応といったところだ。その上、身長はどちらかという

と女性にしては高め。胸もDカップを誇っている。かなりデカイ。そういうわけで、魔法少女衣装が絶望的に似合

っていないかった。いい年した姉ちゃんが無理をしているようにしか見えない。

「う、うわああああ……」

ロイがどん引きの声を漏らした。

が、茜は気にしない。というか彼の言葉は耳に届いていない。

憧れの魔法少女に変身したという事

実に最高の高揚感を覚えつつ——

「みんなの夢と希望を守る魔法少女——ロイヤル茜、ここにけ〜んざん♥」

可愛らしく小首を傾げつつ、指でハートの形を作るのだった。

「……なんですかそれ」

これにはロイも流石に突っ込まずにはいられなかったらしい。

「なんですかって、決めポーズよ。魔法少女には必須でしょ！」

「そ……そうですか……。というか、ロイヤル茜って？」

「名前よ名前。魔法少女には可愛い名前が必須でしょ？ 可愛さと、私の高貴さが入り交じった名前よ」

「なるほど。しかし……か、かわ……いい？」

「あ？ 何か文句でもあるの？」

眉間に皺を寄せて口をへの字に曲げつつ、鋭い目で睨む。痛い格好をしているとはいえ、美人は美人。そして美人の不機嫌顔というのは迫力があって怖いものなのだ。

「なんでもありません」

豚はただでさえ猫くらいの大きさしかない小さな身体を更に縮こまらせるのだった。

「まあいいわ。さて、それじゃあ仕事を始めるわよ。どこへ行けばいい？」

「……それはその、意識を集中させてみて下さい。病んでいる人間を魔力で捉えることができますから」

「なるほど……」

意識を集中——取り敢えずそれっぽく目を閉じてみる。すると茜の脳裏に男の顔が浮かび上がってきた。実家にて部屋から出ることもなく、ひたすらゲームをやっている男の姿が。

「実家に寄生してゲーム三昧か……クズね」

吐き捨てるように呟く。

「ええっ」

何か抗議するような声を豚が漏らした。が、一睨みしてやると黙った。

「さつさと病みとやらを祓ってやるわ。ちやっちゃん仕事終わらせるわよ！ もうすぐブラゲのメンテがあげちゃうからね！」

「……貴女がクズって言った人と同じような思考ばた……いえ、なんでもありません！ さあ、行きましょう！」

「よし！ それじゃあ……早速魔法を使うわよ！ ワ〜ブ」

「転移魔法を発動させる。」

「あれ？」

が、何も起きない。

「あ、すみません。そういう魔法はありません。移動は徒歩とか車、電車でお願います」

「……面倒ね。仕方ない。変身を……」

「……解けないわよ！！」

「ああ、一度変身すると、病みを浄化しない限りそのままです」

「んっ!? え、待って? つてことは、この格好で移動しろってこと?」
「……はい」
ロイが頷いた瞬間、茜は彼を鷲掴みにして窓から放り投げるのだった。
とはいえ、浄化しなければ一生このままである。結果、茜はジロジロ周りの人間に不審な視線を向けられながらも、引きこもり宅まで電車で向かわざるを得なかった。因みに昼間だというのに何度か職質もされた。
（この怒り……ぶつけさせてもらおうわ）
強烈な怒りを全身から発散させつつ、辿り着いた引きこもり宅のインターホンを押す。するとすぐに「はい。どなたでしょう?」とマイク越しに声が聞こえてきた。女の声である。多分母親だろう。
「あなたの息子に用があつてきたわ」
偉そうに告げる。
「ちよっ……もう少し穏便に」
肩の上に乗っているロイが注意してくることがない。茜は昔から御貴族様として育てられてきたので、下手に出るといふことを知らないのだ。
「えっと……いい、いかがわしいお店の人ですか?」
モニター越しにこつちの様子が見えるのだろうか? 恐る恐るといった様子で尋ねてくる。
「ち……ちがあああああう!」
沸点が低い茜はすぐに切れた。声を上げると同時に魔力を解放し、家のドアをぶち破る。

「ひえええ!」
悲鳴を上げたロイが肩から飛び降り、どこかへ逃げていった。
それを気にせず茜はズンズンと部屋の中に入っていく。
「な……なな……なんなんですか貴女は!? け……警察……」
廊下で女性が腰を抜かしていた。先程会話をしていた相手だろう。
「あなたは黙ってなさい。私はあなたの息子を更正させに来たんだからね」
「……更正?」
わけが分からないといった様子で女は首を傾げる。
「おい、今の音はなんだババア!」
二階から声が響いてきたのはその時のことだった。何となく顔を上げる。するとそこには男がいた。
「あなたね……」
「な、なんだお前? で、デリヘル? 頼んだ覚えはないぞ」
茜を見てポカンと男は口を開ける。その言葉にピキピキと青筋を立てつつ、茜は無言で男へと近づいていった。
「な、なんなんだよお前は!」
「私? 私は魔法少女……魔法少女ロイヤル茜よ」
「ま、魔法少女? 少女?」
実に疑わしげな視線を向けてくる。そんな男の頬を容赦なく平手でぶっ叩いた。
「な、何を!」
当然男は抗議してくる。が、茜は気

にしない。凍てつきそうなほど冷たい視線で男を睨みつつ、更に平手を叩き込んだ。しかも、一発だけではない。パンパンパンパンと何発も叩く。そうした連打に対して男は最初こそ「痛い!」や……やめろっ」とか言っていたが、やがて「あっ♥」とか「はひん♥」とか心地よさそうな喘ぎ声を上げるようになった。
気持ちが悪いので突き飛ばす。男は「ああっ」とか嬉しそうに床に倒れた。そのまま股間を踏みつけ——
「働け」
一言だけ告げた。
瞬間、男はまるで条件反射のように「はい♥」と頷いた。
そのような反応を冷たい瞳で見下しつつ「豚! 来なさい豚っ!」とロイを呼ぶ。
「な、なんででしょうか?」
へこへことした態度で豚が近づいてきた。
「で、浄化ってどうすればいいの?」
仕事の本番はここからだ。
だが——
「あ、それならもう終わってます」
「え? どういうこと?」
「どういふことも何も、魔力を持った一撃を何度も加えたじゃないですか。最後には働け——なんて言葉まで。今で浄化は終わりですよ」
「え? そうなの? なんか……浄化キラリンシャワーみたいな魔法は使ったりしないの?」

「はい」
というわけで、魔法少女ロイヤル茜による最初の仕事は終わりを告げたのである。
これ以後、茜はほぼ一週間に一回出撃し、毎回男女問わず病んだ人々をビシタすることとなった。
*
「茜様大変です!」
魔法少女を始めてからだいたい一ヶ月が過ぎたある日、ロイが血相を変えて茜の部屋に飛び込んできた。
「何よ?」
「なによじゃありません! 魔法使いが現れました!」
「魔法使い?」
「はい。病んだ童貞が三十歳を超えると出現する存在です。その力は魔法少女に匹敵するほど恐ろしいものです。浄化しないと」
「……面倒臭そう」
「そう言わないで下さい! 因みにターゲットは三人います。彼らの浄化……どうかお願いします」
ロイの言葉が終わると同時に、茜の脳裏に男達の映像が流れ込んできた。
一人は引きこもりのエロゲオタク。
一人はメイドマニア。もう一人は盗撮犯。全員業が深そうだ。
「誰から浄化しましょうか?」
↓エロゲオタク 118ページへ
↓メイド好き 123ページへ
↓盗撮犯 128ページへ
「誰からってそれは……」

「ここがエロゲオタの家か……。まるで兎小屋ね」

木造アパートを見つめて茜は不快そうに眉間に皺を寄せた。因みに変身済みである。移動などを考えると変身はあまりしたくないのだが、変身してないと相手の位置が分からないのだから仕方ない。

今日もジロジロ見られて実に不快だった。故に不愉快さを抱えつつ、エロゲオタクの部屋の前に立った。表札には金山敦夫と書かれている。

ロイの話によるとこいつはただの引きこもりとはわけが違うらしい。魔法を使って少女達にイタズラをしているとの話だ。

（何にせよ、ぶちのめすだけだけけど）いつも通りビンタするだけだ。そのようなことを考えつつ、インターホンを鳴らした。するとすぐにドアが開き、金山が姿を現した。

贅肉塗れの太った気色悪い男だ。顔は二キビ跡だらけである。不快だ。

「……デリヘル？」

何度聞いたか分からない言葉が向けられる。腹が立つたので無言でビンタしてやった。

「あうっ」

金山が悲鳴を上げる。が、気にしない。更に二度、三度とぶっ叩く。その上でいつも通り「クズが」とか「生き

てる価値のない社会的ゴミね」とか罵倒の言葉も加えた。

（魔法使いだかなんだか知らないけど、いつもと変わらないわね）

だが、その瞬間、異変が起きた。ぐじゅっ……。ぬじゅるるるう！

「え？ あ、な……なにっ!？」

突然茜の身体にヌルヌルとしたものがまとわりついてくる。

「これ……触手っ!？」

粘液に覆われた緑色の異物。うねうねと蠢くそれは異様なほどに長い。一見すると蛇のようにさえ見える肉触手だった。そんなものに両手足首が拘束される。いや、それだけじゃない。腰回りまで……。

そのまま茜は部屋の中へと引き摺り込まれることとなってしまった。

「うあつ！ あ……茜様あつ！」

肩に乗っていたロイが引き摺り込みの勢いに負けて落っこちる。豚を残し、茜はただ一人室内に連れ込まれた。パタンツとドアも閉まる。

が、重要なのは室内に連れ込まれたという点ではない。

「ちよっ！ 気持ちわるっ！」

気になるのは衣装に粘液が染み込んでくる点だ。ねっとりとした感触が実におぞましい。ゾクツと背筋が震えるような怖気が走る。慌てて藻掻いてみせる。が、触手を引き剥がすことはできない。それどころかより強く茜の身体に絡みついてきた。

「なんなのよこれはっ!？」

「何って……ば、僕が魔法で喚び出した触手なんだなあ」

「魔法で喚び出したって……なんでこんなものを!？」

「なんでって……もちろん、触手が好きだからなんだなあ。触手で女の子を苛める。男のロマンなんだなあ」

語る姿は実に楽しそうだ。

「わけが分からないわよ！ そんなことより、早く私を解放しなさい！ この私に対してこんな真似……マジでぶっ殺すわよ！」

ギラギラとした殺意を向ける。殺す—— 比喩ではなく本気だった。

それを理解したのか、金山は怯えるような表情を浮かべつつ「お、お前……何者だあ？」などと尋ねてきた。

「私？ 私は魔法少女よ。魔法少女ロイヤル茜！ あんたを浄化しにきてやったのよ！ 感謝しなさい」

拘束されたままだが、どこまでも偉そうに告げる。

「……魔法少女?」

そうした茜の言葉にピクツと金山は眉根を震わせた。

「ええ、そうよ！」

触手に捌め捕られたまま、えっへんと胸を張ってみせる。年齢の割に実の子供じみた態度だ。だが、それも仕方ない。子供のままだい年になってしまったのだから……。

「ふざけるなっ！」

そんな茜に対し、金山は突然怒鳴り声を響かせた。

「な、なによっ!」
唐突すぎる大声。流石の茜も驚かざるを得ない。
「なによ……じゃないんだなあ！ 魔法少女？ あんたが？ 馬鹿も休み休みに言うんだなあ!」
「ば、馬鹿って……」
「本当のことなんだなあ。だつてあり得ない。お前みたいな年増が魔法少女とか、絶対あり得ないんだなあ！ 魔法少女ってのは『きらら☆キララ魔法少女つたいへん!』『きらら★キララNTR 魔法少女は変わっていく……』に出てくる十萌きららちゃんみたいな少女のことを言うんだな！ お前みたいな年増が魔法少女とか、絶対あり得ないんだなあ!」
語る金山の言葉の中には強烈な憤怒が込められていた。ピリピリと肌が痺れるほどのレベルである。
「と、年増って……ふざけるんじゃないわよ！ 私はまだ二十九よ!!」
けれど、怒りに関しては茜だつて負けてはいない。しかし——
「アラサーは年増なんだな!」
色々意見はあるだろうが、金山が生きている界限の人間にとつて二十九歳は年増なのである。それは動かし難い事実なのだ。
「うぐううっ!」
グサツと茜の胸に見えない刃が突き刺さる。
「お前みたいな年増が魔法少女を名乗るなんて絶対許せないんだなあ。だから

響よ！
敵は多いぞ
気を付ける
のじゃ！

了解
御霊様！

イヤ

—ツツ！

ああッ

可憐な学園退魔師は
悪鬼悪霊を討つ！

キル

く…そ

っ

キル

キル

手ごずらせて
くれたナア！

さびびび
料理して
やろっか

く…ッ
まだ終わり
じゃないわ

御霊様！

力をお借し
下さい！！

合神！！

霊！

身！



契約者
呉内響よ!
我と共に

仕方ないのう

魔を討つ刃と
なれい!!



ぶっっ

大したこと
ないやつで
あったのう

あの程度なら
僕の助力なしに
討滅できねば
ならんぞ

まったく
近頃の退魔師は
れべるが落ちた
ものよな

はいはい
悪かった
ですねえ

浮獄バトルスクール

魔を断つ刃 呉内響

漫画 ぱふえ
COMIC

まだ終わったか
確認してないん
だから

油断しないで
下さいね
って!

僕は疲れた

ごら!
待って!

一眠りすると
しようかの

大丈夫じゃ
淫魔の気は
消えておる

しかし！

淫魔

人の魂：
とくに精気を
好んで喰らう
異界の化け物

繰り返してる
と聞くが…

近年では
性に旺盛な
少年少女が
狙われる
ようになり

この学園は
不思議と

何度も
大物に狙われては
討滅してを

淫魔から
彼らを守るため
学び舎に潜入し
戦う…それが

学園退魔師の
任務である

授業を
始めるぞー





うっ

淫魔!?

な...!?

ちよつとお!

やっぱりまだ
倒せてなかった
じゃないの!!



ククク
勝ったつもりで
油断したな
気配を消した
だけよ

キサマの
退魔師は
いつも同じ様に
ハマりよる



ちよつと！
聞いているの!?



御霊様



今暴れられたら
クラスの皆に
被害が出るし！

くくくく
キサマの力で
その触手は
ほどけぬよ



く…御霊様の
力はアテに
できないか

やられた
フリとはいえ
痛かったぞ

このままでは
血界も張れない



ひゃっ

さてたぶぷりと
仕返しさせて
もらいぞ



どつすれば…
……く…

ん
ん

TS女勇者は異世界男根に嬲られ
メス性感の虜となつてゆく

異世界性転 セクワイナ

小説 かりのけい 狩野景

挿絵 はれんちとめこ

「ここ、どこ……?」
「いったいどうなってるんだ? わけがわかんない。」

「っていうか何これ、戦争映画? 建物は爆撃されたみたい崩れてるし、それにあれって……死体?」

「焼け焦げて真っ黒になったのが、そこから辺に転がってる。あれとか、人間じゃない……よな? なんなんだ?」

「それにこの街並み、東京じゃないだろ。さっきまでやってたファンタジーゲームをつくりなんだけだ。」

「前の日から徹夜でプレイしまくって、ボスキャラ戦の手前でセーブして、コンピニにメシ調達に出かけて。」

「信号待ちで立ちくらみして、車道にダイブしちゃったんだ。」

「……つまり俺、死んだのかよ!?」
「じゃあここはあの世ってことか?」

「それにしても妙に感覚が生々しいんだけど……」

「セラフィーナ。故郷を救えず無念なのはわかるが、いつまでも留まる訳にはいかない。そろそろ出発するぞ」

「訳わからなくてへたり込んでたら、なんかいきなり話しかけられた。デッカい剣を背負ったムキムキの男、どう見ても外人だけど、こいつが喋ってる言葉わかるぞ?」

「セラフィーナ……って、俺の事か? でもそれって……」
「一刻も早く魔人ゴルディンを倒さねば、世界は闇に包まれる。これ以上の

犠牲を出さぬためにも、行こうセラフィーナ。ヤツを倒せるのは勇者であるお前だけなのだから!」

「魔人ゴルディンって俺がやってたゲームのラスボスじゃないか。」

「それに……、セラフィーナはそのゲームの主人公、女勇者の名前だ。」

「あと、ムキムキの言葉にうんうん頷いてる、黒いローブ着たのと僧服着た二人の女がいる。」

「剣士、ウイザード、プリースト……、俺がやってたゲームのパーティの編成そのまんまだ。」

「じゃあ、俺は……」
「ん……なんだ? 胸……?」

「ムキムキ剣士に手を借りて立ち上がるうとしたら、胸でゆっさりど何か重い物が揺れた。」

「それに足とか股間とかが、妙にスーするし。」

「はあっ!? なんだこれ……おっぱい……だと?」
「俯いて見たら、あり得ない膨らみが目に入った。」

「しかも、さっきまで着てた小汚いジャージじゃなくて、やたら露出度高い、ヒラヒラしたコスチューム着てるし。」

「か、鏡! 鏡を見せてくれっ!」
「鏡……ですか?」
「女ウイザードに頼むと、怪訝な顔で呪文を唱えた。目の前に姿見大の魔法の鏡が出現する。」

「死んだと思ったら、ゲームの世界で勇者に転生って、なるうで飽きるほど読んだパターンだろ。」

「しかも性別変わるとか、属性が一部にしかウケなくて、アクセス伸びないヤツだ。」

「それはともかく、鏡に映ってる俺の姿は悪くない。」

「いや、むしろかなりいい。ファンタジー映画のエルフとかみないな、髪の毛長くて緑色のクールな超絶美少女だ。しかもおっぱい凄くおっきいし。」

「腰の辺りのクビレとか、グラドルでしか見た事ないレベルだし、太ももなんかプルプルだぞ。」

「風呂に入った時にいつも見てた俺のアブラマシマシ豚ポディじゃない!」

「まじでセラフィーナだ。俺がさっきまでやってたゲームの主人公……。やつぱりこれって、夢?」

「コンピニ行く以前に、実は寝落ちしてんだよな? なるうの読み過ぎでこんな夢見てんだらう。」

「ほつぱたツネネよりも、どうせ夢ならって、試しにおっぱい鷲掴みにしてみる。」

「ふああんっ!」
「夢とかあり得ない。」

「しつかりした生の感覚だ、これ。おっぱい柔らかすぎ!」
「それに敏感すぎるだろ、おかげで変な声出ちまった。」

「いつて。なんか……凄いな!」
「それに触ると触られるの、両方経験出来るなんて!」

「とにかく、男の身体と感覚がぜんぜん違うぞ。」

「セ、セラフィーナ、なにを?」
「どうしたのですか? 勇者様……」

「俺がおっぱい揉み始めたから、パーティの連中が驚き始める。」

「その中で男の剣士は、妙に前屈みになってた。こいつ、俺に勃起してやがる……」

「俺が死んだのかどうかはともかく、何故かゲームの世界に入り込んで女勇者になっちゃったのは確かだ。」

「こういうのってラスボス倒してクリアしたら、みんなに見送られながら現世に戻るっていうのが約束だけだ。」

「でも戻れたとしても、俺、事故に遭ってるし、それはどうなるんだ?」

「死んでなかったとしても、大怪我状態とか、シャレにしないんだが。」

「いや、いまそんなこと考えてもしようがない。まずは元の世界に戻ることに先だ。」

「だけど、あともう少しでクリアだったゲームの続きを、主人公になって直に体験できるなんて、ちよつと興奮する。ゲーマーとして、究極の喜びだろ、それって。」

「ネット上で自慢したいっ!」
「こんな経験できる人間なんて、めつたにいないだろうし、外に実況できるツールがあればいいのに。」

アクセス数とか、すごいことになる
だろな。

「勇者……?」

「な、何でもない。決戦前に装備の具
合を確認しただけだ。さあ行くぞ仲間
達。これまで悪逆を働いた魔人ゴルデ
インを、今度こそは討ち果たすぞ!」

「やりましょう、セラフィナ!」

「憎き魔人に、正義の鉄槌を!!」

キャラの口調を真似てそれらしいセ
リフを言うと、仲間たちが反応した。

しかし何か話すと、自分の口から女
の声が出てくるなんて変な感じだ。

それでこのゲームだけど、これまで
プレイしたエピソードを思い返すと、

魔人には幼馴染みを目の前で殺された
り、謀略にはめられて人々から孤立さ
せられたりして、やたらと酷い目に遭
わされてきたんだよな。

モニター越しじゃなくて、酷い街の
状態を直に見てると、プレイヤーじゃ
なくセラフィナ自身として、これま
での事に腹が立つてきた。

元の世界に戻ることを抜きにしても
この世界をこれ以上魔人の好きにさせ
るわけにはいかないな。

減じた街を後にして、俺たちは魔人
の本拠に向かっていた。

かなりの距離を歩いたけど、さすが
勇者の身体だ、少しも疲れない。

「よし、ここで少し休憩だ。俺、いや
私は小便……じゃなかった、用を足し
てくる」

ゲームの中なのに、生身の身体だか
らか尿意を覚えていた。

しかも、もう少し我慢出来るかなっ
て思ってたのに、あつという間に結構
ヤバくなってる。

女は男より尿道が短い分、我慢出来
ないっていうけど、それなのか?

つい男口調の上品な言葉遣いしちま
うの気をつけながら、道を外れて一
人で森の中へ向かった。

さすがに皆が見てる前で立ち小便つ
て訳にはいかないからな。

ええと、座ってしなくちやいけない
んだよな。面倒くさいな。

いい感じの茂みがあったんで、その
陰で鎧の下ごと下着を下ろす。

ゲーム画面だと脱げるのは装備まで
なんだけど、その点は問題なかった。

「本当に、チンコ無くなってる……」

女の声でチンコなんて言っちゃった
から、自分でドキッとした。

他にも色々エロい事をこの声で言っ
てみたくなる。

確かめると、俺のペニスは跡形もな
くなって、つるんと何も無い女の股間
が目に入った。

詳しくどうなっているのかは、鏡で
もなければ自分でも見られない。

「そんな事より、いまは小便だ」

やばい、漏れる。もたもたしてる間
に尿意はもう限界だ。

チンコがない身体で、立ったまま小
便したらどうなるのか……、ちよつと
試してみる気にはなれないな。

小便するときに力むところは、男も
女も同じだ。

「んっ」

しゃがみ込んで、下腹部に力を込め
る。

じよおおお、じよろじよろ。

「ふあ、あああ、これが、女の小便」

チンコの中を熱いのが走り抜けてい
く感覚なしに、一瞬で飛沫が溢れかえ
った。

しかも溜まりに溜まっていたらしく
すごい勢いで、激しい音が仲間達の所
まで聞こえちやいそうだ。

少し堪えようとしたけれど、女の股
間は一度出始めた尿を、全く抑えられ
ない。

それに激しく噴き出す尿の勢いに、
放尿の爽快さと何か違う気持ちよさが
股間に芽生えていた。

「はあ、ん、ああ……。小便なんか
男も、女も、ああ、大して違わないっ
て思ったのに……。男の時と、全然違
うじゃんか……。確か、終わったら、
拭かないと駄目なんだよな?」

どうにか全部出し終わったけど、股
ぐらがべちよべちよに濡れちゃって
いる。

チンコなら振って飛沫を切ればいい
けれど、この身体にはその振る物がな
い。

近くの葉っぱを一枚千切って、それ
で濡れた部分を拭いてみた。

「ひうつ! おあ……な、何だ、今の
感覚……」

触れた途端に、股間からゾクツとす
るような刺激が走って、背中がビクン
ビクンってなった。

「女の、まんなの……感触。こんなに
敏感なんだ……」

不細工でゲームオタな俺の彼女は、
モニターの中の女の子と右手だけだつ
たから、生まんこに触るなんて初めて
だ。しかもそのまんこが自分のだなん
で、なんか……すごく興奮する。

自分の股間まさぐると、チンコじゃ
なくて、まんこがあるなんて……。

女は男の何倍も気持ちいいとかい
けど、それが全然大袈裟じゃないのが
よくわかった。

「そういえば、この身体……元とどう
違うのか、まだしつかり確かめてない
よな……」

鏡で見て外見が全く別なのはわかっ
たけれど、それ以上は仲間の目があつ
て調べるわけにはなかった。

いまは休憩なんだし、少しくらい戻
るのが遅れても構わないだろ。

俺はビキニ鎧の上も外すと、撓わな
膨らみに、今度は直に触れてみた。

「はあああ、あううう。やつぱり、気
持いい……」

これが、生おっぱいの感覚……。

敏感だし、すごく柔らかくて、指が
どんどんめり込んでいく。

揉むとイヤらしい形に^し拉^しが^しげ^して、
ちいいの、膨れ上がる。

男のオナニーと駆け巡る快感が、根
本的に違う。こんなの味わるなんて、

「ひうつ! おあ……な、何だ、今の
感覚……」

女の身体、ズル過ぎる……。

「ふあああ、はあああ」

揉む感触もたまらないけど、それ以上には採まれる気持ちよさが凄すぎる。指を蠢かせる度に、快感が俺の思考を奪ってゆく。

「くふう……ああ、すげえ、乳首、こんなに勃つちやつてる……」

じんじんして、こんなとこ触つたら……。

「はううっ！ おお、あああ、痺れ、走ったあ。んふう、ふああ、あ、ああああ……いい」

乳首、キュッてつまみながら、おっぱい採むと、ますます頭が馬鹿になつていく。

充血して過敏になった乳首も刺激しながら、女の喘ぎを漏らして悶える。

「気持ち……よすぎるだろ、女の身体あ。はああ、んああっ」

おっぱいだけで全身がじんじんして、腹の奥の方が熱くなつてる。

股間の疼きが止まらない。チンコが勃出した時に近いけれど、そういうはつきりした脈動とは違う。

ドロドロ溶け崩れていくような感覚に意識を奪われる。

「チンコじゃなくなつてる、俺の、ここ……。お、おまんこ……。触っちゃったら、どうなるんだ……？」

おっぱいで理性が危なくなつてるのに……。

怖いようなわくわくするような気持ちに生唾を飲み込みながら、そつと股

間に指を押し当てる。

「く……ッ、ふおおおっ！ おおっ、あああああ、なん……だ、これっ。

はあつ、あうっ、おあああ」

くちゅ、と指が潤んだ髪に埋まり込んだ瞬間、強烈な刺激が爆ぜた。

ちよつと触つただけなのに、こんなに感じるなんて。

敏感さがチンコどころじゃない。それに割れ目もぐちゅぐちゅに濡れてて、指がズブズブめり込んでいく。

「ふあああ、はあ、指い、あ、あ、ああ……」

小便じゃない、ヌルヌルした液が指にねつとり絡みついてくる。

「ああ、我慢したいなヌルヌル、どんだん溢れてくるう」

濡れ方がチンポの先っぽより桁違いにすごい。

あつという間に股間がグツグツグチヨダ。

「これ……ああ、女の、愛液い。俺、濡れちやつてる、ああああ」

男だった俺が、おっぱい揉んだ気持ちよさに興奮して、おまんこから愛液溢れさせてる。

「あうう、ここもう、本当にチンコじゃなくなつてる。あふう、はあああ」

ピラピラの割れ目が濡れまくって、掻き回すときちゅくちゅ、すぐエロい音する。

俺の股からこんないやらしい音聞こえてくるなんて、凄すぎる。もつと弄

つたら、どうなつちやうんだ？

「ふああ、女の、おまんこの音っ。はあ、あ、あああ、ここ……」

弄るとますます割れ目が蕩けて、広がってゆく。

陰唇をほぐすように指を蠢かせる、と熱い痺れで頭が朦朧とする。

「こうなつてるんだ、女の割れ目。ふああ……」

チンコと全然違う。気持ち良くなるほど柔かく蕩ける。

確かめようと触つただけなのに、気持ち良すぎて指が止まらない。

「俺……ああ、女の身体で、オナニーしちゃつてる。はあ、あう、あはあ、おお、あ、あ、あふんっ！」

おっぱいも一緒に採みながら、おまんこを夢中で弄りまくる。

そうしたら指先に、コリッとした硬い物が当たった。

「ひあつ、あおっ、おとおおあああつ!! 何だ、いまの、くふう、あああ、これつて、クリトリス……!?!」

すぐ感じるつて聞いたことあつただ、そんな次元じゃなかった。

指で擦っただけで、頭が完全に真っ白になった。

「ひあ、こんなの、くひっ、おとお……、ひゃんっ。ふあ、あ、あああつ」

チンコと比べものにならない。感じすぎて、頭どころかかなりそうなくらい気持ちいい。

割れ目から愛液をたっぷり掬って、ヌルヌルと指の腹でクリトリスを擦り

続けると、身体中小刻みな痙攣が止まらない。

「はうう、じゅんって、愛液あふれっぱなし……。ここ、穴……から腔……からあ……ふあ、おお、あはああああ」

頭の中が白くなる。腹の奥がキュンキュン疼くのが強くなる。我慢出来な

い。

もつとここ、擦っていたい。

中に……。エロい汁垂らすおまんこの中に何か入れて、内側から刺激しま

くつてみたい。

「はあ、あああ、入れる……。穴にい、俺の指い……」

穴に、中指を入れてゆく。

「入つてる……。俺の股に、おまんこ開いてて、指が入る。ああああ、中、こんなにヌルヌルでぐちゅぐちゅで……熱い。くふう、んふあ、あ、ああ、はあああ、んうっ！」

愛液のヌメリで押し込むと第二関節くらいまでめり込んだ。それ以上は変な抵抗があつてやめたけど、これだけでも自分のまんこに指入つてると実感があつて、感動しちゃう。

「くあ……は、あああ、いま、おまんこの壁、いきなりキュンって窄まって指締め付けてきた……」

射精のような達した感覚じゃないのに、もう射精よりずっと気持ちいい。

「今の感覚、もつと激しくなつたら……、このままイッたら、どうなつちやうんだ？ この身体、あ、あふううう、

くはああ」

男とは比べものにならないほど気持ちいい女のオナニーに、もう他にににも考えられない。指が止められない。

「ああ、穴あ、んお、おっぱい、もお、あああつ。なんで、俺、こんな、女の身体に、ああ、ここ……、イイツ、くふあ」

指でグイッてするときゆう〜って、気持ちよさ膨れ上がって、意識が崩れそうになる。

「はわ、あうううつ。あつ、ああ、はううつ」

膣の中を探ってる内に、気持ちいいポイントがわかってくる。

夢中でそこを刺激しまくると射精の前触れに似た衝動が込みあげてきた。

このままだと俺、イクのか？

チンコ、この中に入れたら、もつと気持ちいいのかな？

「つてなに考えてんだ、あう、俺は男だぞ、おお、ああ、あふううつ」

いくら女の身体でも、そんな物入れられるなんて冗談じゃない。でももつと太い物入れたら、きつと……。

快感が膨れ上がるほど、何だか指だけじゃ物足りない気がして、気色の悪い考えに行き着いてしまった。

それでもこの穴をもつと気持ち良くしてくれる太い物を求めて、キyunキyunと膣壁が窄まりつぱなしになる。

「フゴフゴ、こつちの方だ。牝臭い匂いがブンブンしてきやがる」

なんだ？ 声がする。誰かくる？

マズい。俺、女の身体でオナニーしちゃってるのに、こんな所人に見られたら……。くう、ああ……。

でも、いま、オナニーやめたくない。こんな、気持ちいいのに。もつと続けたい。

「はう……ん。おお、あああ……」

せめて声を漏らさないように、歯を食いしばったけど、指、止まらない。くちゆくちゆくちゆくちゅまんこ鳴っちゃってるのにつ。

「こいつは人間の牝、しかも極上品だぜ。匂いだけでも、チンコがはち切れそうだ」

え……？ 人間じゃない？

そうか、ここはゲームの世界。言葉を話すモンスターもいる。

こいつらは……。

「フゴー、いたぜ極上の人間牝。しかも丁度いい具合に発情してやがる」

「ブヒヒ、孕ませ甲斐があるぜー!!」

「オ……、オーク？」

姿を現した醜い亜人種に、一瞬で我に返った。

雑魚キャラの代表的存在。一匹だと弱いけど、群れになると結構厄介だ。それがどう見ても十匹以上いる。

しかもやたらと鼻がいいからオナニーする俺の匂いで、やたらと極太なチンポを勃起させてやがる。

（あんな太いの……入れられたら、まんこ、きつと気持ちいい……）

つてなんでそんな考えが急に？
（指じゃ届かない奥まで……、チンポ

なら絶対、届く……。ああ、あの太いの奥に当たったら、きつと……）

生睡が溢れてグビツと飲み込んだ。冗談じゃない。身体の本能に、欲求が引つ張られている。

とにかく今は早く逃げなくちゃ。

「はう、こ、腰が……あああつ」

オナニーを止めて立ち上がろうとしたけれど、身体に力が入らなくてすぐへたり込んでしまう。

その間に、オークの群れに取り囲まれた。

モニター越しじゃなく直に目にする、人外の化け物はマジに怖い。

鋭い牙とか、ぶつとい腕とか、攻撃されたら確実に死ぬ。一度死んだ事があるだけに、こいつらに鬨り殺されるのを想像したら、恐ろしくて身体が動かさなくなつた。

「あ、ああ、やめて……。殺さないでくれ……」

魔人と戦える勇者なんて設定、頭から吹っ飛んだ。

必死に土下座で命乞いする。

「死にたくねえか？ じゃあこのチンポを口で満足させてみな。良かったら命だけは助けてやるぜ」

オークが先っぽからカウパーをポトポト滴らせて、極太ペニスに俺に向けてきた。

「こ、これを……口で？」

こんな身体をしても本当は男だ。他人のしかもモンスタアのペニスをしやぶるなんて冗談じゃない。

「いやなら無理強いしねえぜ。どうせ結果は同じだけだな！」

「ぐっ！」
俺の髪を掴んで、チンポへと顔を引き寄せてくる。ツンと體えた吐き気を催す匂いが鼻を突く。

「わ、わかつた、口で、満足させるから……。はむ、あぐ、んむ。うう〜」

どうせ無理矢理にでもしやぶらされるなら、自分からした方がマシだ。俺はオークのペニスにかぶりついた。

「ぐええ、うぐう、おええつ。なんらこれえ、気持ち悪い、うぐう」

塗端により濃厚になった腐臭が口いっぱいに広がって、吐き気を催しそうになる。

舌に亀頭がねつとり貼り付き、おぞましい味が染みこんできた。

獣に近い怪物なんだから当然だけど、ペニスは全く洗ってなくて、亀頭には分厚い恥垢が溜まつてる。

「どうした、啜えてるだけじゃ、さつぱり気持ちよくねえぞ。死にたくねえんだつたら、さつさと舌動かして、チンポに奉仕しろや」

気持ち悪くて気が遠くなりそうだけど、やらないわけにはいかない。

「んむ、れる、くちゅ、うぐ、ちゅば、おえ、ぶぶあ……、なんれ、俺があ」

舌を恐る恐る動かしてペニスを舐めると、恥垢がべつとりこびりついて、痺れる風味に気が狂いそうになる。

「ああ、なんだそのしゃぶり方。おちよくつてんのか、この牝人間。真面

監獄都市から愛をこめて 較系囚王女

【けいしゅうおうじょ】

監獄都市から愛をこめて

小説 **冬野ひつじ**

かんざき し おん
挿絵 **神崎詩音**

監獄都市の王女を墮とす
陵辱クーデター勃発！
典獄として囚人としての
羞恥連鎖！



「睫毛^{まつげ}つて、凍るんだ……」
 それがネフトゴルスカに降り立った少女の、一番初めの感想だった。

「きや……ッ？」

雪上車から踏み出した足を雪に取られ、よろめいたところへ粉雪交じりの冷たい突風が吹く。セーラー服の襟から伸びた細いなじが剥き出しにされて、痛いほどに冷たくなるのを感じる。

「私、こんな遠くまで、本当に来ちゃったんだ……」

「マフユ様、足元にお気を付けてください」

ふわりと軽いミンクのコートが肩に掛けられた。

「あ……ありがとうございます……」

少女は、たなびく髪を押さえながら振り返った。見渡す限りの雪原を映したヘーゼルの瞳を、心細そうに何度も瞬かせながら。

「それと、三条院さ……いえ、三条院、その呼び方は、やっぱりちよつと……」

「いえ」

銀縁眼鏡の若者は小さく首を振って見せた。三条院孝明は唯一の側近だ。高い頬骨と細い鼻筋は、側近というよりも王族の肩書が似合いそうな繊細さで、つい見惚れてしまいそうになる。

「いけません。マフユ様はれつきとした蓮乃宮家の血筋であり、《白雪》の典獄なのですから……まずはご自身がしっかりと自覚をお持ちにならないければいけません」

滔々と説かれてしまえば、少女には

返す言葉がない。

「……そうですね、分かっています」

こつそり吐いた溜息は、まだ覚悟を決められていない自分へのものだ。

（三条院さんの言う通り、私はもう、これまでの私じゃない……）

短い車列の周囲には、硬く凍て付いた雪の層が圧倒的な白さで広がっている。その遥か先に目を凝らせば、雪原に打ち込まれた楔のような黒々とした塊が見える。

（あれが……私の、お城……）

高い尖塔を中心としてプラントが密集している姿は、《白雪》という優美な名称とは裏腹の、無機質な佇まいの監獄都市だ。豊富に埋蔵された地下資源を採掘・加工する事を目的とし、そこで働く囚人達を収監するための監獄棟で都市の大部分が占めているのが最大の特徴であった。

（そのずっと向こうが、ルシアナ……）

隣国ルシアナ共和国とは領土を巡り古来紛争が絶えない。このネフトゴルスカが和平条約によりルシアナ側から譲渡されたのは僅か五年前だが、ルシアナ上層部ではこれを不満に思い、奪還を主張する声すらあると言われている。

（今日からは、私はこの島で生きていかなきゃいけないんだ……）

また風が吹き上がった。凍えた王女を迎えるにはあまりにも温もりのかけらもない、鉄とコンクリートの要塞を、粉雪が掻き消していく――。

「さ、早く車にお戻りください。聞けばこの辺りは日中でも盗賊団や化け物がうろついているそうですよ」

だが、物騒すぎる単語も、ミンクの滑らかな温もりも、何もかもが自分からは遠くて、少女はスカートのプリーツが風に翻るのに任せながら、ただ立ち尽くしていた――。

蓮乃宮マフユは、こうして監獄都市《白雪》の市長及び刑務所長、すなわち典獄へと就任したのである。

マフユは本来であれば蓮乃宮の本家とはほとんど関わりなく庶民として暮らしていたはずだった。

しかし、本家の当主蓮乃宮光彦がこの国の王となつてからは、蓮乃宮一族が各地域を治める事が始まり、マフユもその一人として招集が掛かったのである。数十人いるとも囁かれている、光彦のいわゆる《外側室》の娘という立場は、恐らくは隣に北の脅威であるルシアナ共和国に対する要衝の地を治めさせるのは格好の条件であったのかもしれない。

「あちらの奥にルシアナ共和国の大使の方がいらつしやいます。ご歓談に行かれた方がよろしいかと」

着任のパーティーの主役にしては、いささか硬い表情で大広間の来賓達の動きを目で追っていたマフユの意識は、三条院の声で引き戻される。

「そうですね、参りましょう」

礼装姿の少女は深呼吸した。念入りに採寸を繰り返しただけあって、濃紺色のスーツはびつたりと身体にフィットしている。本来ならば袖を通す事などないような年頃の少女のためにフリルが多用され、首元には宝石のブローチが輝いている。敵つさを和らげる工夫のお蔭で監獄の長というイメージを保ちながらも、うら若き典獄の瑞々しさを程よく引き締めている。

（新任のルシアナ大使は軍の出身で、我が国への印象はあまり良くないらしいから、油断はできない）

歩いていても、マフユに目を向ける者は少ない。

「三条院……私、大丈夫でしょうか？」

何曲目かのワルツ。どこかで聞いた旋律に紛れるように、背後の家臣についている問いをぶつけてしまう。

「私、ちゃんとできていますか？」

短期間で教育係に立ち居振る舞いを叩き込まれたとはいえ、会場で一人だけ動きがぎこちない実感は残っている。現に婦人達が扇子の陰から覗かせる視線は、哀れみか、もしくは蔑みにも似たものばかりだった。

「王女といつても、私は庶民の……」

「自信をお持ちになってください」

三条院の声は優しく穏やかで、胸が別の意味で騒めいてしまう。

「あくまでも蓮乃宮の人間として、このネフトゴルスカに睨みを利かせていただくのがお役目です……堂々となさってください」

「ありがとうございます」

人混みの向こうに目的の男を見付け、
王女は笑顔を作った。

「ああ、これはこれは、噂以上にお美しい典獄でいらっしやる」

初老のルシアナ大使もグラスを掲げて笑顔を見せるが、その灰色の目は、
微塵も笑っていないかった。

「典獄、この建築は、基礎工事から柱の彫刻に至るまで全て罪人達の手による巨大な監獄であると伺いましたが……色々興味深いですな」

よくそんな所に住んでいられるものだとでも言いたげな物言いには、笑顔で返すのがここの鉄則だ。

「ええ、ご存知の通り我が国は現在発展の途上であり、財源も人員も全く足りておりません。これはいわゆる苦肉の策なのです」

実際にはパンクした刑務所の増設という側面もあった。蓮乃宮家による急激な国体の強化により、それに反発する市民も増加した結果、政治犯や思想犯が刑務所に溢れる結果となっていた。対応に苦慮した本国は彼らのうちから模範囚を選別し、国境の守りも兼ねた開拓民として凍土の島に送り込んだのだ。ルシアナにとって、目の前の自分も含めてこの《白雪》は疎ましいどころではない存在である事は容易に想像が付き。

「しかしですな、このような重要な土地を、まさか貴女のようなまだまだお若い方が任されるとは……ハハッ、予想もつきませんでしたよ」

面と向かった侮辱だった。

少女は曖昧な笑みで怒りを誤魔化す。「ご心配ありがとうございます。確かにこの典獄は若輩者の私ですが、全体の運営は優秀なAIが行っておりますので」

「ま、お手並みを拝見させていただきますよ……方が一の際は、真つ先に駆け付けますので、ご安心を」

去っていく大使の背中を見ながら、マフユの表情は曇っていた。

「やっぱり、ルシアナはまだこのネフトゴルスカを諦めてはいない……」

きつかけさえあればいつでもこの地を掌握できるという、これは彼らなりのメッセージなのだ。執念深さと貪欲さがひしひしと伝わってきて、マフユは背筋が冷たくなるのを感じた。

「ああ……疲れた……あ……」

執務室に上がったマフユは、大きな溜息と共に椅子に腰を下ろした。大広間ではまだ就任披露パーティーが続いているが、典獄としての仕事はこれからが本番だ。山と積まれた祝電にも目を通さなければならぬ。

「お疲れ様でした」

シルバートレイを掲げたメイド服の若い女性が淹れ立ての紅茶を机に置く。彼女もまた、この監獄都市に収監されている模範囚の一人だ。

「カヤさん、ありがとうございます」

カヤは大学院生だったが大学構内で

政府批判のビラを配布して逮捕されたという。この穏やかな様子の中にそんな激しさがあるのかと不思議になるほどにおっとりとした女性だ。

（んっ、ちよつと、濃い……かも……）
カップを口にしたマフユが首を傾げたのに気付いて、下げようとする。

「申し訳ありません、すぐに淹れ直したいします」

「あつ、違うんです！」

思わず大声を出してしまい、少女は慌てて立ち上がる。

「あのっ、すごく美味しいんですけど、その、家では、配給品のティーバッグを使い回ししてたから……こんな風に使って淹れてもらうの、まだ慣れなくて舌がびっくりしちゃって……」

二人の少女は顔を見合せて、笑い合う。このひとときが心安らぐ貴重な時間になっていた。

「ええ、特に問題が発生している訳ではありませんが、しかし現場の看守の精神的負担の軽減措置などは取られているのでしょうか？」

運営が実際にはAI任せとはいえず、マフユには典獄としての任務も与えられている。

《白雪》に収監されている囚人は、約三千人。大半が全国から集められた模範囚だが、彼らの待遇は一般の囚人と変わらない。獄舎で目覚め、獄舎で就寝する。その全ての行動がモニターで監視されている。

しかし最近では、それ以外の犯罪者も入ってきていた。特に技能もない彼らの移管が急に決まった点がマフユには引つ掛かっていた。

「囚人の数に対して管理者の人数が少ないというのは、AIでの運用が軌道に乗っているからであり、なら問題ではない……貴殿は典獄としてそれを承認さえすればいい」

定例報告も、実際には事後承諾を行うだけの場だ。若き典獄に異を唱える機会など、もともと用意されていない。

（AIが、この都市の全てを管理している……だから、私が余計な事を考える必要はないんだ……）

胸に蠕る不吉な予感を振り払い、少女はモニターの人物に敬礼した。

「だっ、だからですな、私にはそういう暇はないんです……ッ！」

就寝前のほんのひととき、ネグリジエ姿のマフユは自室前の通路で、壁に押し付けられるようにしてキスを迫られていた。

「本当にッ、こういうのも、はッ、初めてです……ッ」

「大丈夫ですよ。全部私が教えて差し上げるって言うていいではないですか」
年上の余裕を存分に湛えた笑みで、男は王女の顎をそつと掴んだ。

「もう、孝明って呼んでくれてもいい頃ですよね？」

押し付けられる。

「んふッ……これ以上は、はあッ、だめ……です……ッ！」

ハアハアと息を弾ませながら、生真面目な抗議をする。

「仕事の時はあんなに優しいのに……ッ、どうして他人がいらないとこんななツ、とかく、強引過ぎです……ッ！」

ここ数日毎晩のように繰り返げられている光景である。

「心配性ですね、カメラはここにはありませんよ……ッ、んちゅッ、もういつまで焦らすおつもりなんですか」

「そ、そんなつもりじゃ……」

二人つきりになった途端に豹変する恋人に、少女はドギマギするばかりだった。

（孝明さん、今日はなんだかちよつと怖いくらい……どうしたの……!?）

三条院孝明とのこの関係が始まったのは、本国で典獄の任務を下命された時からだ。補佐役として宛がわれた三条院は初対面の時からアプローチを掛けてきて、彼から一方的に恋人扱いされるようになってしまい、今に至る。

（優しいし、頼れる人なんだけど……二人つきりになると、すぐエッチをしたがるのが、ちよつと……でも、男の人って、みんなこうなの……?）

仕事中は極力意識しないようにしているが、ふと横を見た時や手が触れ合った時などは胸が高鳴り、平静さを保つのが難しい。

（キスしちやったら、その先に進んじ

やう……そんな事になったら、私、孝明さんの事で頭がいっぱいになっちゃうて、お仕事がでなくなると……）

迫ってくる恋人を、罪悪感を抱きながら、今夜も押し退けてしまうのだった。

「ご、ごめんなさいッ、明日は視察で朝早いですから……ッ」

身を振るようにして恋人の腕から抜け出して、

「おやすみなさいッ！」

マフユは音もなく開いた自動ドアの間に逃げるようにして駆け込んだ。

「……またか」

一人残された恋人は、深い溜息を吐くと、眼鏡のブリッジを押し上げる

。《白雪》と外部を隔てる扉は一般的な監獄のそれよりも遥かに分厚く、高い。脱獄を防ぐため張り巡らされた監視網により二十四時間の警備がされているが、一歩扉の外に出ると、もうそこから先には一切の人工物を見て取る事はできない。たとえ脱獄に成功しても、この島からは生還できないだろうという絶望を可視化したかのような白い雪原だけが広がっている。

その雪原と要塞都市を隔てる扉のまさにその境界で、

「止まってくださいッ！」

少女の凛とした声が響いた。

「今なら罪には問いません！ 速やかに武器を捨てて投降してください！」

本来であれば閉鎖しているはずの門の前で、旧式の電気馬（馬型ロボット）に跨った男達と警備隊が対峙している。その先頭にいるのが、マフユだった。

「あれはこの辺りに住み着いている盗賊団ですね。門の電子錠を壊して入ってきてはそこの機械の部品なんかを盗っていくんですよ」

マフユと同じ最新式の電気馬に跨り白い息を吐きながら、げんなりした声で言うのは、警備隊の隊長だ。AI管理の要塞と謳っている割には末端で的一些細なトラブルが頻発している。慣れない寒さと囚人の方が圧倒的に多数という異常な環境に置かれた住民達のメンタルは思ったよりも危ういようだ。

「危ないですから典獄はもうお戻りください、電子錠が直り次第あとは我々で追い出します」

「いえっ、大丈夫です！ ここは私が」

電気馬の手綱を握って、マフユは前に進んだ。久しぶりの外気はコートを着ていても身を切るように冷たいが、同時に心地良い。

「なんだ、女だぞ」「初めて見る顔だな」「今日は引き返すか」

盗賊達は顔を見合わせ、来た方角へ戻り始める。

「ま、待ってっ！」

慌ててマフユも後を追う。

「どうしてこんな事をするんですか!! あなた達はどこから来たんですか!!」

呼び掛けても、盗賊達は疾風のように電気馬を走らせる。違法改造なのだ

ろう、物凄いスピードだ。マフユも負けじと追い掛けた。

その後ろで、門が締めり始めた。

「え、電子錠壊れてるんじゃないの!?」

「典獄！ お戻りください！」

振り向くと、まさに出ようとしていた警備隊の鼻先で門が閉じるところだった。

「どうしよう……」

盗賊達の後を必死に追ったものの、走り慣れている電気馬に追い付くのは難しく、たちまちマフユは引き離されてしまった。

「この先の補給ポイントを越えたらもう目印になる物もないし、深追いはやめて、電気馬の充電が切れる前に引き返した方がいいのかな……」

咄嗟に飛び出してきたしまったせいで防寒用の装備になっておらず、通信機は動かなくなっていた。応えてくれるのは自分の吐く白い息だけだ。一気に心細さが押し寄せてきて、少女は電気馬の手綱をギュッと握り締めたその時、遠くで悲鳴が聞こえた。

「さっきの盗賊団……!!」

マフユが駆け付けた時には、既に盗賊達はぐったりとした二人の少女を肩に担ぎ、電気馬の鎧に足を掛けていたところだった。

「なんだ、さっき《白雪》にいたガキじゃねえか」そんなおっかない顔して、おじさん達と遊びたいのかなあ？」

新造少女 光華

しんぞうしょうじょ

こうか

◊ THE IRON MAIDEN ◊

小説
NOVEL

やかたそうけい
屋形宗慶

挿絵
ILLUSTRATION

あきつき
秋月からす

敗北した天才サイボーグ少女が
四肢も誇りも失いオナホ堕ちの大ピンチ

!?

その人々は始めに本物の超能力者
超人とネットで騒がれ、そしてTVシ
ョーで世代を問わず話題が広がった。
彼らは、まさに超人と呼ぶにふさわ
しい身体能力と、人智を超えた様々な
超常能力「アビリティ」を発現し、徐々
にその認知数は増えていく。

やがて彼らは常人「ミディオクリテ
イ」と区別されて、超人「トランセン
デント」と呼ばれるようになった。こ
の超常的能力者たちには、時の政府に
よって様々な人権的制約が課され、一
定の監視体制が敷かれた。それに反発
し、能力濫用により政府への反抗や犯
罪に走るものは「ヒール」と呼ばれる
ようになる。

このヒールに対する抑止力、対抗す
る者として能力を使い、市民と社会を
守る者は政府により「ヒーロー」と呼
称されるようになった。
かつては東京湾と呼ばれた場所に広
がる、独立自治府「江戸」。前大戦中
に計画され、計画開始から一世紀にも
なる今もなお拡張が続く、地下都市と
ピラミッド形の完全環境都市が複合し
た都市群だ。

建設にあたる労働力を得るため、江
戸に限定した居住を条件に緩和された
永住権によって、今やそこは世界でも
類を見ないミディオクリティとトラン
セメントの増堀となつている。

その江戸の中でも比較的新しいアー
コロジー、第七研究学園都市、通称「七

研」。その片隅にクラインズ・ラボラ
トリーはあった。

「光華、準備はいいですね？ 作り直
したアンダースーツはきつくはない？」
「はい。ぴったりです」

ラボの敷地内、ヘリポートに人影が
ある。毛先の切り揃えられた長い黒髪
が、照明に艶々と濡れたようなキュー
ティクルを輝かせた。

年の頃は十代の後半ほど。整った清
楚な顔立ちと、大きくクリクリとした清
瞳が童顔な印象を与える。そんな顔立
ちに反して、露出度の高いレオタード
状のスイートに浮かび上がる住良木光華
のボディラインは凹凸豊かだった。

「光華つたらまだ成長期真っ盛りなん
ですわね……去年作ったスーツなのに
もう胸が入らなくなるだなんて」
「は、恥ずかしいこと言わないでくだ
さい博士！」

光華は頬を赤くしながら胸元を押さ
えて身をよじり、聞こえてくる声の主
地下のモニター室で観測機器を監視し
ている綾子・久貫・クラインズ博士に
抗議の声を上げる。

周囲に人影はないが、綾子の声は光
華の意識の中で、静かに語りかけるほ
どの音量で聞こえていた。

「あらあら、うふふ……テレメーター
が乱れて大変」

光華の体の多くの部分はサイバネテ
ィック・オーガニズムで補われている。

彼女は容姿通りの若年だが、理学の
幅広い分野で高い知能を見せ、幼少期

から天才と称される少女だ。その頭脳
を以て、警察や軍によるヒール対策の
ための研究を行っていた。それが成果
を取った時、彼女を危険視したヒール
の犯罪シンジケートにより暗殺の標的
とされ、爆破テロに遭つたのだ。

四肢を失い、その他の部分も含め瀕
死の重傷を負つた光華を救つたのが、
共同研究者であつた綾子だった。

「義肢も問題なさそうですね」
テレメーターに表示される光華の心

身状態を表す数値をチェックした綾子
の落ち着いた声が光華に届く。

彼女らの研究成果であり、完成して
間もない【精神感應生体金属】を用い
て光華の頭部と胴体の骨格を補強・保
全している。

光華がこれからも一人の女性として
生きていけるようにとの思いから、可
能な限り彼女自身の組織から培養して
肉体を再生し、失われた四肢を補う義
肢にもヒイロカネを用いながら、サ
イボーグ化することで光華は命を救わ
れて今に至る。

「理力装甲強化服」、同調開始」

彼女の足下には、朱色から橙色に揺
らめいて淡く光る水銀を思わせる液体
が、水鏡のように湛えられている。

少女は目を伏せ、精神を研ぎ澄ます
すると、足下のヒイロカネに水滴が
落ちたように同心円の波が広がった。

「ヒイロカネ同調よし」

「結合……」
液体金属状のヒイロカネが、光華

の足下から這い上がるようにして彼女
の体に纏わり付き、肌を覆っていく。

顎下からの全身を完全に覆つたヒイ
ロカネは、体の部位によっては結晶
化しながら厚くなり、それまで液状で
あつたのが嘘のように硬化した。

「結合完了。予定通り、プロトタイ
プの試運転を開始します」

「了解。まだ【理力】への反応が過敏
だから気を付けて」

全身に纏わり付いたヒイロカネは、
結合が完了すると炎のように揺らめく
発光が鎮まっていく。やがて黒と紫を
基調とする光沢感の強いピッチリとし
たスイートへと変換していった。

手足の動きを確かめるようにストレ
ッチをすると、ほんの僅かな厚みしか
ないスイートに包まれた瑞々しい女性の
甘肉がブルリと揺れた。

理力装甲強化服は、女性特有の特殊
な精神力・生命力混交エネルギー【理
力】と、精神感應生体金属によって成
り立っている。理力は光華が研究し理
論化したエネルギーであるが、これに
感応して理力に物理的作用を発生させ
るヒイロカネによって、身体能力強
化、理力防壁といったヒールに対抗す
る能力の付加を可能にしていた。

「スイートの状態良好です。運動テスト
のあと、負荷テストに移ります」

「了解。リミッターはあるけれど、ま
だ高負荷でヒイロカネの形状保持が
不安定だから、最大でも四〇%程度に
抑えておくように」

ストレッチを終えた光華が、陸上競技のクラウチングスタートの姿勢を取る。クイツと腰が上げられると、ムチツと強調されるハイティーンの張りのある美臀。スーツの光沢も相まって艶めかしい曲面が際立って見える。

「機動テスト、スター……」

クラウチングスタートの姿勢から、機動テストを開始しようとしたその瞬間であった。

ラボラトリーの敷地を外部と隔てる壁が突如爆発。コンクリート片が飛散する。そして、爆破された壁の跡から、異様な集団が姿を現した。

一様と同じ体格、同じ外見、鋳型で量産されたような姿の者たち。江戸の建設現場でも見られるバイオドロイドだが、銃剣を備えた銃火器を手にしたその様子は明らかに異質だ。

「爆発!? 大丈夫ですか!?!」

「大丈夫です! でも……」

「フイッ! フイッ! フイッ!」

十数体のバイオドロイドは、奇声を上げながらクラインズ・ラボラトリーの敷地へと侵入してきていた。彼らは一直線に光華へと駆け寄り、取り囲む。

「まさかシンジケートの襲撃……? 光華が理力とヒイロカネの研究を続けていることを知って!?!」

「博士はデータを持ってここを離れてください! 私が時間を稼ぎます!」

「バカを言わないで! テスト用のスーツには武装は一切ないので、あなたこそ逃げなさい!」

「理力防壁とヒイロカネの強度があれば大丈夫です! それに、今日まで近接格闘技術はみっちりラーニングしてきました! やれます!」

徒手空拳に身構え、周囲を取り囲む敵の動きに意識を研ぎ澄ませます。

「フイッ! ツ!!」

氣勢を上げ、人ならざる者たちが襲いかかる。光華の背後から、銃剣を構えたバイオドロイドが刺突を繰り返して突撃した。

「つふッ! ハッアアッ!」

次の瞬間、カウンターの蹴りが入り、バイオドロイドの体がぐぐの字に曲がって吹き飛ぶ。仲間が吹き飛ばされる様を見ながらも、バイオドロイドは臆することなく、次々に襲いかかった。

「やアッ! ふンッ! たアッ!」

光華のCCCは誰かに師事して会得したわけではない。パーチャルリアリティによるラーニングではあったが、電脳の補助もあつてまるで歴戦の傭兵かのように隙なく、そして的確な動きで敵を打ち倒していく。

「ダタタタタタッ!!」

格闘は不利と見たのか、残ったバイオドロイドが自動小銃を発砲し始める。反射的に光華が両腕で顔を庇うと、銃弾がスーツの表面に触れる寸前に跳弾した。ヒイロカネを触媒として物理的干渉力を持った理力の防護障壁によるものだ。

理力の防壁で銃弾を防ぎ、近接戦闘

でバイオドロイドを叩き伏せる。その様は圧倒的であった。

「ミディオクリティのくせに、バイオドロイドを素手でぶつ殺すわ、銃は効かねえわ。トンでもねえなお前!」

光華の鋭い回し蹴りにより吹き飛ばされた最後のバイオドロイド。その残骸を踏み越え、いまだ立ち上る爆煙の中に浮かぶ人影。

阿吽の仁王像が動き出したかのような、筋骨隆々な巨躯。分厚い筋肉も相まって、まるでタイヤを着込んだかのようにすら見える黒いボディースーツ。覆面の頭部から爪先まで、全く同じ姿形をした二人組だった。

そのうちの一人が、予備動作もみせず弾丸のように光華に飛びかかる。

サイボーグ化された目でなければ見えなかつたであろう掌底。咄嗟にガードしたにもかかわらず、その掌底が少女の形の良い乳房を打ち、衝撃で少女の体は高々と宙に打ち上げられた。

「オレの動きに反応したってか? とんでもねえヤツ! ハハアアッ!」

理力防壁とスーツに守られているにもかかわらず、ヒイロカネで補強された骨格が軋む。

打ち上げられた頂点で一瞬静止したように滞空する光華に、黒ずくめの巨漢の追い打ちが襲う。

強烈で重い拳を、申し訳程度の装甲がついた肩口で受け、相手の野太い腕を掴んで体を丸めるようにしながら敵の腹部へ膝を打ち込んだ。

技術的には非の打ち所がない反撃。しかし、光華は体重差がもたらす打撃戦の有利不利にまでは理解が及んでいなかった。

「えっ!?! ゴうあアッ!」

圧倒的な体格差が、サイバネティクスとスーツによる身体強化すらも上回って優位性を相殺する。腕を取っていた手を逆に取られて関節を極められ、地上へ叩き付けられた。

（義手は耐えられても、接続部から先……胴体へのダメージは痛覚の遮断もままならない……それなら……!）

その瞬間、腕をもぎ取られた——ように見えた。が、実際にはヒイロカネで構成された義手は耐えており、関節も折れてはいない。関節を極められた義手を強制分離することで、地面に叩き付けられる衝撃を軽減したのだ。

ほぼ生身である胴体へのダメージは軽視できない。光華は瞬時の判断で義手をパージしていた。

「光華ッ!?! こう……!」

攻防の衝撃と、それによる精神の乱れのせいだろう。電脳を経る縲子との通信がフツと途切れた。

「咄嗟に自分から腕を切り離して逃げるとは恐れ入ったぜ。なるほど、いっぺん死んで、機械で新造されて生き返ったサイボーグってわけか!」

右腕と引き換えに組技から抜け出した光華は、左腕を隙なく構える。そんな彼女を前に、巨躯の男はパージされた光華の腕を撫でると、その義手を自

愛と正義と情熱の美少女ヒロイン
卑劣な洗脳調教に堕つ!!

ジャスティス / Passion
Justice Passion
Haruka
ハルカ

恥辱洗脳で完堕ちする正義の戦士

小説 / くろな 黒名ユウ 挿絵 / くろさわ 黒澤ユリ
NOVEL ILLUSTRATION

人ひとりがやつと収まる程度の大きさの直立カプセル。その中にハルカは閉じ込められていた。全裸であるのは眠らされているせいだ。

彼女のパワーの源であるJPLブーストは、正義と情熱、そして愛という精神のエネルギーによって発動するすなわち、意識を失ってはいはその身を守る《スピリチュアル・レオタード》もまた発現しないのだ。

閉じ込められている容器を満たす不気味な蛍光色の溶液に、少女の長い髪が水中花のように咲き乱れていた。

「戦いとなれば猛々しいこやつも……こうしてしまえば小娘と変わらぬな」

向かい合い、ハルカの裸身を鑑賞していたゾギーマが感慨深げに呟く。

負の精神によって形成される生命体《ネガティブ・スピリッツ》たちの巢くう負の次元界。こは、その王たる彼の居城の中心部である。

人間世界への幾度も侵略は、目の前で眠るただ一人の少女——ジャスティス・パッション・ハルカによって、これまで全て阻まれてきた。だが、それもこれで終わる。最終決戦を挑みに乗り込んできた彼女を畏にかけ、虜囚とするのに成功したのだから。

ハルカの整った顔立ちは、儂さ、あどけなさを残しつつ、どこか自立した大人の女も感じさせる。それは、女子校生ながらも孤児院でボランティアをしているせい、あるいは、JPLブーストを託されて以来、たった一人の

戦士としてゾギーマら《ネガティブ・スピリッツ》の魔手から人々を守り続けた戦いの日々がそうさせたのか。

身体つきの方も、同じ年頃のハイテーンと比べて発育が良い。背丈こそ標準的であったが、カプセルの上端で両手首を拘束されて真っ直ぐに伸びるしなやかな白い肢体は、男なら誰もが見惚れてしまうほど見事なものだった。

隠されることのない無防備な腋の窪みの美しさ。たゆたう乳房は片手に余る大きさでありながらも品の良い形。薄桃色の乳輪の中央では小粒な肉先がツンと上を向いている。ヒップは強烈に女を主張して張り出しつつ程よく引き締まっており、その先に続く、長く滑らかな脚線美はむっちりとした太腿から可憐なつま先までを非の打ち所のない優雅さで全うしていた。

「さて、楽しませてもらうぞ、ハルカ」ゾギーマが含み笑いを漏らす。

憎悪、卑怯、傲慢、嫉妬……負の精神が正なる精神に敵うことはない。捕らえることはできても、ハルカを殺すことや消滅させることは不可能だ。かといって、憎き敵をそのままにしておくつもりはなかった。なんとといっても彼はあらゆる邪な想念の王なのだ。

（翫りつくしてくれる……）ゾギーマの身体から何本もの触腕が出現した。大柄な人間の男のような姿の彼だが、やはり人に非ざる存在なのである。男性器の形状をしたおぞましいその先端が、なんの抵抗も受けずに

カプセルの表面を通過していく。

《スピリチュアル・ペニス》。彼ら負の精神生命体に備わる器官は思念で形成され一切の物理制約を受けない。それが、少女の頭部へ次々に潜り込む。

「うっ……ん、んんっ！」

ペニスの接合と同時に、眠るハルカの美貌が苦悶に歪んだ。その様に愉悅を感じ、ゾギーマは口元を緩める。だが、お楽しみはまだまだ序の口だ。

思念化した洗脳スベルマが、半透明な触手の管内を通って少女の脳内へ、びゅぐびゅぐと送り込まれてゆく。

「あ……はぐっ……んんっ、んんっ！」

水中でなければ、そのような喘ぎ声でも漏れ聞こえよう口の形。まぶたと眉の痙攣。脳が犯されている証だ。

「フハハハハッ！ 屈服し、我が忠実なる奴隷へと生まれ変わるがよい！」と、ハルカの双眸が突然見開かれた。その瞳は澄み渡る正義の青。変身時の彼女の目の色だ。

「馬鹿な！ 意識は奪つたはずだ！」

ゾギーマが怯んだ次の瞬間——

「JPLブースト！ ジャスティス・パッション・ラブ・チャージ！」

正義の青、情熱の赤、そして、鮮やかなピンクは愛の色。プリズムの如きまばゆい光が炸裂する精神力の質量化現象。その圧力がカプセルを粉々に砕いた。拘束を破って飛翔し、完全復活した変身ヒロインが舞い降りる。

不覚を悟ったゾギーマに向かって美少女が見得を切る。

「……あなたの敗因を教えてあげる。それは、私の意識を奪えても、正義の心までは奪えなかったことよ！」

その身を包む《スピリチュアル・レオタード》も元通りとなっていた。

両肩を露出し、背中の大きく開いたデザイン。ポニーテールに髪をまとめる大きなリボン、そして腰回りをふわりと飾るフロントカットの超ミニフリル。およそ戦闘服とは思えぬ姿だが、それが彼女の精神エネルギーの物理的な形なのだ。正義と情熱、そして愛の。

「これで終わりよ！」

そう叫ぶと、ハルカは躊躇なくゾギーマの前に跪き——その股間の逞しい隆起にとりすがった。

（ゾギーマを倒すには、オチンチンにご奉仕しなければ……！）

接近できた今が最大のチャンスだ。（あれ……？ でも、本当にそう？）

その胸に違和感がよぎる。

「ククク……」

ゾギーマは戸惑う彼女を見下ろしながら含み笑いを禁じ得なかつた。（不意の覚醒には驚いたが……どうやら洗脳はギリギリ間に合ったようだ）彼女の正義や情熱、愛の心は奪えな。だがその思考回路ならば弄ることができ。目の前の敵を倒すには性奉仕をしなければならぬ——そう思い込ませたのだ。それは時が経てば経つほど全身に回る毒のように、彼女の心

痛痒に火照る天使の秘所！
偏執的な欲望が乙女の純潔を奪う！



BEAT VALKYRIE D3EAL

超昂神騎

エグゼクト

~ 双翼、魔悦調教 ~

第三話 清廉なる蒼、白濁に沈みて

小説 みねさきりゅうのすけ 峰崎龍之介
挿絵 そんようしゅう 孫陽州
原作 アリスソフト アリスソフト

まるで泥の中に沈んでいるかのようにだった。冷たい雨をたっぷりと吸った泥。重く冷たいそれが、全身に絡みついて離れない。

眠っているようで、そうではなかった。意識は既に覚醒へと向かっている。重苦しい気配を押し返けて、見るべきものを見ようとしている。

（私、は……）

エクシールは苦勞して瞼を開け、心の中で呟いた。口に出したつもりだったが、喉が凍ったように動かなかったのだ。また視界の調子も非常に悪い。長く瞼を閉じていたせいか光が目にも染みて、まだなにも見えてこない。四肢には無視できない気だるさと鈍痛が果食い、身を振ることすら億劫に感じてしまう。（でも……起きない、と）

自らが置かれている状況をいまいち掴めないまま、彼女は身を起そうとした。が、そこでふと気づく。起き上がる必要はなかった。彼女は既に上体を起こしている。というより、座ったまま気絶していたというべきか。

（ここは……王座の間？）

少しずつ光に馴染んできた瞳で、前方を見つめる。ここはどうやら、気を失う前と同じ場所——王座の間のようだった。荘厳な雰囲気の間が視界いっぱいに広がっている。そして奥には、下層へと繋がる階段があつて——

（奥に階段？ では、いま私がいるのは……玉座？）と、彼女が違和感に気づいた瞬間だった。

「気が付いたようだな」

「え？」

いきなり背後から聞こえてきた声に驚いて、エクシールは身をすくませた。美しくも禍々しいその声には、どこか聞き覚えがある——

「その声……アゼル!? つ、くう……つ」慌てて振り返ろうとして、失敗した。全身を襲う

倦怠感と鈍痛が一気に高まったせいだ。そしてその苦痛が、彼女の意識をいつそうはつきりさせる。（そう、でした……私は、アゼルに負けて……）

意識を失っていた原因を思い出し、エクシールは奥歯を噛みしめた。あまりにも呆気なく敗北してしまつた事実が、嫌な苦みとなつて口の中に広がる。「思い出してきたようだな。では次だ。自分の置かれている状況を正しく認識しろ、エクシール」

アゼルは再び囁きかけてくると、エクシールの右の乳房を指先で撫でた。それも直にだ。「んくっ……な、なにを……!」

唐突な恥辱に、蒼き神騎は赤面しつつ呻いた。と同時に気づく。彼女の体を守ってくれるはずの聖鎧が、部分的に破損している。乳房と股間だけが完全に露出している形だ。しかもその状態で、股を開かされている——

「……っ」

自らが晒している痴態を認識して、エクシールは声にならない悲鳴を漏らした。それから、どうにか股を閉じようと身を揺する。だが彼女の足はなにかに引っかかかっていて、上手く閉じられなかった。

エクシールに大腿開きを強要しているのは、肘掛けだった。アゼルのために設えられた荘厳な玉座の肘掛け。つまりエクシールはいま、玉座に座らされているのだ。

いや、それも正確ではない。彼女が座っているのは、玉座に座っているアゼルの腿の上」なのだから

「状況は呑み込めたか？」

アゼルはエクシールの乳房を弄びながら、淡々と告げてきた。淫らな行爲とは一致しない、実に平静な声である。

「……どういふつもりですか？」

混乱したまま絞り出したその問いには、ふたつ意味があつた。ひとつはなぜ自分が生かされているのか

かということ、もうひとつはなぜこんな奇妙な——そして屈辱的な——体勢を強いられているのかということだ。

「お前を調教する。殺さなかったのはそのためだ」

「調教……?」

「そう。エイダムに穢された心身を浄化し、お前を私のモノにする。エクシール。お前は美しい。出来損ないの魔王如きにくれてやるには惜しいほどに」

「……誰が、あなたのモノになんか——くうっ?!」

否定の言葉が途切れた。アゼルの指が、エクシールの乳首を捻り上げたせいだ。淡い桃色の果実は気絶している間に散々刺激されていたらしく、いつの間にか勃起してしまつていた。それをこうも乱暴に弄られれば、声が漏れるのは仕方のないことだった。「たったこれだけのことで、もう感じているのか?」

「……だ、誰が感じてなんか……!」

かつと頬を赤く染めて、エクシールは鋭く吐き捨てた。そのまま、アゼルの手を掴んで乳房から引き剥がす。

「おつと、まだそんな力が残っていたのか」

などとアゼルは言つたが、その声に乗っているのは感嘆ではなく侮りだった。いつでも力づくで捻じ伏せられる自信があるのだろう。こちらの剣幕など気にも留めていない。実際、いまアゼルが本気で力を込めれば、満身創痍のエクシールは簡単に組み伏せられてしまうに違いないかった。

だがアゼルは、そうはしなかった。くくくと喉の奥で笑つたあと、耳元でそつと囁いてくる。

「その気を荒げるな。調教とは言つたが、私としてはお前との時間を愉しみたいと思つている。どれひとつ機嫌を取つてやろう。お前と共に私に挑んだ、赤い糸物がいただろう? その安否を知りたいとは思わないか?」

「——っ!」

はつとして、エクシールはその身を強張らせた。赤い紛い物——キリエル。共にアゼルに挑み、そして敗北した仲間。

目が覚めてから彼女の姿を一度も見えておらず、声も聞いていない。生きているか死んでいるかさえないまのエクシールには知る術がなかった。

「力を抜け」

再びの囁き。「仲間の安否が知りたければ抵抗するな」という、言外のメッセージが込められていた。(……卑怯者)

エクシールは内心でだけ罵って、掴んでいたアゼルの手を離れた。するとアゼルは満足げに微笑み、完全に無防備となったエクシールの肢体に対し、本格的な愛撫を開始した。

褐色のしなやかな指が、透き通るように白い肌の上を好き勝手に這い回る。豊かに実った乳房を揉み、硬くしこった乳首を捏ね回し、むっちりとした肉感的な腿を執拗に撫でてくる……。

「……う……っ」

蒼き神騎は歯を食い縛って、その身を襲う恥辱に耐えた。先ほどとは打って変わっての優しい愛撫は、ともすれば心地いいと感じるほど達者なものだったが、それは決して表には出さない。

しばらくそうして愛撫されたあと、アゼルがこんなことを言った。

「言いつけ通り大人しくしていたな。では褒美だ。赤い紛い物——キリエルは無事だ。少なくとも生きてはいる」

「……そう、ですか」

心底ほつとして、呟く。するとアゼルはそんなエクシールを弄ぶように、続きを口にした。

「ただし、この先も五体満足でいるかは保証しない。あれはシエムールにくれてやった。奴がどう扱うかは私の預かり知らぬところだ。もつとも——」

「……私の態度次第で助けてやってもいい、と？」
先を引き取ると、アゼルが満足そうに頷くのが、気配で知れた。

「この条件を以って隷属せよ、とは言わぬ。お前にも抗う機会は与えよう。だが無駄に足掻かれては興が削がれる」

言葉は切つてから、アゼルは続けた。

「先ほども言ったが、私はお前を調教する気である。屈服させ、墮落させる気である。だが暴力や人質でそれを為すつもりはない。それではあまりに芸がないからな。お前に与えるのは恥辱と快楽だけだ。心さえ強く持てば耐えられる」

「……それに耐えれば？」

「紛い物と一緒に解放してやつてもいい。悪くない余興だろう？ 戦えば当然、私が勝つが……これならお前にも、一握の希望がある」

突き付けられた選択肢に、エクシールはしばし黙考した。

——繰り返しになるが、エクシールの体には先ほどの戦いで受けたダメージがそっくりそのまま残っている。加えて魔力も底を突いていて、ソル・クラウンを召喚するどころか、破損した聖鏡に応急処置をすることすらできない。いまのエクシールは、言わばまな板の上の鯉だ。料理人の気分次第でいつでも調理できる、無力な食材でしかない。

（悔しいですが……この状態ではどれほど上手く隙を突いても、反撃が成功することはありません。ここは誘いに乗っておいて、時間を稼ぐのが得策……）

アゼルが約束を守るとは限らないが、時間を稼ぐのはどのみち必要なことだった。なぜならエクシールは、まだ脱出の可能性を諦めたわけではないから

だ。エクシールはかつて、『アツサル弓』という神具を継彦に与えていた。その弓から放たれた矢は自

動的に対象の下に辿り着き、弓の下へと帰る能力を持つている。時間差こそ生じるが、発動すれば高確率でエクシールやキリエルを救い出してくれるだろう。

（矢が届くまでの時間さえ稼げば、帰還して態勢を整えることができるかもしれない。であれば……）

静かに判断を下して、エクシールはこくんとひとつ頷いた。

「……わかりました。どうぞお好きに」

「いい子だ。……では早速、調教を始めさせてもらおう。ふふ、簡単に堕ちてくれるなよ？」

アゼルは愉悅を滲ませて言い、再びエクシールの体に指を這わせ始めた。今度は乳房や腿だけでなく、秘所にもその魔の手が及んだ。

「……っ」

大股開きを強制され、全てが訝らかになっている女の園の上を、褐色の指がもそもそと蠢いた。羞恥によって微かな湿り気を帯びた花卉に、くすぐったさ混じりの刺激が走る。

「あ……っ……っ」

漏れそうになる甘い声を喉の奥に押し込めて、エクシールは唇を固く引き結んだ。するとアゼルが、艶っぽい声で囁いてくる。

「声を堪えているな。ふふ……その我慢がいつまで続くものか、ひとつ試してやろう」

アゼルは言いながら、エクシールの肉芽にそっと触れた。包皮は剥かず、皮越しにくにくにといじめてくる。

「んう……う、う……」

思わず漏らした吐息は熱く、そしてどこか甘かった。与えられている刺激は決して強くなく、むしろ弱いとすらいえる程度のものだ。しかしクリトリスというのはやはり敏感で、執拗に愛撫されてしまうとどうしても感じてしまう。

びく、びくんつ。体が小刻みに震えた。続いて膺口がひくひくと蠢き、淫らな液体を徐々に分泌していく。固く口を噤み、明確に喘いでしまうことだけは避けているエクシールだったが、肉体の反応そのものを抑えられるわけではなかった。

「肉芽を弄られるのは随分堪えるようだ。熱い蜜が溢れてきた。まったく、呆れた神騎だ。ほんの少し愛撫されただけでこれほど濡れてしまうとはな。恥ずかしいとは思わないのか？」

言葉責めとともに眼前に突き付けられたアゼルの指には、たったいまエクシールの秘所から掬い上げられた淫蜜がたっぷりと付着していた。

「……っ」
まざまざと見せつけられた自身の欲情の証から、エクシールは咄嗟に目を逸らした。燃え上がる羞恥心が、直視することを強く拒んでいる。

「ふ……存外わかりやすい反応だな。お前の屈辱が手に取るようにわかるぞ。……だがそろそろ、だんまりを決め込まれるのも飽いた。声を出させてやろう。お前の好きな肉芽責めでな」

と、アゼルが嗜虐的な調子で告げた、その瞬間だった。目の前に突き付けられている褐色の指が、ぼろりと淡い光を帯びた。そしてその輝く指が、エクシールの敏感な果実を根元からきゅつと摘まむ。すると指先に灯ついていた光が、音もなくクリトリスに吸い込まれていった。

「く……っ。な、なにを」

ぞつとして、呻く。その光が魔術によるものだということは、魔力の迸りを見れば一目瞭然だった。だが何の魔術なのかは想像もつかない。状況からして「調教」のための魔術ではあるのだろうか……と、そんなことを思い浮かべた瞬間。

「あ……あああああああああああつ!?!」
エクシールはかっつと目を見開き、その身を仰げ反

らせた。そのままたわわな乳房を野放図に揺らしながら、がくがくと痙攣する。

——熱い。股間が。下腹部が。そしてクリトリスが、とてつもなく熱い。

「これ、は……あぐ、うあああああああ……っ」
外から押し付けられた熱さではなかった。これは体内から押し出されている熱さだ。

内から外へ。そして上へ。絶えず込み上がってくる得体の知れない熱量に、エクシールは額に汗して悶えた。

そして——その熱量が、いよいよ最大限に高まった時。その変化は起きた。

ぐぐ……じゅるんつ! そんな擬音が背後に見える。そんなほど急激に、エクシールのクリトリスが肥大化した。

「う、嘘……こ、こんなことが……!」

包皮を押し退け、まるでペニスのようにそそり立つた自身の肉芽を見下ろして、蒼き神騎は睫毛を震わせた。そしてそんな彼女をあざ笑うかのようにアゼルが上機嫌に喉を震わせる。

「くくく、随分と立派なモノが生えたな。さて、肝心の感度の方はどうだ？」

エクシールの困惑と動揺などご吹く風で、アゼルはそそり立つ肉芽に指を絡めてきた。

ちゅくちゅく、ぬちゅ……っ。エクシール自身の愛液をローション代わりにして、褐色の指が卑猥な上下運動を繰り返す。まるで男性器を責めるかのよう。その動きは、蒼き神騎の股間に鮮烈な快感を生じさせた。

「や、やめ——ひあつ、あうううううう! あが、くはああああつ!」

エクシールは悲鳴じみた嬌声を漏らし、全身を強張らせた。「クリトリスを扱かれる」というのは未知の刺激であり、それが生じさせる快感もまた未知

のものだった。ゆえに我慢の仕方などわからず、エクシールはひたすらに翻弄された。

「くうううつ、あひつ、ひう……っ。こんな、あうつ、うひいひいん! んん、うううう……くう、ああああ……はあああん……っ」

声が徐々に震え、鼻にかかった甘ったるい響きを帯び始める。喘ぎだけは漏らすまいと食い縛った歯の隙間から、どうしようもなく零れ出ていく。

「ふふ……もうイクのか？」
艶めかしい手つきで『デカクリ』を愛撫し続けながら、アゼルが囁く。

「イ……イカない……こんなこと、でえ……っ」
エクシールは反射的に口を開いたが、可憐な唇の隙間から拙い反論を零した次の瞬間には、がくがくと腰を震わせていた。

「ああああああああつ! だめ、もう……もう……!! あひいつ、ひいひいひいつ!」
ぐつと一際大きく腰を突き上げて、エクシールは官能の極みに達した。股間から足先まで、痺れるような感覚が走り抜ける。同時に全身の汗腺が一斉に開いて、瑞々しい肢体を汗まみれにする。紅潮した肌が光沢を帯びていくさまは、とてつもなく卑猥な光景だった。

(なんて快感……いけない……こんな絶頂を何度も受けてしまったら、私……!)

魔悦に身を焦がされながら、エクシールは内心怯えるように咬いた。

クリトリスによる「外イキ」は強く鋭いが、持続性に乏しい一過性のものだ。喉元を過ぎれば忘れる熱さでしかない。しかし違う。これは違う。あまりにも絶頂の波が大きくて、痺れるような余韻が残ってしまう。そしてその余韻は、次なる魔悦の呼び水となる。

「そら、まだ終わりではないぞ?」

装刃戦姫
サクラビト
フタナリ淫獄に堕ちる黒髪乙女

第八回 背徳絶頂
恋人に注がれる白濁

小説 NOVEL 有機企画 挿絵 ILLUSTRATION 緑木邑

淫獄シヨロ最終幕!
極上のフタナリ恥辱が装刃戦姫を堕姦へと誘う!!

登場人物紹介



建宮流華

「装刃戦姫サクラヒメ」に転身し、人に仇なすオニグミを滅殺する。

鬼蛙

オニグミを束ねる幹部。蛙坂蔵夫という名で流華と同じ学園に通い、彼女を徹底調教する。

クリス

流華の親友で「装刃戦姫コーデリア」に転身する。本名はクリスティーナ・エイミス。

妖月

クリスに恨みを持つオニグミの幹部。

前号までのあらすじ

人に仇なすオニグミと戦う装刃戦姫サクラヒメと流華は鬼蛙に敗北し、地獄のようなフタナリ調教を強いられる。そして、装刃戦姫コーデリアとして戦う流華の親友、クリスにも妖月によるフタナリ調教の魔の手が迫り……

地下劇場淫獄、最終日。
二人の装刃戦姫は制服を着せられて、舞台上に上がっていた。

セラー服とブレザー制服の胸元は解放され、たわわなGカップ巨乳とEカップ美乳がはみ出ている。スカートも膝上四十センチで切り揃えられ、最早衣服としての役割を果たしていない。

下着の着用は許されず、心許ない布きれの間から、フタナリペニス顔をのぞかせていた。

(チツ……下衆どもの性癖には毎度辟易させられる。まあいい、それも後少しの我慢だ。今日の調教が終わればすぐに儀式を開始するはず。良平とクリスのためにも、必ず自由を手にしてみせる！)

(ついに最終日ですわね。流華さんと良平くんのため、わたくしのすべてを出し尽くしますわ！)

何度目かもわからない淫獄に臨む装刃戦姫。フタナリ快楽に慣らされた身体は、すでに限界に達していたが、愛する人を守るために気力を振り絞る。

「今日も楽しませてもらうよ、サクラヒメ」

「元気にしていたかい、お嬢さま」
悪鬼が壇上に姿を見せる。
鬼蛙は丸々と太った身体をタキシードで包み、

妖月は着物姿で微笑を浮かべた。

二人は禍々しい瘴気を放つ呪符を握り、これまでにない鬼気を漲らせていた。

(演技は常に続けている。奴らはわたしたちが完全に堕ちたと思込んでいるはずだ)

(見ていなさい。吠え面かせてやりますわ！)
あれだけ痴態を晒してまだ戦う意思が残っているとは思わないはず。

ダブル戦姫は勝利を確信し、双眸を煌めかせる。

「長かった淫獄ショーも本日で閉幕。その代わりに最後にふさわしいとびっきりの恥辱を用意しています。皆さま、心ゆくまで楽しんでいってください。

それでは、今回の演目、巨チンザーメン噴水を始めます！」

鬼蛙は割れるような拍手を浴びながらショーの開幕を宣言する。

「キミたちには極上の射精を体験してもらおうよ。まずはこの呪符をチンポに貼ってもらおうかな」

「承知した。鬼蛙さま」

「はい、ですわ」
媚びた表情で呪符を受け取ると、ベタリと肉茎に貼りつける。

瞬間、固めたばかりの決意は、角砂糖のように崩れ出した。

「ひぐつ?! な、何だこれは……!?!」

「おチンポが熱くて……んっ、ああああああ!」
呪符から黒い渦が発生したかと思うと、男根を包み込み形を変える。禍々しい感触に全身の毛が逆立つ。

渦が晴れた後に現れたのは、進化を遂げた新たなフタナリペニスだ。

「こ、こんな馬鹿なことが……!」

「ちよつと、じよ、冗談ですわよね!」

ペニスの長さは五十センチにまで伸張し、金玉も

ソフトボールサイズに膨張している。

巨大化に合わせて射精衝動も増幅し、火で炙られているかのように身体が熱く、今すぐにでもシゴかなければ暴発してしまいそうだ。

これまでの倍以上はあるイチモツに、フタナリ乙女は悶え狂う。

「あぐうううううううううう! お、おチンポが大きく……んっ! んくう……!」

「これすごいすわ! おチンポがビクビク脈打つてえ♥ 射精したくてたまりません♥ コキたい♥ おチンポシコシコしたいですの♥」

「鬼蛙、シゴかせてくれ! すぐにセンズリしないとどうにかなってしまいそうなんだ!」

「わたくしもですわ! コーデリアの激臭ザーメンを吐き出させてくださいませ!」

開始早々に理性を蒸発させ、宿敵に懇願してしまふ。膨れ上がった雄幹から、凄まじい性衝動が立ち昇ってくる。

「いいよ。好きなだけオナニーしてごらん。ただし、観客席からよく見えるようにね」

「まったく、どうしようもない雌奴隷だねえ。みつともないつたらありやしない」

「か、感謝するぞ鬼蛙! だ、あああ……!」

「妖月さま、ありがとうございます! う、ふううううう……!」

お許しを得た黒髪、ブロンド戦姫は両手で大きな肉幹を掴むと、左右からゴシゴシとこすり上げた。片手では大きすぎてカバーできないのだ。

ゴシユツ♥ ズチユ♥ ゴシユゴシユゴシユ♥

「お……おほおほおほおほおほおほ♥ すごい♥ すごい♥ しゅごい♥ デカチンポしゅごい♥ ギュンギュン種子種汁が溜まっていく♥

ザーメンパワー充填しまくる♥

「ほぎゅうううううううう♥ い、いいですわコレ

え♥ キンタマ♥ キンタマ♥ ビッグサイズ金玉が最高ですのおおおお♥ 寧丸からわたくしの変態雄精子がドンドン生産されていきますの♥ おほ♥ おお♥ ふひひいいいい♥

ヘコヘコと腰を動かし、怒張器官をそそり立たせながら快楽を食る。

一擦りごとに今までの比ではない快美の波が訪れ、理性や矜持を飲み込んでいく。

観客に笑われるのも気にならないほどに、巨根ゼンズリに没頭してしまふ。

「チンポ♥ チンポ♥ チンポおおおお♥ デカチンポをゴシゴシするの気持ち良くてたまらん♥ オッ♥ ウング♥ 巨チンセンズリ最高すぎるうううううううう♥」

「ポコチン♥ ポコチン♥ オヒイイイイイイイイ♥ おつきくなつた変態ドスケベ男根が喜んでますのおおおお♥ お手ででおチンポ、シッコシコ♥ シッコシコ♥」

節操なく手を腰を動かす巨根美少女。

包茎のサクラヒメは包皮と亀頭がこすれるたびに卑猥な水音を鳴らし、ペニスで淫猥なコンサートを開催してしまふ。

コーデリアはデカ金玉を太腿に打ち付け、タブンタブンとやわらかな感触を楽しんでた。

グロテスクな陰囊が前後するたびに、濃厚な雄汁が生産され勃起力が高まる。

鬼蛙がこの目のためだけに創り出した呪符は、相手が装刃戦姫でなければ、廃人と化してしまふ最後の切り札。その効力も絶大だ。

「も……もうダメだ♥ チンポつらい♥ キツいい♥ あ……アツ♥ てる♥ てる♥ でてしまいうう♥ 早漏デカマラで射精するうううううう♥ おッ♥ ひうああああああ♥」

「おほ♥ ひううッ♥ わたくしもイキますわ♥

キンタマぐにぐにしながら公開オナニー最高ですの♥ キンタマ♥ キンタマ♥ タヌキみたいな巨大キンタマでイキましゅのおおおおおお♥

ケダモノめいて喘ぎながら、男性器をバキバキに滾らせる。舌を突き出しよだれを垂らすその姿に、装刃戦姫の凛々しさは欠片もない。

これほどの快悦にこらえ性のない早漏肉竿が耐えられるはずもなく、あつという間に特濃雄精子が噴き出した。

ビュルルル♥ ビュルルル♥ ブビュルルルウウウウウウウウ♥ ビュリユリウウウウウウ♥

「おふ♥ おつううううう♥ で、でてりゅ♥ わたしの変態巨大マラがイッてるうううううううう♥ 洪水みたいにザーメン出してりゅ♥ おッ♥ ぼっ、ほおおおおおおお♥」

「わ、わたくしもイキますのおおおお♥ パンパン金玉からスベルマシャワー出してしましますの♥ キンタマ揉みながら雌フタイキしますのおおおおおおおお♥ ぶひっ♥ ふごお♥」

みつともなく嬌声を響かせながら、精子を吐き出すデカチン戦姫。

両手をザーメンでドロドロに汚し、荒い息を吐きながら射精の余韻を味わう。

（これが極上の射精……すごい♥）

（意識がブツ飛んでしましますわあ……♥）

今までの射精を上書きする肉快楽に、トロンと腫を蕩かせ酔いしれる。

だが、膨れ上がった射精衝動は一発だけでは満足しない。巨大寧丸が子種汁を大量に生み出し、ドクンドクンと陰茎へポンプする。

「あんっ♥ ん、く♥ だ、出したい♥ また出したくてたまらない♥ おチンチンがパンパンに膨らんで……センズリしたい♥」

「んむっ♥ わたくしのチンポもギンギンですわ♥

さつき出したばかりなのにオナニーしたくてたまりません♥ マゾチンポがフル勃起してしましますのおオオオオオオ……♥

「鬼蛙もう一度あかせてくれ！ シッコシコしたい……ザーメン出したくてたまらないんだ！」

「射精させてください妖月さま！ キンタマがブリユプリユ精液つくってますのお！ チンポ！ チンポ触らせてええええええ！」

肉竿にへびのような血管がいくつも浮かび上がり、海綿体がち切れんばかりに膨張する。

皮の剥けたカリキノコがヌラヌラと光り、鈴口が切なげにヒクつく。

「そこまで射精したいなら許可しようかな。ただし、次はサクラヒメはボクと、コーデリアは妖月と一緒に絶頂してもらおうよ。八大鬼の実力、思い出させてあげる」

「ようやくあたしの出番かい。来なよ装刃戦姫サマ」

「ああ、よろしく頼む♥」

「わかりましたわ、妖月さま♥」

躊躇なく悪鬼の命令に従う汚臭ザーメン乙女。あまりの陰茎の高ぶりに、もう演技しているのかどうかもわからない。

「クフフ、立派なチンポになつてくれて、ボクも嬉しいよ」

鬼蛙はサクラヒメの正面に立つと、自らの陰茎を露出した。長さは巨大化チンポと同程度だが、幹の太さがまったく違う。

凶器とも思える肉勃起は、年月を重ねた大木のような威圧感で天を仰ぎそびえ立っていた。

（ゴクンッ。すごい、なんて遅いんだ。以前見た時とまったく違う。これが鬼蛙のペニスなのか……だ……だ、ダメだダメだ！ 何を見惚れている！ 良平を助けるんだぞ！）

男性の象徴を目の当たりにして思わず喉を鳴らし

てしまう。

火照った身体をどうにか抑える黒髪ヒロイン。

「皆さまの前で存分に狂っちゃいな」

妖月もコーデリアの前に立つと、四本の尻尾を展開した。

自由自在にくねる尻尾に呪力を漲らせると、一本に束ね巨大な手の平に変化させる。

これならどんな巨肉竿でも掴んでシゴくことができるだろう。

（ふああ……妖月の尻尾がこんなにカッコ良く見えるなんてえ♥ あれでおチンポをシコつてもらえたらどれだけ気持ちいいのかしら♥ ……って、いけませんわ！ 女狐に感動してどうしますの！ 良平くんを助けるのに誑かされてはいけませんわ！）

始めに妖月が動く。コーデリアを背後から抱きしめ耳元に唇を近づけると、

「じつとしていな。あたしが気持ち良くしてやるからさ」

「は……はい♥」

大きな手の平で巨根ペニスを掴み、両手でも覆いきれない肉幹に指をまわして、根元からこすり上げた。

「あつ、んうううううう……♥」

射精欲求がさらに高まり、精神力を総動員して耐えなければ、すぐにも絶頂してしまいそうほどの快楽が押し寄せてくる。

「ひうううううう♥ んん♥ チンポすごい♥ すごい♥ すごいですのおおとおお♥」

「ふふ、身体中が蕩けそうだろう？ 盛大にイカせてあげるよ」

「ひゃい♥ イキたい♥ ザーメンだしたいですわ♥ ヒグ♥ ナアああああああ♥」

「本当にこらえ性のない雌ブタだねえ。イキたいなら、皆さまの顔を見ながらおねだりしな」

「わかりましたわ♥ 変態デカチンポのコーデリア

はあ……濃縮特濃ザーメンビュービュー射精したいですのおおとおお♥ 先つばからくつさいミルクを出させてえ♥ ジオオオオ♥」

観客席からは早く射精しろとコールが飛び交う。ブロンド戦姫が惨めな醜態を晒すところを、見物したくてたまらない様子だ。

巨大陰茎は妖月の巧みな愛撫に何度も鈴口を開閉させ、マグマのような欲望を滾らせた。

「もう限界みたいだねえ。まったくマンコの臭いマゾの上に早漏だなんて恥ずかしいのかい？」

「恥ずかしいですわ♥ ムレムレ腋でクサマンの上に超デカチンなんて♥ 死ぬほど恥ずかしいですわあ♥ ひう、あうううう……♥」

「でも、恥ずかしいのが好きなんだよねえ？」

「はい♥ 恥ずかしいのがイイですのお♥ 恥ずかしくて、みつともなくて、惨めなのが最高にコーンパンですわ♥ おおとおお♥ ああ、もうおチンポがパンパンですわ♥ 出させて♥ 早くザーメン出させてえ♥」

「イク時は乳首でオナニーしながらイクんだよ。オッパイも淫乱な雌奴隷だつて教えてやりな」

コーデリアはEカップ美乳の先端をつまむと、クリクリとオナニーを開始した。

フタナリ射精だけでも最低なのに、公開乳首自慰まで強制させられてしまう。

「んっ♥ ふああ♥ 乳首オナニーも気持ちいいですの♥ はう、んううううう……♥」

乳首を引つ張り爪で弾いて、激しく快楽を求める。巨大手の平コキの気持ち良さど合わせって天にも昇る心地だ。

「い……イク♥ イク♥ イグ♥ イグ♥ イグ♥ うううううう♥ 乳首とデカチンポ手コキでアクメしちゃいますのおおとおお♥ もおとおお♥」

妖月の愛撫に耐え切れず肉竿が暴発する。

炎のような射精の脈動に抗う術などあるはずもなく、一度目以上の勢いで精液が迸った。

ドビュウウウウウ♥ ドブブブブブ♥ 「ほおおおうううううう♥ おチンコ汁ドバドバでますのお♥ 巨大手コキが気持ち良くてたまりません♥ おツグ、ソツ♥ 皆さまあ、巨根マゾ雌の淫乱大量ザーメン見てえ♥ いっつぱい蔑んでええええええええ♥」

ドビュドビュと、観客にかかりそうなほど大量射精する薔薇の戦姫。

想像すらしなかつた法悦に金玉を震わせ、その場

にへたり込んでしまう。

「あ、アハハ……しゅごいですわあ♥」

（なんて気持ち良さそうにアクメするんだ……わたしも、あれくらい射精してみたい……）

サクラヒメは淫悦への期待に肉幹を震わせた。戦友が絶頂するまで待たされた巨肉竿は、大蛇のごとく張り詰め、パンパンに反り返っている。

「そんなに物欲しそうな顔をしなくても、彼女と同じ、いやそれ以上の快楽を与えてあげる。未来の旦那様を信じてよね」

「ああ、信じているぞ」

（だれが旦那だ、この変態カエルめ！）

鬼蛙は一直線になるように、自らの亀頭とサクラヒメの亀頭をくつつけた。巨肉竿同士が触れ合い、乙女の思考がジーンと痺れる。

「今から兜合わせ、ペニスとペニスをこすり合わせるよ。ボクがリードするから任せておいて」

「初めてするプレイだな……わたしにできるだろうか？」

「心配ないよ。キミはじつとしてるだけでいいからさ。ただ、笑顔だけは忘れずにね」

「承知した。鬼蛙さま♥」
快感と屈辱がない交ぜになった表情でサクラヒメは微笑む。

そして、密着した部分がゆつくりと擦り合わされていく。

(熱い……それにドクドクしてる……んっ♥)

血管の脈打つ感触が直に伝わってくる。

高温で熱せられた鉄棒のように互いの体温が感じられ、心臓が鼓動を早める。

「あうっ♥ ひうう♥ チンポすごい♥ スリスリすごい♥ ぐうくうううううううっ♥」

「ね? 言ったでしょ?」

「ああっ♥ き、貴様の言う通りだ♥ チンポとチンポでこすると頭がパーになってしまう♥ 感じまくるう♥ ほおおおおおおおお♥」

「ボクの動きに合わせてね。そうすれば天国に連れていってあげるよ」

「ひゃい♥ はあ、あふうううううううう♥」

嬌声を上げ兜合わせに興じる黒髪乙女。

フタナリデカ陰茎が触れ合うたびに、背筋がビクンビクンとのけ反った。

雄の象徴に身も心も預けてしまいたくなる。

「チンポとチンポでくつつくのイイ♥ 亀頭発情する♥ ハウ……ひう、ひゃああああ〜ん♥ も……もうでてしまいたいそうだ♥」

「まだダメだよ。それにほら、こうしたらもつと気持ちいいだろう?」

「ひううううう?! う、はうううううううう♥ こするスピードが上がってええええええええ!!♥」

亀頭と亀頭が粘着音を鳴らし、鈴口と鈴口がぶつかり合っつて糸を引く。我慢汁にまみれた男根から淫猥なハーモニイが奏でられた。

トクンツと子宮まで疼いてしまう肉快美だ。

「アウ、う、ンクウウウウウウ♥ チンポいい

♥ 熱くて切なくてどうにかなってしまいたいそうだ♥
鬼蛙……わ、わたしはもう……♥」

「もう出したいの? クフフ、キミは本当にスケベだね」

「さ、さつきからチンポが疼いてもう我慢できないんだ♥ 早くザーメン出したいいいいいいい♥」

「いいよ。でも、その代わりボクのことを好きだっって言って欲しいな。それができるなら射精させてあげるよ」

「っ……わかった! 言うだけでいいんだな!」

サクラヒメの巨肉竿がさらに膨れ上がり、射精の体勢に入った。

擦り合わされる肉棒の動きがいつそう激しくなり、翠丸がアメリカンクラッカーのように跳ねる。

(これは演技、そう演技だ。だから決して良平を裏切っているわけじゃない。チンポ欲求に負けたわけじゃない……♥)

恋人に対する想いも快楽の波に飲まれていく。

「くる♥ チンポアクメくるうううう〜♥」

亀頭が激しく蠢動し肉竿が離れた瞬間、強烈な勢いでザーメンが進った。

「ビビ♥ トププ♥ プ、ブビュルビュルウウウウウウウウウウウ♥ ドビュルウウウウウウウウウウウ♥」

「好き♥ 好き♥ 好き好き♥ しゅきいいいいいい♥ 鬼蛙、貴様のことが大好きなんだああああ♥ 大好き♥ い、イクッ♥ イグッ♥ マゾ巨大チンポがイッてしまおう♥ チンポとチンポでキスしながらラブラブちゅっちゅっアクメしゅりゅううううううううううう♥」

恍惚の表情でエクスタシーを迎える黒髪乙女。意識が真っ白に飛翔し、必要以上に恋人めいたセリフを言ってしまう。

舌を出しながら虚空を見つめる彼女を眺め、鬼蛙は口元を吊り上げた。

今は心地良いだろうが、肉竿はすぐにまた射精を求めよう。

二度の射精で刻み込まれた快楽は、逃れられない楔となっているはず。

終劇の準備は整った。

「キミらしい豪快な射精だったよ。ボクに任せて良かっただろう?」

「は……ひゃい♥」

「あんたもそうだよねえ、コーデリア?」

「ええ、最高の絶頂を感謝しますわ♥」

「とびきりのアクメ顔を晒してくれたことだし、ご褒美をあげようかな。頑張ったキミたちのためにスペシャルゲストを用意しているんだ。さあ、入ってきて」

「え。な、に……?」

「はい……?」

呆けた表情で鬼蛙が指さす方向を見るダブル戦姫。その顔はすぐに驚愕へと変わった。

舞台の上にかげがえのない恋人、三城良平が現れたのである。

「……………」

「良平っ?! どうしてここに!?!」

「こ、こんなところに来てはいけませんわ!」

丸メガネの少年は服を身に着けていなかった。男性にしては少し線が細い裸体を晒している。

だが、今の二人にとつて格好などどうでもいい。地下劇場での痴態をすべて、彼に見られていたのかもしれないのだから。

美貌を蒼白に染め、必死に弁明する。

「ち、ちがッ……違うんだ良平! これは無理矢理やらされているだけだ! 鬼蛙なんか好きじゃないっ!」



どうして
ソクソクするの!?

ああ…こんな
わたし食べられ
てるの!

呑み込まれ
てる…!

リ…
リーゼ様

粘獄のリーゼ

淫罪の宿命
最終話 奇跡

いよいよ決着の時!!



光流…!

ああ…
リーゼ様まで
ん…呑まれて
しまったなんて…

大丈夫!?
怪我はない?

はい…怪我は…
ありませんわ

肉を切っても
すぐ再生されて
しまうけど…

塞がる前に
素早く出れば
いけるかも
しれない

せめて
光流だけでも

いけない!

心まで
呑まれる
所だった…

光流…ごめん
もう天使の刃は
残ってないの…

ああ…
はあつ…
リーゼ様

も…もう
ダメですの…

わたくし…
ずずっと
イキっぱなしで

身体がいう事を
きかないんですのよ
ああ…くっ…

ズッ
ズッ



光流…!?
しっかりして!

ニムシ

なに
こいつら

もど

カ
ニムシ

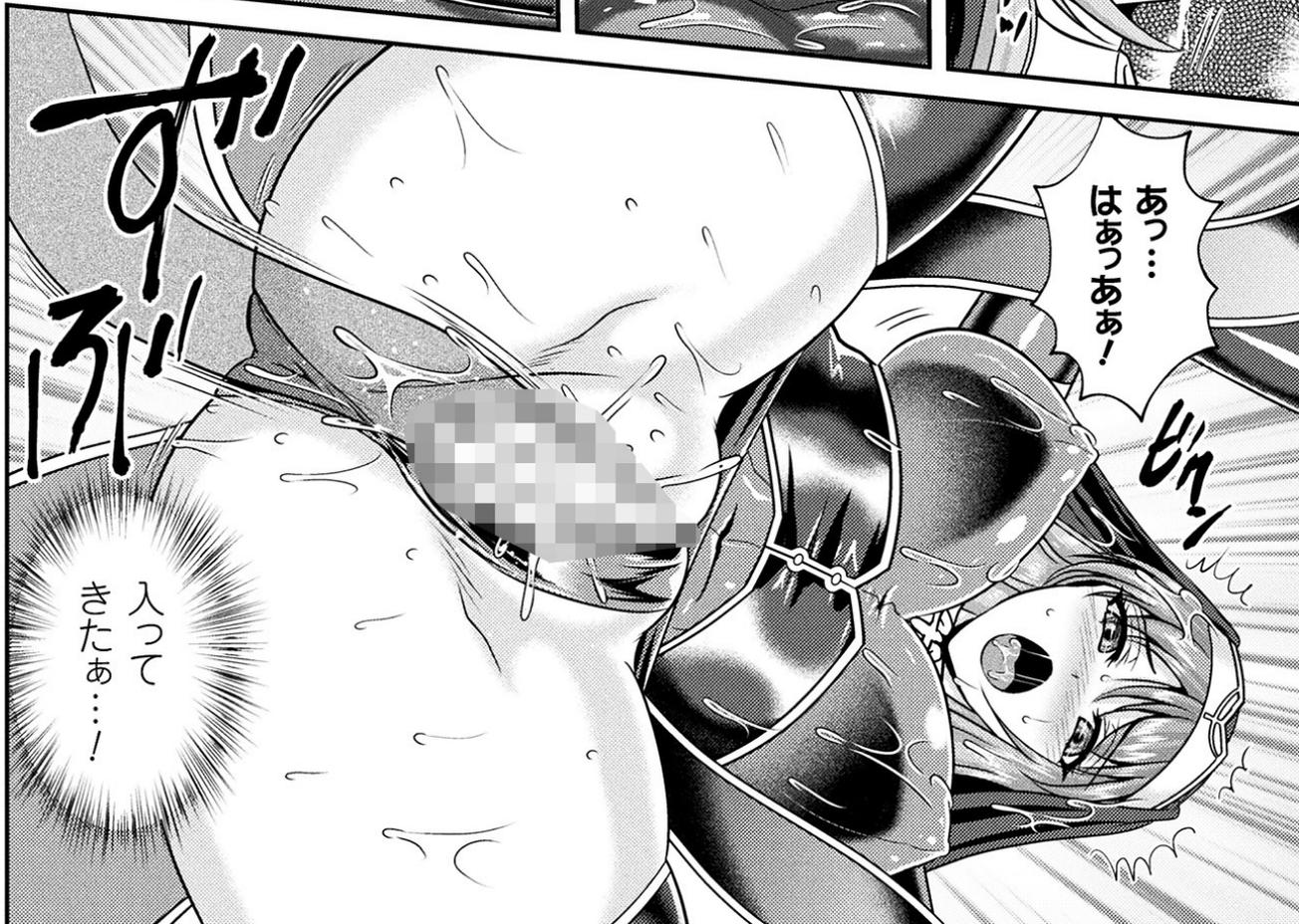
じゅる

こんな所まで
いるの!?



あまかった!!
こいつは
休む暇も
与えない

体内の中でも
わたしたちを
弄ぶ気なんだ



い...いや
やめっ...
アアア

今入れ
られたら...!

バクバク
カクカク

やめ...

カクカク

ズル
ズル
ズル

ああっ!

あっ...
はあっああ!

ヒッ

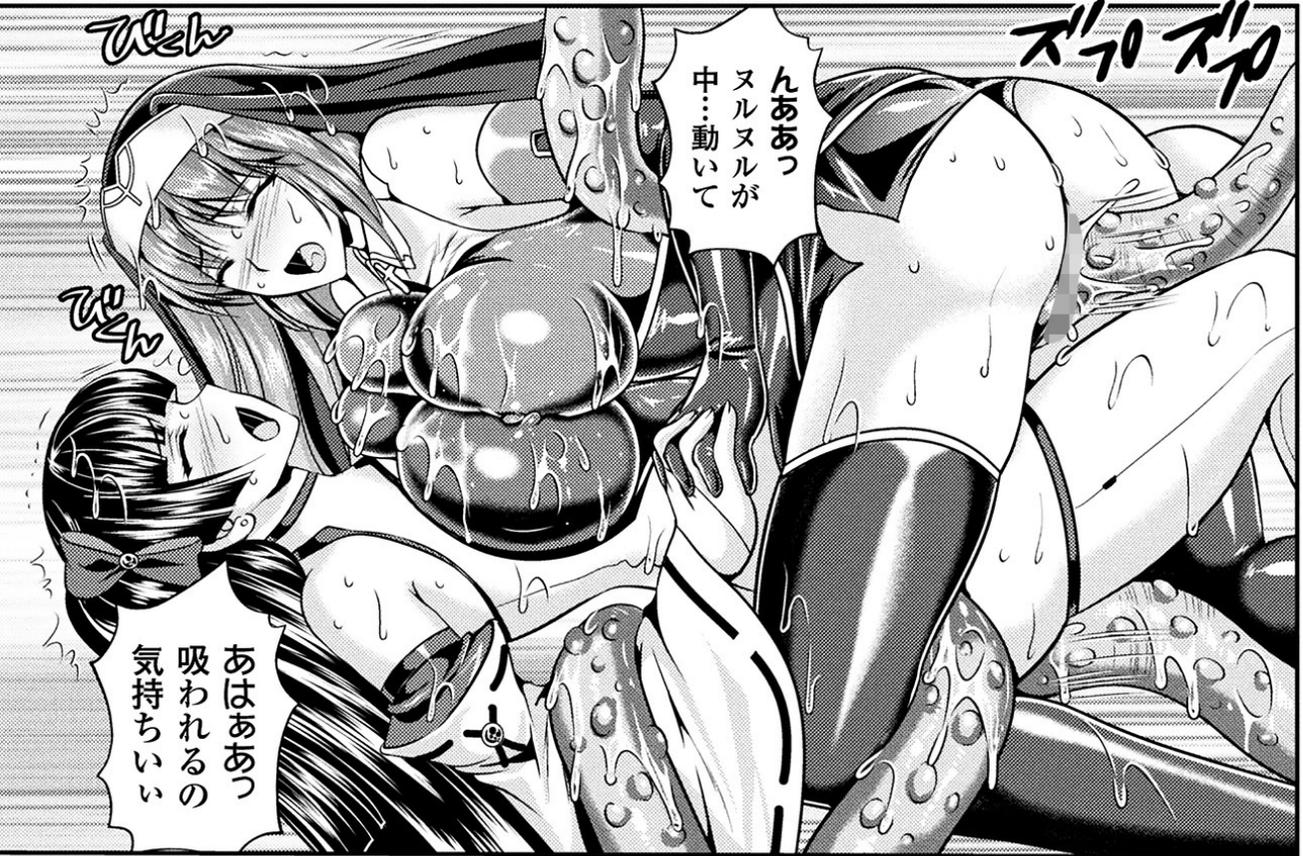
入って
きたあ...!



あひい!
こんなの…
気持ち悪すぎ
ますっ

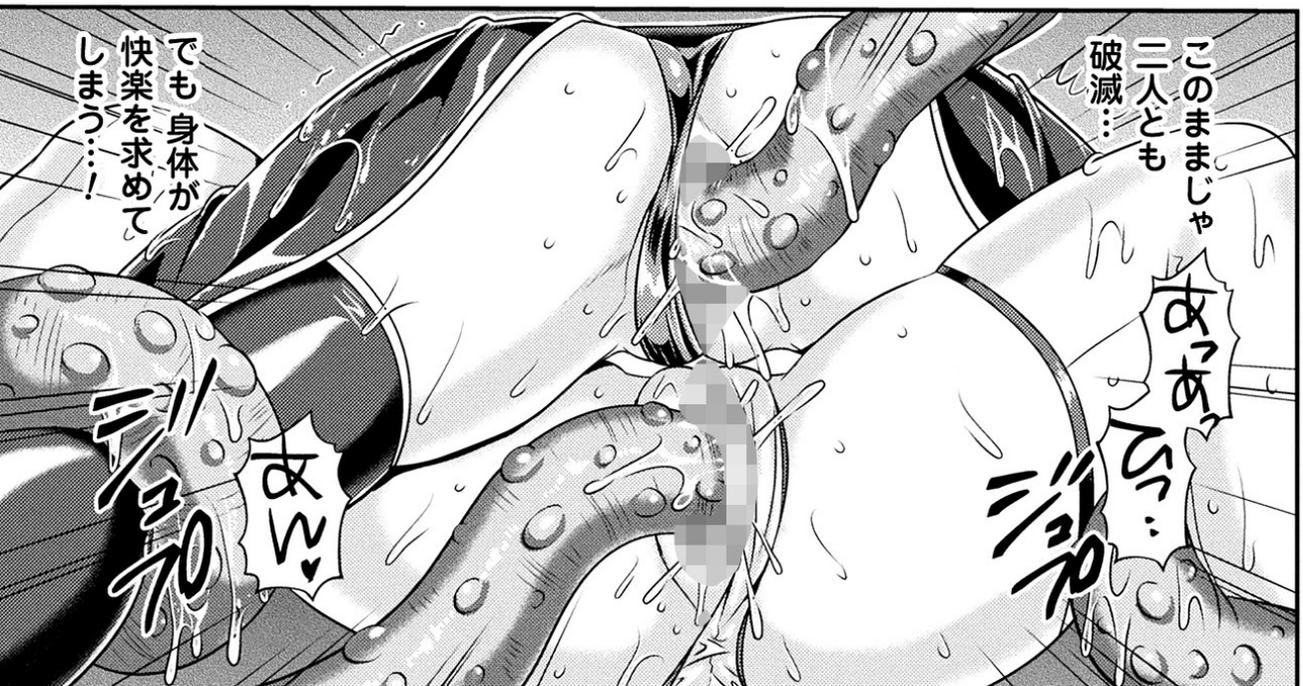


ひゃっ
激し…!
突かないでえ



んああつ
ヌルヌルが
中…動いて

あはああつ
吸われるの
気持ちいい



このままじゃ
二人とも
破滅…

でも身体が
快楽を求めて
しまう…!

この身穢されても……
みんなを助ける!



魔法少女

小説 くりす 栗栖ティナ
NOVEL
挿絵 な かん奈
ILLUSTRATION

☆
ヴァルジーネ☆リリナ

普段は大勢の人々で賑わっている繁華街の中心部に、悲痛な悲鳴と破壊音が響き渡る。

「死ね、愚かな人間どもよ」

淡々と抑揚のない声で呟き、漆黒の炎を周囲にまき散らすのは、宙に浮かんでいる黒い人影。

自ら「ブーヨ」と名乗る異形の怪物を前に、警察も軍も歯が立たず、無残に潰されていくのみ。

絶望が広がるそんな中——唯一の希望が近くのビルの上に立ち、忌々しい怪物を睨みつけていた。

「今日こそ決着をつけてみせる。私、負けない……守ってみせるから！」

ブレザー型の制服がよく似合う、かなり小柄でほっそりとした、まるで小動物のように愛くるしい少女の名は、乙峰凛々奈。

陽光を受けて輝く金糸のごとく髪がポニーテールにまとめられ、あどけない可愛らしさを演出している。

だが、敵を見据えるエメラルドのように輝く瞳と、きつく結ばれた桜色の唇には、強い意志が浮かんでいた。

息を整えるように右手を当てた胸元は、その背丈には不釣り合いなほど大きく張り出している。

彼女が深呼吸するたびに、ぷるんっという音が聞こえそうな勢いで揺れ動く。「いくよ！」

凛々奈が容姿に合ったキーの高い声とともに左手を掲げると、どこからともなく一本のロッドが現われた。

腕ほどの長さのそれは、先端を飾る星が淡い光を放ち続ける、見るからに不思議な力を感じさせるもの。

悪と戦う絶対的な力を授けてくれるそれを天高く掲げたポニーテールの少女が、力強く叫ぶ。

「封魔解除！ 愛と正義の光よ、ヴィルジネ・マッシュモ!!」

声とともに飛び上がった凛々奈の身体が光に包まれ、彼女の身を包む服が変化していく。

ポニーテールの髪を飾る、まるでお姫様のようなサークレット。

ボディラインをくつきりと浮かび上がらせる、桃色を基調としたドレス。その胸元からお腹にかけては、コルセットのように左右の布地が紐で繋がれたデザイン。

大胆に開き、彼女の小さな手ではとても掴みきれないサイズの爆乳が今にもこぼれ落ちそう。

フリルで飾られたスカートも短く、翻るたびに引き締まった小ぶりなヒップがチラチラと見え隠れする。

そのことに少女は気恥ずかしさを覚えて頬を赤らめるが、今は隠している余裕などないとそれを押し殺し、真つ直ぐに敵へ向かって宙を駆ける。

そんな少女の姿に気づいた逃げ惑う人々が、揃って歓声を上げた。「きてくれた……魔法少女！」

「頑張れ、リリナちゃん!!」魔法少女ヴィルジネ・リリナ。人類を超越した悪の存在に、唯一立

ち向かうことができる希望の光、それが少女の正体だ。

「ブーヨ、これ以上、あなたに誰かを傷つけさせない……今日こそ、私が倒してみせるっ！」

もう一年近くブーヨと戦い続けてきた彼女は、今日のために自らの力に改めて磨きをかけてきた。

「正義を慈しむ虹の光——お願い、私に力を貸してっ！」

胸のふくらみが揺れるほど勇ましい声を上げると同時に、掲げた星型ロッドに強い光が集まってきた。

七色に輝くそれが球体となり——。「オーラシエル・フルバースト！」

凛々奈が叫びながらロッドを振り下ろすと、それが宙に浮かぶ邪悪な影へ真つ直ぐ向かっていく。

激しい衝撃波でピンクの短いスカートがふわりと捲れ、衣装よりも薄い、白に近い桃色のショーツがチラリと見えそうになっってしまう。

だが、それに気恥ずかしさを感じる余裕もなく、意識を目前の怨敵に集中し、すべての魔力を注ぎ込んだ。

「ウオオオオオッ!! 光……ギャア！」

高速で放たれた必殺の一撃を受けたブーヨは、七色の光の中で瞬時に白い煙となって消え去っていく。

「か、勝てた……?」

今日のために苦しい鍛錬を積んで磨き上げた新しい魔法が、遂に邪悪な敵を滅ぼしたのだ。「やった、勝った! リリナちゃんが

ブーヨを倒してくれたんだっ!!」逃げ惑っていた人々の中、若い男の声を合図に、みんなが騒ぎ出す。

その声を聞き、凛々奈はようやく勝利したのだと実感が湧いてきた。「よかった。私……」

傷つく人を見たくない。ふとした偶然で手に入れた魔法少女の力に困惑しつつ、ただその一心で辛い戦いを乗り越えてきた。

その日々が報われたのだと、大きく開いた胸元に手を当て、しみじみと嘯み締めた——刹那。

「ククッ、見事な魔力……やはり、ただ潰すのではなく、我が奪うに相応しいものだ。計画どおりにな！」

たった今、滅ぼしたはずの邪悪な声がどこからともなく聞こえてきた。魔法少女が何事かと周囲を見渡す余裕もなく——。

「ひっ、何だ、これ……うああ!!」先ほどまで凛々奈に声援を送っていた人々の中、男性たちが苦しげな呻き声を上げ始めた。

彼らの身体からは、不気味な黒い霧が立ちのぼっている。「あれは……ブーヨの気配を感じる。まさか……そんな!」

慌てて地面に降り立った凛々奈は、なすすべもなく呆然と叫ぶ。「ご名答だ。貴様の攻撃を受ける直前に身体を飛散させ、この哀れな連中に寄生させてもらった」

再びどこからともなく聞こえてきた

267

プーヨの声に、凛々奈は唇を噛む。
（油断しちゃった……どうしよう）
男たちは苦しげに跪き、揃って救いを求めるようにじっと凛々奈のほうを見つめてきている。

彼らの肉体を人質に取られているような状態。先ほどのように攻撃魔法で吹き飛ばすわけにはいかない。
解決策を見つけれず、悔しげに唇を噛む凛々奈へ、男たちから立ちのぼる黒い霧から再び声がかかる。
「こやつらを助けたければ、貴様の身体で浄化してみせろ」
「……私の身体で？」

意味がわからずに訝しがっていた魔法少女は、自分の身体に突き刺さる熱い視線に気づいた。
「よく見ると……この子、凄くエロい格好してるよな……へへっ」
「俺は前から気になつてたぜ。胸、こぼれ落ちそうだしさ……」

凛々奈の父親ほどの中年男、実直そうなサラリーマン、その他大勢の男たちが、好色な眼差しを隠すことなくポニーテールの少女へ向けている。
「えっ、ど、どうして……」
女として魅力的すぎるほどの見事な

肢体を持つ少女だけに、そういった欲望の眼差しを向けられた経験は少なくなく、敏感に察してしまう。
だが、自分が命を賭して救おうとしていた人々から向けられるそれは、裏切られたような気持ちで湧き上がり、とても無視できないものだった。

（違う、この人たちの意志じゃない。これもプーヨの……）
凛々奈が混乱する頭を整理してそう結論づけた直後、それを肯定するように邪悪が言葉が続ける。

「この者たちの欲望を、我が解き放つたのよ。肉体に宿った私の欠片は、こやつらの欲望の源……体液を排出することではか浄化できん。汚れを知らぬその身体、見ず知らずの男のために差し出せるか、魔法少女」
告げられた絶望的な事実、気丈な魔法少女もさすがに顔を強張らせた。
（そ、そんな……それって、私がこの人たちを……射精……させないといけないってこと？）

保健体育の授業で習った知識を総動員して出した答えを噛み締める。
ひそかに学園の先輩に淡い想いを抱いているだけの純粋な凛々奈には、あまりにも荷が重すぎる現実。
胸の奥が締めつけられるような苦しさに、思わず崩れ墜ちそうになる。
「苦しい……助けて……ううっ」
「早くっ、女……クソ、このままだど誰でもいいから襲っちゃまいそうだ！」

その間にも苦しげに呻く中年男や、殺気立った目で周囲を見渡す柄の悪い男の声が聞こえてくる。
悠長に悩んでいれば、彼らが暴徒となつて周囲の女性を襲いかねない。
（これもみんなを守るため……）
その身を捧げる。
穢れなき乙女にとつて苦しすぎる決

断を下した凛々奈が、意を決して一歩前に踏み出す。
「わかった……私の身体で浄化するから……みんなを解放して！」
辛い言葉を口にして、嵐が過ぎるのを待つように目を硬く瞑る。
「何を言っている？ 貴様がこやつらとその気にさせてみせろ」
「……どういふこと？ えっ、そ、そんな……」

続けて投げかけられた邪悪の声に戸惑う凛々奈へ、好色な眼差しになった男たちが次々に訴えてきた。
「そうだな。エロい格好で誘ってくれないと、やる気にならないぜ」
「さっき、ちよつと見えてたショーツ……ゆつくり見せて欲しいな」
「そいつはいい！ 魔法少女は、どんな下着を履いてるんだ？」
欲望を剥き出しにした男たちの、情け容赦ない要求。
凛々奈は頭を横殴りされたような衝撃に立ちくらみすら感じつつ、それでもどうにか踏みとどまる。
（これも全部プーヨのせい……みんなの責任じゃないんだから……魔法で助けられない、私の力不足が悪い）
凛々奈は自らをそう叱咤すると、震える手で短いスカートの裾を摘まむ。
「んっ……うう……」
抑えきれない嗚咽を唇の間から漏らしつつ、ゆつくりと捲り上げ、その下に隠されているショーツを自ら男たちの視線に晒す。

いかにも少女らしい、薄桃色の清楚な雰囲気なショーツがあらわになった途端、凛々奈を取り囲む男たちが一斉に歓声を上げた。
「おおっ、本当に見せてくれた。サービスイいなあ」
「さすが人助け好きの魔法少女。それとも、実は元々露出狂の気が？ おっぱい見えそうなおエロ服だしな」
少女の羞恥を煽るような言葉とともに、熱い視線が捲つたスカートの中心に集まっている。
（見られちゃつてる、し、下着……こんな、嘘だよ、こんな……）
とても目を開けることなどできず、嵐が去るのを待つようにうつつむいたまま肩を震わせる。

本来ならば哀れさを誘う少女の姿だが、魔に取り憑かれた男たちには、むしろ欲望を刺激されているらしい。
「なあ、どうせなら胸も見せろよ。そのやたらでつかいおっぱい、ちゃんと見せて欲しいなあっ！」
柄の悪い男が手を上げて訴えると、それはいいと言わんばかりに他の男たちが手を打ち鳴らして盛り上がる。
「む、胸……まで……あのっ、そ、それは関係ないです……だから……」
「何だよ、俺たちを助けてくれるんだろう？ 違うのかよ！」
「元々、お前がちゃんと敵を倒さないからこうなつたんだろが!!」
さすがにそこまでとは拒絶しようとした魔法少女だが、男たちが口々に怒

戦うヒロインたちの激しいエッチでいっぱい雑誌を、書店で初めて手に取ったときの衝撃、今もはっきり覚えています。二次元ドリームマガジン100号、おめでとうございます！

声を上げると、その迫力に気圧されて押し黙ってしまう。

自然と荒くなってきた呼吸に合わせ、悩ましく揺れる巨乳。

舐め回されるかのごとくじつと見つめられているのを感じつつ、少女は覚悟を決めてそこへ手を伸ばす。

（そう、私がちゃんとブーヨを倒しきれなかった……私の責任だもん。だから……悲しくても、辛くても、我慢しないとイケない……ここにいるみんなのほうも、もつと辛いはず……）

自分を納得させるように言い聞かせると、胸元の紐をぎこちなく解き、ふくらみを包み込んでいた布地をみぞおちのほうへずらしていく。

ぶるんつと大げさなくらい弾み揺れてこぼれ落ちた、対の爆乳。

それを見た途端、男たちの声は爆発したかのごとく大きくなった。

「おおおつ、生で見ると迫力あるじゃねえか、このデカパイ！」

「マジかよ……手で掴みきれないサイズだろ。可愛い顔して、無茶苦茶エロいおっぱいしてるよなあ」

「でも、乳首は桜色で可愛らしい。くっつ、むしやぶりつきたいぜ！」

わざとらしくいらい乱暴で、欲望をさらけ出した声を上げる男たち。

元々大きすぎることをコンプレックスに感じてた凛々奈は、その言葉一つ一つに羞恥を煽られ、息つく間もなく肩をビクビク痙攣させてしまう。

意識しすぎているせいかな、乳輪の中

央で慎ましく震えていた肉粒が、少しづつ大きくふくらんでくる。

その反応が男たちをさらに喜ばせ、煽る声が大きくなってきた。

（もうダメ……見ないでっ、は、早く終わらせてよ……うう……）

祈るように心の中で願う。

そんな少女の反応に、遊び慣れているような男が楽しげに指摘した。

「可愛いなあ、この反応は間違いなく処女だろ！ そうだよなあ？」

「へえ、処女マンコを俺たちを助けるために差し出してくれるのかよ！ くはは、サービスよすぎだろ」

いつか好きな人と結ばれる。

胸の奥底に秘めていた、いかにも乙女らしい夢を捨てなければいけない。

改めて現実を直視させられる言葉が投げつけられるとさすがに耐えることができず、閉じた目の端に光るものが浮かんできてしまう。

だが、そんな哀れな姿すら、欲望を暴走させた男たちを喜ばせることにしかならない。

「何だ、泣くほど早く処女を奪って欲しいのか？」

「それなら、おじさんにはつきりとそうおねだりして欲しいねえ」

口々にはやし立てる男たちの中、小太りの中年男が前に歩み出て、仰向けに横たわった。

「ほら、おじさんに言ってみな？ 私の処女マンコ、みなさんで楽しんでくださいってさあ。ひひひっ！」

「そ、そんなっ……ううっ」
ためらい嫌んでしまう凛々奈へ、他の男たちからも急かすような声と視線が投げつけられる。

「お前のせいで、俺たちはこんな風になってるんだぞ！」

「責任取れよ、リリナちゃん！」

自分が必死に守り続けていた人々から受ける、酷い仕打ち。

すべては彼らに取り憑いたブーヨのせいだとわかっていても、凛々奈は絶望的な気持ちを振り払えなかった。

（どうして、私、一生懸命頑張っているのに……それなのに……っ）

逃げ出してしまいたい。

そんな衝動に襲われたが、紙一重で堪えて前を向く。

（耐えないと。私はみんなを守る魔法少女……見捨てられない！）

正義の魔法少女らしい気高き理想を噛み締め、横たわる中年男へ向かって一歩ずつ歩み寄っていく。

小太りで脂ぎり、髪も薄い。

理想とほど遠い相手に純潔を捧げなければいけない現実には、また心が折れそうになるのを我慢して口を開く。

「あのっ……お、お願いします。私の初めて……もらってください」

促されたような卑猥な言い方はとてもできず、蚊の鳴くような小声でどうにか言葉を紡ぐ。

口に出した途端、絶望の色が濃くなり、涙が零れそうになるのを止められなくなる。

普通ならば見ているだけで衰れに思っただろう少女の姿。だが、魔に操られている男たちは欲情を煽られ、ますます盛り上がってきた。

「うははっ、可愛い魔法少女ちゃんにそこまで言われたら、おじさんも頑張らないとなあ！ ほら、ぶち込んであげるから、自分で腰を落とすんだ」

中年男は慌ただしく、凛々奈の小さな握り拳ほどの太さもある肉棒を取り出し、それを指差して命じてきた。

「ひっ、あっ、ああ……」

黒ずんだ竿肌が張り詰めた血管が浮かび上がるほど硬く勃起した巨根。

初めて直視する凶悪な見た目の男根は、今まで相手にしてきた魔物よりも恐ろしく見えた。

（こんなに太くて長くて……は、入るの？ 本当に……？）

純潔を失う絶望だけではなく、不安と恐怖が込み上げてくる。

膝が小刻みに震え、今にも崩れ落ちてしまいうるようになるが、男たちはそんな凛々奈に猶予を与えてくれない。

「おら、さっさとしろよ！ これだけ大勢いるんだぞっ？」

いつの間にか後ろに回っていた柄の悪い青年が、立ち尽くす魔法少女の背中を乱暴に押ししてきた。

踏みとどまらず前のめりに数歩歩み出した凛々奈は、ちょうど中年男の腰上に跨がる位置に来てしまう。

「ほら、さっさとショーツ脱いで、オマンコをおじさんに見せて欲しいな。」

「ほら、さっさとショーツ脱いで、オマンコをおじさんに見せて欲しいな。」

これからこのチンポが入る、可愛い穴をさあ……うひっつー!

「ぐすつ……は、はい……」

もうどうにもならないと改めて絶望しつつ、力なく下着を脱いでいく。

あらわになった秘部は、真つ直ぐに縦筋が伸びた美しいものだった。

余計な肉ピラがはみ出していることもなく、ぶつくり盛り上がった肉唇が不安に小さく震えている。

そこへ男たちの視線が集中するのを感じ、凛々奈は再び耐えきれなくなつて目を瞑つた。

(どうしよう、どうすれば……)

あれこれと思い悩みながら下着を脱いでいた刹那、片足にかかったそれを取ろうとしてバランスを崩した少女は踏ん張りきれず、その場にガクッと膝をつき――。

ズリウウウウウウウツ!

「ひぐうっ、はぎいっ、ううっ、嘘、これ……んぐうっ、ああああっ!!」

真つ直ぐ、天を差し示すように勃起していた肉楯が、その勢いで一気に膣壺へ突き刺さってしまった。

「おおっ、せ、積極的じゃないか、随分と。処女膜、ねちつく責めてあげようと思つていたけど、あつという間に破れちゃったねえ!」

「はぐうっ、ひいっ、ああ、う、嘘、嘘お……本当に入つて……んっ!」

呼吸ができないほど下腹部が圧迫され、あまりの衝撃に目前でチカチカと火花が散る。

ジンと強い痺れが鎮まると、同時に脳天まで激痛が響いてきた。

恐る恐る結合部を覗き込むと、丸々と押し広げられた穴口から滴る赤い血が、埋まる肉竿を伝つて止め処なく垂れ落ちていく。

(私、本当に汚されちゃった……初めて……こんな形で……)

想像を絶する痛みと悲しみに、涙粒がポロポロと頬を伝つて垂れる。

逃れたいと反射的に腰を浮かそうとしたが、それを許さないとばかりに中年男が動き出す。

「泣かなくてもいいだろう? すぐにおじさんが気持ちよくしてあげるから……ゆつくり楽しみなさい!」

そんな声とともに中年男が手慣れた感じで腰を振り動かし始めた。ヌチルツ、ズップズップツ!

肉壺をいっぱい埋める怒張が、低い水音を響かせながら出入りする。限界まで広げられた膣壁が、まるで焼けた鉄のごとく硬く熱い竿肌で容赦なく擦られた。

行き止まりにある小さな肉室も息つく間もなく突かれ、凛々奈は呼吸すらままならない刺激に悶絶し、ただ苦しげに呻き叫ぶ。

「ひぐうっ、やめえ……はひっ、ああくううううっ?! 中っ、わあ、私の中がっ、焼けて……ひいっ!」

破瓜の痛みが落ち着く間も与えられずに始まった抽送に、膣内は燃えるように熱く、痺れてきた。

「どうだ? これがセックスだ。お嬢ちゃんには刺激すぎたかな?」

楽しんで言う中年男の動きは、激しさを増す一方。

捲れたスカートから覗く、凛々奈の可愛らしいお尻へ自らの腰を打ち付けて、身体ごと弾ませるように突く。

「くうっ、んくっ、はあ、お願い、しますっ、止めて……ひぐっ、うう」

頭の中が白く染まり、ただこの衝撃から逃れたいという思いだけで頭の中がいっぱいになる。

だが、そんな魔法少女の休む間を与えないと言わんばかりに、周りの男たちが群がってきた。

「待ってられないな。ほら、その可愛いお口で啜えてくれよ!」

横に立つ背広姿の男が、凛々奈の可愛らしくまとめられたポニーテールを掴んで振り向かせると、息を切らす口に自らの肉棒をねじ込んできた。

「むごおっ!! んむっ、じゆるっ、んちゅっ、うううっ」

むせるほど激しく喉奥を突かれ、口いっぱい独特の生臭さが広がる。

(舌がピリピリする……気持ち悪い、この味……嘘……お口まで汚されるなんて、そんなあ……)

喉の奥まで熱い肉棒で塞がれ、息苦しさに意識が遠のく。

必死に呼吸しようとする、吐き気を催す牡の臭いが鼻孔にまで広がり、乱暴な陵辱を受けているのだと否応なしに実感させられる。

耐えきれずに意識が遠のきかけていた凛々奈だが、前のめりになって軽く突き出す形になっていた尻房を乱暴に掴まれる感覚で我に返つた。

「待つてられねえからな! 俺はこっちで楽しませてもらうぜつ」

柄の悪い男の声とともに、掴み広げられたヒップの谷間に熱いものが押しつけられる。

『まさか』という不安が、凛々奈の意識を覚醒させた直後。

ミチイッ、グッポオオオオ!

「おおおっ、おおおっ!! おつ、おひりいっ、ひぐうっ、ひいい!」

侵入を拒むようにキュッと窄んでいた菊穴が、ヌルヌルの先走り汁に塗れた亀頭で乱暴にこじ開けられる。

そのまますすすすもなく腸内に怒張を押し込まれ、あまりの衝撃に目を見開いて絶叫してしまう。

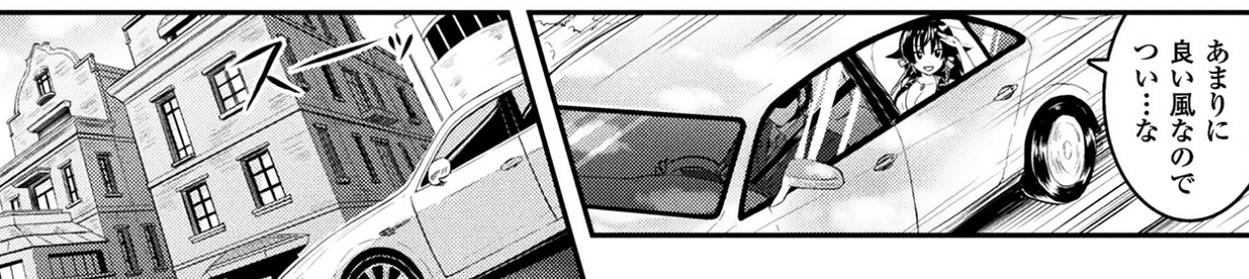
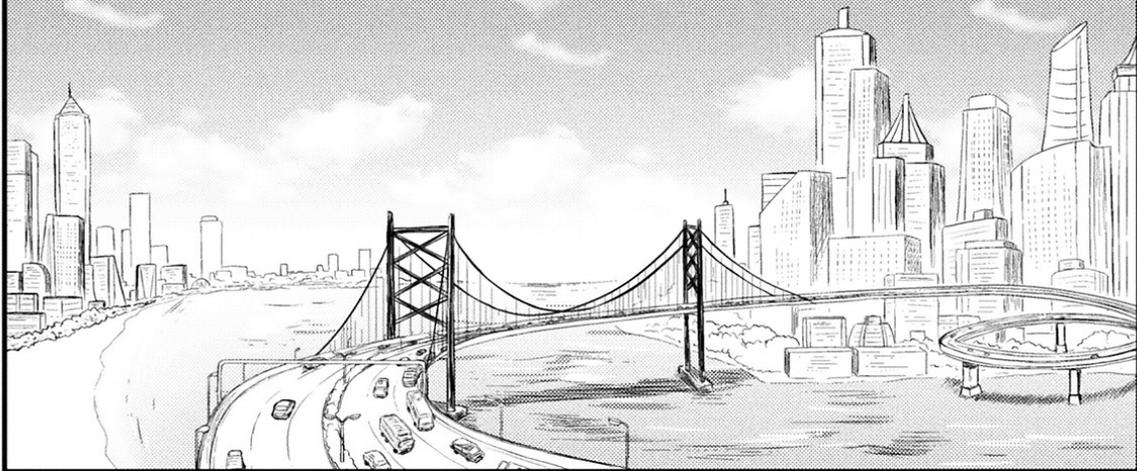
「くうっ、魔法少女のケツマンコ処女いただきだ! 最高にきついなっ」

「ははっ、無茶をするなあ。だが、マンコのほうもすすすす狭くなって、いい具合だよ。おおっ!」

そんな凛々奈を氣遣うこともなく、二穴を突き犯す男たちは満足そうに笑い、腰を振り続ける。

隔壁が両側から強く擦られ、今にもすり切れてしまいうだ。

硬く張った肉傘が壁面に食い込み、捲れて引つ張り出されていくような感覚に、息が詰まる。
(お尻なんて……き、汚いよ。それな



着きました

ふむ……

なかなか綺麗な
マンションじゃないか

呪詛喰らい師
常磐城咲妃の
復帰初戦に
ふさわしい！

コミックス

『Curse Eater 呪詛喰らい師』
4月27日発売！

小説
『新装版 呪詛喰らい師』
5月29日発売！

ニジマガに緊急出張!

む……

Curse Eater

呪詛喰らい師

#01 Priestess Came Back

原作
ORIGINAL

Rusty Soul

漫画
COMIC

あると
或十せねか

原案
DRAFT

蒼井村正



微かに
淫の気を
感じるが……

長らく実戦から
遠ざかっていたせいか
ハッキリとは掴めないな……



神伽の巫女の
任務に差し障らぬ
よう……

機関の方でも
入念に準備させて
いただきました



ご近所様への
挨拶の品も
バッチリ手配
済みですよ

ほう……

トラヤの先輩
とはなかなかな
イイセンスだな



ハイ

今日中には
なんとか...

サーセン...

ウッス!
終わるまで
ペンキ塗り
自粛...
了解ッス

ピンポーン



ハアア!?
マジかよ!!

こんな巨乳
見たこと
ねーぞ!?



誰だあ?
— ったく



うおおっ
何だこの美人っ!?

カッパ



やり...
てえ...



誘ってんのか
このスス...

食い込みキツイ
ズボンまで
履きやがって



オオオ...

ドキドキ



お？

ぐふっ



んくッ

…

ぐひひっ
チチ…モマセロ…

テ…テメエ
何して…

やぎやん!!

…これは!!



3
隷将軍
どれいしょうぐん
~ 反逆の代償 ~

「何故です帝よ、何故こんな!」

広々とした王の間に、手枷を嵌められた一人の女の糾弾の音が響き渡った。時は大陸歴212年。超大国である帝国カリストは、100年に渡る平穩を破り侵略戦争を開始した。

近隣諸国を武力で制圧し従属せぬ者は有象無象の区別なく処刑する。新帝を迎え一転して覇道に鞍替えした帝国に、諸国や民衆は恐怖した。

その暴虐に敢然と異を唱えた一人の将。それこそこの女、ルクスであった。「帝国のため尽くしてきた。誉れ高き将として戦ってきた。だが、もはや耐えられぬ。帝は何をお考えなのか!」

帝国きつての名うての闘将。剣を取らせれば一騎当千の強者。それがルクス・ベネトリクスという将軍であった。

しかしその容貌は無骨と称するには程遠い。長く眩いプラチナブロンド、日焼けを知らぬ白い肌、輝く翠の双眸に笹葉のごとき長い耳。エルフの末裔と思しき細面は武人としての気高さに満ち満ち、壁画の内より現れたような凛とした美貌を誇っていた。

身に纏うのは、鎧下となるレオタードに似た薄いインナー。拘束中であり鎧は着ておらず長いマントのみが身分を示す。21歳の若々しい姿はエルフらしからぬ豊満さを持ち、肉感的な胸と腰が居並ぶ兵士の視線を集めていた。

「帝に背く気? 愚かな選択だこと」
酷薄な笑みを浮かべるのは、新帝の隣に控える三十路中ほどの女である。

「エルザ。一将軍でありながらよくもぬけぬけと……貴様が帝をかどわかつたのだ、子供でも知っていることだ!」

そう、この女が現れてから歯車は狂い始めた。博愛主義者の先帝が突如病に倒れ、まだ若い二人の息子、兄弟が新帝として立った。その新帝も何故か全権をエルザに委ね、帝国は事実上この女の手の中にあつた。

これを陰謀と解せぬ者など一人としてはいはしない。人類の宿敵たる魔物と手を結んだことからも明白であつた。その謀略にただ一人翻意を示したのが、反逆罪で拘束されているルクスなのである。

「帝、どうか目をお覚ましく下さい! 御身は利用されているのです!」
「無駄よ。こいつはもう私の言葉しか聞こえないわ」

虚ろな表情で反応すらしな帝を見て、ルクスは歯噛みする。

「あなたまで裏切つたんだもの、罪は重いわよねえ。弟帝殿?」

「?! ヒュー!」
玉座の背後から一人の美少年が現れると、ルクスの顔に動揺が走つた。

弟帝ヒュー。先帝の二人の遺児の片割れ。16歳の若い少年であり、ルクスの元で剣を学ぶ弟子でもある存在。

それさえもエルザは人質に取つたのだと知つた。

怯えた様子の弟子を見て、ルクスは思わず叫んだ。
「ヒューには手を出すな、無関係だ!」

「分かつてるわ」とエルザは言つた。「一応は弟君だもの」とも。

「でもお前は違う。帝国に逆らつたんだもの。覚悟はできてるわよね?」

「……弱者を踏みにじるしか能のない蛮族め。後悔などあるものか」

ルクスは腕を閉じた。帝国軍法では反逆罪は斬首である。無念はあるが、かくなる上は潔くあろうと決めた。

「クク、勘違いしてない? 今じゃ私の言葉が帝のお言葉なのよ」
エルザが指を鳴らすと。灯明の届かぬ闇の奥から異形の怪物が数体現れた。

オーク。泥色の肌と見上げるほどの巨軀を持つ人外の者たちであつた。こんな連中を帝の御前に——ルクスは今一度エルザを睨みつける。

その視線を嘲笑うようにしてエルザは言つた。
「お前のことは調べたわ。帝国に来る前——奴隷だつたこともね」

その瞬間、ルクスの表情がたちまちにして青ざめた。

「驚いたわ。ハーフエルフだつたのよね。おかげで人間にもエルフにも捨てられ人買いに売られた。で、飼ひ主様は毎晩お前を——」

「黙れ! 言うな、その先は……!」
それは忌まわしい過去であつた。依り代のない自分は下卑た好事家に飼われ、ありとあらゆる調教を受けた。娼婦以下の扱いを数年に渡り経験した。

秘めておきたかつた過去を暴かれルクスは悔しさに頭を垂れる。エルザの

私兵の囁りの声が自尊心を切りつけた。「私もお前を飼つてやろうと思うの」
エルザの合図と共にオークらが下品に笑い近寄ってくる。

ルクスのはつとなつた瞬間には、連中の腕々が群がるように伸びてきた。

「な、なにをする貴様ら、離せつ、私を将軍と知つて——ああつ!」

手枷を嵌められた両手が片腕で軽々と宙吊りにされた。もがく間もなくさらに腕が伸び胸の鎧下が引き裂かれる。ぶるんと揺れまろび出たのは美しい腕型の豊かに膨らむ双乳である。白い肌には傷らしい傷はなく陶磁器のごとく滑らかであり、先端の桜色が浮かびあがるようにして淡く色づいていた。

オークらはその見事な豊乳を遠慮の呵責もなく握つて揉みしだく。

「無礼な、痛つ……貴様、らあ……!」
「あらあら乱暴なこと。やっぱりオークはこうでなきや」

暴れもがく女將軍にエルザは馬鹿にした声で告げる。

「といつても、お前もあつさり感じてゐるわね。やっぱり身体は素直じゃない」

「そんな、ことはつ、く、ああつ……!」
果たしてエルザの言う通りであつた。散々ばら調教を受けた身体は多少の痛みなどものともせず、むしろ苦痛の中にあつてさえ刺激を甘受しつゝあつた。

その証拠に乳首は徐々に硬化を始め、細く先端を尖らせてゆく。

その先端を口に含まれガリツと歯を立てられると、突然走つた甘痛い感覚

女九尾の柔膺は、昼夜の別なく
邪悪な魔羅に突かれ注がれ、
また突かれ

女妖狐の退魔録

白濁に溺れる椿

うせみ
小説 **空蝉**
NOVEL

挿絵 **つづきますみ**
ILLUSTRATION

見目は麗しき妙齡の美女。なれど腰まで伸びる金色に輝く髪と、そこよりピンと飛び出た狐耳が二つ。さらに着物の尻から覗く三本の尾が、人外であることをまざまざ知らしめる。

性別問わず惹きつける艶めかしくも真白な肉体が、荒く息継ぐたびに汗と甘い牝の体臭を放つてもいた。それを包む和服は、激闘のさなかにそこかしこ裂けちぎれ、帯もすでに無い。爪をかけて引くだけで脱がせそうな危うい有様が、余計に牡の劣欲を煽り立ててやまない。

「こりや。どこ見ておる」

相對する敵の視線と鼻息を咎める女妖狐の軽い口振りも、唇尖らせた愛嬌ある仕草も、重苦しい空気を変えようとしてのこと。けれど肩で息する様が、疲弊ぶりを嫌でも相手に伝えてしまう。艶めかしき女体の内、最も目を惹く丸く白い乳肌の上半分ほどが、着物からこぼれ出てもいるのだ。

（相手は、これまで桁外れの性欲に衝き動かされて数多の女を死ぬまで犯し続けてきた。こんななりでは奴を挑発しとるようなもんじゃ……）

危惧はすれども、乳や尻が露出するのを気にしては戦えない。

ならばせめて言葉で気を惹いて、体力気力回復のため、時間を稼ごうとも思ったが――。

「ふううっ、ふううううっ！ ぶち抜いてやる。俺、この魔羅で！ その旨そうな身体を串刺しにしてやるうう

うあああああつ！

人と呼ぶにはあまりに巨大で筋骨隆々の肉体に、馬の頭部を持つ鬼――賽の河原で獄卒を務める馬頭鬼の姿に酷似したそいつは、有り余る体力を駆使して、鼻息も荒く駆け迫ってくる。

ひと際猛らせた剥き出しの男性器がブルブル揺れる様が目に飛びこみ、女の本能からくる恐怖が身を凍ませた。「……ッ。妖狐の神通力で相当弱らせたというのに、それほどわしを抱きたいか？」

半ばやけくそ気味に嫌味を放ち、地に縫いつけられたように動きの鈍い脚を叱咤する。その、ほんの数秒の間に、七尺五寸の巨軀が再び間を詰める。

「くあ……！」

低い姿勢で体当たりしてきた馬頭鬼の肩に跳ね飛ばされ、宙を舞ってから地に転げた細身が、勢いそのままに二転三転。廃寺の境内に立つ樺の木に背が当たったことでようやく止まり、天を仰いだ時には、眼前に馬面の鼻息が吹きかかっていた。

「おおおおお女あああつ！」

はだけた着物よりこぼれた双つの薄桃色の乳頭と、手に余る大きさの白い丸みに目を奪われた馬頭鬼の、血潮滾らせ屹立した男根が突きつけられた瞬間。

「……哀れな男じゃ」

恐怖でなく、怒りや嫌悪でもなく、真つ先にその言葉が滑り出た。

「わしの名は椿。ぬしを眠らせに来た」現れるなり憐みの目を向けてきた高慢な女妖狐を力づくでねじ伏せ、犯す――戦いの間抱き続け、勃起の活力としてきた、それがいよいよ現実のものとなるのだ。

歓喜に震える馬頭鬼の馬並みの逸物が、へそに張りつく勢いで天を突く。幾つも血管の浮いた幹が脈打つたび、喜々と滾ったエラ張り亀頭から先走りの露が滴り落ち、獣臭い体臭もひと際濃くなった。

「人であつた頃、不貞を働いた妻と間男に殺められたお前が、賽の河原で見た獄卒に擬態して蘇り、見境なく女を犯す鬼と化した。因果とはいえ……哀れな、話じゃな」

どこで調べてきたのか、忘れたくても忘れられぬ屈辱の過去を口にした拳句に、「強制的に退治はしたくない、自ら成仏してくれぬか」などと大上段からのたまつた「女」。

（俺を裏切り、捨てたあいつと同じ、女の分際で！）

もう顔も思い出せぬ大昔、人であつた頃共に生きた伴侶とだぶらせることで、怒りは際限なく増す。その怒りが情欲の焰に油を注ぎ。

転がる間に前をはだける格好となつた女妖狐の足首を左右の手で掴んで大股開きにし、まだ濡れてもいない女陰にまつしぐら、逸物の切っ先を押し当てる。

「ば、馬鹿。塗りつけるでない……やあつ……ああつ……」

覆う物を失つた女陰に先走り汁が摺りこまれる形となり、女が思わず甘い声音をこぼした。

（濡らしてやる手間をかけてもらえらなくても思っているのか。馬鹿が）

思わぬ摩擦刺激を浴びて、平素よりも甲高い声を出してしまつたことを恥じているのか。きゅつと唇結んで、白い裸身を震わせている姿に、否応なく嗜虐心が掻き立てられる。

嫁と間男に殺された己の骸が埋められていた、この樺の木の下で、その木と同じ名の女を犯す。因縁めいたものを感じて、なお胸と股間が昂る。

（高慢な女狐め。これまでの女のように、無様にヒイヒイ鳴かせてやるぞ）

脳裏に間男に組み敷かれて喘ぐ嫁の姿がよぎつたが、いつものごとくその顔だけがどうしても思いだせない。ただ、卑しくも艶やかなその容貌、夫である自分が終ぞさせられなかつた表情を浮かべていたという事実だけは覚えていた。

「この魔羅はな、どんな堅い女でも意地汚く欲しがるようになる代物だ」

これは、すでに数多の女を罵り尽くした経験を踏まえての結論だ。

忌まわしきあの晩、妻が間男の前でそうしたように、

「あまり女をつ、あ、んっ、馬鹿にするでな、いつ、ン……ない、ぞっ」忌むべき馬頭鬼にいつ犯されるとも

しれぬ状況で、悔しそうに眉をたわめてはいても、割れ目とその上端に咲く陰核を亀頭に抜かれては甘い声を漏らすにはおれぬ、眼前の女狐然り。

「今まで犯し殺した女どもの中にも似たようなこと吹いてた奴がいたっけなアア」

「そいつも終いにはもう殺してと乞いながら逸物をねだっていた。命尽きる瞬間まで腰振りをやめない色惚けになり果てたのだ。」

「身体にじかに教えてやるよお！」
肉棒と同等以上に滾る暗い感情をぶつけるように、腰を押し出し、同時に掴み通しの女狐の両脚を手前に引き寄せる。

「そうして勢いを二乗させ、からからに乾いた女陰を、ヌルつく亀頭で力任せに割り裂いてゆく。」

「ぎぢっずぶぶうううううっ！」
「いぎっ!? ああああああッ!!」

細腰の体積の半分ほどもある逸物を突きこまれ、女妖狐がまさかいきなり挿入されるとは思ってもみなかったとでも言うように目を白黒させる。

そして腹の底から絞り出した、濁った叫びを聞かせてくれる。

傑作だ。

「アイツにも、こうしてやりたかったんだよ、俺を殺したアイツにもオ！」

「ごずっ！」

止めどもなく進る先走り汁を撒き散らしながら膣内を直進し、一気に最奥へ到達、そこを力任せに打ち叩く。

(賽の河原で見た馬面の鬼。奴の股にぶら下がってたのと同じくれえの魔羅が、俺にもありやあ……殺されやしなかつたんだ……!)

人としての死の際に抱いた無念と屈辱。あの世との境に広がる河原で目にした馬頭鬼の肉体への憧れと妬み。妻を牝に変えた間男への恨みと嫉み。そのいづれもが、滾り続ける情欲を底支えする。

「いひイイツ！」

折しも、牡の独りよがりな考えを肯定するように眼前の女妖狐が、先の高慢さのかけらもなく鳴く。悲痛な響きを発した直後、悔しげに震える唇を噛み締め。たわむ眉根の下でひとりでに滲んだ涙を、睨めることでひた隠し。

痛みで震えた膣肉がギチッと締まり、余計に強い痛みを受け止める。

「女つてのあ、結局そういうもんなんだ。魔羅ぶちこまれりや、喘ぐしかねえ、従う以外にできやしねえ！」

俺の妻がそうだったように——と続きかけた言葉を既のところで喉奥へ唾ごと飲み戻す。

(糞ギツネが、思い出したくもねえこと考えちまうのもてめえのせいだ!)

「ぎゅむううううっ！」

「いあああああッ！」
力任せに、根元から絞るように女狐の乳房を握り締める。先の戦闘で苦しめられた神通力が作用してでもいるのか、細身の女体の中でも際立つ大きさ

と弾力を備える膨らみは、人外の膣力

に締め潰されてもちぎれ飛ぶことはなく。また、痛みで反射して膣の引き締めが強まった。

「つうう、ば……ば、かものおつ、女の胸はっ、子に乳を与えるための大事な部位なんじゃぞっ……うううっ」

その上で、妙齡の美貌に似つかわしくない涙声での詰問だ。

「……ハハ。本当に傑作だぜ。てめえはよっ!!」

どこぞに同類でもいて、そいつと子を成すつもりでもあるのか。

(化け狐が一丁前に人間気取りの御託並べたてやがって)

何よりもまだ上から目線の女狐の態度に、久方ぶりに腹の底から笑った。

とことん嗜虐心を煽ってくれる女狐の肉体は、どれだけ乱暴に扱っても壊れることがない。

「ヒヒヒ、ハハハハハッ! いいぞお、ああ……最高の玩具じゃあねえか!」

おまけにもうじき、アレの効能が現れる頃合でもあるのだから、笑いが止まらない。

「ず、るるるうううっ……」

「んひっ!? やっ、どう、しつてっえええっ、ひ! んああアア……ッ!」

試すように腰を引けば、逸物と膣壁の摩擦に女体が打ち震える。逸らした願より喜悅の声を進らせ、喜々として引き撃れた膣肉が愛蜜を、上気した桜色の肌を汗をどっと噴き出した。

「この魔羅の先走り搾りこまれた女は、色狂いになる。心に決めた相手か

居ようが関係ねえ。俺の魔羅でなきゃあ満足させられねえんだからなア」

「こ、姑息なっ……くっ、うう、あああ……な、んじゃ……身体が、あ熱い、焼けるように……熱いっ!」

「身体、つうか股座の奥がだるおが。魔羅が欲しくて堪らねえんだよなア!」

煽る言葉を浴びせると、また悔し涙の滲んだ眼で睨んでくる。

(そうだ、その眼だ。もつと身体に教えこんでやらねえとなつて気にさせる、苛立たしくつて堪らねえその眼!)

一方で先の煽りを肯定するがごとく、逸物をくわえて離さない膣内で真新しい、温蜜汁が溢れる。

「んぐうっ!? な、中で魔羅が膨らんでっ、嫌じゃ、感じとうない……ふあああ、嫌あああああッ!」

蜜でとろとろになった膣肉の締めつけに反応して膨らみ、脈動する逸物。外敵であるそれを喜々として受け止め、腰をくねらせ続けずにはいられない。

どこまでも「女」を体現し続ける狐が性欲をそそるほど、同時に「女」という性そのものへの憎悪が募る。

「おら! そんななまつちよるい腰遣いで種汁搾り取れると思つてんのか!」

「がりっ!」

今も女の右乳房を根元から絞る手に再度力をこめ、それによって一層しこり勃つた右乳頭に歯を立てた。

「ひいあつ! あひやああつ、ひやめつ、しよれつ、ひやめへえええつ!」
感度が高まりすぎた身を持って余し、



とある地方の
造成地

世にも奇妙な
艶物語が幕をあげる

昭和後期

深塊の贖身

いんがいのがんしん

前編

漫画 COMIC ひぐちいさみ

ああつ!!
い…嫌ア……!!

んっ…!!
んあっ…
はあっ!!

ちんぽ、ちんぽ、ちんぽ

イウウ…!!

また
イッちやう
じつじつ!!

ちんぽ

ちんぽ

ちんぽ



イェウ...!!
あついのつぽろ...
イェウイェウイェウ!!!



ジャン...!!



おあおあ!!
おあおあ!!
おあおあ!!



お願い…
ゆ…許してエ
……

ああ…
も…もうイク
のは嫌ア…



いやあ!!



あつ…ひびく!!

ああ…な何…!!
おながが…!!
私のおなか!!
あつ…あああ!!



おめめめめめ!!



私は県立S学園2年関谷乃愛
どこにでもいる地味な
ごく普通の女の子です…

部活は歴史に興味があり
考古学研究部に
所属しています

数日間行方不明だった
友人が突然帰って来た

彼女は川瀬和奏
私と同じ
考古学研究部に
所属しています

帰って来てからの
彼女の様子が変なのです
…えらく無表情で
言葉少なになったと
いうか…



周りの友達はショックの
せいでと言ったけど
私には何か別の理由が
あるように感じるの
です…

思い当たる事が
ありました—

ほう！
乃愛！早く
来なさいよ！

連日の大雨の後学園裏山の
造成工事中の斜面が崩れ
そこから祠が見つかりました
大雨の際数人の工事関係者が
行方不明になっていた為



やっぱり
危ないよ
よそうよ…

何言ってるのよ
あんたそれでも
考古学研究部員なの？

辺り一帯は立ち入り禁止でした
でもどうしても祠を見たいという
和奏に強引に誘われ
私も付いていく事になりました



人々を守る愛と希望の戦士は
因縁のある悪魔に捕らわれ

クリスタルプリンセス

愛結晶姫リン

Crystal Princess Rin

ほむらりゅう

小説
NOVEL

火村龍

あおぐう

挿絵
ILLUSTRATION

阿呆宮



石造りの地下室には、天蓋つきのベッドが部屋の半分を占めてしつらえてあった。これはただのベッドではなかった。生きているのだ。暗い紫色をしたマットレスが悪魔ミリスの分身なのだ。彼女の影から生み出され、彼女と感覚を共有し、彼女の思うまま、ここに寝た者を拘束したり、責めたりできるのだ。

愛結晶姫リンはこのベッドに寝かされてしまった。仰向けに寝かされ、手袋の腕とブーツの脚を吞まれて、動きを封じられてしまった。

逃げ遅れた人を庇い、悪魔の攻撃を受け捕まったのだ。リンは人間を愛していた。人間の愛と希望に強く惹かれていた。その愛と希望を否定し、奪おうとする悪魔に反発して、人間を守るために戦っていた。

捕まってから三日が経つ。ここは街の近くの森に隠されたミリスのアジトのひとつで、リンがいるのはミリス専用の調教部屋だった。

リンは美しい少女だった。大人びた顔立ち、長く真っ直ぐな桃色の髪、髪よりも深い桃色の瞳。顔と同じように身体も成熟している。胸も尻も大きく、張りがある。その肉つきのよい身体に、愛結晶姫のコスチュームを纏っている。コスチュームは白い。白いドレスの下に白いレオタードを着、二の腕まである白い手袋に膝下までの白いロングブーツをはき、白いリボンで髪の一部を結んで、愛結晶姫の力の源であるク

リスタルのはじめこまれたティアアラをつけている。

リンは全身に汗をかいていた。コスチュームに汗の染みができていた。本来それはありえないはずだ。愛結晶姫のコスチュームは汚れを清めるはずなのだ。

すべてはこの部屋のせいだった。部屋は燭台の蠟燭に照らされているのだが、この蠟燭の一本一本が凄まじい熱と匂いを発して、三日三晩燃え尽きることなくリンを苛んだ。熱にも匂いにもミリスの力がこめられていた。肉体を狂わせる毒だ。はじめ、コスチュームはリンを守った。熱を寄せつけず、匂いを抑え、脱出しようとするリンに力を与えた。だがやがて限界がきた。一日ほど前から力のほとんどが失われてしまった。リンの身体は熱と匂いによつて手脚の先まで敏感にされ、ほんのわずかな刺激でもおそろしい衝撃が走るように変えられてしまった。

その手脚をミリスの分身は揉んだ。手袋とブーツの上からねつとりと揉んだ。刺激は手脚を這いあがる。愛結晶姫のエナジが溜まった乳房と子宮からエナジの溶けた汁が漏れそうになる。リンはエナジを漏らすまいとした。唇を噛みしめ、声をだすのも堪えた。我慢するほど汗がでてスーツが蒸れる。手袋とブーツはさらに。素足にはいたブーツなどは、脚が濃厚な脂にまみれたかのようにどろどろに蒸れ、揉まれるたびにぐちぐちと恥辱的

な音を立てた。

こうして三日が過ぎ、ついにエナジはスーツの中に漏れ出してしまった。汗よりも濃い汁がじわじわとコスチュームに染みて、白い布地にリンの肌を透かした。

ミリスは四日目に現れた。

彼女はリンよりも小柄で、ウエーブのかかった銀色の髪を黒いリボンで結つてツインテールにしていた。リンより小柄であるが、リンと同じように胸や尻は十分にでており、身体のラインを際立たせるびつちりとした黒いハイレグのスーツを着て、二の腕まである黒い手袋、太ももまである黒いハイヒールのサイハイブーツをはいていた。

ミリスはリンを見つめた。その瞳は赤く、瞳孔は蛇のように縦に長い。その視線は傲慢だった。支配することに慣れていた。

「やつと捕まえたわ」

と、ミリスは昂奮を抑えた声で言った。

「半年も……奴隷のくせに、わたしに刃向かうなんて」

ミリスはリンの足の側からベッドに乗ると、膝立ちでにじり寄ってきた。

リンはミリスを睨んで、

「ミリス……うう、ち、力がでない」

「さすがの愛結晶姫のスーツも力を失っているようね。いい格好だわ」

「ち、ちかづかないでください！」

「口のきき方がなっていないわね。それ

がご主人様に対する態度？ あの愚図どもに虐められていたのはだれ？ わたしが拾ってあげなければ、あなたはとつくに死んでいた。その恩を仇で返すつもり？ さあ、そのティアアラを渡しなさい」

「絶対に渡しません！ これは人間の愛の結晶……それを悪いことに使おうなんてまちがっています。あなたにも聞こえるはずですよ。結晶の音が、愛の音が！」

「聞こえるわ。奪われる者の声、弱者の音が。結晶だけじゃない。この衣もわたしのもの——」

ミリスはリンの脚の間に入り、彼女の乳房をつかんだ。

「ああうっ!!」

「触られるだけで辛いね。いいの？ 愛のスーツに勃起乳首がくつきり」

「言わないで！ はああつ、そんな、くりくりしちやだめです！」

「おっぱいからエナジが漏れてるわよ。こんな簡単に発情するような牝に結晶を使われていると知ったら、人間はどう思うかしらね」

「ああ、ああっ！ だめ、でちゃだめです、ううっ、エナジがあ！」

乳房を揉まれ、乳首をつねられて、リンはたまらず腰をくねらせた。触れられずともエナジを漏らしていた乳房がつかねられて耐えられるはずもなく、乳首からエナジの溶けた母乳が漏れてしまう。乳首の快感は子宮にも響いた。膣が熱くなり、陰唇が開いて、レ

鎮座の魔王女

魔王の娘

あまとうき
小説 **天戸祐輝**
NOVEL

挿絵 **ササマシ**
ILLUSTRATION



小生意気な魔界の王女が
秩序を乱す悪い魔物におしおき!

破壊と略奪による支配。

混沌と無秩序こそが魔界のルール。そんな魔界を現魔王が統治して以来、争いが絶えない日はない。

それは小さいものではない。大きなものでは反乱なんてものまである。そして、今日は大きな争いの日だ。

「くそ、たかが小娘一匹に……」

反乱の首謀者、魔王に成り代わろうとした大柄なミノタウロスが、恨めしそうに雷雲の空を見上げた。

「お父さまにとつて代わろうとして、癖に、こゝろんなに弱いなんて」

両肩を露わにしたゴスロリの赤いミニスカートワンピースに、黒いオーバーニーストッキングにパンプス。

所々に赤い薔薇が施されたチョーカーやブレスレットを身に着けた少女が、口元に手を当てて笑った。

宙に浮いたその少女は見た目十代半ばという感じだが、この魔界では見た目の年齢が実年齢とはかぎらない。

現に、丸みを帯びた顔に目尻がスツと上がった丸い緑瞳の少女は、百年以上前から父に成り代わって騒乱を鎮圧している魔王女だ。

「その大きさのミノタウロスなら九百才つとところかしら？ そんなおじさんがたかが百四十才のわたしに負けちゃった気分はどう？」

「なにを言う、まだ勝負が決まったわけではないぞ小娘」

「あははっ、まだ自分が負けたことに気付かないなんて、牛さんの頭は本当

に悪いみたいね」

魔王女が長い金髪を靡かせ、側頭部の角を微光させながら天に掲げた掌に魔力を凝縮させる。

「魔界の女王、ディアアー・グレッドドラゴンの名において地に伏し倒れよ、ダークネスプロミネンスレイン！」

叫んだ刹那、小さな掌から魔力が柱のように天に登り、獄炎の雨となって反乱者たちに降り注いだ。

「グウオオオオオッ！」

ミノタウロスが身を屈めてディアアーの攻撃に耐えるが、他の魔族たちはそうはいかない。

降り注ぐ魔力の爆発に吹き飛ばされ、次々と倒れて呻く。

「クス、これでお終いなのか？」

「この小娘、俺の下に組み敷いて肉便器にしてやる」

「いやらしいっ、下から見上げてたのはわたしのパンツで興奮するため？」

ゴスロリワンピースのスカートを押さえ、覗かれていたピンクのショーツを隠した。

「まあいいわ、最後に良い物を見られたでしょう、ならもう死んで」

とどめを刺そうと、ディアアーは魔力を槍の状態に形成しはじめた。

「残り少ない魔力で俺にとどめか？」

「そう、これでぶっ刺してあげるわ」

「なにこれ？」

ただの小物にしか見えない十字架、しかしそれがディアアーに届いた瞬間。「盟約に基づき、穢れた魔王の娘は牡の性欲を満たす存在になるがよい」

「きやうううう……っ!!」

魔とは正反対の存在の音が響き、十字架から発した聖なる光がディアアーの身体を十字に拘束した。

魔王女は電気を流されたような痛痺れに悲鳴をあげ、生贄のようにミノタウロスの前に墜落し立たされた。

「こ、これは天使の力……」

「ああ、俺が魔王になつたら魔界の半分をくれてやる盟約で力を貸した」

「魔族が天使と結託するなんて、でもこんな拘束わたしの魔力で……」

ディアアーが力を入れた途端、光の十字拘束にヒビが入っていく。

「甘い小娘」

「え？ きゃあああああつ！」

あと少しで天使の拘束が解けると思った瞬間、地面から半透明なスライムが滲み出して身体に絡まってきた。

「な、なにこれ……、スライム!!」

「戦闘経験不足だな、戦いは力だけではいんだよ」

身体中をスライムに撫でられ、ジュワジュワと服を溶かされていくディアアーの胸にミノタウロスが触れてくる。

「さわるなっ」

「俺にピッタリのおっぱいだ」

「んうううっ」

赤いゴスロリワンピースの胸元が溶

け、ピンクのコレットブラ越しにスイカのような乳房が揉まれる。

「やめ……はあうっ、な、なに？ おっぱいがジンジンして……」

「忘れたか？ 天使に淫の罰を受けたことを、じゆる」

「淫の罰つて……はあうううっ！」

コレットカップがずらされ、露わになった巨乳に舌が這わされた。

大きくてごつい手が乳房を揉み、長い牛舌が薄ピンクの乳首を舐めるたびに背筋がゾクゾクする。

「はああ……、おっぱいのジンジンが身体に広がってきて……はうっ、やめ、そんなところに……ああっ」

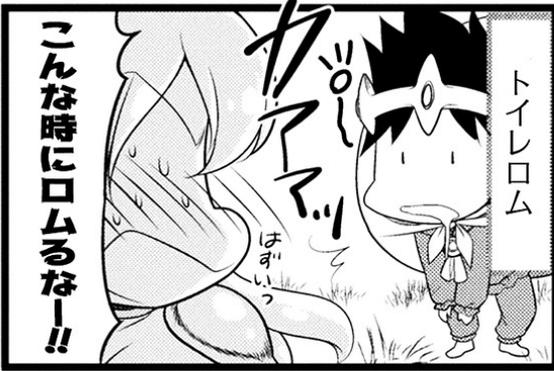
ニーストッキングに溶け穴を作ったスライムが太ももを撫で、ピンク色のショーツ越しにお尻に触れてきた。

手とは違って丸く広がるスライムはお尻全体を撫で、微妙に硬さを変えながら割れ目を擦ってくる。

「んう、あつ、んひっ！ そんなところを……ふああつ、ダメ……」

「スライムに嬲られて感じてるのか？ さすが淫魔に墮ちた牝女王だ」

妙に恥ずかしい間



凸凹コンビによる
人気シリーズ最終回は
特集にちなんだ
怒涛の展開に!

ツインレ☆クエスト

Vol.7

迷宮へようこそ……最後の戦い!?

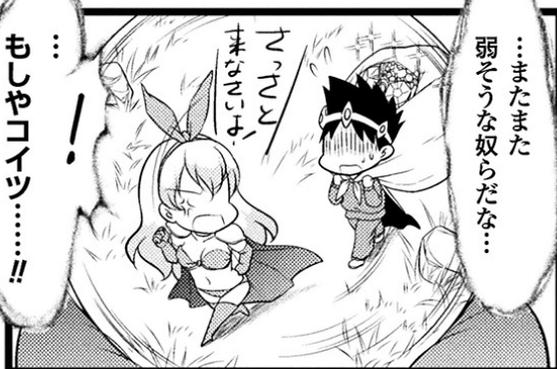
漫画
COMIC

かのう
嘉納あいら

まだ持ってました



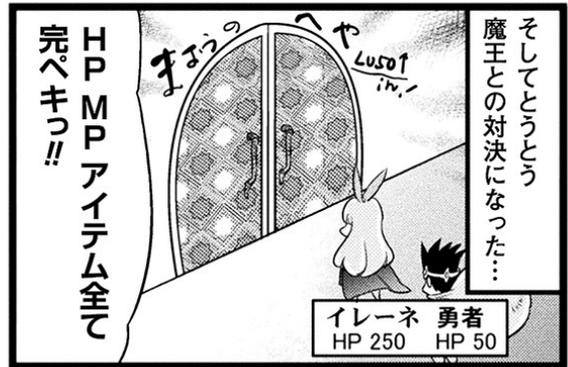
魔王…!?



ガード不可



何かがおかしい……



コラー!!

いきなり大ピンチ!

おれたちも
同業だ

弱っちいくせに
ギヤーギヤー
うるさい
女戦士さんよ

返答次第じゃ
ひどい目に
あわせるわよ!

傭兵募集って言うから
せっかく来てあげたのに
これはどーいうコトなのよ!?

おれたちのナワバリで
こんなチラシまいて
アコギな商売されちゃ
困るんだよな

~~見習い傭兵~~ サマ

う…

別に私の
勝手でしょ!

『姉友さセックス』
好評発売中!

漫画 FGT
COMIC





お前ほど弱いヤツは初めてだ

キョー



いいわ

最近はお前みたいな三流が仕事欲しさに流れてきては勝手気ままにしゃがる

4人まとめて相手してあげる!

ここでそういうヤツらを見かけたら片付けてやってるんだが



ちよっ...!?

まだまだ私はこれからが成長期よ!

フン

たじろ

Handwritten signature



オ…ン…
ナア…

!?

なかなか
いい眺めだな

ん…

く…
う…
う…

これ以上成長して
牝牛にでもなる
つもりか?

たぶ



へっへっへっ
そうだな

最近は若い女の
道中護衛もなくて
つまみ食いもできて
ないからな

アンタたち
絶対にゆ…

親分女なんて
久しぶりですねえ

うほ!!

せつ

ムル

弄んで
売っばらっても
全部モンスター
のせいにしちまえば
いいし

楽な商売だったん
だけどなあ!

そんなことより
親分
早く早く!

わかってるよ!
ネエちゃんそんなに
ニラむなよ
すぐ良くなるからよ

むうっ?
!!!

ニヤ

ニヤ

ニヤ





くそっ!!

全くだ

よし
その口でヌイて
もらおうか

町娘たちは
こんな顔しねえ
もんな!

ひひ:
いい顔するなあ
あんた

いっ...
いやよっ!

ぐっ...

むうっ!!

むぐ

おいおい
迂闊なことして
噛みつかれるん
じゃねえぞ!

ひひ:
さっき仕込んでおいた
クスリがまわってくる
ころですよ
ほらくわえろ

魔剣士 リネ

乙女穢されし戦場

【第13話】崩壊の序曲

原作 / まくらカバースフト

小説 / 酒井仁

挿絵 / 桐島サトシ

物語はクワイマックウスへ!!
策謀によって滑落した魔族軍
希望なき宮殿にて少女武将たちが魔族の手に落ちていく

電子ノベルズ第1巻～第2巻
各電子書籍サイトにて
好評発売中!



將軍アレスという、唯一自分の地位を脅かす存在を駆逐したバロックは、祝杯をあげていた。傍らに寵姫はおらず、側近ヘルメスのみ。

「これほどうまくいくとはな。これでワシの治世も安泰というわけよ」

「その通りでございます」

アレス將軍に謀反を起こしたという濡れ衣を着せて逆賊とする。その筋書きを立案し、バロックに実行させたのは無論ヘルメスである。

「まあ、あ奴を処刑できなかつたのは残念だが……二度も君主を裏切つた將軍に、ついていく者などおるまい」

「もちろんです。ハイランド、いやこの世界のすべてはバロック聖王陛下のものでございますゆえ」

満足りて果実酒を煽るバロックは、目の前の執事がどんな目つきで自分を見ているのか、気付いてもない。

そこにあるのは殺意ですらない。ただ見苦しく愚かな下等生物を高めから嘲笑う目つきである。

「どうかあとのことはお任せを」

「うむむ、よきにはからうがよい」

「はい……無能なる王にはこの辺で退場していただきましょう」

この世のすべての権力、領土、美姫を手に入れ、まさに頂点に上り詰めた男は、強い衝撃に目を見張り、己の胸を呆然と見下ろした。

「……………」

分厚い胸板をまるで薄紙のように貫

いていたのは、忠実なる側近の右手であつた。がぼつ、と口から噴き出した血反吐がガウンの襟元を穢すのを、バロックは呆然と見つめる。

「あなたの役割は既に終了致しました。どうぞ、あとはその肉体を、私めにお譲りいただければ幸いです」

バロックの顔が苦悶に歪む。

断末魔の苦痛を堪能するように、ヘルメスは舌舐めずりをした。

まったく、人間というのは度し難いほど愚かだ。自分がいかに能なしで好色で視野の狭い、ただのろくでなしであつたか。その事実を突きつけられたときのバロックの驚愕と絶望は、この上なく甘美な味わいだつた。

「うげ……ごば、が、あ……………」

即死することも許されぬまま、バロックは気の狂いそうな苦痛の中でのたうち回り、そうしてようやく死の救済を得ることができた。

ずる……ずる……2メートル近くも伸びたヘルメスの右手が不気味にうねつたかと思うと、ヘルメスの身体が変形した。

ぐねぐねと不定形になつたかと思うと、ヘルメスであつた肉はバロックの胸の傷からずると入りこんでいったのだ。血反吐も綺麗に拭い去られ、たつたいま絶命したはずのバロックの目が不気味に輝く。

その目は好色王のそれではなく、悪意と邪悪に満ちている。

哀れバロックは、ヘルメスにその肉

体を篡奪されたのだつた。バロック、いやバロックに憑依したヘルメスは、どかりと玉座に腰を下ろす。その一部始終を物陰からじつと見つめている目があつた。

「……クロエカ」

兄が目の前で惨殺され、魔物に肉体を奪われたというのに、女騎士の瞳はガラス玉のように意志の光がない。

ヘルメスが手招きをすると、女騎士は無言で近づいてヘルメスの前で膝を折つた。そして従順な奴隷のごとくにその手の甲に口づけをする。

「我が君、魔皇子ヘルメスさま……」

それから一週間ほどが経つた。リーネたちとて、アレスの謀反に納得していたわけではなかつた。しかしベアトリスは出産直後、リーネとシンシアもいつ陣痛が始まるかもしれない状況である。

ウオードたちからもアレスへの処遇に疑問の声があつたが、バロック本人の「アレスが謀反を起こした」という主張の前では、自由に動くこともできなかつたのだつた。

それに、もう一つ……。

「聖王陛下は、少し変わられたか？」

ウオードが首を傾げるほどに、バロックは以前のように子作りを優先するのではなく、それなりに政務の書類に目を通すようになった。

それはまるで人が違つたような変貌ぶりだつたが、そのこと自体に不満を

漏らす理由はない。

ましてや、その肉体が既に魔皇子ヘルメスに乗つ取られているなどと、誰が思えただろうか。

「みなさま兄君さまのこと、どうか盛り立ててくださいませ」

他ならぬバロックの実妹クロエにそう言われれば、どうしようもない。家臣たちは心中でアレスのことを案じつつも、ヒツピアとの戦後処理や対策に追われるしかなかつたのだつた。

そんなときであつた。ヒツピア帝国皇帝アクラムを倒し、最後の魔武具を手に入れたセリアとエルヴィンが、ダイヤモンドシティに帰還したのだ。

「そんな、アレスさんがそんなことをするはずありません！」

アレスがバロックを謀殺しようとして失敗、大罪人として国を追われたと知つて、セリアは驚き激怒した。

「ああ、当然だよセリア。聖王陛下はグスタフ王とは違う。なにか行き違ひがあつたに違ひない、すぐに抗議を」

「行つてはなりません」

「マ、マルティナさま！」

それは、後宮メイドに身をやつしてゐる元聖王ルートヴィッヒの妻、マルティナであつた。

「あなたたちには、アレス將軍と共謀していた疑ひがあるとして、後宮では黄金の騎士団が待ち構えています。さあ、こつちへ——」

ルートヴィッヒ亡き後、後宮メイド

に専念していたはずの未亡人は、別人のようにきびきびした口調でエルヴィンとセリアを王城外に導いたのだ。

その威厳はまさに元聖王の妻といった風情で、セリアはもちろんエルヴィンでさえごく自然に「さま付け」で呼んでしまうほどであった。

「お二人とも、聖稜ホーリーヒルはご存じですね。聖王の身の証を示す『王の石版』のことも」

聖稜ホーリーヒルは、後継者が真なる聖王となるため『王の石版』の前で儀式を行う聖なる場所。そしてルートヴィヒが暗殺された場所でもある。

「王の石版……何があつたのですか、マルティナさま」

「王の石版は聖王が身罷られ、その資格が次代の聖王に受け継がれると、そこに記された聖王の紋章が変化するので。もちろんルートヴィヒさまの次はパロックさまの紋章でした……つい、先日までは」

城外に急ぎながら語るマルティナの言葉に、エルヴィンは息を呑んだ。

「えっと、どういうことなんですか？」
「つまりねセリア。石版の紋章はいま現在『存命の』聖王の紋章しか示さない。石版の紋章が変わつたということは、つまり」

「そう……パロックさまはもう生きてはおられぬということですよ」

ようやく事の重大さに気付いたセリアも、顔色を失う。なら、いまま政務に就いているパロックは、いったい何

者だというのだろう。

「一刻の猶予もありません。この王都にはおぞましい存在が巣くつています。あなた方には急ぎしていただきたいことがあります」

そうしてマルティナはエルヴィンにある場所に赴いて欲しいこと、そしてセリアにはアレスの後を追いつ、最後の聖武具を渡すよう告げたのだ。

「マルティナさま、あなたもお逃げください」

「いえ……私にはまだすることがあるのです。お二人ともお気をつけて」

なんとということだろう。

ようやくヒッピー帝国の脅威が去つたというのに、なぜ誰よりも尽力したアレスが裏切り者の汚名を着せられねばならないのか。

リリーネたちはいったい何をしているのか。疑問は尽きなかったが、セリアたちには時間がなかった。

セリアとエルヴィンは直ちにマルティナの指示どおりに王都を出奔した。逃亡中であるアレスの行方ははっきりしないが、狩人であるセリアは黄金の騎士団に先んじる自信があった。

(アレスさん、すぐにこの聖武具をお届けにあがります、それまでご無事で)

その夜。パロックの寢室を訪れたのは、マルティナであった。

「マルティナではないか。こんな夜更けにどうしたのだ」

寡婦であるマルティナは、パロック

にとつては興味の外。パロックがマルティナを寢室に呼んだことはない。

それゆえなのか、マルティナが「後宮メイドを辞め、暇をもらいたい」と言い出したときもそれを快諾した。

「既にベアトリスさまは聖王陛下のお世継ぎを出産、リリーネさま方も出産間近。もはや私の為すべきことはほとんど残されていないかと」

「ほう——やはり家族との思い出の残るブルデイ島に帰るのかな」

そう言つてパロックは、そつげなく背を向け、書類仕事に戻る。

ここで亡き夫と息子のことを持ち出してくるとは、いかに聖王といえど礼を失した発言。しかしマルティナは眉一つ動かさない。

「私先日、聖稜に赴いて、『王の石版』を確認してまいりました」

その言葉に、パロック、いやパロックに憑依したヘルメスは沈黙した。

ルートヴィヒが王の石版の前で聖王となる儀式を行ったことは、義勇軍の者なら知つている。ルートヴィヒはカシムに暗殺され、パロックは命惜しさにリリーネたちを連れてさつさと逃亡してしまつたのだ。

ヘルメスはそのどさくさにまぎれ、パロックの側近を殺害し、側近とすり変わった——つまり、ヘルメスは王の石版の存在を「知らなかつた」。

「ほう……それで？」

「王の石版に現れる紋章は、聖王の崩御に伴い、次代の聖王の紋章に変化致

します。当然、パロック陛下もこのことは知つておられると」

「……無論だ」

室内の空気が、一気に冷え込んだ。「では……どうしてパロック陛下の紋章が、新たな紋章に変わつてしまつたのでしょうか」

「パロックさまに隠し子がいるらしいということとは、騎士クロエより聞き及んでおりました。いま石版に現れているのは、おそらくその御隠し子のも……つまり！ パロックさまは既に命を落としておられるということなのですわ!!」

「ぐっ？」

不意を突かれたパロックの脇腹に、銀の短剣が深々と突き立つていた。しかも、そこから溢れるのは鮮血ではなく煙のような黒々とした魔力。

銀は魔を退けこれを滅する。女の細腕とはいえ、銀器の一撃にパロック——ヘルメスは顔を歪めた。

「私とて元聖王の妻、マナの気配くらいは感じ取れます。パロックさまが聖王となられて以来、この国には絶えず邪悪な気配が感じられた。だから私は敢えて後宮メイドとなり、その正体を探つていたので……あなたはパロックさまではない、いったい何者です！」

そう、「ノー着衣デー」だのアレスを誘惑したりだのという淫らな振る舞いをしてきたのも、すべてはこのときのためだつた。

だが——マルティナは高いマナを持つてはいたが、剣士ではない。ましてや我が夫の仇、裏で糸を引く邪悪が「魔皇子」であるとは思い至つてはいなかった。

「くっ……くっ、く、く……これだから人間というのは面白い。お前はあの無能王などより、よほど胆力のある女だ、マルティナ。だが、いささか相手が悪かったな」

心底愉快そうに笑いながら、ヘルメスはマルティナの手首ごと短剣を掴み、ずぶりとそれを引き抜いてしまう。

「そんな、銀の短剣で刺されたのに……ああっ」

ヘルメスの目が怪しく光り出し、マルティナの手足から力が抜ける。脇腹の傷は既に塞がり、マルティナは己の目算の甘さにいまさら気付く。

(いけない、このままでは……)

愛する夫と息子を亡くして以来、美しき未亡人はパロックやヒッピーアの陰で暗躍する邪悪を討つことだけを考えた。そのためなら命を落とす覚悟はあるはずだった。

それなのに——

「もうよいのだ、マルティナ。お前はよくやってくれた、もう十分だ」

「えっ……」

気がつけば、マルティナは一人の男に抱き締められていた。ああ、その厚い胸と逞しい腕、高貴な中にも凛々しさと優しいさの宿る顔立ち。

「あ、あなた……ルートヴィッヒ、さ

ま……っ」

愛しい夫の腕がマルティナの肩を背中を優しく撫でる。くびれた腰をぐいと抱き寄せると、久しく忘れていた疼きに腰が震えた。

傍らのベッドにそつと押し倒されたとき、マルティナは夫が既に死んでいること、ここがパロックの私室であることなど忘れ去っていたのだ。

「愛しているよ、マルティナ」

そう言つて口づけしているのは、パロックに憑依したヘルメス。しかしマルティナの目には相手はルートヴィッヒに見えているのだ。

れるっ、るちゅ、れる……巧みに舌を搦め捕られたマルティナの口から熱い吐息が漏れる。銀の短剣はとつくと取り上げられ、その手はヘルメスの股間にあてがわれていた。

「あああなた、こ、ここがこんなに」

「そうだよ、お前を思うほどに私のマラはいきり立つのだ。もちろんお前は私のこれを受け入れてくれるね」

ルートヴィッヒとマルティナの夫婦生活はごく大人しいもので、ルートヴィッヒがこんなにあからさまに性欲をむき出しにしたことはない。

なのにいまのマルティナは夫の堅くたぎつた肉棒に指を絡めると、悦びを持ってそれをしごきさえした。

「あなた、私少し怖いですわ。だつてジュリアンが生まれてから、あなたは滅多に」

「いや、いまなのだ。私はいまお前を

抱きたい。このマラで心行くまでお前を突きまくりたいのだ」

それはなんと残酷な所業であつたらう。魔皇子は亡き夫への一途な思いに付け込んで、憎き魔族である自分の巨根をマルティナに受け入れさせると、哀れな寡婦^{かぶ}は頬を赤らめながら自らメイド服の胸をはだけ、無防備となつた股をゆつくり開いていく。

「おおそうだ、お前のその淫らに濡れた唇に、勃起した我がマラがめりこんでいくぞ……」

「んああっ、お、おつきいっ！ おおきすぎます、あなたあつ」

しかしヘルメスは構わずにのしかかり、さらに挿入を深める。久しく夫を受け入れていなかった人妻の淫肉が強引に押し広げられ、マルティナは首をのけぞらせて悶える。

たとえマルティナが騎士や剣士であつても、魔皇子の前では無力。既にパロックの妹クロエもヘルメスの毒牙にかり、言われるがままに従う性奴隷と化している。

ましてやいまのヘルメスは幻覚魔法によつてルートヴィッヒに成りすましているのだ。

マルティナの唇から、甘い声が漏れたとして、誰にそれを責められよう。

「ひい、ひいっ。あなたっ、は、激しすぎ、わたくし壊れ、ちやううう」

「なにを遠慮することがあるうか、思う存分乱れよがるがいい、我が愛しき妻、マルティナよ……」

先ほどまで慈愛に満ちた笑みだったルートヴィッヒの顔は、いつしか優越感と悪意に満ちていた。

パロックに隠し子がいたと聞かされたときは少し驚いたが、その隠し子を次期聖王にして傀儡にするなりなんなり、打つ手はいくらもある。

(そしてこの大陸を、そして人間どもすべてを狂気と混乱に巻き込み、我ら魔族がすべてを支配するのだ！)

既にマルティナの肉壺は濃厚な蜜液で満たされ、陰茎を突き入れられるたびに牝の香りの飛沫を飛ばす。

マルティナは自らの乳房を揉みしだきながら下肢でヘルメスの腰を挟み込み、食欲に夫の寵愛を求める。

「ああああ、イク、イク、イク、イク、もうだ、め……」

「イク狂うがいい、マルティナ。我らの愛する息子ジュリアンの兄弟を、その身に孕むがいい！」

ずぼぼつ、じゅぼつ、ずぼおつ。ペッドが激しく軋み、マルティナは悦楽の中で髪を振り乱す。

誇り高き美貌は淫乱な人妻のそれにとつて変わり、一瞬の暇もなく続くエクスターシーの中で、マルティナの瞳からは理性の光が消えていった。

「イク……イッチャウ……わたくしもう、イクことしか考えられせん……」

その日、アウラ神国の聖巫女であり

女王シンシアは、出産間もないベアトリスを見舞っていた。

「まあ、なんてかわいらしいこと」

「ふふ、シンシアさんももうすぐこの喜びを味わえますわ」

産後の肥立ちは良好のようで、ベアトリスの顔色もよく、赤ん坊も丸々と太ってすうすうと眠っている。そしてシンシアの腹にもパロックの血を継いだ聖王の世継ぎが息づいている。

「シンシアさんもいつ陣痛が起きてもおかしくはないでしょう。私のことは構いませんから、御身を大切になさってくださいね」

「ええ……」

そう答えるシンシアの顔には、陰りがあった。そしてベアトリスはそのシンシアの憂いに心当たりがあった。

（まさかあのアレックスさんが、聖王陛下に対し反乱を企て、逃亡したなんて……とても信じられませんわ）

しかし、いまの自分は自分と赤子の身を守るので精一杯だ。アレックスとパロックの間には行き違いがあったにせよ、シンシアもリーネも身重であり、なによりその身体を大事にすべきだろう。

丁寧に辞去を述べるシンシアを見送ると、魔導の女王は小さくため息を漏らすのだった。

「ベアトリスさま、気付いてらしたよね……いけない、私が皆に心配をおかけしては。私にとつて大事なものは、こ

の子なんだから」

と、丸々と膨れた妊婦腹をさするその顔は、既に母のものだ。

しかし、それと同時にシンシアには別の不安もあった。最近パロックが抱いてくれないのは、シンシアの身体を氣遣つてだろうが、連日のように犯され、子種を植えられ続けた身体が、どうにもたまらない疼きを訴えている。

「陛下はより多くの世継ぎを作るために、貴族の子女たちとまぐわつてらっしゃるようだけど、ああ私も少しは」

あの分厚い掌、太く逞しい巨根を思うだけで、下腹が熱く濡れる。しかし赤子のためには自慰をするのも憚られる……その夜のことであった。

「聖王陛下がシンシアさまにお会いしたがつておられます。陛下もシンシアさまの御身を案じておられるのではな

いかと」
そう告げた騎士に従い、パロックの寢室に向かう。向かう間もシンシアの胸は高鳴り、その裏門が疼いていた。そして身重になった自分を案じてくれるパロックの心根にただ感謝するばかりだった。

「パロックさま……シンシアでございます」

パロックは見た目こそ変わらないものの、以前のようにギラギラした肉欲のオーラを発してはいない。だがそれはシンシアたち以外の娘を相手にしているからであり、また自分を氣遣つてくれているのだろうと解釈した。

「このところ政務に追われてな、構つてやれなくて済まぬなシンシア」

「いえ、そんな畏れ多い……あつ」

パロックはシンシアの背後に回り込むと、そつと太い腕で少女の身体を包み込み、丸々膨れたお腹を撫でる。

（ああ、パロックさまの分厚い掌）

聖王の陰茎で犯され、子種を注がれ続けたシンシアは、身も心もパロックに委ね、安心しきっていた。ゆえにヒップに硬いものを感じても、むしろ自分から尻を突き出しさえしたのだ。

「ふふ、お前はすっかりこのマラの虜なのだなシンシア」

「もちろんでございます。陛下の御子を産むまでとはいえ、これがおまんで味わえないのがつらうございます」

ふむ、とパロックは少女の耳元に息を吹きかけると、腹部を撫でまわしていた手を乳房と太ももに滑らせる。

右手でぐいと乳房を露出させ、左手は太ももを持ち上げる。シンシアは既に下着を着けていなかった。むき出しになった花びらからは、既に透明な蜜液が垂れ落ちている。

「ああ陛下、どうか今宵はシンシアのお尻の穴を可愛がつてくださいませ」

首を捻るようにしてキスをせがむと、分厚い唇がそれを塞ぐ。ぴちゃぴちゃ舌を絡ませていると、乳房を弄っていたパロックの右手がもう片足を持ち上げ、シンシアは赤子のように持ち上げられてしまったのだ。

いつの間に取り出したのか、尻に押

し当てられている熱いものはパロックの陰茎。脈打つ肉棒が尻の割れ目で擦り立てられ、シンシアの胸はいつそう高鳴った。

「陛下つ、お、お尻……お尻に欲しいです。陛下のおちんぽ欲しいッ」

とてもアウラの聖巫女とは思えぬ淫語を発して身悶える少女に、パロックはにんまりと罪深い笑みを浮かべた。

そして、隆々と反り返つた肉棒の先端をぐりぐりと尻の奥に潜らせたかと思うと、ほぼ真下からシンシアのアヌスを突き上げたのだ。

「ああああ……っ！ パロック、さ……なんだか、いつもより太い」

尻を犯されるのが久しぶりだからそう感じるのか、シンシアは挿入されただけで軽く達していた。しかも両足を抱え込まれた体勢なので、自分ではどうすることもできない。

はしたないM字開脚状態のまま、ゆつさゆつと上下に揺すられると、両の乳房とポテ腹が重たげに揺れる。

「ひつ、すごいです、おちんぽがケツ穴をこすつて、ああああお尻気持ちいい、きもひいいいっ」

ずるるっ、ぬぶぶぶっ。ずる、ぬぶううっ。シンシアもそう小柄なほうではないのだが、パロックの膂力は少女を軽々と持ち上げ、思う存分その尻穴をえぐり続けた。

「あひ、はひい……」
それだけ激しく尻を犯されているというのに、シンシアの左手は無意識に

二次元

健全な鬼畜青年を育てるオリジナル小説雑誌

COVER ILLUSTRATION BY 雛瀬あや

18
未 満

ドリーム

2D DREAM MAGAZINE

女子プロレス

特集!

「この特集で
持病の腰痛が
全快しました」
広島県 女子プロファン

ファイティングピクシース
蒼井村正 × 夏木きよひと
痛辱の快感電流デスマッチ

キャットファイトの
伝道師!?
猫闘娘

スプラッシュマコ
小本田絵舞

女子プロレスコラム
#繋がらなくていいから
女子プロレスを見てくれ
シンギナツキ

ギリギリでぶりんぶりんな
ファイター!

HPP
~ヒロピンプロレスリング~
雛瀬あや

vol.100

二次元ドリームマガジン
2018年6月号特別付録 分売不可



最強の姉妹を目指す
美少女ラッグ
ファイティング
ピクシーズ!

夏木きよひと
緊急参戦!

ファイティング
FIGHTING PIXIES
ピクシーズ

あおいむらまさ
小説 NOVEL 蒼井村正
なつき
挿絵 ILLUSTRATION 夏木きよひと

～痛辱の快感電流デスマッチ～

満員のスタジアムに轟々と海鳴りのような大歓声が響く。

熱狂した観客たちの前で練り広げられているのは、世界女子プロレスタッグ選手権の決勝戦だ。

四連覇を狙う世界最強女子タッグチームに挑んでいるのは、デビューから破竹の勢いでスターダムを駆け上ってきた美少女姉妹タッグチーム、ファイティングピクシーズ。

姉妹揃って、グラビアアイドル顔負けの美貌と、メリハリが利いて引き締まった肢体の持ち主で、ルックスと実力を兼ね備えた期待の新人だ。

姉の如月要は、ロングヘアが似合う凛とした雰囲気的美女で、レオタード風のリングコスに包まれたウエストは細く引き締まり、対照的にヒップとバストは挑発的なボリリウム感を誇示して砲弾状に突き出している。

肩から腕のラインは、程良く鍛えられたしなやかな筋肉が浮き出し、スラリと長い脚は、躍動感と量感を芸術的なバランスで融合させた脚線美を描いていた。

要は、レスラーとしては決して大柄とは言えない体格ながらも、パワフルな投げ技とシャープな打撃、さらに多彩な関節技も使いこなすパーフェクトファイターだ。

妹の如月巴は、姉より少し小柄だが、そのプロポーションは姉にも劣らぬメリハリの利いたナイスボディで、ボーイッシュで活発な雰囲気漂わせる美

少女だ。

ラフに乱したショートカットの髪型は、「巴へア」と呼ばれて、女性たちの間で密かに流行しているらしい。

巴の試合スタイルは、パワーファイタータイプの姉とは対照的に、スピーディーで華麗な空中戦からの、電光石火の打撃と流麗な関節技を得意としている。

ファイティングピクシーズは、プロレスファンだけでなく、一般認知度も急上昇中の人気タッグチームであった。しかし、百戦錬磨のチャンピオンタッグチームのパワーと狡猾な連携に圧倒され、姉の要はコーナーロープに追い詰められて、一方的に攻め立てられていた。

「フンッ！ フンッ！ ムンッ！ ハアッ！」

獅子のたてがみのような金髪を振り乱し、元女性ボディビルダーで、プロボクサー経験もあるチャンピオンは、鍛え抜かれた全身の筋肉をうねらせ、怒濤の猛攻を仕掛けてくる。

タッグパートナーの、元女子空手チャンピオンの肩書きを持つ褐色肌の美女レスラーは、勝利を確信しているのか、エプロンサイドで高みの見物を決め込んでいる状態だ。

「くうっ！ ウッ！ うううッ！」
一撃受けるごとに、要のうめき声と、低くくぐもった打音がリングに響く。

打撃の衝撃で、汗が飛沫となって飛び散り、コスチュームを張り詰めさせ

た要のたわわなバストが衝撃でブルンブルンと揺れ弾む重々しい連打だ。

「ドムンッ！」
「クウウッ！」

腰の入った鋭いボディブローを打ち込まれた要は、凛々しい美貌を苦悶に歪め、均整の取れた肢体を前のめりに屈める。

「お姉ちゃん！ タッチして！」
妹の巴は、姉に呼びかけながらロープ越しに必死に手を伸ばすが、対角線上のコーナーからは届くはずも無い。

「フィニッシュュ！」
とどめを宣言し、要の身体を軽々と抱え上げたチャンピオンが、リングの中央で、バックドロップを繰り出そうとした、その瞬間。

「やあアッ！」
空中に掲げられた体勢から巧みに身を捻った要は、腕が緩んだ一瞬に、フィニッシュ技からの脱出を果たす。

コスチュームの要所にあしらわれた、「妖精の羽根」を模した飾りが、空中でしなやかに旋回する要の動きで、翻り、一連のアクションをさらに華麗に見せつける。チャンピオンの背後に降り立つた要は、振り向きざまのエルボーを回避しつつ、逆襲の投げ技を仕掛けた。

「ハアアッ！」
気合い一閃、三十kg以上の体重差があるチャンピオンの身体を抱え上げ、そのままコマのように回転して、遠心力を加えた投げを繰り出す。

要のオリジナル必殺技、「クワドラ

ブルボディスラム」だ。

「グハアッ！」

観客の大歓声を圧するような音を立てて、過剰な筋肉に包まれたマツチョコボディがマットに叩き付けられた。

「ウオオオオッ！ 要！ 要ッ！」
絶体絶命の状態からの鮮やかな逆転劇に沸き立ち、一斉に湧き起こる要コールに操られているかのように、力を使い果たしてグロッキー状態だった要がフラリと立ち上がる。

「お姉ちゃん、タッチ！」
ロープ際から手を伸ばし叫ぶ妹、巴に、千鳥足で歩み寄った要が倒れ込むようにタッチすると同時に、巴はトップロープを飛び越え、そのままの勢いでレッグラリアート気味の蹴りを放った。

「ハグウンッ！」

起き上がりかけていたチャンピオンの喉元に、鋭い蹴りがぶち当たった瞬間、空中戦に長けた妹は、しなやかな美脚を鞭のようにしならせ、筋肉の束のような元ボディビルダーの首に巻き付けながら捻り倒す。

彼女のオリジナル必殺技、打撃から流れるような動きで絞め技に移行する「クノイチストラグル」だ。

「絶対に……離さないッ！」
リング中央で、三角絞めの体勢に入った巴は、太腿の筋肉に思い切り力を込めた。

引き絞られたナイスボディに、臀筋と背筋がエロチックな凹凸を描いて浮き上がり、太腿に挟まれたチャンピオンの顔が苦悶に歪む。今度は、相手側のタッグパートナーがロープ越しに身を乗り出し、援護に入ろうとするが、レフェリーに制止されている。

五秒……十秒……巴コールが響き渡るリングの上で、美少女レスラーの白い太腿が、褐色に日焼けしたマッチョチャンピオンをグイグイと絞め上げた。「ウグムウウウウッ！」

顔を真っ赤にしながら必死に耐えていたチャンピオンが、堪らずタッグアウトし、ギブアップを告げる。

カンカンカンカンッ！

割れんばかりの大歓声に包まれたスタジアムに、試合終了のゴングの連打音が響いた。

「死闘を制し、世界女子タッグ選手権優勝の栄誉をつかみ取ったのは、ファイティングピクシーズ！ デビューからわずか半年、初出場にして初優勝！まさに快挙ですッ！」

最大ボリュームで音割れ気味の解説の声が勝利者の名を告げ、ファイティングピクシーズのテーマ曲が大音量で鳴り響くと、観客の盛り上がりはさらにヒートアップし、怒濤のようなピクシーズコールが湧き起こった。

「ハアハアハア……。ナイスファイティングだったよ、巴。三連覇中のチャンピオンからタッグアウト取るなんて、凄くないか」

「お姉ちゃんが、あの逆転の投げからアタシに繋いでくれたからだよ」

激闘で上気し、汗ばんだ美貌に満面の笑みを浮かべて語り合う姉妹の所に、惜しくも準優勝に終わった対戦者タッグが歩み寄ってきた。

「いいファイティングだった！ 四連覇、阻まれちゃったね。でも、今度は負けなによ！」

「こちらこそ、素晴らしい対戦相手に恵まれて光栄でした。また、やりましょう！」

リングの上でガッチリと握手し、ハグし合って互いの健闘をたたえる両タッグに、惜しみのない賞賛の声と拍手が送られる。腰にチャンピオンベルトを巻き、四方八方からカメラのフラッシュを浴びながらポーズを取る姉妹の顔は、この上なく晴れやかであった。

「お姉ちゃん、最近、ちよつとハードスケジュールすぎじゃない？ オーバーワークは身体に悪いよ」

タイトルマッチに勝利して以来、異様なハイペースで試合を続ける姉、要に、妹の巴が心配げな声を掛ける。

所属団体での、ファイティングピクシーズとしてのタッグ試合に加え、要は他団体の興業にも積極的に参加して、連日、激しい試合を繰り返しているのだ。

人氣実力ともにトップのドル箱スターである要の参戦は、どの団体にも歓迎され、結果、要は「乱入チャンピオン」という異名で呼ばれるようになっていた。

「今のままじゃ、ダメなんだ。もつともつと強くなりなきゃ……」

鬼気迫る形相で、サンドバッグを打ち続けながら、要はつぶやく。

「お姉ちゃんは十分強いよ。来月にはタッグチャンピオンの初防衛戦もあるんだから、調整しておかないと……」

「フンッ!!」

妹の声を遮るかのように、ひととき強いミドルキックをサンドバッグに叩き込む要。

ドムンッ！ と重い音を立てたサンドバッグが、吊している鎖が千切れてしまいそうに振れながら跳ね上がる。

「私は、もつと強い奴と戦って、自分を磨かなきゃ……。負けたら死ぬぐらいの覚悟を持って、強い奴らと戦いたい！」

「おねえちゃん……」

殺気立ってサンドバッグを打ちまくる姉の様子に不安を感じる巴であった。

その数日後、女子プロレス界を震撼させる事件が起きる。

ファイティングピクシーズの姉、如月要、突然の失踪……

最初は、話題づくりのためのフェイクニュースかと思われたが、捜索願を受理した警察が公開捜査に踏み切ったことで、世間やネット上、ワイドショーを騒がす事件となった。

しかし、それもつかの間のこと。

何の情報も無いまま数週間が過ぎると、世間の注目も薄れていった。

「それは本当なの!? お姉ちゃんが地下闘技場の選手に!?!」

薄暗いカラオケボックスのブースで、如月巴は、情報屋を名乗る男に詰め寄っていた。彼女の顔を知る者に勘づかれないように、伊達メガネをかけ、身にまとっているのは、オーバーサイズのフード付きパーカーとジーンズというラフないでたちだ。

女子レスラーの仕事を休業し、ありとあらゆる伝をたどって、姉を探し続けていた巴にコンタクトを取ってきたのは、目の前にいる、いかにも胡散臭そうな中年男であった。

「いや、まだそうと決まったわけでは無いんですけどね。試合を見た知人が、ちよつとしたプロレス通でして、そいつが、ピクシーズの要に良く似たすげえ技を使う覆面レスラーがいた、って言うってたもんですから」

詰め寄る美少女レスラーの気迫に押されながら、情報屋は顔を引きつらせると。

「この目で確認しに行くから、闘技場の場所を教えてください！」

「無茶言っちゃいけない。闘技場と言っても、裏社会の主催ですからね。そりゃもお、色々やバインですよ。どこでやってるかなんて、俺たちみたいな下っ端が知るわけ無いですよ」

「じゃあ、その知人っていう人に会わ

「せなさい！」
藁にもすがりたい心境の巴は、なおも食い下がる。

「それも難しいですね。世界中飛び回ってる奴なんで、今はどこにいるのやら……」
「はあ……。今回も、ガセ情報だったか……」

落胆した巴は、愁いに満ちた表情でソファに座り込み、ガックリとうなだれる。姉が失踪してから数ヶ月、ありとあらゆるルートで情報を求め、ついには怪しげな霊能者や自称超能力者にも頼ったが、掴まされたのは曖昧な情報ばかりであった。

「そう落ち込みなさんな。客としては無理でも、選手としてなら入れるかも知れませんか？」
「選手として!?!」

俯いていた顔を上げた巴は、伊達メガネのレンズ越しに、中年男を真っ直ぐに見つめる。

「ええ。なんせ、裏社会の興業なんて、試合で壊れる選手も多いらしくてね。裏家業専門のプロモーターが、選手を物色してるって噂ですよ」

巴が食い付いてきたことに気をよくしたのか、情報屋はここぞとばかりに話し始める。
「もしかしたら、あなたの姉さんも、そういうプロモーターの斡旋で、裏の闘技界に入っちゃったんじゃないかな? ファイトマネーは、表よりいいって話ですからね」

「お姉ちゃんは、お金に釣られるような人じゃありませんっ! ……でも、激しい試合を望んでいたので、もしかしたら……」

失踪寸前の姉の言動や、何かに憑かれたかのようにハードな試合を繰り返していたことを思い出し、巴は表情を曇らせる。

「プロモーターの下請けをやっている連中になら、なんとか渡りを付けられると思いますけど、どうします?」
「お願いするわ!」

姉の身を案じる妹は、即座に答えていた。

「たああああッ!」
対戦相手のミドルキックを高々と飛翔して回避した巴は、斜め上から打ち下ろすようなドロップキックを放った。

「ガフッ!」
首筋に直撃を受けた相手は、低く呻きながら吹き飛び、大の字になって倒れたまま起き上がれない。

「……KO! 勝者、シユライクッ!」
勝ち名乗りを受ける巴の目元は、正体を隠すための覆面に包まれていた。

リングネームはシユライク、空中戦を得意とするテクニカルファイターとして地下闘技場でデビューを果たした彼女は、これまで三戦して全てKO勝利をおさめている。身にまとっているのは、メキシカンプロレスでよく見られるような、いささか装飾過剰なデザインのリングゴスチュームだ。

百舌の名が示すとおり、要所要所に鳥の意匠が組み込まれており、目元から鼻先を覆うマスクも、鳥のクチバシのように尖っている。

腕に装着したロンググローブの肘や、腰回りには、羽毛の飾りが付けられ、ブリッと引き締まった尻の辺りにも、尾羽を模した装飾が揺らめいていて、空中戦での動きをより華麗に、ダイナミックに見せつける役割を果たしていた。

（今日もなんとか勝てた……）
勝ち名乗りを受けながら、シユライクは会場内を見回す。

音の響き具合や歓声の量から推測すると、闘技場の客席数は、二程度だろうか? リング上にしか照明が当たらず、客席は闇に包まれているので、観客たちの正確な数や顔は判らない。

音響や映像設備は、最新のものが使われているようで、リングの真上四方には、大型のスクリーンや、複数のリモコン式カメラが設置され、試合の様子を細部までアップで映し出せるようになっていた。

（でも、あのカメラは、試合専用ってわけじゃないんだよね。目的は、むしろその後……。勝っても、ちよつと憂鬱な気分になっちゃう）

フウツ、と大きく息を吐き出したシユライクは、トップロープをヒラリと飛び越えようと、リングをあとにする。「なんだよ! また何もせずに帰っちゃうのか?! たまには一緒に陵辱しようぜ!」

「帰るんなら、オッパイかオマンコでも見せて行けよ! ケツの穴でもいいぜ!」
プーイングに混じって、下品なヤジが飛ばされるが、シユライクはまったく無表情、無反応で足早に去って行く。（敗者は性的辱めを受ける……。こんな最低のルールで試合が行われているなんて! でも、私はお姉ちゃんの消息を掴むまで、どんなに憎まれても罵られても、今のファイトスタイルで勝ち続けてやるッ!）

選手に与えられた個室に戻り、リングゴスチュームを脱ぎ捨て、シャワーを浴びながら、巴は悲壮とも言える覚悟を決めていた。

（このまま勝ち続けていけば、いつかは、お姉ちゃんじゃないか、って情報屋が言ってた覆面レスラーとも対戦することになるはず……。例え覆面をしていても、会えば、お互いに絶対判るわ!）

凛々しく美しい姉の面影を脳裏に思い浮かべながら、巴はシャワーの湯滴に身を委ね、そのときが来るのを待ち焦がれている。

「つうッ! 打撃、結構もらっちゃったな……。顔にも一発、いいの入っちゃよつとヤバかった……。これ、痣になりそう。まあ、マスクで隠れるからいいか?」

筋肉質に引き締まった肢体のあちこちに、赤紫色の打痕が刻まれ、熱く疼

くような痛みが残留しているのに呻いた巴は、手早く応急処置を済ませ、バスタオル一枚巻いただけのあられも無い姿でベッドに寝転がる。

(地下闘技場に登録された選手は、一切の外出および、他の選手との交流禁止。もちろん、外部との接触も禁止。契約満了後は、ファイトマネーをまとめて受け取り、闘技場のことを一切漏らさないという約束で放免される……) ぼんやりと天井を見つめ、巴は選手

契約時に交わした契約を脳内で反芻する。選手間の交流も禁止されているため、リング上で相対するまで、どんな相手と戦うのかも判らない。

これまで戦った三人は、いずれも何やら訳ありの様な連中だったが、タイプの違いこそあれ、いずれも美女と呼ばれるルックスと肉體、そして、優れた格闘センスの持ち主であった。

負ければ辱められるのが判っているため、誰もが全力で戦いを仕掛けてく

るため、毎試合が激闘だ。少しでも油断をすれば、巴が敗者として陵辱されていただろう。

「……試合は、陵辱を盛り上げるための前座でしかないのかな？ クッ！早くお姉ちゃんのことを掴んで、こんなゴミ溜め、二人でとっとと出て行つてやるわ！」

瞳に熱い光を宿してつぶやく巴の耳に、端末にメールが入ったことを告げる通知音が聞こえてきた。

「え？ もう次の試合？ 対戦相手の

名前は、エキドナ？ 試合は、明後日……次も必ず勝つて見せるわ！」

試合当日、会場はいつも以上の熱気に支配されていた。

「シユライクよ！ 今日が年貢の納め時だぜ！ エキドナ様にポッコポコにされて、犯し抜かれちゃいなっ！」

「そのオッパイもエロ口もケツも、オレ等のザーマンでドロドロにしてやるからなあ！ 楽しみに待つてろよ！」

リングサイドからは、罵りの声や卑猥なヤジがひっきりなしに飛んでくる。(どうやら、エキドナとかいう選手、かなりの強豪で、人気選手のようなね。)

先にもリングインして、対戦相手の登場を待ちながら、シユライクは思う。

(それに、今日の試合、リングロープが何だか変……何、これ？)

リングの四方に張り巡らされているのは、いつもの真つ直ぐなロープではなく、電話の受話器コードのようなスパイラル状の構造をしたワイヤーであった。

(いつもよりも伸縮性があるから、ロープに振つた時の反動とか、結構違つてきそうだな……気をつけないと)

ロープに背を預けてもたれかかり、反発力を確認するシユライク。

「お待たせしました！ デビューから二十戦無敗の絶対王者、最強女王、エキドナ選手の入場です！」

リングアナウンサーの声が響くと、

観客たちは一斉に沸き返った。

「待つたぞおエキドナあ！ お高くとまったシユライクをぶつ倒して、ひん剥いてくれよお！」

「お前のテクでヒィヒィ言わせたとで、オレたちにも姦らせてくれよお！」

観客たちの下卑た歓声を打ち消さんばかりの大音量で、デスマタル調の入場曲が響き渡る中、マントを羽織つた対戦相手、エキドナが、ゆつくりとリングに向かってくる。

(覆面レスラー……まさか、あの人が、お姉ちゃん?)

顔は、牝豹を模したような黒いエナメル皮革の覆面に隠されているが、身長や体格、マントから垣間見える極上のプロポーションは、姉である要にそっくりに見える。

(試合中に語りかけてみよう……もし、お姉ちゃんだったら、何としても一緒に逃げ出すんだ！)

決意に燃えるシユライクの目の前で、悠々とリングインしたエキドナは、羽織っていたマントを脱ぎ捨て、均整の取れた肢体を露わにする。

(間違いない！ あれは……エキドナは、お姉ちゃんだ！)

露出度の高いコスチュームに包まれたエキドナの肢体を見たシユライクは確信する。

たわわなバストを左右から緊縛して吊し上げているかのような、大胆なデザインのリングコスに包まれた肢体は、数え切れないほどスパイリングをして

きた妹が見間違うはずのない姉のものだった。

打撃系を得意とする姉らしく、両手にはパッド付きのオープンフィンガーグローブを装着しており、レガースの膝部分には、周囲を威嚇するような、不気味な目の紋様が描き込まれている。

マスクの目元部分は、細かいメッシュ生地になっていて、目を直接見ることはできなかつたが、伶俐に整った顔立ちも、要に間違いない。

「両者、リング中央へ！」

リング中央で向かい合った二人は、レフェリーの形式通りの注意を聞き流しつつ、互いに見つめ合う。(マスクで顔を隠していても、お姉ちゃんなら判るでしょ？ 私だよ、巴だよ！)

精一杯の思いを強い視線に乗せ、エキドナを見つめるシユライクであったが、対するエキドナは、冷たく無表情に睨み返してくるだけであった。

(感情が……読めない。お姉ちゃんのはずなのに……どうしてそんなに無反応なの?)

カアアアッ！

不安と、胸の内から湧き上がってくるかすかな恐怖心を振り払えぬうちに、試合開始のゴングが鳴った。

「フンッ！」

軽く息を吐きつつ間合いを一気に詰めてきたエキドナは、シユライクの首に手をかけて、凄い力で引き寄せてくる。

「ンンッ！」

膝蹴りを受けぬように、シユライクも自ら動いて距離を詰め、身体を密着させた。

リングコスチュームを盛り上げた二人の見事なバストが、弾力を競うかのようにぶつかり合つてムニユリとひしやげ、マスクに包まれた美貌が摩擦熱を発しながら擦れ合う。

「お姉ちゃん！ 私だよ！ 巴！ 要お姉ちゃんだよね!!」

エキドナの耳元に顔を寄せ、必死に呼びかけたシユライクに対する返答は無造作な突き放しと、腹部への鋭い膝蹴りだった。

ドムンッ！

邪悪な瞳の描かれたニーパッドが、シユライクの引き締まった腹にめり込む。

「はぐうらッ！」

反射的に腹筋を引き締め、息を吐き出して衝撃を和らげつつ飛び退くシユライクに、滑るような足取りで迫ったエキドナは、追い打ちの連打を仕掛けてくる。

顎や側頭部を狙った掌底気味の平手打ちに加え、コンパクトに振り抜く肘打ちでこめかみを打ち抜こうとしてくる攻撃をギリギリでガードしながらシユライクはジワジワと追い込まれてゆく。

（この踏み込みの速さと打撃のコンビネーション、本気で私をKOする気だ！）

あつという間にコーナーまで追い詰められ、防戦一方に陥ってしまったシユライクは、リングロープに背を預け、反発力を利用して脱出しようとした。

しかし、ロープに触れた瞬間、背中にビシイッ！ と鞭で打たれたような衝撃が駆け抜ける。

「はあんッ！」

意に反した甘い声を漏らしながらも、覆面レスラーは、いささかきこえない横つ飛びでエキドナの猛打から脱出した。

（このリングロープ、さつきまでは何ともなかったのに、今は電気が流れている!! それも、何だか変な感じの電流!!）

背中に感じた痺れが、甘い疼きに変わり、戦う美少女の身体を妖しい波紋が震わせる。

痛みとは違う、もつといやらしく粘つこい、快感と呼ぶには悪意に満ちすぎている不気味な感覚が、メリハリの利いた肢体をチリチリと火照らせ始めていた。

「ウオオッ！ 触つたぜ！ 快感電流ロープに！」

リングサイド先に陣取っていた観客が声を上げる。

「快感電流ロープですって!!」

思わず問い返し、マスクの下で、ギクッ！ と顔を強ばらせる巴。

「おやあ、知らなかったのか？ その特殊な電流が流れているんだ。……フ

フット」

ニヤリ、と邪悪な笑みを浮かべたエキドナは、舌なめずりしながら言う。

これまで聞いたことが無いような凄艶な色香を含んではいしたが、それは間違いない、姉、要の声だった。

「お姉ちゃんッ！ 私だよ！ 巴、巴だよッ！」

素早いタックルでエキドナの懐に潜り込んだシユライクは、快感電流ロープに触れぬようにリング中央で組み合いながら、必死に呼びかける。

「お姉ちゃん、だど？」

エキドナの身体が、ピクッ、と小さく反応した。

「そうだよッ！ 理由は聞かない！

だから、一緒に逃げよう、ね!!」

「お前は何を言ってる？ 試合中だぞッ！」

密着した肢体からほのかに香り立つ姉の汗の匂いに胸を疼かせながら、懸命に呼びかける巴の声を無視して、エキドナは一本背負いのような投げ技を仕掛けて来た。

「まさか、私のことが判らないの!!」

投げを打ちに来た腕にスルリと美脚を絡ませたシユライクは、関節技を仕掛けながら叫ぶ。

飛びつき腕ひしぎ、完璧に決まれば脱出不可能と言われる、強力な関節技だ。

しかし……。

「甘いッ！」

半ば腕を極められながら身体を旋回

させたエキドナは、快感電流の流れるリングロープにシユライクの身体をきつく押し付けた。

ビシイイッ！ ジジイイッ！ 一瞬触れただけでも性感神経を掻き鳴らす快感電流が、覆面美少女の肢体を容赦無く貫き駆け抜ける。

「ふうわあああああッ!!」

甲高い声を上げたシユライクの身体がグンッ！ と仰け反り、天を突き上げるかのように突出したバストの頂点で、乳首が痛いほどに尖り勃つた。

エキドナの腕に絡めた美脚もピクンピクンと痙攣し、肘の辺りに秘部がムニムニと押し付けられて、余計に性感を刺戟されてしまう。

（ダメ……こんなので感じちゃ、ダメえ!）

下腹の奥から湧き上がってくる粘っこい魔術を拒絶しようとしてみるものの、快感電流で増幅された性感の炎は、しなやかに鍛え上げられた美少女レスラーの肉体を確実に欲情させてゆく。（クウウッ！ アソコの奥が、震えてる……!!）

腰の奥で熱い熱気が渦巻き、普段は意識していないヴァギナや子宮の存在が、異様なほど際立って、覆面美少女の股間を疼かせる。

「フンッ！」

拘束の緩んだシユライクの身体を、腕の一振りでもマッドに叩き付けたエキドナは、そのままの勢いで倒れ込みながら、鳩尾めがけてエルボーを叩き込



さあ！いよいよ
始まりました
メインイベント

シングルマッチ
30分一本勝負
ゴズミック☆モアVS
セルピエンテ^{セルピエンテ}榊！



本物のファイト
見せてやる！

HPP 旗揚げから
現在に至るまで
因縁が続く2人

今日こそ闘いの
終止符が打たれるので
しようかーおっと

珍しく
榊選手が握手を
求めています！

今日は
クリーンファイトの
つもりでしょうか？





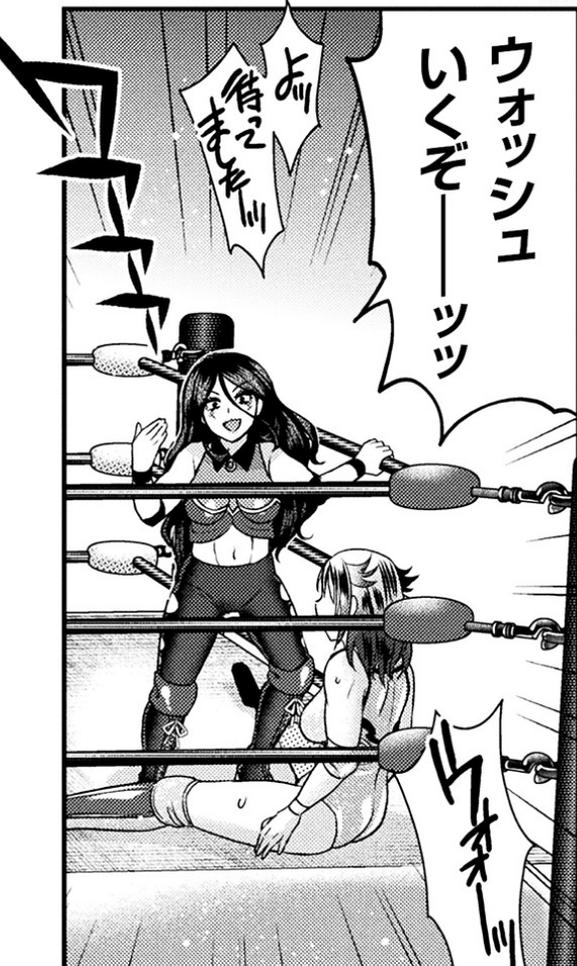
おーっと
やはり畏
だったー!

試合
開始です!!



いつも
甘っちょろいんだよ
テメーは

今日という今日は
徹底的にスタスタに
してやる



ウォツシユ
いくぞーツツ

お
待たま

ム
オ
ー



激しいウオッシュユで
モア選手の豊かな
双丘がポロリ…いや
モロリしてしまった!!

赤く色づいた
シューズ跡が
痛々しくも
艶めかしい…ッ!

おや…
榊選手のセコンドが
レフェリーに何やら
絡んでいますね

榊選手その隙に
リング下へ潜り
何かを探す—

ああ……と
触手！触手です！！

一体
どこから喚び寄せたのか……
リング下は異界と繋がって
いたのでしょいか！

触手を使役した
榊選手 モア選手へ
向かって――

いーぞー
やだえー



テンタクル
ラリアット
だ――ツツ!!!

やだえー



オラァ…

テメーの勝利
信じてるファンどもに
現実見せてやるよ



うっ…!



柵選手
満身創痍の
モア選手に触手を
差し向けるッ

正義の秘部は
悪辣な魔手に
暴かれ蹂躪されて
しまうのか…ッ



うっ…
うっ…
やーめ
ろおッ…!!



『サンダーグループス! リポーン』
キャラクターデザイン
みどりぎ さら
緑木 邑

正義と正義が
性技でぶつかり合う!

サンダーグループス! VS 聖天使ユミエル

超次元の淫闘

まさか
ドリフトムバトル!

小説 NOVEL
は ざわ こういち
羽沢 向一
くろい ひろき
黒井 弘騎
挿絵 ILLUSTRATION
うしゆ うり
白う~屈い

その巨大な城は空間に浮いていた。城が潜む空間の存在を知る人間の数は少なく、その空間を表す言葉もきわめて少ない。

次元の狭間、宇宙と宇宙の隙間、世界と世界を隔てる空漠に浮かぶ城は、統一性のない多種多様な様式の建物を大量にかき集めて、でたらめに混ぜ合わせたような姿。

その異様な城の中には、円形の空間がある。

闘技場だ。

円形の滑らかな床の周囲を、階段状の座席がかこんでいる。古代ローマ帝国のコロッセオを思わせる構造物の上を、高いドーム天井がふさいでいた。天井全体が光を放ち、真昼の青空の下のように闘技場を照らしている。

観客席を埋めているのは、すべて男だった。城同様に統一性のない、髪や肌や目の色もファッションも千差万別の男達の視線は、闘技場の中心に立つ二人の若い女に注がれていた。

数メートルの距離を取って向かい合う女は、どちらも美人。どちらも豊かなバストを持つ、魅力にあふれた肉体的な女性。そして、どちらもスーパーヒーロー。

一人はユミエル。

一人はフレア。

数多くの悪と闘い、人々を護り、救ってきたユミエルとフレアは、激しい

闘志をみなぎらせた視線を相手にぶつけ合う。そして二人の美しいヒーローの視線が、相手の上へと移動していく。ユミエルが見つめるフレアの背後の壁には透明な窓があり、母親のマリエルの上半身が覗いている。

フレアが見つめるユミエルの背後の壁の窓には、サンダークラップスのチームメイト三人の顔が並ぶ。

何よりも大切な人々を救うには、たつた一つの方法しかない。ヒーローは胸の内言葉をあふれさせた。

(絶対にフレアさんに勝たなくちゃ！)
(必ずユミエルを倒す！)

苛烈な決意に反応するように、ユミエルとフレアは肉体の熱い疼きを感じた。口から押し殺した喘ぎがこぼれてしまう。

「あうっ……」
「んんふ……」

闘技場の中に入った瞬間から、二人のヒーローの身体が強制的に発情していた。ゲームを面白くするため、なにかをされたのだ。

いつもより張りを増した乳房の内側で、甘い火花が弾け、コスチュームの中で勃起している乳首がピリピリと痺れる。

下半身では、閉じたままの秘密の花の内側で肉壁が蠢き、膨張したクリトリスがズキズキと脈動した。

「……んん、はあ……」
「あふ……はんん……」

怒りと望まぬ官能の昂りがないませ

になり、ユミエルとフレアの脳裏に忌まわしい記憶が浮かび上がった。

羽連悠美と羽連真理はキツチンで、母親の悪い時間をすごしていた。

悠美と真理は三日前にこの町にあるスイミングスクールに巣食っていた邪悪な淫欲の怪物エクリプスを一掃した。他の土地でエクリプスが暴れている情報は、まだ入っていない。

おかげで滞在用に借りたマンションで、母親水入らずの生活を送っている。今はおそろいのエプロンをつけて、ス

ーツ作りに挑戦中。
たわいのないおしゃべりをしながら、悠美はチョコレート湯煎している。

「わたしはパンダのショートケーキを作るよ。ママはどうするの？」
「わたしはシマウマのケーキにしようかしら」

「それ斬新！」
完成した動物ケーキが並ぶ姿を想像して、悠美はエプロンの下のかわいい胸を、真理はエプロンを盛り上げる豊かな胸を、そろって高鳴らせる。

甘い期待にひたる悠美と真理だったが、敏感に異常な音に気づいた。手にしたゴムべらと泡立て器を捨て、互いに手を取り合い、窓からマンションの庭へと飛び出した。

入れ替わりに、砲弾のように飛んできた乗用車が壁を突き破り、キツチンの床にめりこんだ。

母親が裸足で降りた庭には、三人の男が立っていた。

一人はサーカスのパフォーマンスじみた派手な赤い衣装で、前に向けて広げた左右の手のひらの肌から、真紅の炎が高々と燃え上がった。

もう一人の男は、上半身は裸で、黒いズボンだけを着るマツチョ。上体の筋肉が、さらにベキベキと膨れあがり、トゲの生えた鱗に覆われた。顔も変形して、肉食恐竜を思わせる頭部と化す。

三人目は、SF映画のキャラクターのように全身の三分の二が金属。腕と脚は複雑な関節がいくつもある機械。

異形の男達を見つめて、悠美は驚愕の声を上げた。
「影魔……じゃない。ママ、あの人は人間よ！」

真理も初めての体験に、美しい目を見開く。
「ええ。信じられないけれど、わたしにもわかるわ」

影魔とは人から生まれた人ではないもの。人は外に出してはならない暗い欲望を、知らず知らずのうちに自分の影に蓄積している。ときに強すぎる欲望が暴走して、影が本体を呑みこむ。

影に喰われた人は、グロテスクな姿と魔力を持つエクリプスと化して、他人を歪んだ欲望の餌食にするのだ。

悠美と真理はエクリプスを滅ぼす務めを負う救済者、光翼天使。

だからこそわかる。異様な男達だが、エクリプスにはなっていない。初めて

遭遇する未知の怪人だった。

だからこそわからない。男達の敵意を感じながらも、どう対応すればいいのか、困惑してしまう。

迷う母娘の頭上から、いきなり力強い声が降ってきた。

「わたし達はこの世界のエクリプスではない」

見上げれば、一人のショートヘアの若い女が空にいる。飛ぶのではなく、空中にすくと立っていた。

(えっ！ チャリダー!?)

と、悠美が思うのも無理はない。ノースリーブでミニスカートの白いワンピースを着て、両脚に白いはロングブーツを履いた姿はチャリダーっぽい。背中からは、腰までの長さの白いマントがひるがえっている。

大きく隆起した胸には、燃え盛る黄色い炎が紋章のごとく描いてあった。

「わたし達は別の世界から来た超人だ。オブビートと呼ばれている。わたしはフレア！ オブビートを支配する者！」

言葉の意味が、母娘には信じられない。光翼天使という普通の人々から見れば非日常を生きる二人にも、別の世界から来たなど理解を超えている。

「さあ、お前達も変身しろ！ 光翼天使の力を見せろ！」

フレアの言葉とともに、サーカス男の両手の炎が細長く伸び、燃える鞭と化して悠美へ向かってきた。

「もう、しかたない！」
悠美はエプロンのポケットから銀色

に輝くロザリオを取り出し、高々と掲げる。十字架から清らかな白光があふれて、小柄で華奢な身体を包む。

「聖なる光よ！ わたしに、希望の翼を！」

清浄な光輝の中で、悠美は一瞬で「変身」した。未発達な肢体はしなやかに成長して、大人の肉体を魅力たっぷり花開かせた。

幼いバストは二回りもふくらみ、オブビートからの敵意を跳ね返すばかりに前へツンと迫り出す。

ウエストは細く絞られ、艶めかしい曲線を描いて、成熟した量感をたたえる尻と太腿へ続く。

肩までの黒髪が一気に腰まで流れ落ちて、金色の輝きを放つ。

背中からは神々しい白い翼が大きく広がり、まさに天使の名にふさわしい荘厳さを見せた。

着衣も変化した。エプロンと普段着が消失して、上半身に密着する黒いボディスーツと下半身の純白のショーツが出現する。

両脚はむっちりした太腿の半ばまで白いニーハイソックスに包まれた。

ボディラインをくつきりと浮かび上げらせる腰のまわりに、白ミニスカートがひらりと巻かれて、ニーハイソックスとの間に魅惑の絶対領域を形作った。

両手には白いロンググラブ。さらに白いケープが上半身を護る。胸元では眩い黄金色の十字架が燦然

と煌めく。

愛らしい童顔が、凛とした意志と力をたたえる美貌となり、鋭い眼光で敵をにらみつけて、雄々しい名乗りを上げた。

「光翼天使ユミエル！ ここに、光臨ッ！」

娘とデュエットして、真理も名乗りを撃ち放つ。

「光翼天使マリエル！ ここに、光臨ッ！」

変身した真理は、シスターの修道服に似た真紅のワンピースドレスを身にまとう。表面には、ユミエルよりもさらに豊満な肉体が鮮明に現れた。

ドレスの中心部分は十字架型の切れ込みが走り、深い胸の谷間からへその下まで露出している。裾も深いV字型に切れ込んで、左右の太腿がほとんど見えた。

背中からは四枚の光の翼が広がり、周囲を照らす。

凛々しくも艶めかしい光翼天使のそろい踏みも前にしても、三人のオブビートがひるむことなく殺到した。

ユミエルだけが三体の怪人にかこまれて、視界をふさがれた。炎の男を蹴り飛ばし、左右の翼で恐竜男とサイボーグを薙ぎ払って、目の前を開けると

恐ろしい光景が出現した。

フレアがマリエルの左右の手首を掴んで、空高く飛翔していく。マリエルのほうは、人形のように無抵抗だ。

「ママ！」

ユミエルが叫ぶと同時に、フレアとマリエルの頭上に、直径数メートルはある穴が開いた。穴の向こう側にはギラギラした赤黒い色の空間が広がっている。フレアが母とともに赤い空間に飛びこむと、穴がスッと閉じる。

二人の姿は跡形もなく消失した。

「ママッ！」

虚空に向けて叫ぶユミエルに、再び三人のオブビートが襲いかかってきた。

山道の突き当りで白いワゴン車が停まり、ドアを開けてサンダークラッパズの四人が降りた。

四人はすでにスパーヒーローの姿になっている。

日向燦は白いコスチュームのフレア。鈴堂麗は赤いコスチュームのスターサンダー。

柳イザベル美果は猫科の獣人オセロツト。

北原静子はエメラルド色に煌めくアーマールのロイズデバイス。

この世界には多種多様なスパーパワーを持つ超人達が、ある者はヒーローと呼ばれる超人達は、ある者はヒーローになって人々を護り、ある者は超能力を悪用した。

若い美女四人組の新進ヒーローチームのサンダークラッパズの前には、立派な洋館があった。さる富豪が孤独という贅沢を築きむために、人里離れた山中に建てた別荘だという。今は使われていないと確認済みだ。

「ママ！」

昨日の昼、ビル倒壊事故の救助が終わって、現場近くに駐車した家用ワゴン車に戻ると、ドアに封筒が貼られていた。中には「サンダークラップスだけに重要な情報を教えます」という文章と地図が入っていた。

どこからどう見ても異くさいが、自分達だけで行くしかない。スーパーヒーローなのだから。

最年少のローズデバイスのアーマーから、大人の女らしく加工した声が出る。「別荘の内外をスキャンしました。中に人間が一人いるだけです。不審な機械も発見できません」

オセロットも猫の瞳を細め、頭に生えた三角形の猫耳を動かす。「魔力や魔術の痕跡は感じないよ」

とはいえ科学と魔法の捜査を逃れる方法はいくらでもある、と四人はわかっている。

慎重に別荘のドアを開けると、広い玄関ホール中央に、一人の人物が待ち受けていた。四人は期せずして、同じ言葉をお互いに口にした。

「天使!」
流れる黄金の髪。白光を放つ大きな翼。胸には金の十字架。まさに天使のイメージを体現した美女が迎える。

「サンダークラップスの皆さん。よく来てくださいました。わたしはユミエル。別の世界から来ました」

四人は驚いたが、嘘とは断じなかつた。他のパラレルワールドから来たオ

フビートが関わる事件の記録も存在する。

スターサンダーは落ち着いた物腰でユミエルにたずねる。「異世界からの訪問者が、どのような情報をくださったのかしら?」

「サンダークラップスに教えてあげる。わたしの世界を影から侵食するおぞましい怪物エクリプスを」

フレアが身を乗り出して叫んだ。「まさか、あいつが」

叫びが終わる前に、玄関ホール内の空間そのものが変質して、一瞬でヒーローのまわりをグロテスクな異形の群れが包囲する。

「これがエクリプス?」
呼び出されたエクリプス達は、フレアの想像とはまったく違った。

その姿は人間と別の生物を混ぜたもの。哺乳類、鳥類、爬虫類、魚類といった脊椎動物だけでなく、節足動物、軟体動物、腔腸動物、さらに植物まで融合している。

それだけなら多様な姿のオフビートが闊歩するこの世界でも珍しくないが、エクリプス達は全員が勃起した特大ペニスをあからさまに見せつけていた。股間から猛々しくそびえるだけではない。カマキリじみたエクリプスの腕から男根が伸びている。カメレオンの口から伸びる長い肉棒が、ペロペロとくねる。クラゲやタコやイソギンチャクが蠢かせる触手の先の亀頭が、粘液をドロドロと滴らせる。

オフビートにも性犯罪者はいる。サンダークラップスの四人も、悪党に陵辱された経験がある。しかしここまで淫欲に特化した肉体は初めて。性犯罪者どころか邪悪な性欲の化身だ。

全身から欲望を迸らせるエクリプス達が、われ先に四人の女性ヒーローへ押し寄せた。

亀頭の束からいっせいに噴出した大量の粘液が、フレアの顔に浴びせられ目をふさがれる。

「汚らわしいっ!」
顔からネバネバをぬぐった途端、信じられない光景が目に入った。

エクリプスの壁の向こうで、チームメイトの三人がユミエルの前で棒立ちになっている。

「どうしたんだ?! ああっ!」
ユミエルの背後に赤黒い円が出現した。フレアは蠢く肉棒を押しつけてくるエクリプス達を殴り飛ばし、仲間へ向かって突き進む。

「待ってっ! やめろっ!」
伸ばした手が届く前に、ユミエルが白い翼でスターサンダー、オセロット、ローズデバイスを包みこみ、背後の赤い円の中へ入った。

円が消失して、フレアと蠢くエクリプスの群れだけが、玄関ホールに置き去りにされた。

にもない。
ユミエルは別の世界へ移動する方法など知らない。もう二度と母に会えないという恐怖に捕らわれる。

「いつたい、どうしたら……」
悲嘆の言葉を漏らすユミエルの背後から声がかげられた。

「ユミエル様。わが主人であるフレア様から伝言がございます」
ふりかえると、空中に若い男の執事がいた。おだやかな顔つきも、隙のない黒いスーツも、上品な物腰も、ユミエルがイメージする執事そのものだった。

フレアと闘ったエクリプス達が消滅した。死んだのか、姿を消しただけなのか、わからない。今は考えている余裕もなかった。

チームメイトとユミエルが消えたあたりを懸命に探したが、手がかりは見えない。それでもなお床をまさぐりながら、今後の方策をつい口に出していた。

「ジャスティスサーカスに相談すれば、みんなを追跡できるかも」

「フレア様。わが主人であるユミエル様から伝言がございます」
頭上からの声に反射的に立ち上がると、目の前に執事がいた。

「ユミエル様」
「フレア様」
執事は濁みない美声で、異なる世界

の二人のヒーローに告げた。

「わが主人は平行宇宙を隔てる次元の壁を超えて無数の世界を旅して、ゲームに興じておられます。ルールはいたってシンプル。訪れた世界から選り出した二次元ヒロイン、つまり貴女様に主人と闘っていただきます」

別々の世界で、ユミエルとフレアは同じ疑問を口にした。

「二次元ヒロインとは」
「どういうことなの？」

「次元を超越したわが主人から見れば、一つの次元に捕らわれる人間は、紙に描かれた二次元の存在みたいなものです。ゆえにわが主人は、それぞれの世界から選り出したゲームの対戦相手を、二次元ヒロインと呼んでいます」

執事がていねいな口調で語る傲慢な言葉に、ユミエルもフレアも唖然とした。執事は意に介さずに、言葉を続ける。

「貴女様のお仲間、ゲームへの参加を拒否されぬよう、主人の城におあずかりしました。貴女様がゲームに敗北すれば、ペナルティとして貴女様が所属する世界を、主人が圧倒的な武力で攻撃します。お仲間の命とご自分の世界を護りたければ、私とともに城に行き、主人と闘い、勝利してくださいませ」

ユミエルはうなずいた。
「わかりました」

フレアは拳を握りしめた。
「行つてやる」

だが執事の言葉の続きを聞くと、二人は愕然とするしかなかった。

「ただし主人のゲームにおいて、闘いとは相手の肉体に快楽を与えることです。相手を絶頂させた者が、ゲームの勝者なのです」

うやうやしく手をさしのべる執事の背後に、赤黒い異空間が丸い口を開いた。

※

ユミエルとフレアは闘技場の中央で、ゲームの始まりをジリジリと待っている。開始を告げるまでは、一歩踏み出すことすら禁じられていた。

その間にも、肉体を蝕む淫熱はより激しくなり、身も心も焼かれ続けた。

「はああ……」
「ふうう……」

甘く熱した息を吐くユミエルとフレアを見下ろす観客席は、それぞれの世界から集められたエクリプスとオフビート犯罪者達で埋まっている。今はエクリプス達も人間の姿を保っているが、正体を現せば観客席の半分は異様な怪物で埋まるだろう。

居並ぶオフビートの一人が、太い首をかき上げた。

「あいつらが互いに、相手が仲間をさらった悪党だと思ってるのは本当か？ ちょっと考えれば、おかしな状況だとわかるだろう」

となりに座るエクリプスが、下卑た笑いをニヤニヤと向けた。
「そこが、われらが暇つぶしの王の御

力よ。ふざけた名前だが、能力はすごいぞ。女どもの認識を歪めてんのか。相手が敵で、エロいゲームで勝つことしか考えられねえのよ」

二人の悪党が敬意をこめて目を向けた先に、王座のような特等席があり、ユミエルとフレアが執事だと思った男が鎮座している。しかしその姿は、今のユミエルとフレアの操作された視覚には映っていない。

その男、キルタイムキングが優雅に右手を上げた。

闘技場全体にアナウンスの声が響き、二人の女性ヒーローの鼓膜を叩いた。

「さあ、皆さんお待ちかねの第一回戦を開始します！」

■一回戦 猛るフレアのふたなりファック！
小説・黒井弘騎

「第一回戦のルールは単純明快、先に相手をイカせたほうの勝ち！ いつも犯されてばかりの二次元ヒロインですが、その経験が活かせるかあ？」

闘技場の真ん中でアナウンスを告げるのは、キルタイムキング配下である異次元人の少女だ。際どいパニーガル衣装に身を包んでいるが、びよこびよこ動くウサギの耳は衣装ではなく本物。煽り混じりの軽妙なアナウンスに、会場がドッと沸き返った。

「実は俺はユミエルと犯つたことあるのよ。あんな可愛い顔してムツリスケベの淫乱マゾだからよお、このルールじゃ瞬殺だろうぜ？」

「いやいや、フレアだってそうだが、勇ましいフリしちゃうが、一皮剥けば本性は雌奴隷だ。犯されだしたら、すぐに快楽に溺れちゃうからなあ」

下劣極まる品評が、観客席のそこかしこで沸き起こる。

観客は男ばかり——彼らは皆、こことは異なる世界から招聘された邪悪なる者達。即ち悪のオフビートであり、エクリプス達である。キルタイムキングの超次元テクノロジを持ってすれば、多元宇宙へのアクセスなど造作もないのだ。

「ひひ、こんな楽しいお祭に呼んでくれるなんてよ。キルタイムキング様は

仮面の姫剣士と吸血鬼少女！
白濁に染まる闘いの結末は!?

白百合の剣士 VS ヴァンパイアスレイブ

ヒロイン肉人形改造編

ちくまじゅうこう
小説 **筑摩十幸**
NOVEL

すけさぶろう
挿絵 **助三郎**
ILLUSTRATION

「はああっ！ 邪魔よっ！」

鋭い少女の声が夜気を貫き、同時に銀光が流星のように闇夜を切り裂いた。「ぐざやあああっ！」

少女が駆け抜けたあと、バラバラになったゾンビの群れがドッと崩れ落ちて、土へと還っていく。

「ふん、ザコのくせに」

異形の群れを一瞬で屠った少女が艶やかな黒髪を梳き上げた。だが月光が浮かび上がらせる姿は、彼女もまた常人ではないことを示していた。

ナイフのように鋭く伸びた爪、少し尖った耳、背中に生えた黒い翼、そして口元に光る白い牙。彼女の名は絹川歌織。人と吸血鬼との間に産まれたハーフヴァンパイアの少女である。

「早く薬草を見つけないとね、ケインくんのためにも！」

赤い瞳がキラリと光る。人の心を失わず、吸血鬼の力で闇を狩る歌織だが、教会からは疎まれ、エクソシストに追われることもある。絶体絶命の彼女を助けてくれたのがケインという少年だった。

「待っててね、絶対助けてあげるから」年下の優しい少年の笑顔を思い浮かべると胸がキュンッと疼く。彼もまた半人半豹の獣人であり、ともに旅を続けるうちに二人は心を通い合わせていた。初めは孤独を癒やすという部分もあっただろう。だが今は明確な好意へと、もっとハッキリ言えば愛情へと変わっていた。それは半魔という呪われ

た宿命を背負った少年と少女にとつて初めての恋であった。

「僕たち、ずっと一緒だよ」

「うん、嬉しい……ケインくん」

愛を誓い口づけをかわした夜を思い出すと、胸がときめいた。もちろんそれ以上の関係はないけれど。

そのケインが昨日から高熱を出して倒れてしまった。病院へいくわけにもいかず、万病に効くという薬草を求めて歌織はこの古城に来たのだった。

「霊気が……強くなってるみたい。妖しいわね」

通り過ぎる夜風が歌織の髪を揺らした。腰まで届くストレートロングは、闇よりもさらに深い黒。それでいて星々の微かな光を反射するほど艶やかだ。

「奥の方に何かあるわ」

少し吊り上がった切れ長の瞳はルビーのように赤く、闇の中を数百メートル先まで見通す。そこは古びた城跡で、ほとんど廃墟と言つていいほど荒れ果てていた。かつては「ランドール」と呼ばれた名城だったらしいのだが今は見る影もない。

「見つけた。あれね」

庭園の中央には噴水があり、その前に美しい少女の石像があった。かなり昔のモノであるはずなのに、噴水は清らかな水をたたえ、石像も磨き上げられたように美しい。その足下に不思議な光を放つ紫の花が咲いていた。おそらく例の薬草に違いない。

「やったあ、これでケインくんも助かるっ。それにしても、変わった趣味ね」

ふと石像を仰ぎ見る歌織。仮面をつけた少女の裸像にはタコだかイカだかの触手がまとわりついており、顔にも苦悶するような、喘ぐような生々しい表情が浮かんでいる。まるで生きているかのように、今にも声が聞こえてきそうだ。いや、実際に……。

「え……何？ 声？ タスケテ……？ まさかこの石像から？」

何かを感じた歌織は少女像の胸に手を当てて、魔力を送り込んでみた。すると……。

「シュバアアアアッ！」

石像の表面に細かな亀裂が走り、そこから目映い閃光が溢れ出した。大理石の表皮が剥がれ落ち、下から肌色の皮膚が現れたではないか。

「えええッ!!」

歌織が驚いている間にも、石像は生身の少女へと変貌していった。

「な、なにこれ……どうなってるの？」

くずおれそうな少女を慌てて支える。色白の肌からは温もりが伝わってきて、彼女が生きていることを物語る。ポニーテールにまとめた金髪、ゆつくり瞬きを繰り返す碧眼。白い仮面に隠されているが、高貴な血を引く美少女であることは感じ取れた。

「うう……ここは……私は一体……」

刻みに振っている。

「私は歌織。貴女は石にされていたのよ。何があったの？」

歌織が優しく声をかけると、仮面の少女は少し落ち着いたようだった。

少女の名はブリジットといい、この城のお姫様だったらしい。しかし魔族と手を組んだ姉によって捕らえられ、石像に変えられてしまったという。

「ひどい……許せないわ。私がやってやるっ！」

妹を石像として何百年も晒し者にするなど人のすることではない。正義感が身体を熱く滾らせ、歌織は拳をブンブン振り回した。

「と言つても、三百年前じゃどうしようもないか」

「ありがたいわ、歌織さん。気持ちだけでも嬉しいわ」

にこりと微笑むブリジット。澄んだ青瞳はサファイアのような透明の輝きを放っている。

「でもそれは私の仕事です！」

ブリジットはサツと振り向く。その手にはいつの間にか装飾用の石製レイピアが握られていた。

「復活おめでとう、ブリジット」

とつ持ち出すことは許さない。それはブリジット、貴女も同じこと。貴女は私の所有物なんだから」

怨念のこもった声が地を這うように聞こえてくる。伝わってくる邪悪な気配はどうやらただ者ではないらしい。「レイラお姉様、魔道に堕ちてまで……なんて哀れな人」

ブリジット姫が銀髪の女性をにらみ返した。浅からぬ因縁を物語るように二人の間に激しい火花が散る。「相変わらず生意気ね。三百年も魔物に責めさせたのに、まだそんな顔ができるなんてねえ」

「ちよっと待ちなさいよ」歌織が憤然と割って入った。「下等な地縛霊ってどこね。私が地獄に送り返してあげるわ」

「小娘が……お前も石にならなさいっ」レイラの目が光り、赤い怪光線が放たれる。「あぶないっ」

ブリジットが叫んだ時には遅く、歌織の身体は一瞬にして石像に変えられていた。「愚かな娘……むっ」

「石化なんて鬱陶しい。私には急ぎの用があるのよ」

表面を覆っていた石が粉々に砕け散り、黒髪の少女は何事もなかったように埃を払う。ドレスは戦闘的な漆黒スーツに替わり、背中にはコウモリのような翼が生え伸びる。「悪霊ごときの力で私を封じられると

思ってるの。身の程を知りなさい！」ギユオンッ！

黒い翼をはためかせ、漆黒の闇が走る！

二つの影が交錯した時、レイラの身体はバラバラに切り刻まれていた。「うああ……この力……闇の眷属の……ぐぎやあああつっ！」

怨嗟の声をまき散らし、悪霊の身体が霧散する。後には微かな湿り気を帯びた夜の静寂が戻ってきた。「すごい、貴女は一体？」

「私は魔物の血を引いているの。話すとき長くなるけど……ん？」

異変を察知して振り向くと、山の向こうが赤く染まり始めているではないか。「夜が明ける!? そんなの早すぎっ」

身を隠すより前に、目映い朝日が歌織の身体をカッと照りつけた。「うあああああつっ！」

ハーフとはいえヴァンパイアである歌織にとつて、日光は禁忌だ。全身の細胞が灼熱し、ヤケドを数百倍にしたような凄まじい激痛に襲われる。(でも……負けるわけにはッ) 苦痛に耐えながら目を凝らし、敵の姿を探し求める。その眼前に白い影が飛び込んできた。「なっ、ブリジットさん!」

「うぐうっ!」

いかに不意を突かれたとはいえ、相手は人間。その攻撃をかわせないとはそれほどまでにブリジットの剣が速かったのだ。(そんな……)

信じられないという表情を浮かべたままガクツと膝を折るヴァンパイア少女。そのまま歌織は意識を失った。

「ブリジット。目覚めなさい」

「うう……お姉様……あああつ!」

ハツと自分の身体を見る。首から下が球体関節を持つ人形ボディに変えられているのだ。無機質な光沢と弾力を持つ特殊ラバーの肌は毛穴ひとつない、人肌とは異なる妖しい人工的な魅力を放っていた。

「せっかく綺麗な石像にしてあげたのに素体から作り直し。まったく余分な手間をかけたせいでくれるわ。でも……」

円形の手術テーブルに大の字に磔はりつけにされている歌織をチラツと見る。眠るように目を閉じ、意識はないようだ。「極上の素材が手に入ったのは幸運だったわ。あの庭園にはもう一体、噴水を飾る石像が欲しいと思っていたの。吸血鬼の彫像なんて、なかなか素敵じゃない」

「やめてください。恨みがあるのは私でしょう。責めるなら私を」

「もちろん貴女も苦しめてあげるわ。最高のやり方だね」

ブリジットの手に剣が握らされる。いつも使うレイピアとは違う、肉切り包丁を大きくしたような、重く分厚い刀だった。刃の部分には呪文が刻まれ、青白い光を纏っている。

「それは次元刀よ。斬りつけた部位を別次元に離断してしまう魔法の剣。貴女にも使ったから覚えていてほしい。ホホホ。あのときの貴女の顔、思い出だけで興奮するわ」

「あああ……」

次元刀を握った手がブルブル震え出す。三百年前、ブリジットもこの円形手術台の上で姉レイラによって手足を切り落とされ、人形の手足に付け替えられてしまったのだ。それを今から自分がさせられるなんて……。

「改造手術をさせてあげる。貴女自身の手でねっ」

「い、いやです! そんなこと絶対にきません!」

く精緻な作りのチェーンが、ブリジットの腔内に深く潜り込んでいる。「これはなんなの？ 言いなさい」「うああ……そ、それは「子宮枷」……わ、私の子宮と魂を……え、永久に縛る……奴隷の鎖です……あああむ……お姉様のご命令には……絶対服従いたします……」

恥辱に顔を真っ赤にしながら答えるブリジット。「そうよ。貴女は私に絶対逆らえない、操り人形なのよ。オホホホ」

女の命の中心である子宮に繋がる鎖をツンツンと引っ張り、ブリジットを手術台の前に立たせる。

「まずは右腕からちよん切ってもらおうかしら。彼女は今人形に生まれ変わるための呪文を脳に直接書き込まれているの。痛みは全然感じないから安心してなさい」

歌織の頭には銀色のリングが嵌められており、リングに接続された何本かの導線から呪文が送り込まれるたび、ピクピクッと黒眉が痙攣している。

「あ、ああ……私を助けてくれた人に……こんなのだめえ」

右手がゆつくりと振り上げられていく。あたかも吊り上げられていくギロチンの刃のようにギラリと残忍な光を放った。

（歌織さん……！）

命の恩人を処刑させられるなど、魂を切り裂かれるように辛い。

歌織は薬で眠らされているのか、静

かに目を閉じたまま。手足は鎖でピンと引き伸ばされ、まさにまな板の上の人魚といった風情だ。

「やりなさいっ、やるのよ！」

一際強く金鎖が引かれ、レイラの命令が呪力の電撃となつて子宮に流れ込む。

バリバリバリバリエイッ！

「ひいッ！ いやあつ、そ、それだけ……絶対にはできませんっ！ うあああつ！」

身体をバラバラにされるような苦痛を浴びせられながらも、ブリジットはなおも首を横に振り、拒み続けた。普通の人間ならとつとつに死んでいるか、魔人になっているだろう。

「まだ人形になりきってないのね。徹底的にわからせてあげるわ！」

レイラが子宮枷の鎖についているリングに向かって呪文を唱えると、ブリジットの股間に魔法陣が浮かび上がり、そこから光る棒状のモノが生えてきた。

「うああ、なに……これ……」

戸惑う間にも光の棒は、どす黒い不気味な張り形へと姿を変える。硬質ラバー製の淫具で、カリの張り出した龟头部や、血管がのたうつ胴部に真珠のような突起がいくつも埋め込まれている。

「こんなことって……ああうっ」

まるでペニスが生えたような姿にされて絶望の吐息が漏れる。しかも感覚も繋がっているようで、姉の手に軽く扱かれただけで膝が崩れそうなほどの

快美感に襲われた。

「オホホ。立派なモノが生えたじやない。さあ、改造手術の続きよ」

グツと人造ペニスを握って命じるレイラ。

「ひい！ それにさ、触らないで……あひいんっ」

イヤイヤと首を左右に振りながらも、操られた身体は勝手に動いて刀を構えてしまう。どんな苦痛にも堪えられるブリジットだったが、未知なる牡の快楽にはどう対応していいのかわからない。

「やりなさい、ブリジット！」

姉の指から放たれた魔力が淫棒を直撃する。ヴウイイんっ！ と唸りを上げて張り形が振動を開始した。

「あひい、いやあああああつ！」

ズバアアツ！

絶叫と同時に青竹を斬るような見事な太刀さばきで拷問刀が振り下ろされ、歌織の左腕は離断されてしまった。腕が消えた直後、丸い球体関節を持つ人形の腕が触手に運ばれてきて、肩口にすげ替えられてしまう。

「はあはあ……私……なんてことを……ああ……歌織さん……ごめんなさい……」

「さすがは白百合の剣士。いい腕ね」

妹の顔を覗き込み、皮肉っぽく唇を歪める姉嬢。ブリジットはどんな悪党に対しても峰打ちを使うほど優しい少女だった。その正義の剣士に最も嫌がることをさせ、精神的に痛めつけるの

が愉快でならない。

「まだ残ってるわ。早くやるのよ」

「ううっ……もうこんなこと……さ、させないでください、お姉様……ひどすぎますっ……いや、いやああつ！！」

泣こうが喚こうが、人形として操られる身体は、姉嬢の命令通りに動いておぞましい次元刀を振りかざしてしま

うのだった。

「第一段階は終わり。上出来よ、ブリジット」

両手両脚を人形のモノにつげ替えられたヴァンパイア少女を見下しニンマリと嗤う姉嬢。

「ハアハア……うあ……こんな非道すぎます……ああ……もう……と、止めて……これを止めてえ」

ブリジットは後悔の涙をこぼしながらも、自らに生えた淫具の振動に翻弄されていた。さらに猛々しくそそり立ち、蛇のように龟头をくねらせながら先走りの汁をまき散らしている。

「非道いと言いつつオチンポはピンピン、オマンコもグチョグチョじやない。ウフフ。命の恩人の手足を切り落としながら、とおつても興奮していたのね。なんて悪い子なのかしら。正義の剣士が聞いて呆れるわ」

開ききつた鈴口から浅ましい欲情汁を滴らせ、淫鎖に掻き混ぜられる膣孔からも、破廉恥な水音とともに愛液が溢れ出て太腿の内側をベっとり濡らしていく。

不死身の退魔師・佐々木零、ここに復活！
今度の舞台は……まさかの地下アイドル？！

新 呪い屋 零

ZERO

いしほよしかず
小説 **斐芝嘉和**
NOVEL
たかはまたろう
挿絵 **高浜太郎**
ILLUSTRATION



「ふあ……」
触れ合っていた唇が離れると、

上擦る吐息を漏らした鞠音が、熱っぽく潤んだ瞳で梨紗を見上げた。深い琥珀色の虹彩の奥に羞じらいと躊躇いと淡い期待が揺れる。

「ダメよ、梨紗……もうすぐ本番なのに、こんな……」

拒否する言葉に滲む、哀願の音色。若い牝の理性では、欲望する肉体を抑えられない。紅を引いた艶やかな唇がなにかに吸い寄せられるようにすうつと上向き、今一度のキスを求めて微かにわななく。

「んちゅ……ちゅ……ふはあ……ダメ、こんなところで……だれかに、見られちゃうよお……」

「大丈夫、ちゃんとおまじないしてあるから。それに、ここで止めたらダンスに集中できないだろ？」

猫のように丸い吊り目を細め、吐息を乱した少女の艶やかな黒髪をそっと掻き上げながら、意地悪く囁く梨紗。なにか言いかけた鞠音の唇を再び唇で塞いで、

「んあ……ん……んう……」

応えて伸びる少女の舌に己の舌を絡みつける。

「んちゅ、ふは……梨紗……んう、んちゅ、ちゅ……」

睫が触れるほど近くで、たちまち蕩

けていく鞠音の瞳。猫目を細めた梨紗は胸の内に込み上げてくる温かな気持ちを舌に乗せ、華奢な美少女の小さな八重歯を、白く形よい前歯を、歯茎を、唇の裏側のヌルヌルとした粘膜を、慈しむように舐め回した。

「地方都市・五百釘市の、そこそこ賑やかな駅前商店街の片隅。」

小さな芸能事務所が運営するライブハウスの、薄暗い廊下。

縦に細長い掃除道具入れの陰に隠れてしなやかな身体を絡み合わせているふたりの少女は、明るいオレンジ色の短いスカートが無邪気に咲きこぼれた花のように大きく開いた、お揃いのステージ衣装を纏っている。

御当地アイドルグループ・セルキーズの、比嘉鞠音と佐伯梨紗だ。

冷たい壁を背にして追い詰められた恰好の、長い黒髪をツインテールにした鞠音は、小柄童顔で胸も薄く、円らな瞳が愛らしい。普段は恥ずかしがり屋なのに、ステージに登って音楽が鳴り始めると人が変わり、天使のような笑顔を振り撒きながら颯爽と踊り出す。

そのギャップも相俟って、五人いるメンバーの中でもっとも人気が高く、不動のセンターとして定着している。

対する梨紗はスラリと手足が長く、肩の辺りで切り揃えられた髪は明るい栗色で、鞠音より頭半分ほど背が高い。猫のように丸い吊り目にはいつも冷やかな光が宿り、表情もたいてい無愛想だから、可愛い系で揃えられたセル

キーズの中では異色の存在だ。

そんなふたりが本番前に唇を重ねさらには舌を絡み合わせるようになってしたのは、三ヶ月ほど前。ストーカー化したファンのかげに困っていた鞠音が、メンバーの中で最年長の梨紗に相談したのがきっかけだった。

アタシが傍にいてやるよ、と頼もしく頷いた梨紗は、鞠音のボディガードとして送り迎えをするようになり、やがて互いの部屋を訪れる仲になり、いまはこうして吐息を重ね合っている。もちろん、それ以上のことも。

「好きだ、鞠音……アタシの指や唇で気持ちよくなって、トロトロに湧いている鞠音が、大好きだ」

「もう……梨紗のバカ！」

幼さが残る頬をプクッと膨らませ、拗ねたように唇を尖らせる鞠音。だが、本気で拒んではいけない。その証拠に、今度は自ら細腕を伸ばして梨紗の首にしがみつき、自ら唇を重ねていく。

（あの、恥ずかしがり屋の鞠音が、こんなに積極的……）

前歯を舐めている少女の舌を唇で挟み、甘酸っぱい唾液をチュチュッと吸い取りながら、梨紗は思う。

ライブ本番まであと少し、時間が少ない、こんな場所ではだれかに見つかるかも——焦りと怯えがほどよいスパイスとなり、鞠音の気持ち昂らせているのだ。もう少し責めてやれば、欲望を抑えきれなくなり、梨紗だけが知る鞠音のエッチな顔を見ることができ

はず。

「んちゅ、ちゅ……あとで、あとでね、梨紗……いまは、キスだけ……」

「また風呂で洗ってこすか？」

「うん、する……絶対するから……ん……んぷっ!? あ、だ、ダメ……そこは……あッ!?」

花びらのようなスカートを捲り上げてドロワーズの中に手を挿し込もうとした途端、不意に手首を掴まれた。細指に込められた予想外の力に、本気の拒絶を感じ取る。

（ちょっと早かったか。まあいい、もう少しだ……）

思い直した梨紗は、強張ってしまった鞠音の気持ちと和らげるように、薄い腕や柔らかな頬、ほんのり赤らんだ可愛い耳朶に熱いキスを繰り返す。ドロワーズの中に挿し込んだ手も、その場に留めたまま、鞠音のすべすべとした下腹部を優しく撫で続ける。

「ダメ？ 本当に？」

羞じらい藻掻く少女の薄い背に細い腕を回し、しっかりと抱き留めながら、意地悪く囁く梨紗。

いつもの鞠音なら、梨紗の指がもたらす悦びの予感に抗いきれず、「す、す、す、す、す」と耳の先まで真っ赤になつて許してくれるのだが——。

「だ、ダメ……本当に、ダメ……！」

今日の鞠音は頑なだった。先ほどまで、言葉とはうらはらにされるがままになつていたのに、いまは泣き出しそうな顔で梨紗の手首を掴み

その細い指先が敏感な場所に触れるのを一生懸命拒んでいる。

「どうしてダメなんだ？ アタシのこと、嫌いになった？」

猫目に微かな戸惑いを見せ、梨紗が囁くと、腕の中の少女は濡れた瞳を上げ、慌てて首を振る。

「ち、違うの、梨紗は大好きよ！でも……いまは、ダメ……ステージの上で、み、みんなの前で……思い、出し、ちやう……ンうっ!!」

梨紗に抱えられていた鞠音のなよやかな腰が、なかに弾かれたように鋭く引いた。腕を振り切られた形の梨紗は、愕然とした顔になり、いやらしいことをしようとしていた己の指先をジッと見つめる。

「あとで……あとでね！ お風呂でもベッドでも、いっぱいいっぱい可愛がって！ でも、いまはダメなの……ゴメン、梨紗！」

カアツと頬を赤らめたツインテールの美少女が、しきりに謝りながら傍のトイレに飛び込んでいく。顔を洗い、乱れたメイクを整えて、気持ちを作り直すのだろう。

その細い背を呆然と見送っていた梨紗は――。

「……呪詛か」

己の指先に視線を降ろし、ギリリと歯軋りした。

花びらのようなスカートの下、愛らしいドロワーズの中、愛しい鞠音のつるんとした無毛の秘処に――ねっとり

と貼りついていて呪詛の気配。

鞠音は「みんなの前で思い出す」と言っていたが、それはたぶん、梨紗に每晚されていることをステージ上で思いついてしまう、という意味だろう。

だが、事実は違う。

どこかのいやらしい呪術師が、梨紗の目を盗んで鞠音の秘処に呪いをかけ、ステージ上で踊っている彼女に淫らな悪戯を仕掛けているのだ。

大勢のファンが見守る中、明るい笑顔を振り撒きながら元気に踊り歌う美少女に対し、その敏感な秘処をこっそりまさぐり、感じやすい肉豆をネチネチと責めて――。

地下アイドルとして活躍している鞠音だが、基本的には恥ずかしがり屋の、どこにでもある少女だ。メンバーで陣を組み、声出しをして、気持ちをしっかりと高めてからでなければステージに上がれないほど気弱な少女だ。

そんな彼女に、なんと卑劣な――。衆人環視の中で辱めに耐えていた鞠音の気持ちを思うと、臓腑が煮える。(クソッ！ アタシとしたことが……なんてザマだ、情けねエッ！)

固く握り締めた拳で廊下の壁を殴りつけ、歯軋りする梨紗。

しばらくそのまま俯き、細い肩を震わせていたが――。

「……呪い屋の目を盗むとは、いい度胸じゃねえか」

ゆつくりと上げられた顔には、凶悪な笑みが浮かんでいた。

二

――開演ブザーが鳴り、客席のざわめきが潮のように退いて――。

二百人ほどの観客を焦らすようにジリジリと上がり始める緞帳、静かに流れ出す楽曲、8の字を描いて観客の頭上とステージの間をまぐるしく走り回るスポットライト。

さして広くないステージの上では揃いの衣装を纏った五人の少女が、マイクを掴んだ右手を左肩に押し当て、空いている左腕を背のうしろに伸ばし、ほっそりとした脚を交差させながら深くお辞儀した姿勢でジツと固まっている。低く小さく単調なリズムを刻んでいたドラムが、急に大きくなり、一気に登り詰めて――ダンッ！

腹に響く重低音を合図に、五人の少女たちが身体ごと跳ね上がって最初のポーズを決めた。

途端、息を詰めていまかいまかと待ち構えていた観客たちが、野太い声で獣のように雄々しく吼える。

いきなり沸騰した欲望をさらに煽るように、短いスカートを閃かせて五人の少女たちが軽やかに舞い、素早く立ち位置を変えた。揃いの衣装の中で揺れる乳房、照明を浴びてしっとり輝きながら軽やかに靡く髪、客席からの声援に応えて愛想よく振り撒かれる天使の笑顔――そして、
「まっつりーん！」

曲に合わせ進る、男たちの吠え声。ステージに背を向けて両手を広げた客がいないかと、鋭い目を光らせるながらゆつくり首を巡らせている。

客席といつても椅子はなく、すべてが立ち見だ。箱が狭いからオタ芸を披露するファンはいないが、しかし、二百人ほどの男たちは両手に握ったケミカルライトを動ける範囲で必死にぶぶん振り回し、スピーカーから流れ出す音楽を掻き消すようにオオウオオと吼えまくる。

前奏が終わったあとしばらくの間は、ひとり前に出た鞠音のソロパートだ。スポットライトを浴びたツインテールの美少女は、薄い胸を張り、なよやかな腰をくねらせて舞台の一番前まで歩み出し、甘ったるい声で歌いながらピンと伸ばした指で客席を端から端までゆつくりと指し示していく。指された客は大喜びで、

「まっつりーん！」
「っそう太い吠え声腹の底から搾り出す。」

その間、背後で踊っている梨紗は、
「どこだ？ どこに隠れている……」

猫のように丸い吊り目を細めて、無数の光が踊りまくる客席を油断なく見回していた。
昨晩、鞠音と愛し合っていたときその秘処にいやらしい呪詛はかけられていなかった。という事は、今日、ライブハウスに来るまでの間にかける

れたのだ。

ストーカーの件以来、鞠音が外を歩くときには梨紗もピツタリ張りついてる。だから、その間にかげられたのだとしたら、完全に梨紗の失態だ。

呪い屋の目を盗むとはいいい度胸だと嘯いてはみたものの、

(……そりゃ、偽名を使ってるんだから、面ア知らねえヤツは呪い屋だと思わねえか)

ステージに上がる前にはある程度落ち着いていた。

佐伯梨紗の本名は、佐々木零。

後ろ暗い連中にはそこそこの名の知れた、呪い屋という忌まわしいふたつ名を持つ、フリーの呪術師だ。

厄介な仕事ばかり持ち込んでくる面倒なクライアントと手を切るため、姿を消し街を離れ、まったくの別人となつて生活していた。ただし、呪術絡みの仕事はダメだ。狭い業界だから、噂はすぐに広まってしまふ。

そこで選んだのが、御当地アイドル。可愛い少女が好きな零にとつては夢のような職場だ。

面倒な事件に巻き込まれることもなく、鞠音のような可愛い恋人もできて、毎日楽しく過ごしていたのに――。

(アタシの幸せを踏み蹴った代償、キツチリ払わせてやるからな！)

客席に紛れているであろういやらしい呪術師を探し、猫目を尖らせる。

ステージ上で踊る鞠音の秘裂に悪戯するならば、その様子を必ず自分の目で

見ているはずだ。不意に沸き起こる快感を必死にこらえ、頬を赤らめたり瞳を揺らめかせたりする鞠音の姿を、ニヤニヤしながら鑑賞したいはず。

(変態野郎め、必ず見つけてやる！)

いつも以上に険悪な顔で、零は踊りながら客席を見回す。普通のアイドルではあり得ない表情だが、

「ああ、今日の梨紗ちゃん、目つきが怖い……！」

「気合い入ってるなあ。ああ、あの脚で、力一杯蹴飛ばされたい！」

一部の特珠な趣味のファンが、特殊な盛り上がり方をしていた。

鞠音のソロパートが終わり、残りのメンバーたちが代わる代わる前に出て、客席からの歓声を浴びる。一番最後が零で、フットライトをガツンと踏みつけ、沸き立つ客席を前のめりになつて

呪み回しながらサビを歌い上げると、ほかとはやや毛色の違う客たちが大いに盛り上がる。

五人中ひとりだけ明るい髪色で、スタイルが抜群によく、アイドルらしからぬ鋭い目つきをした零は、一般ウケこそしないものの一定量の固定客のハートをガツチリ掴んでいるのだ。

「りっさちゃん！」

いつもの辺りから聞き慣れた野太い声が上がるので、見た目はともかく心情的には愛らしいソイツらに視線を向け、立てた親指で首を掻き切る得意の

仕草をくられてやっつてから、サツと身を翻した零は――。

(あ……あの野郎っ！)

客席から目を切る直前、視界の端に映った人影に、胸の内毒突いた。

盛り上がるライブ会場からココソコと逃げ出して行ったのは、中肉中背の白髪頭の眼鏡男。ほんの一瞬、横顔が見えただけだが、いやというほどつき合いが長いから見間違えようがない。

羽賀透基、日本呪術界の重鎮だ。外道と呼ばれる実戦神道・羽賀神道の宗師であり、零に厄介な仕事ばかりを振る面倒なクライアントでもある――いや、あつた。

過去形だ。

羽賀と手を切るため、佐々木零は佐伯梨紗になったのだ。

その、思い出すだけでいやになる外道羽賀の宗師が、いま、ここに――。

(畜生、バレちまった……つていうか、ヤツが鞠音にいやらしい術をつ!!)

ひとりで歌うツインテール美少女の背後でほかのメンバーたちと飛び交いながら、ギリッと歯噛みする零。

実践ではなく実戦と称されるだけあって、羽賀神道の術師たちはいろいろえげつない術を使う。そのトップである透基が敵ならば、零もそれなりの覚悟を決めなければならない――が。

(……違うな。アイツは変態だが、あんなに可愛い少女にネチネチ嫌がらせする性格じゃねえ……)

言うなれば、陽性の変態だ。零を恥づかしがらせるのは好きだったが、陰でココソコするのはなく、外濠をし

つかり埋めて二進も三進もいかないようにしてから堂々と嫌がらせする感じ。いっそう性質が悪いが、しかし、鞠音の秘処にこつそりと呪詛をかけ、羞じらいながら懸命に耐える様子を見てほくそ笑むタイプでないことは確かだ。

だから、透基ではない――が、

(野郎が直々に動いてるつてことは、かなりの大物だな)

透基が犯人でないのなら、ほかの呪術師が客の中に紛れているということになる。そしてそれは、羽賀神道の宗師が自ら出張ってくるほど危険な相手ということ。

それほどの術師であれば、鞠音の傍に張りついてた零に気づかれることなく、鞠音の下着の中に呪詛をかけることも可能だろう。うしろから見ている限り、いまのところツインテール美少女の動きにおかしなところは無いが、(クソ、どこに隠れてやがる……！)

早く見つけなければ、また鞠音がいやらしい悪戯をされてしまう。どこにいても、どこにいても、と焦りながら猫目を尖らせ、客席を懸命に見回す。

そんな呪い屋を挑発するように、青いケミカルライトの群れはリズムに合わせて激しく揺れる。客席のどれもこれもが喜色満面、幸せそうに微笑んでいて、先ほどの透基のように不審な動きを見せる者はいない。

(いままで気づかなかつたんだ、そう簡単に見つけられるわけねえか……) 業を煮やした零は、舞台の端で身体



小説
NOVEL

かさ
さかき傘

挿絵
ILLUSTRATION

のぞみ
希望つばめ

魔法少女の心と身体は
ペニスに!?



きらら★キララ 第12.5話
魔法少女は
変わっていく...

KIRARA★KIRARA

ごろごろごろ。

真っ白な雪の原っぱに、一本の道ができていく。

「あはっ、あははっ」

「うあー、重てーっ」

そんな道を追いかける足跡は4つ。計二人分。

ごろごろごろ。

二人で転がす雪玉は、一步一步どんどん大きくなっていく。

「タダシタダシっ、もっともっと」

「分かってるって。んがあああ！」

もう育ちすぎた雪玉は重すぎて、なかなか動かないけれど。

それでも少年は、この寒い雪の日に、汗が出るくらい顔を真っ赤にして雪玉を押しした。

「あははっ、あはははははっ」

そうすれば彼女が笑ってくれるから。金色の髪を揺らしてあの子が、楽しそうに笑ってくれるから。

もちろん少女も、ミルク色の肌を真っ赤にして、がんばって雪玉を押し。

ごろごろごろ。

二つの隣り合った足跡は、ずっと同じ歩幅を刻んでいた。

☆

12月25日、朝8時――。

昨日からの雪は、外を一面雪景色に変えていた。

「寒っ」

こんな日の朝8時はさすがに寒い。

基本的に体温高めめで、マフラーなんて

真冬でも汗をかくだけだと嫌がる少年も、今日ばかりは首から顔の半分までをぐるぐるに巻いていた。

吐いた息がマフラーの編み目をぬつて、一面真っ白な景色に新しく白いもやを乗せた。

空にはまだ分厚い雲がかぶっている

が、雪自体はもうやんでいる。

ちょうど、積もった雪で遊びやすい

天気だった。

「ふっ」

なんとなく頬を緩める少年。

国鳥タダシが住むこの町は、都会と

いうほどではないが田舎でもなく。また寒い地方でも暑い地方でもない。日本のごくごく平均的な町である。

雪の回数も平均的。年に数回降る日

があり。

今日みたいに綺麗に積もって、ちょうど雪遊びしやすい日も、年に一度か

二度だった。

遊びたい。

子供の本能が顔をだしそうで、どうしても表情が緩くなる。

こんな日は……。

「あいつ、まだ寝てんのかな」

お隣さんへ目を向けた。

こんな「ちようどいい日」は、いつもならあいつからの電話で始まる。「タダシ雪積もってるよ！遊ぼう！」といった拍子である。

ただ今日はそんな電話もメールも来

ていない。

まあ今日のタダシは用事があるので、そんなお誘いは来ないほうが助かるの

だが……にしても来ないのは変な気分

まだ寝ているのか、もう雪ではしゃぐほど子供じゃないのか。

「……」

ちよつと考えて、後者はないなとまた頬が緩んだ。

子供だ。あいつは。

お隣さんの、十萌きららは。

☆

「おータダシ、来てくれてサンキュ」

「いえ……てかだいぶみんなサボってますね」

「だな」

25日クリスマスは、世間では記念日

だが、タダシが所属する学校のサッカー部ではただの冬休みの一日。27日に

控えた練習試合の2日前でしかない。

つまり、降り積もった雪は楽しい遊び道具などでなく、試合場を汚す邪魔

者でしかなかった。

本日のサッカー部は朝から集められ

グラウンドにトンボをかけるよう言われていた。できるだけ雪と水気を除い

て、試合日には地面が乾くの待つわけである。

「めんどくさいっすよねー」

「だな」

当然こんなぐちゃぐちゃのグラウンドでは、練習はできない。

サッカー部に参加するということ、

サッカーがたくて来ているのに。ボールは蹴れないし走ることもできない。ただただグラウンドの整備である。

招集されたのは試合に出られる、ユニフォームをもらった15人。だが集まった部員は6人。半数以上がサボっているうえ、集まってもみんなして愚痴が漏れていた。

「ふう」

それでもタダシはマジメに作業をこなす。一面のサッカーコートから雪を

落とし、ぐちゃぐちゃの地面をなるべく平らにならしていく。

「ははっ、やっぱ気合い入ってるなタダシ。そっか27日ってことは」

「はいっ」

気合いが入らないわけがない。

明後日、27日の試合日は、タダシにとつてちようど誕生日なのである。

また「誕生日」というだけで無条件にテンションがあがる歳だし。でなく

ても、

「試合でカッコいいと見せれば、あのプロンドのカノジョちゃんに夜にイイコト……ってか？」

「きゃ、キャプテン」

親戚のおじさんみたいなからかいに、ちよつと慌ててしまった。キャプテン

の西織は、ケラケラ笑いながらグラウンドにローラーをかける作業に戻る。

チーブなからかいに、顔まで真っ赤

にしてしまった。マフラーで顔を隠す

少年。

ちようどいま思っていたことだったから、本気で照れてしまった。

2日後、試合で。きつと見に来るだろうあいつに、カッコいいところを見せたいと。

☆

6人しか来なかったせいもあり、作業は予想以上に時間がかった。

解放されたのは正午を回ったところ。「うあー、もう靴ぐつちよぐちよ」

「ですわー」
「でもこれ、すげー働いたな俺たち。これだけで軽く雪だるまじゃん」

「はは」
6人、午前中をかけて校庭中から集めた雪は、隅っこに小さな山を作るほどだった。

上にひとつ丸い雪玉でも乗せれば、確かに雪だるまだ。

「でもこのサイズに合う頭を作るとなると、大きすぎて運べなくなりますよねたぶん」

苦笑しながら言うタダシ。
「なにタダシ、雪だるま詳しい」

「昔よく作ったんで」
言ってから、「作らされた」か。口には出さず訂正する。

昔はよく作らされた。あの遊ぶの大好きな幼なじみが言うので。
「……」

軍手を取って手を洗って、携帯電話に指をスライドさせる。

一番上に来ている番号は、当然一番使用率が高い番号。

この携帯を買ってからずっと、幼なじみの番号が占拠している。
「もう起きてるか？ 雪で遊ぶなら早くしないと溶けるぜ」

集めきつた雪山の写真を載せて、メールを送った。
「なあどつかで温まってこうぜ。喫茶店とか、ファミレスとか」

自然とそのまま6人、町に練り出すことになる。
ちよつと幼なじみの顔を見に行きたくなつたが、まあ異論はない。タダシも付き合うことに。

後悔したのはすぐあとだった。この町は田舎ではないが都会でもないので、暖を取れる場所はあるに多くない。喫茶店でもあれば、とは思うが、ちようどいまは正午すぎ。お昼ごはんに店が混み合う時間だ。

この人数ではさつと入れる場所は少なく、
「アキラんちでいっか。あいつ、ひとり暮らしだし」

「う……」
5人が勝手に行き先を決めてしまったのだ。

駅前のロータリーまで直通の、この街では一等地にあたるだろうマンションの一室。

かなり裕福らしい佐山アキラの家は、

まだ子供な息子にもこんな贅沢な家を一部屋、ぼんと与えている。
「おーい佐山、いるだろー」

サッカー部キャプテンで先輩の西織からすれば、親の目を気にしない方がいい。集まりやすい場所といった感じのよう。平気な顔して一方的に大人数で押しかけた。

「つたく、多いっすよキャプテン」
アキラとしても、同じサッカー部なので今日は本当はグラウンド整備しなければならぬのにサボった引け目があるのか。苦笑しつつも迷惑そうにはせず迎え入れた。

「いいだろ別に。……うあー温かい」
6人全員、ぞろぞろとお邪魔する。部屋はまさに「私室用」で、1LKの小さなものだ。入ってすぐが大きなダブルベッドの置かれたリビングで、奥がキッチンとベランダ。

7人でくつろぐにはやや狭いが、ひとまず暖は取れるとあって、お邪魔した6人みな思い思いにくつろいだ。
「……」

「なに小さくなってんのタダシ？」
「別に」

「お前くらいチビならそもそも場所取らねーんだから、ゆつたりすりゃいいのに」

ケラケラ笑うアキラに、イラッとは来るながら、言い返しはしないタダシ。相変わらずコイツを相手にすると、息をするように嫌味が飛んでくる。白

尊心の塊な佐山アキラにとつて、同じチームでポジションを争うタダシが気に入らないのは分かるが……。
「……」

いつもなら言い返すところだが、今日の少年は大人しかった。

お邪魔している立場というのがあるが、それ以上に「マンションをひとつ自分の部屋にしている」という、いかにも大人なあちらの生活スタイルに、気分的に卑屈になっていた。こちらは年相応に親の庇護下。毎日朝夕ごはんを出してもらっている子供なのに。

来るんじゃないかな。後悔した。それでも、6人で来たのだ。自分ひとりが気まずいからと解散にはできなかった。隅っこで大人しくしているしかない。

辛い……。
「あれ、佐山、なんでこれカップ二つ出てるんだ？」

「ん、ああ」
キャプテンの西織が、ベッド脇にある白いマグカップに気付く。

すっかり冷めているが、コーヒーが片方はブラック、片方はミルク入りで残っていた。

誰か二人で飲んだのは明らかだ。
「カノジョです。昨日からずっと一緒にいるんで」

「え、あー……そっか。俺たちお邪魔だったか？」

「んー、まあそうっすね。このあと……の予定なんで」

……の予定なんで

「そ、そか。すまんすまん」

サッカー一途な6人も、そこでようやく今日がクリスマスだと思いつつ、「邪魔して悪い。もうすぐ帰るから」

「急がなくていいですよ。あつち、30分くらいは大丈夫なはずだから」

すっかり恐縮してしまい、みんな来たばかりで帰り支度を始めた。もちろんここから去るのはタダシも異論ない。このまますぐというのもなんなので、10分ほど時間を潰しておいとますること。

「アキラのカノジョ……、ミサトちゃんだっけ？」

「いやミサトはいま冷却期間つすね。今日は別の子と」

「ほんと手が早いなお前」

「いやまあ、かもしれないっすね」
大したことない。といった風を装いながら、表情には自慢げなニヤニヤが出ているアキラ。

その目が妙にこつちを見てくるので、タダシはいたたまれなくなり、

「トイレ借りるわ」
席を立った。

廊下に出て、ふう、とため息をつく。廊下の空気の冷たさがいまは気を静めてくれて幸いだっただ。

トイレだけ、たつぷり5分ほどかけて済ませた。これで戻ればもう帰るといふ空気になるだろう。

廊下を引き返し……。
「さぶ。」

「？」

風呂場から水音がした気がした。

一瞬気になったが、その直後、リビングのほうで爆笑が沸く。そつちのほうが気がかりですぐ引き返した。

☆

「あー、クリスマスってこと思い出しちまった」

マンションを出れば、くすんだ空気はすぐに流れた。

今日、サッカー部を優先した時点で、少なくともこの6人はそういう共通点がある。お互い不幸自慢に似た空気でおどけ合う。

「タダシはそこんとこイイよな。可愛い幼なじみがいて」

「いやあ……あいつは、子供すぎてクリスマスは一緒にいても、雪だるま作るの手伝えーってなりそうです」

「ははっ、そっか」
茶化されても、軽く返せる。

言われてふと、道の端に目を向けた。まだまだ寒いが雪はずいぶん溶けはじめており、もう雪だるまという感じではなくなっている。

「でもせっかくなんだし、プレゼントくらい買つてつたら？」

「え……プレゼントつすか」
「そうそう。結構大事だぜ」
「ん……」

言われてなんとなく、駅前ロータリーの一角。いかにも女の子が喜びそうなギフトショップが視界に入る。

クリスマスプレゼント……。

いいかも。他5人とは別れて、店に入つてみる。

急なことなので予算もないし、なににするかも考えてない。

「リボンでいっか」
芸がないが、8月、彼女の誕生日にしたプレゼントと同じで妥協した。

なんだかんだ8月はすごく喜んでくれたし、4ヶ月間ずつとつけているし。思つて、サイフを出そうとして。

「あれ」
そこでふと、いつもサイフを入れているお尻のポケット右側が軽いのに気がつく。

ない。調べても、どこのポケットにもバッグにもなかった。

焦りながら……確か学校からの帰りジュースを飲んだのを思い出す。あるときまでは持つていたはず。

ということとは……携帯でアキラに電話した。

思えばこの番号。同じ部活なので入れているが、かけるのは初めてだ。

「ああ、さつき廊下に落ちてた。取りに来いよ」

「お、おう」
なくしたサイフはすぐに見つかる。

「入れよ」
さつきと同じ手順で確認してもらい中へ入るタダシ。

6人が入ったときも緊張したが、いまはさらにドキドキする。大きく息を

吐きながら、

「お邪魔しまーす」
玄関から中へ。

そういえばカノジョさんがいるんだっけ……緊張したが、どうやらまだ帰っていないようだ。アキラはベッドに寝そべって、スマホで遊んでいる。

「ほら」
「お、おう」
用事はあっさり済んだ。サイフを投げてくれる。

「悪かったな。じゃ」
すぐに帰ろうとする……。

「タダシ」
「ん？」
声をかけられた。

足を止める少年。
さらに緊張する。こいつのことだから、また嫌味でも言うつもりだろうか。思つたが、

「今度の試合、がんばろうな」
「え……」

「お前のこと、サッカーの実力だけはすげーと思ってるからよ」
「……」

意外な言葉が飛んでくる。アキラは照れているのか、シートの中でヒザの位置を変え向こうを向いて、スマホをいじりながら、

「サッカーだけはな」
「……あつそ」
それ以上なにか言うこともないので、改めてきびすを返した。

麗しのメイド長と女軍師が
エッチな家庭教師に!?

ハーレムキャッスル
Harem
Castle 外伝
午後のお勉強の秘密

小説 NOVEL 竹内けん
挿絵 ILLUSTRATION Hiviki N

「殿下、これは百回の記念号ですよ。ぜひお読みください」

大陸の西方にある森と湖の国イシュタール王国。その王宮の東にある一室。午後の爽やかな陽が射す机の上に、フィリックスは向かっている。

いまでこそイシュタール王国の王子などと祭り上げられている彼であったが、つい最近までは騎士の家で育てられていた。

しかし、前国王ローゲンハイドが子供を儲けることなく亡くなったのちに、母親のマリンカがかつて王宮で働いていたときの国王のお手付きであり、自分が隠し子であることを告げられる。そして、女王グロリアーナの即位に伴って急遽、王太子に冊立されたのだ。

そのため義母となったグロリアーナの管理下、帝王学を修めるために日々勉強に追われている。

国を代表する学者たちにさまざまなことを教授されているが、本日の教師役は銀髪赤瞳のお姉さんであった。

机に座ったフィリックスの右に椅子を置いて座っている彼女は、年のころは二十代後半の見るからにおっかなそうな才媛だ。

女にしては背が高く、背筋がピンツと伸びて、鈍い銀色の豊かな髪を結い上げてきつちりと留めていた。少々の強風では乱れそうもない。

「そうなんだ。すごいんだね」
適当な相槌を打ちながら、フィリックスは家庭教師役のお姉さんの顔を覗

き見る。

「う、ルイーズって近くで見るとやっぱり美人だよなあ、知的でかっこいい」

彼女は、フィリックスの義理の母、女王グロリアーナの実家クリムヒルト一族の出であり、腹心だ。

政務顧問として女王を補佐する傍ら、王太子のメイド長として身の周りの世話もしてくれている。

どちらか一方だけでも多忙であろうに、二職を兼任して大過なく回しているのだ。いかに有能かわかろうというものだった。

昼間は官服、夜はメイド服と使いわけている彼女は、いまは高級官僚の装いをしてい

きつちりと糊のきいた赤い服にシワはなく、肩口はパフスリーブの長袖で、胸元から覗く白いドレスシャツにはお洒落なリボンタイで締められている。

隙のない装いの中で少し特徴的なところは、胸元に金の鎖で繋がれた赤い宝珠のネックレスを下げているところだろう。

これは以前にフィリックスが城下の町で見つけて、ルイーズに似合うなと思いついてプレゼントした代物だ。

ルイーズは喜んでくれたようで、これだけは昼夜の違はなく、肌身離さず身に付けてくれていた。

服装や髪型のみならず立ち振る舞いにも、一切の隙がない知性的な美貌は、仕事のできる女であることを外見から主張していた。

玲瓏たる美貌を誇る彼女を見た者は、みな本能的に思うことだろう。彼女に逆らわないほうが身のためだ、と。

気に障ることをしたら、暴力とかの直接的な危険ではなく、もつと狡猾な手段で社会から抹消されるに違いない。

実際、彼女の父親デクスセルは、虎騎将軍の肩書を与えられたイシュタール王国の軍部の最高責任者だ。

父娘で、国の政治部門と軍事部門を握っている形である。彼女がその気になれば、この国においてできないことはないであろう。

「どうしよう、この本。昨日、シヤクテイに教えてもらったばかりなんだけど……」

ルイーズに事情を説明しようかどうか、しようにか、悩んでいるうちに左隣から、軽い調子で相槌を打ったのが、シヤクテイだ。

「ああ、その本ですか、わたくしからも一読を勧めますよ」

長い脚を見せつけるように組んだ二十歳ほどのスタイリッシュなお姉さんだ。

深くも鮮やかな宵闇の藍の髪をアップにして、左髪に垂らした独特の髪型をしている。

裾の長い青い羽織をゆつたりと纏い、中には黒いシースルーのシャツとミニスカートに身を着け、ネックレスのようになしてなぜか鈴をつけていた。かなり特殊な美意識の持ち主である。そんな独特なファッションを着こな

せるのも、素材がいいからだ。

細面であり、鼻筋が通り、細い顎、切れ長の目に長い睫毛。大きな口に、薄唇。細く長い首に、浮き出た鎖骨は華奢。手足が細くて長く、指の先までしなやか。

人形のように完璧な美貌は、動物らしい生々しさが感じられず、まさに特権階級の出。生まれながらの貴族といった風貌だ。

スレンダービューティーという言葉がよく似合う。

どこか神経質な芸術家肌のような雰囲気がある。

実際、彼女は芸術家だった。ただし、軍事のである。

グロリアーナの即位とフィリックスの王太子冊立を、快く思わなかった王弟ヒルメデスが反乱を起こしたとき、反乱軍に与した。

もつとも、彼女が積極的に与したわけではなく、父親のクンダル伯爵がヒルメデスに加担して、彼女は領国を守っていたにすぎない。

しかし、ヒルメデスが戦死して、反乱は失敗。クンダル伯爵も降伏したあとに、彼女は領国に引きこもってしまった。

そして、ゼーンズフト將軍率いる討伐軍を寡兵で撃退したのちに、有利な条件で降伏したのである。

その手腕に感嘆したフィリックスは、彼女の隠棲地に三度足を運んで、個人的な軍師になつてもらうように要請し

た。
誠意を認めてくれたシャクティは、軍師を引き受けたと同時に、忠誠の証として処女もくれたのだ。
「……」

差し出口にむつとしたルイーザは、赤い瞳をジロリと動かした。

それを受けてシャクティは、につこりと美しい笑みを返す。

一瞬、イラツとした表情を浮かべたルイーザだが、毒気を抜かれたのか、なにも発することなく、何事もなかったかのように、フィリックスに本の意義を説明する。

「わがイシュタル王国の歴史を学ぶのに、この本ほど最適な本はございません」

ルイーザとシャクティは、国を代表する才媛である。

実務能力という意味ならばルイーザが勝り、天才的な閃きという意味ならば、シャクティに軍配があがるであろう。

世間での名声という意味ならば、華やかな軍事実績のあるシャクティのほうが上だろうが、権力を持つという意味では、ルイーザのほうが圧倒的に上だ。

普段はバラバラで教授してくれるのだが、今日はたまたま二人がブッキングしてしまった。

より正確には、本来、シャクティの授業の予定だったのだが、たまたまルイーザに余裕ができた、ということだ。

割り込んだのだ。

シャクティは、フィリックスの個人的な家臣であるのに対して、ルイーザは国の官僚機構のトップだ。シャクティの授業ならばいつでも受けられるが、ルイーザのほうは滅多にできない。

だから、この場の教授役はルイーザであり、シャクティはこの場にいる必要はまったくない。

ただ、自分もこの国の最新の事情を知りたいと志願したシャクティが、邪魔しないから、といって同席しているのだ。

（もう邪魔しないという約束なんだから、ルイーザを怒らせるようなことはしないで欲しいな）

二人の無言のやり取りにヒヤリとしたフィリックスは、視線でシャクティを窺（うかが）めめる。

ルイーザは、決して器量の狭い人ではないが、かつて敵であったシャクティに好意的である理由もなかった。あくまでもフィリックスが側近として登用したいと申し出たから、その才能を付度して許可したにすぎない。

シャクティは、フィリックスの私設部隊の隊長のようなもので、内外に広い諜報網を築いているが、その金を出す検断権を握っているのはルイーザなのだ。

ルイーザの機嫌を損ねたら、シャクティはあつという間に、王太子の側近を罷免（ひきめん）されることだろう。

「さて、まず陛下に知ってもらいたい

のは、クリームヒルト家のことです」

真面目な顔で説明するルイーザは、机の上に広げられた本に手を伸ばす。すると、フィリックスの顔のすぐ近くにルイーザの胸元がきた。

（で、でかい。ルイーザのおっぱいは、いつ見てもすごいよなあ）

感心したフィリックスは、しみじみと見入ってしまう。

王宮暮らしをするようになったフィリックスは、王太子たるもの女で失敗しないように、という義母の教育方針のもと、多くの女性を侍らせられた。

そんな中で筆おろししてくれたのがルイーザである。彼女も初体験だったようだが、素晴らしい体験であった。

以後、フィリックスは彼女の体に溺れてしまい、一週間あまりは毎夜、心行くまで堪能させてもらったものである。

（普段はお堅いルイーザなんだけど、おっぱいは柔らかいんだよなあ。それに乳首が敏感で、突つくと、ああんつて甘い声で鳴いてくれるんだよなあ）

初体験の女性だけに、ルイーザの艶姿は鮮烈な記憶としてフィリックスの脳裏には残っている。

どうやれば喜んでくれるか、と一生懸命に女体探求に勤しんでしまったものだ。

しかし、あれだけ夢中になったお姉さまだというのに、最近では少しご無沙汰だ。なぜなら、王太子の花嫁候補が多くて、そちらを優先しなくてはなら

なかつたからである。

ルイーザのほうも忙しい。そうそう王太子の夜の玩具をしている余裕はないのだ。

「この国を語る上では、クリームヒルト家との関係を無視することはできません。そもそもグロリアーナ殿下からして、クリームヒルト家のご出身ですからね」

そして、ルイーザもクリームヒルト家の出身だ。彼女の父親デクセル將軍は、現在のクリームヒルト家の当主の従兄弟にあたる。

この国は門閥として、クリームヒルト家が幅を利かせすぎている、という話がよく聞く。

それが先の王弟ヒルメデスが反乱を起こしたそもその原因だといわれている。

（クリームヒルト家のお姫様はみんな美人で巨乳揃いだから、歴代の国王に愛されたのかなあ）

などという不敬な疑惑に駆られフィリックスは、我に返って反省した。

というのも、フィリックスの義母グロリアーナは、ルイーザに輪をかけた巨乳の持ち主なのだ。

美貌と巨乳と才知によって、歴代国王の正室の座を奪い続けたクリームヒルト家は、イシュタル王国とは切っても切れない絆で結ばれている。

そのことはシャクティに口が酸っぱくなるほどに教えられていた。フィリックスが成長すれば、必ずク

クリームヒルト家との軋轢を呼ぶ。

クリームヒルト家が欲しいのは、自分たちの言いなりとなる傀儡の王である。もし、フィリックスが独自の動きをすれば、首のすげ替えを企んでくるだろう。

これに対抗するための策としては、クリームヒルト家を敵に回してはいけない。そんなことをしたら必ず負けるよしんば勝てたとしても、人材不足に陥って国そのものが立ち行かなくなってしまう。それほどまでにクリームヒルト家の人々は、国家の中枢を担っているのだ。

では、どうしたらいいのか？

シャクティ曰く、「敵の中の一部と手を結べばいい」ということである。

大きな家である以上、一枚岩ではない。時間とともに分家たちが独立していくのは自然な流れだ。

そして、フィリックスから見ても、一番近いクリームヒルト家の人間。それはルイズだ。

「彼女は必ず味方に抱き込んでおいてください」

というのがシャクティの助言だ。

この初体験をさせてくれた美貌のお姉さまが、いつか敵に回るかもしれない。そう考えるのは、フィリックスにとって、耐えがたいストレスだ。

城下で見かけたペンダントを発作的に買ってプレゼントしてしまったのも、少しでも彼女の気を引こうという浅ましい行動であった。

（ルイズって、こんなに敵しい顔しているけど、エッチのときは意外と可愛いんだよね。それにおっぱいが弱い。

おちんちんを入れたところで、おっぱいをモミモミするとオマ○コもキュッキュツって締めて気持ちいいんだよね。そして、自分から腰を使ってくる。「もつと奥までお願いします」とか……。あの言い方がすごく色っぽい）

国の廷臣たちには、クールでおつかない女と認識されているルイズの、女としての顔を知っている男は、自分だけだ。そう思うと優越感を覚える。

真面目に講義しているルイズの顔を見ながら、セックス時の艶やかな表情を想像していたら、赤い腫できつく睨まれた。

「聞いておられますか？ 殿下」

「も、もちろんだよ」

フィリックスは慌てて、教科書に視線を下ろす。

助け船を出すように、シャクティは軽い調子で相槌を打ちつつ。

「ふむむなるほど……さすがはルイズさん、なんでもよく知っていますね。ただ付け加えるなら、このところも覚えておいて損はありません。クリームヒルト家とイシュタール王家はもはや一体とっていい。それよりも注目すべきは十三年前の出来事でしょう」

それはいいのだが、さりげなく体を前にしたシャクティの胸元が、フィリックスの左肩に当たった。

「っ！」

驚くフィリックスを他所に、ルイズは一瞥する。

「シャクティ殿、物事には順序というものがございます。差し出口は無用に願います」

「はぁい」

明るく笑ったシャクティだが、フィリックスの左肩から乳房を離そうとはしない。

これは間違いなく意図的だ。

（そんなことをしていると、ルイズに怒られちゃうよ）

フィリックスは声に出さずに訴えたが、シャクティは悪戯っぽく口元に人差し指を立てて、右目でウインクしてみせた。

「……」

フィリックスは押し黙る。

シャクティはさりげなく、右手をフィリックスの左太腿の上に置いて、軽く円を描いてみせる。

それは明らかに誘っている女の動きだ。しかし、ルイズの目がある以上、決して乗るわけにはいかない。

（うー……シャクティのおっぱいって、大きくはないんだけど、こう勢いがあるって存在感があるんだよね）

ルイズほどの巨乳ではないが、美乳なのだ。若いぶん勢いがあるというのだろうか、とにかく弾力が素晴らしい。

陶然としているとルイズに声をかけられた。

「おわかりですか？ 殿下」

「はいっ!!!」

フィリックスは飛び上がるように返事をする。

ジロリと不機嫌そうに見下ろしたルイズは、再び本の説明に戻った。

ルイズの体が近い。

いや、ルイズの乳房が、フィリックスの右肩に当たった。

プルン

柔らかない。

大きくて、蕩けるような弾力だ。（こ、これは……っ!）

事態を悟ったフィリックスは身を固くする。

ルイズの乳房だけでも、極上だというのに、同時にシャクティの乳房も当たっている。

すなわち、左右の肩にそれぞれ別の

女性の乳房が当たっているのだ。

「西国地域は、城砦都市国家が主流ですから、いずれの国も決して大きいというわけではありません。しかし、それだけに地域ごとの特性があり、文化文明も多様で発達しています。それでいて、交流は盛んなのですから、理想的な政治状況といつていいでしょう」

乳房を押し付けながらルイズは真面目な顔をして、説明を続けている。（でも、これって意図的だよな。絶対にルイズも意識しておっぱい押し付けているよね）

困惑するフィリックスを他所に、左肩にはシャクティの乳房が、右肩には

ルイズの乳房が押し付けられる。

ムニムニムニ……

「あつ……」

右から柔乳、左から硬乳によって板挟み。

極上の乳房でサンドイッチにされてしまったフィリックスは、悦楽の溜息を漏らしそうになって、慌てて飲み込む。

「特にここシエルファニール王国の先代の国王マクシミリアン殿下は、イシユタール王国からの婿入りです。このように西国諸国の王族とイシユタール王家は縁が深い。これはいざというときの保険になるでしょう」

説明を続けるルイズの顔はあくまでも真面目であり、その声は硬い。

しかし、乳房を離そうとはしなかった。いや、どうもシャクティに対抗しているように感じる。

フィリックスはさりげなく肩を左右にふるう。

ブルブルン

左右で違う弾力を楽しめる。

「っ!!」

フィリックスが乳房の弾力に酔いしれていることを察したシャクティは、右手をフィリックスの左腿の内側へと移動させた。そして、そこでも円を描く。

（うわ、内腿はダメ、内腿は……）

見悶えるフィリックスを、ルイズは冷たい視線で見下ろす。そして、怖い声を出す。

「シャクティ、あなたさつきならなにをしているのかしら？ 殿下の勉強の邪魔をするようなら出て行ってちょうだい」

シャクティは悪びれずに肩を竦める。「いや、実はその本、昨日、わたくしが殿下に教えたばかりなんですよ」

「っ!!」
ルイズは目を剥く。

「そうなのですか？ 殿下」
「は、はい。すいません」

フィリックスは小さくなって謝る。それを受けて、ルイズは溜息をつく。「そういうことは先にいってください」

「はい」
「シャクティもです」
とがめられたシャクティは、悪戯っぽく笑う。

「でも、おつかない女教師に隠れてエッチなことをするのは、男の子のロマンでしょ」

「そんな無駄なロマンは、犬にでも食わせてしまいなさい」
吐き捨てたルイズは、怖い顔でフィリックスの股間を見下ろした。

「殿下、お勉強中になにを考えておられたのですか？」
ルイズの冷たい視線を追ったフィリックスは、ズボンに見事なテントを張っていることを発見した。

「あ、これは……」
慌てたフィリックスは両手で股間を隠した。

「くすくす」

シャクティは鈴を鳴らしたように涼やかに笑う。

「申し訳ありません。配慮が足りませんでした。それにしても、殿下はほんと、女性に弱すぎますね。女王陛下のおっしゃられるように、もつと耐性をつけるべきだと思いますよ。世の中には悪い女はいっぱいいるんですから」

「あなたのような女がね」
チクリと釘を刺してから、ルイズは首を横にふるう。

「そうですね。世の中にはハニートラップというものもあるのです。そのような卑劣な罠にかかって、殿下が身を持ち崩さないように、しっかりと女に慣れていたただかなくてはなりません」

それが陛下の教育方針でもあられます。女なんていつでもできる肉便器と考えられるようになってこそ、一人前ですよ」

「は、はい……」
「は、はい……」
「う、うん……」

「はい、はい……」
「う、うん……」

「はい、はい……」
「う、うん……」

「はい、はい……」
「う、うん……」

「はい、はい……」
「う、うん……」

「はい、はい……」
「う、うん……」

「はい、はい……」
「う、うん……」

驚くフィリックスの耳元で、ルイズは甘く囁く。

「勉強しているふりをしていてください。そうしないと、あちらのおつかないお姉さんに怒られますよ」

ルイズはチラリと部屋の出入り口に目を向けた。

「防犯のために、扉は開いている。そこには銀のツーピースのビキニ鎧を纏ったお姉さんの後ろ姿が、左半分だけ見えていた。」

暗褐色の長髪は腰にまで届く。女にしては少し抜けた長身。手足は長く力強い。引き締まった抜群のスタイルを誇っている。

銀色の腰覆いは前にしかないので、後ろから見ると黒いパンツに包まれたぎゅつと吊り上がったお尻を見ることができた。

王太子の親衛隊長であるウルスラだ。彼女は自らの職務に従って控えているのだ。

「う、うん……」
ルイズのいわんとしてしていることを察したフィリックスは、素直に頷いた。

フィリックスの育った家の隣のお姉さんであるウルスラは、初恋の人である。

彼女が王太子の親衛隊長に抜擢されたのは、もちろん、フィリックスとの個人的な信頼ゆえであるが、それ以前から十分な実力を知らしめていた女傑だ。

「う、うん……」
ルイズのいわんとしてしていることを察したフィリックスは、素直に頷いた。

「う、うん……」
ルイズのいわんとしてしていることを察したフィリックスは、素直に頷いた。

魔斬姫外伝 2

—退魔師たちの乳淫獄—

無様に暴かれる
凛々しき女退魔師の裏の貌 かお



小説 あやがみなつき 綾守竜樹

挿絵 なほ ここのき奈緒

※本作品は、二次元ぶち文庫『魔斬姫外伝2 退魔師たちの乳淫獄』に描き下ろし挿絵を加えて再録したものです。

「……いつまで……続けるつもり？」

荒息をしながら睨みつけた。

「……こんなことをされたって……私は絶対に……屈しないわ……」

私は退魔組織「紅薙姫」の一員。人知れず魔を斬り続ける女狩人だ。ミスに犯せばどのような運命が待ちうけているか、嫌というほど目にしてきた。いや、見るだけでなく実際に――。

首を振る。

とにかく、私たちが戦っている相手は「淫魔」である。人外の器官と性戯を使って女を犯し、その精気を搾りとる化け物だ。これまでも数知れぬ戦友たちが、女に生まれたことを後悔させられてきた。

「……さすがは九条院法子、八雲の一番弟子ですね」

「私はともかく……八雲先輩を……呼びすてにしないで欲しいわね……」

シャドウと名乗った淫魔は、いやみつつらしく拍手を響かせた。

「これほど責められても、まだそんな強がりと言えるとは……双乳の大きさだけでなく、気丈さも受けついでおられるようで」

「強がりなんかじゃ……ないわよ……」

この薄暗い地下室に監禁されて、もう二日になる。その間ずっと、私は「触手」のお世話になった。露わすぎるどころと秘めたところを晒られて、女体の裡に眠るものを穿りだされた。昼夜問わず、おなかの底から叫ばされた。

あの刺激、あの気持ちよさ。

淫魔の触手はヌメヌメなのにザラザラで、粘膜の包容力と骨の貫通力を兼ねそなえていた。ひとたび絡みつくや肌の毛穴や粘膜の襞に快感をこびりつかせ、いつまでもいつまでも狂わせた。

正直に告白すれば、私は何度も淫獄に引きずりこまれた。身体はすっかり、触手の膚に落ちていた。さらには心も

「この気持ちよさに溶かされてもかまわない」と思いかげさえた。けれど陥落の寸前で、ある退魔師の姿が私を支えてくれた。

鷹城八雲。

私たちの先輩で、現在最強と謳われている女退魔師である。容姿、態度、性格のすべてが漂々しく、まさに日本刀のような方だ。その勇猛な戦闘方法

といい、一匹狼的な生き方といい、私には憧れの対象だった。

八雲先輩が絶対、助けにきてくれる。この部屋へ連れこまれるまえ、私は救難信号を残している。先輩ならここを探りだし、このシャドウを斬つてくれる。冴えないサラリーマンに擬態したこいつを、血祭りにあげてくれる。

その確信が、私を淫欲の魔手から護った。ともすれば快楽へ溺れそうになる心を叱咤して、敵愾心と矜持を維持させた。

「……早く私を……殺すか、放すかすることね……でないと、後悔するわよ……」

私はチラツ、とドアを見やつた。赤錆だらけの金属板を、穴が開くほど見

つめた。

「……でないと」シャドウは目線の意味を汲みとって、「斬魔の姫君たちが救出に雪崩れこんでくる、と？」

「ええ」

「なるほど、それが強がりの正体ですか」

「だから！ 強がりなんかじゃないわ」

「……法子さんは聡明ですが、女性ですからときどき夢を見てしまいますよね」

淫魔はとても優しく微笑んだ。

「お節介とは思いますが、私が目覚めのキスをしてさしあげます。あなた方、狩人を気取っている戦姫たちの……牝の真実を教えてあげましょう」

甘ったるい口調で言い、鉄扉の向こうに消えた。

「……真実、ですって……」

一人残され、私は両肩で息をついた。全身を覆っている汗と粘液が流れて、性感をささくれ立たせた。

いまの私はドアと反対側の石壁に磔られ、ほぼ全裸に剥かれている。全身スーツであるはずの念装甲膜は、肘と膝の先にしか残っていない。触手たちに女性の部分を奪いとられて、あられもないX字を描かされている。

監禁部屋はレンガ大の石を組みあげたもので、まるで巨大なカマドだ。私の右手側の壁には雰囲気とそぐわないスクリーンが、左手側には映写機が置いてあった。レンガの境目からは、紫色の触手が突然変異したキノコのように

に這いずりだしていた。

きつと、この館のどこかに菌果みたいな腐肉の塊が眠っているのだろう。低級淫魔のなかには、独立した生物のかたちを取ることさえできないヤツらもいる。この触手どもは、そいつが伸ばした捕食の網にちがいない。

部屋には照明器具の類もなく、四隅のロウソクがかりうじて視界を屈かしていた。換気の悪い空間には匂いと湿度がこもり、私は自分が漏らしたものをつねに自覚させられていた。

「……絶対、助けにきてくれる……」

この二日間、初めて知った。私は俗に言う「潮噴き」をしてしまう女だった。気持ちよさが高まりすぎると下腹部が張つてきて、無意識のうちに屈伏の水芸を披露してしまうのだ。

「……八雲先輩なら、あいつに勝てる……」

奥歯を噛んでいると、鉄扉が勢いよく開けられた。

「……待たせたな」

シャドウが、イヌ用の鎖を手に戻ってきた。ジャラジャラと鳴るものもの先を見たとき、

「……ッ！」

私は目を開けたまま気絶していた。視界と思考のあいだで、深刻すぎる肉離れを起こしていた。

「一つ、ついたの？ 八雲、セックスできるの？」

四つんばいが入ってきたのは、現在最強の女退魔師だった。生ける日本刀

最強の女退魔師だった。生ける日本刀

はシャドウの足に頬を擦りつけ、飼い犬の頬を振りまいた。

「ああ、たっぷり可愛がつてやる」淫魔は私の顔を見て、ニヤリと笑った。

「いやというほどヨガリ狂わせてやるよ」

「く、狂わせて！」

先輩が舌つたらずに叫ぶ姿を、私は呆然と見つめた。

「八雲を、ご主人様の牝にしてっ！」

八雲先輩は、真つ赤なバンドと金の鎖輪を組みあわせたボンデージを着せられていた。三センチ幅のエナメルが首や胸を締めあげて、屈強な女戦士に虜囚の哀れさをまとわせた。

「おまえはとつくの昔に、俺の牝だよ……その馬鹿デカイ乳房をブラ下げたときから、牝牛に墮ちると決まっていたんだ」

「そうです、そうでした……で、でも」先輩はシャドウの革靴に接吻して、「もつと！ もつと牝にして！」

拘束の帯は筋肉質な腕や日本人離れした長さの肢にも巻きついて、白い肌赤の幾何学模様を描いている。さらに腰骨あたりの金輪から二本のバンドが下ろされ、陰部を左右から挟みあげている。足の付け根をなぞっている。それは、裏に回されて尻たぶにも喰いこみ、谷間の暗がりを広げている。

「ふふふ……おまえは二日前から裸になつて、四つんばいで歩いている。床の皿にプチまけられた飯をイヌ食いし、居間のどまんなかで排泄しながら

暮らしている……これより下があると思うのか？」

「……あるんでしよう？」赤い舌を伸ばして、靴の甲を舐め始めた。「や、八雲はもつと牝にされる……いやらしくされるんでしよう？」

先輩は濡れた舌をチロチロと這わせ続ける。イヌが尻尾を振るように、ムツチリとしたお尻を揺らす。明らかに意図的な、娼婦の手管だった。たくましい内腿には透明な液体が伝いおち、ロウソクの螢火を反射して輝いていた。「ああ。おまえは、どうしようもないマゾだからな。畜生以下の牝になれるさ……おまえを二度と這いあがつてこられないドン底まで墮としてやるよ」

「墮として！」心底、嬉しそうな声だった。「マゾ牝の八雲をもつと！ もつともつと墮として！」

先輩は衣装らしからぬ衣装を着ているながら、ブランド物のハイヒールを履いていた。それとバランスを取るように、両手の爪にも真つ赤なマニキュアを塗っていた。さらにバタフライ型の眼帯、これまた血色の覆いをつけて、視界を放棄していた。

「……ふふ、ふふふ……ふははは！」

シャドウは硬直している私を見て、笑い声を響かせた。狭苦しい監禁室は、淫魔の凱歌をいやというほど反響して、私をますます失語症に追いやっつた。

マゾ牝の八雲。

先輩は自ら、そう告白したのだ。誰よりも淫魔に恐れられている女狩人が、

自身を変態性欲者だと公言し、しかもそれに陶醉を覚えているのである。

「ははは、よく言つた！ なかなか効果的だつたようだが」私の顔から先輩の後頭部に視線を戻して、「さあ、ご褒美だ……どこを虐められたい？ おまえの好きな場所を選ばせてやる」

先輩は顔をあげた。エナメルバンドに縊りだされた乳房が、風切りの音を立てそうな勢いで揺れた。人差し指の先くらいはありそうな乳房の先から、玉の汗を振りとばした。

「……はいっ、ありがとうございませ！」

イヌのチンチンのポーズを取り、長すぎて持てあましているような両足にM字を描かせる。太腿の肉とふくらはぎのそれが押しあつて、オトナの女らしい充実感を漲らせる。そのまま両膝を開き、股間をほぼ一八〇度になるまで割つてみせた。足の切れこみから陰部のありさまにいたるまで、包みかくさず披露した。

先輩の下腹部には、伸ばし放題の陰毛がびっしりと茂っていた。いつから手入れしていないのだろう、恥丘から胴底にかけての曲面は真つ黒で、生クリーム色の肌と著しい対比を為している。

まるでその部分、女性器のなかに悪しきものが詰まっているような、おどろおどろしい印象だった。絡まりあつた縮れ毛は汗やほかの体液を溜めて、独特の甘酸っぱい匂いをくゆらせた。

「や、八雲はマゾ牝のくせに退魔師なんてやつていたから、いやらしい思いでいっばいの……」両手で乳房をすくいあげ、捧げ物のように掲げる。「この巨乳を虐めてもらえませんでした……ほ、本当は淫魔の皆様に、かたちが変わるまで揉まれたり、吸われたりしたかつたのに」

よく、「絶望すれば心が凍る」と言う。そして何も感じなくなつてしまふ、と。そんなの嘘だ。

だって私の心、墮ちた女戦士の姿を見せられて絶望しているそれは、もう凍っているのにもかかわらず冷えていく。足元の地面が音もなく割れて、身体ごと底の見えない深淵に落ちていく。淫魔の皆様。

私を知っている「鷹城八雲」は、誰よりも淫魔を憎んでいた。淫魔に犯され、戮りものにされた過去があるから、単なる使命感を超えて任務に励んでいた。

「あいつを殺し、奪われたブライドを取りかえす……私はそのために、光の世界を諦めたの。女であることさえ捨てて、斬魔刀を手にしたのよ」

私が落ちこみ、退魔師を辞めようかと思ひなやんでいたとき。八雲先輩は二度と思ひだしたくないはずの恥辱体験まで語つて、私を慰めてくれた。「ともに戦う刀姫として、あいつらに目を見させてやるよ」。そう引きとめてくれたのだ。だから、私は戻つてこれた。あのと

「き誰にも言えない肉の傷を負わされたにもかかわらず、戦う女に返りざけたのだ。」

それなのに。

「私に希望を与えてくれた女、私の崇める復讐の女神が、仇敵に「様」を付けている。「復讐鬼」のたたずまいはただの仮面で、本当は淫魔たちのまえに跪き、その大きすぎる胸を弄ばれたかったのだ、と涙を浮かべて訴えている。」

「や、八雲はあさはかで、意地っ張りな牝でしたから……シャドウ様に調教していただくまで、女盛りのカラダを淫らな疼きが鎮まるように、この……」さらに両手を掲げる。乳房の付け根をさらし、そこに溜まった汗を照からせる。「このマゾおっぱいを黽つて、いやらしさを搾りだしてください！」

「きつと何度も練習させられたのだから。先輩は口上を述べるだけで興奮し、窮屈さの中心にある裂け目から女の蜜を滲みださせた。どうしようもなく匂うそれは、ツルリとした尻たぶを垂れおちて石畳の隙間を埋めた。」

「なんだ、また胸か？ 昨夜あれほど黽つてやったのに、まだ足りないのか？」

「足りないんです！」間髪入れず、だつた。「あんなに愛していただいたのに、朝になるとまた、して欲しくてたまらなくなるんです……」

「まったく底無しだな」鼻で笑つて、

「先週は、あれで満足していただろう？ そもそも乳責めだけであんなにイク牝は、日本じゅう探しても」

シャドウは意味ありげに私を見た。

「あと一人くらいだよ」

「ご、ごめんなさい……八雲のおっぱいは……そ、底無しのマゾだから……欲求不満がおさまらないの……ドンドンいやらしくなっちゃうの……」

聞くにたえない台詞を吐きながら、両手の指を蠢かせる。伏せた盃みたいな乳暈を人差し指と中指で挟み、折りまげるように揉みこむ。

「……うう……で、でも、いいんだよね？ 八雲は、マゾおっぱいをブラ下げているんだから……そうなんても仕方ないんだよね？」

ぶつくりと腫れていた乳頭が、さらに充血して赤くなる。口調も明らかに、呂律が回らなくなっている。

「ああ、いいんだ。その胸は俺の『作品』なんだからな。まだ反応が鈍いくらいだ」

「あああ、ああ……」

淫らになつてもいい、いやらしくなつても仕方がない。先輩は敵の淫魔から墮落の免罪符を与えられて、だらしなく笑みくずれる。充血のあまり下膨れになつた唇を半開きにし、その端から熱々の涎を垂らす。

「どうした？ もつと淫らな乳房にされるのはいやなのか？」

「……あああ……ちがうの、いやなんじゃなくて……う、嬉し」

「まあ、いいさ。こうすれば、おまえはすぐ気を変えるからな」

シャドウは先輩の言葉を遮り、男の腰よりやや低い位置に掲げられたふくらみに両手を伸ばした。券売機から食券を抜きとるような手つきで、その頂きに屹立する突起を摘んだ。

「ひーっ！」

先輩は思いきり背を反らし、絹裂きの悲鳴をあげた。淫魔の指は、ほつそりとした外見とは裏腹にペンチじみた力で乳首を押しつぶし、右に左に捻り始めた。

「くひいっ、ひいっ！ きひいっ！」

女退魔師は魂を握られているような絶叫を放ち、崩れた顔を左右に振つた。真つ赤な眼帯が薄暗闇で踊っているさまは、弱つたチョウが必死で逃げまわっている姿を連想させた。

先輩はすぐ、髪が生え際や首筋に汗を滲みださせた。二の腕やエナメルで区切られた脇腹に、粟立ちを生じさせた。それでもよく躡られたイヌのように、チンチン姿を守り続けた。大開脚の膝が震え、ハイヒールの細い踵がカツカツと鳴った。

「……こんなふうな虐められて嬉しいだろう？ もつとスケベな乳房にして欲しいだろう？」

「うひいっ、ひいっ！ う、嬉しい！ して欲しい！」

「おまえはこれから、ニブレスなしでは歩くこともできなくなるんだ……いや、ただ胸が揺れるだけでもイキそう

になるから、スポーツブラか何かで保持しないかぎり何もできない。レースのブラジャーなんて絶対着られない」

「ああ、そこまで……ひいっ、だめっ！ つ、爪を立てるのはだめえ！」

「電車に乗ったら、痴漢たちの玩具だ……」親指の爪を乳首の根元に喰いこませて、「昔のおまえはどんな男にだつて負けなかつただろうが、これからは乳房をつかまれただけで、腰砕けになつてしまふんだ」

復讐鬼だつた女は、憎き敵から自分の堕ちゆく先を告げられて縦長のヘソを泳がせる。桃色に染まつた内腿を物言いたげに震わせる。

「ひ、ヒドい……なんていやらしい……」

吐息の生つばさからいつて、きつと両目を潤ませているのだから。眼帯のせいで確かめられないけれど、一難ぎするだけで淫魔を金縛りにかけてきた視線は、恋人から睦言を聞かされた乙女のそれになつているのだ。

「わかつたか？ わかつたら、さつさとイケ！ おっぱいマゾぶりを見せてみる！」

シャドウは私の方に首を捻じまげ、先輩の乳首を思いきり引きあげた。洗濯槽から両手で洗った物を摘みだすみたいに、荒々しくモノあつかいした。

「愛撫を吸つて下膨れになつていた脂肪の塊が、パン生地のように伸ばされる。そのポリウムにふさわしい、圧倒的な口ケツトになる。淫魔はふくら

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>